ヘヴィーオブジェクト 亡霊達の警察

「やめて顔はやめて!!」
「ふはははは！　その巨乳の谷間にもぶっ込んでやろうかあ!?」ネバネバの液体（ペイント弾）で女性兵士を狙うヘイヴィア。いたって真面目に行われている第37機動整備大隊の模擬戦だったが、彼らの上官フローレイティアによる「私は処女だ」という衝撃的カミングアウトで事態は急転直下し……!?

砂漠で出会った美人少尉との間にフラグを構築するクウェンサー。女の争いを繰り広げるお姫さまとオホホ。そして相変わらず貧乏くじを引きっぱなしのヘイヴィア……。やがて彼らはオセアニアの裏で蠢く組織との戦いに巻き込まれていき——。

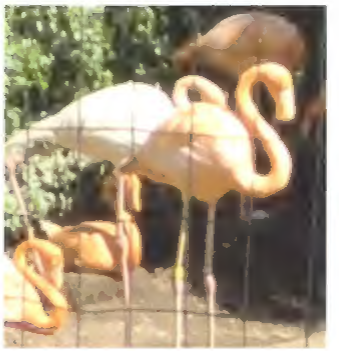
近未来アクション！

か-12-45

ヘヴィーオブジェクト 亡霊達の警察

鎌池和馬

電撃文庫



鎌池和馬（かまちかずま）

本日のレプリカント的観察日記。フラミンゴ！　体が赤いのは食べているものの影響を受けているのだそうで。仕組みを突き詰め、高速化できればカムフラージュなどにも使えるようになるんでしょうか？

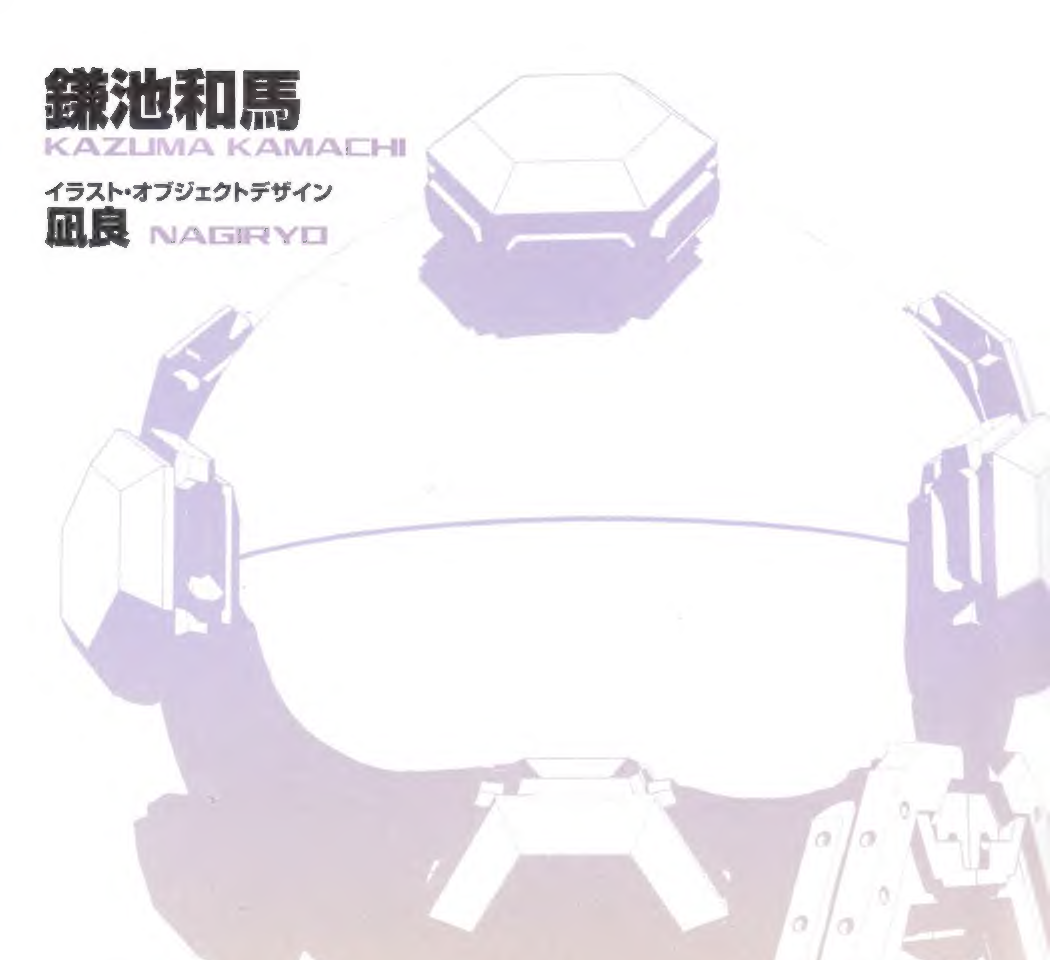
【電撃文庫作品】

とある魔術の禁書目録（インデックス）①～㉒
とある魔術の禁書目録（インデックス）SS①②
新約 とある魔術の禁書目録（インデックス）①～⑧
ヘヴィーオブジェクト シリーズ計七冊
インテリビレッジの座敷童①～③
簡単なアンケートです
簡単なモニターです
ヴァルトラウテさんの婚活事情

イラスト：凪良（なぎりょう）

バンダイナムコのゲーム『アルトネリコ』シリーズのキャラクターデザインをつとめる。電撃文庫では『シャープ・エッジ』『F』（著／坂入慎一）、『アプラクサスの夢』（著／高橋弥七郎）などを担当する。個人サークル『S.E.C』でも活動中。
http://www.sec.or.tv/

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI
イラスト・オブジェクトデザイン
凪良 NAGIRYO



結局、戦争はなくならなかった。
でも、変化はあった。
――超大型兵器オブジェクト。
それが、戦争の全てを変えた。

ヘヴィオブジェクト
HEAVY OBJECT

The police of ghosts 亡霊達の警察

INDEX

000010 序　章

000012 第一章
馬鹿二人は銃で殺し合う
>>オセアニア模擬戦

000140 第二章
私の仕事は絵具を運ぶ事
>>オセアニア情報戦

000248 第三章
警察は戦争を止める手段
>>オセアニア解放戦

000430 終　章

【シンプルイズベスト】SIMPLE IS BEST

「情報同盟」軍所属の水陸両用第二世代オブジェクト。最高速度時速1350キロを誇る対オブジェクト戦特化兵器。

推進方式は水陸両用のエアクッションだが、補助推進装置として取り付けられた無数の高出力イオンスラスターによって音速を超える速度で接近することが可能。

また、機体前面にある嘴のように尖った追加装甲が特徴。薄い金属箔を電話帳のように積み重ねたもので、オブジェクトからの攻撃を感知すると、衝撃が内部に伝わる前に火薬の力で表面の金属箔を分離する事でダメージを抑える、リアクティブ防御技術の塊と化している。

超音速による接近と、ダメージを無視した移動を可能とする装甲。この二つを併せ持つことで、ほぼゼロ距離にまで標的に接近し主砲である下位安定式プラズマ砲を打ち込むという、その名の通り極めてシンプルな戦術を取るオブジェクトである。

Designed by Hiroki Wakabayashi (GRAPHT)

name/Wraith=Martini=Vermouthspray

age/12

sex/female

weight/37.8kg

height/141m

class/lieutenant colonel

body size/68.55.71

eye color/blue

hair color/blond

post/acting commander

place of birth/Bucharest,Transylvania

belong/carrier pigeon news.ltd. emergency supply company

postscript/project whiz kid "MARTINI SERIES" No.49

HEAVY OBJECT HEAVY OBJECT HEAVY OBJECT

HEAVYOBJECT HEAVYOBJECT HEAVYOBJECT HEAVYOBJECT

オセアニアに派兵中の不良系貴族軍人
ヘイヴィア
「またただぜ。オセアニア派兵。これで何度目だよまったくさあ」

オセアニアに派兵中の戦地派遣留学生
クウェンサー
「……ところで学生の俺が何で駆り出されてる訳？」

「正統王国」軍第二七機動整備大隊に同行する報道カメラマン
シーワックス
「今回はカメラ二丁だよ。武装はしていないし、君達の行動を阻害するつもりもない」

南プリテン方面からオセアニアに訪れた観光客の老婆
ドロシー
「やらせてもらおうかね……。こうしてチャンスをもらうまで、ご飯の味も分からないくらいだった」

「正統王国」軍の少尉。「ストークキラー部隊」に所属
リサ＝ドービル
「おいよせそれはっ！どこを触っている、いやそれを私に言わせるつもりか!?」

さあ。

共に人類の扉を開こうじゃないか。

――とある「亡霊」のつぶやき

HEAVY OBJECT

the police of ghosts

ヘヴィーオブジェクト
亡霊達の警察

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

序章

世の中には条件というものがある。
何事においても。
そういう意味では、オセアニアという場所は極めて優良だったという訳だ。
本当は分かっているんだろう？
旧オセアニア軍事国、その軍政側の首脳陣が、本当に単独で圧政を敷けたとでも思っているのかね。
〇・五世代とはいえ、あのオブジェクトの開発技術はどこから入手してきたものだ？
連中が掲げる『解放』という単語は、この部分を理解しない限り真の意味で達成される事はないだろう。そして当然、我々は『解放』を望む側の人間ではない。
そう、君の考えている通りだ。
我々はオセアニア軍事国の裏側にいた者達。
そして君が願い求めるモノに、一番近い場所に立っている者達とも言える。

ここまで言えば理解できたかな。
君が我々を捜し出した訳ではない。我々こそが、君という優れた人材を取得するため招待したというのが正しい。
礼は求めない。
握手もここでは控えておこう。
こちらも職業柄、人物調査には詳しくてね。君がどのような返事をするかは、言葉で聞かなくても分かっているよ。

さあ。
共に人類の扉を開こうじゃないか。

第一章　馬鹿二人は銃で殺し合う　〉〉　オセアニア模擬戦

1

「まただぜ。オセアニア派兵。これで何度目だよまったくさあ」

ブツブツ言いながら、ヘイヴィア＝ウィンチェル上等兵は黒や砂色の顔料を自分の頬に塗りたくっていた。いわずもがな、砂漠用のカムフラージュの一環である。

「二月ってムードでもねえしよ。『島国』なんかじゃイケメンがチョコレートもらったりすんだろ、バレンタイーン！　どこ行きやがったんだ俺様のためにあるような素敵イベントは!!　ま、こんなクソ暑い中でチョコレートぶつけられたらちょっとした嫌がらせになっちまうが」

小火器にさえセンサーや電子機器が搭載される世の中になった訳だが、そんな時代『だからこそ』の迷彩というのも存在する。ヘイヴィアが指で顔に塗りたくっているのは、対人センサーから肌の露出部分を感知させないための化学薬品も含まれていた。

ヘイヴィアは整備基地ベースゾーンの敷地の中と外を区切るフェンスに身を預け、『お化粧』

を続けていた。そんな彼の周りには、同じように準備を進める兵士達が一〇人ほど集まっている。

小柄な女性兵士のミョンリが、顔料のケースを両手で持ったままオドオドした調子で声をかけてきた。

「あ、あのう、これどうするんでしたっけ？」

「駄目だよバージンガール、目の周りに濃い色を置いてんじゃねえ！　白目ってのは顔ん中で一番目立つんだ。だから目の周りも明るめの色で馴染ませて、徐々に周りを濃い色で埋めていく。色味に『段差』をつけるんじゃねえよ」

「……というか、ここでカムフラしたら砂埃も一緒に閉じ込めちゃうんじゃあ……？」

「どうせ殺し合いが始まりゃ泥と血反吐でグチャグチャだぜ」

うんざりしたようにヘイヴィアは言いながら、大きな三日月の模様が描かれたバンダナを摑む。

『お化粧』の終わった者から順に、彼らは西部劇の銀行強盗のように、バンダナで顔の下半分を覆う形で縛って装着していく。三日月の部分は、ちょうど大きく裂けた口のように見える配置だ。

「センスねえな」

「分かりやすいっていうのは重要ですよ」

ミョンリの言葉を聞きながら、ヘイヴィアはアサルトライフルを操作し、マガジンを抜く。ツメで押さえつけられているライフル弾の弾頭に目をやり、

「弾頭確認」

「弾頭確認」

「弾頭確認……です」

律儀に復唱してくるお友達に辟易しつつ、再びマガジンをライフルに突き刺したヘイヴィアは、コッキングレバーを引いて初弾を装填する。無線に口を寄せる。

「A班準備完了。他は？」

『お宅んトコが最後だよ亀野郎。BからD、全班準備完了。合図でいつでも動ける』

「りょーかいりょーかい」

ヘイヴィアはチラリとミョンリの方へ目をやった。

彼女は重たい軽機関銃やアサルトライフルではなく、不時着したパイロットなどが扱う軽量小型のPDWを握っていた。俗に言う『ビジネスバッグに入るフルオート銃』である。

が、軽めの銃を持たされている理由は、彼女が女性兵士だから、という訳ではない。

代わりに支給されている別の装備がとてつもなく重たいからだ。

「シザーオープナーは？」

「三回試しましたよ。これ背負うのすんごく怖いですけど」

「ドア破りにもたつくかどうかでかなり状況は変わってくる。テメェが頼りの綱だぜ。しっかりしてくれよ」

「巨大なハサミを火薬の力でドアの隙間にぶっ刺して、鍵の内部構造をモーターの力で強引に潰し切るようなツールですよ？　背負った状態で誤作動したらどうなるか考えてくださいよ」

「んなもん自業自得だぜ。妙ちきりんな資格ばっかり集めているから変な装備押し付けられるんだ」

言いながら、ヘイヴィアは『作戦目標』のある方を見据える。

整備基地ベースゾーンの外、ではない。

中へ。

本来であれば、味方と呼ぶべき人々のいる方へ、アサルトライフルの銃口を向ける。

結局のところ。

自陣の外に敵がいなくなってしまえば、今度は中に敵を追い求めるのが人間というものである。

「そんじゃあ派手に行きますか。作戦目標はお姫様だ。オブジェクトへ乗り込まれる前にぶち殺せ!!」

2

「よしよし、全部予定通り。だだ洩れになってるよん」

整備基地ベースゾーン……一〇〇台以上の大型車両で構成される基地の敷地内で、クウェンサー＝バーボタージュ戦地派遣留学生はニヤリと笑う。手の中では、軍用無線機が『敵』側の声をしっかりと届けてきてくれる。

「反逆者め。皆殺しにしてやるぞ」

「おいおい、大丈夫なのか？」

彼の横では、督戦専門の、つまり軍内部の犯罪者を取り締まる『黒軍服』の女性が呆れたように息を吐いていた。自己紹介されたがナニナニさんだったかは忘れた。

クウェンサーは軽く軍用無線を振りながら、

「反逆者だから同じ装備を使っているって事を忘れている方が間抜けなんですよ。暗号組み替えたってフォーマット自体同じなんだから傍受されるリスクは残るってのに、間抜けどもめ」

彼らがいるのは、一〇〇台以上の車両団で構築される整備基地ベースゾーンの中央付近だ。銀行の大金庫の扉よりも巨大な車輪に寄り添う形で身を隠しながら、黒い素材の軍用ナイフを使って砂地に簡単な見取り図を描き出す。

「ヘイヴィア達がいるのは南門近辺。すでに何食わぬ顔で敷地内に潜り込んでいます。対してお姫様は中央からやや南下、操縦士エリート特別待遇の宿舎でボディメンテナンス中。ここを

襲うと見て間違いない」

「ミリンダ＝ブランティーニ嬢はオブジェクト『ベイビーマグナム』内に入ってしまえばほぼ無敵だ。何しろ核攻撃の直撃にすら耐える設計だからな。となると」

「専用宿舎からオブジェクト格納庫までの道を塞ぐ」

ガリガリ、とクウェンサーはいくつかのルート上に×印を描き込んでいく。

そこで『黒軍服』の金髪巨乳は眉をひそめ、

「だが反逆者達も好き勝手には動けないだろう。屋外には監視塔の目がある。単純にエリートを追い駆けようとすれば軽機関銃の掃射を受けるはずだ」

「なら、邪魔な監視塔から潰すはず！」

ポン！　ポン!!　と、シャンパンのコルクを抜くような音がオセアニアの荒野に響き渡る。

クウェンサーが顔を上げると、大空に直径三〇センチくらいのパラシュートがいくつか開いていた。子供向けの花火に見えるが、違う。錘の代わりに小型カメラが取り付けられている。

『黒軍服』の美女が叫ぶ。

「来るぞ!!」

「ああくそ！　座標指定される前に撃ち落とせ!!」

クウェンサーが軍用無線に向けて叫ぼうとしたところで、『黒軍服』に首根っこを掴まれて二人一緒に砂地へダイブさせられた。美女が覆い被さる形になったので、背中に柔らかい物が

当たって幸せな事この上ない。

だが一時の幸福とは打ち壊される定めにあるものだ。

ボッバッッッ!!　と。

轟音と共に、クウェンサーの位置からでも見えた監視塔のてっぺんに、本命の砲撃が加わる。

まず空中からのカメラで座標を特定し、続く砲弾で確実に始末する。教科書通りの典型的な迫撃砲の取り扱い方だった。

ただし。

それとは別に、教科書に書かれていない事が彼らの眼前に広がっていた。

ねっちょお……っ!!　と。

何だか、監視塔のてっぺんが白くてねばねばした液体に包まれてしまったのだ。

クウェンサーと『黒軍服』の女性は、ガタガタと震えていた。

反逆者達が何をやらかしたのかを、ようやくそこで知ったのだ。

「や、野郎!!　ペイント弾の中身を赤から白に変更したのか!?　しかもなんかネバネバしてそうな不気味な液体に!!」

ひいいー、変な匂いがするし髪についたの取れないー。監視塔で軽機関銃を抱えて警戒任務

に就いていた女性兵士の悲鳴が、軍用無線を介さなくても直接聞こえてくる。
初撃の混乱を最大限に活用する、というセオリーに従うためか、あちこちからアサルトライフルの発砲音がパパパン!!　と聞こえてきた。
「お、おそらく全てのペイント弾があんな感じになっていると推測しているのだが、君はどう思う？」
「まったくの同感です」
「という訳で、女性の尊厳を守る意味でもここは優先して男性が血路を切り開くべきだと思うのだが!!　ほら世の中は平和で戦場カメラマン達がバズーカ砲みたいなカメラでこっち狙ってきているって話だし、私は機関誌の表紙にネバネバ顔をさらす訳にはいかんのだよ!!」
「男だって白くてネバネバしたもんぶっかけられたくないですよ！　ある意味で女性よりもダメージが大きい!!」
しかし叫んだところで今さら戦闘は中断されない。
クウェンサーは黒い……模擬戦用のゴムの刃を備えた軍用ナイフを鞘に戻すと、『黒軍服』の女性と共に移動を開始する。

3

ちなみに作戦指令室で煙管を吹かしている銀髪爆乳の高級軍人フローレイティア＝カピストラーノは部下からの質問にこう答えた。

「ま、当たると嫌って本気で思わせるようにしないと、誰も真面目に戦わないでしょ」

4

シミュレーションナンバー101（b）。

部隊内から出現した反逆者の可及的速やかな排除と、操縦士エリートの誘導および護衛任務。

「ふひひひ！　お姫様仕留めたら味気ねえレーションから一週間解放されるってよ！　ローストビーフもガーリックシュリンプも食い放題だ!!」

ヘイヴィア達が移動に使っているのは、車両の真下だった。一〇〇台以上の車両団で構築される整備基地ベースゾーンの抜け道である。一台一台がテニスコートよりも広い面積を持ち、車輪を三〇も四〇も備えた大型車両だ。地面と車体の間には二メートル以上のスペースがあるため、立ってそのまま走り抜ける事もできるし、巨大な車輪の陰に隠れて進む事もできる。

ミョンリがあちこちにPDWを向けて警戒しながら、時折咳き込む。

「うえっ、げほ！　排ガスが酷い……。一酸化炭素とか大丈夫ですよねこれ。訓練で死亡とか洒落にもなりませんよ！」

「人間の体は頑丈だ心配すんな！」

ヘイヴィアは悪態をつきながら、同行していた二人の兵士……顔にそばかすのある小柄な女性と筋肉だらけの男性へサインを飛ばす。

「ガーリー、ベーシック！　左から追い込め。車輪の陰から出てきたところを俺がぶち抜く!!」

指示の通りに手榴弾が物陰へ投げ込まれた。

慌てたように（白いネバネバの）爆発から逃れようとする高校生くらいの女性兵士を、ヘイヴィアは容赦なくペイント弾で射撃していく。

「やめて顔はやめて!!」

「ふはははは！　その巨乳の谷間にもぶっ込んでやろうかあ!?」

巨大な車両の下を進むという事は、放物線を描いて空中から襲ってくる砲撃をほぼ無視できる、というメリットがある。

が、ヘイヴィア達がこのルートを選んだ最大の理由はそこではない。

「ミョンリ！　背負った工具を構えろ!!」

彼は真上を指差して、

「エリート用の専用宿舎。ここはその真下だ。予定通りに下から切り開くぞ!!」

「よっと……。専用宿舎は、いくつかの車両を繋げてスペースを確保しているって話ですけど」

「車両と車両の繋ぎ目にドア破りの工具の嘴挟んで強引にこじ開けりゃ、中に潜り込む事だ

ってできるぜ。連中がまだフェイズ1で籠城しているんならここでチェックメイトだ!!」

ヘイヴィアに肩車されたミョンリが、分厚い鋼鉄の天井と化した車体底へ特殊な工具を押し当てる。パイルバンカーのように炸薬の力で一気に嘴を突き入れ、さらにモーターの力で嘴を広げる事で、ピタリと合わさった分厚い鋼鉄の板を強引に押し開く。

「あーあー、バキバキ鳴ってますけど大丈夫ですか!?　これ模擬戦でしょう!?」

「施設ぶっ壊すなっつー注意書きに覚えはねえよ。むしろリアリティを追求しろっつったのはあの爆乳だろ」

隙間はせいぜい人間が一人潜り込めるか否か。まず小柄なミョンリを押し上げ、今度は宿舎内に入ったミョンリに手を伸ばしてもらい、ヘイヴィアが宿舎の中へと潜り込んでいく。

ガーリーはベーシックに持ち上げてもらって宿舎内に入ったが、ベーシックは大柄過ぎて隙間を潜る事はできない。

ひとまずベーシックには別働隊と合流させる事にして、ヘイヴィア達は三人でエリート専用宿舎の索敵を始める。

「マジで大金星だぜ……。実際にこんなやり方すりゃ片道切符は避けられねえけどよ」

内部は軍用施設とは思えないほど高級な調度品で満ちていた。

全体的にクラシカルなマホガニーで構成された、山荘に似たデザインだ。つい二週間前にクウェンサーと来た時は真っ白な無菌室みたいな場所だったし、内部見取り図も全然違っていた。

お姫様の精神的コンディションに合わせているのか、襲撃防止のためか、極めて短期間の内に組み替えられるようにできているのだろう。

「組み替え可能って事は、やっぱりドア破りの工具で押し広げられるって事でしょうか？」

「馬鹿野郎め、これじゃ訓練にならねえぞ。ペイント弾は壁を貫通しねえんだしよ」

呟き、ヘイヴィア達は迅速に一階部分の索敵を完了させる。

出口の数を数え、その全てに即席のトラップを仕掛けてから、彼らは二階へ続く階段を目指す。突撃の前にヘイヴィアが調度品のぬいぐるみを摑んで投げると、案の定、複数の銃撃が即座に応じた。

ヘイヴィアは物陰に隠れたまま、階段に向けて牽制の短い連射を何度か繰り返しながら、

「ミョンリ！　合図と共に手榴弾!!」

誤射防止のため射撃を止めるヘイヴィアに合わせて、入れ替わるように身を乗り出したミョンリが階上に向けて手榴弾を投げ込む。

水っぽい爆発音と悲鳴がいくつか響いた。

「おっ」

「馬鹿!!」

階段へ顔を覗かせようとした女性兵士のガーリーを、ヘイヴィアとミョンリの二人がかりで慌てて手前に引っ張る。

短い連射が階上から撃ち下ろされた。
「死亡確認取るまで気を抜くんじゃねえよ！　馬鹿!!」
「二回言ったね!?」
「大事な事だからだ!!　つーかテメェが男だったら助けてねえぞ感謝しろ馬鹿馬鹿!!」
「そこまで連呼されるとツンデレに聞こえてくるんですけど!!」
「もう一度言ってみろ、背中にペイント弾ぶち込むぞ!!」
ヘイヴィアは叫びながら真上を指差し、
「ミョンリ。例の工具で天井をつつけ」
「え、はい？　でもあそこは建材の切れ目みたいなものはないから、押し広げる事はできませんけど」
「上の連中にその法則性は分かんねえよ。とにかく相手をビビらせろ。向こうが浮き足立ったところで俺が仕留める！」
その言葉を受けたミョンリが、天井に向けて勢い良く工具の嘴を叩きつける。
ごん！　という鈍い音を聞いて警戒した護衛兵が場所を移動しようとしたところへ、ヘイヴィアが階下からの銃撃で彼らを的確に仕留めていく。
「クリア、クリア！　先に進むぞ」
「何であなたレーダー分析官なんてやっているんですか？　要人暗殺部隊とかの方が似合いそ

うですけど」

「それエアコン効いてる部屋で椅子に座りながらできる仕事かよ。じゃなけりゃ御免被るぜ」

階段を上ると、白くてネバネバしたペイント弾を受けた護衛兵達が三人ほど、憮然とした顔つきで両手を上げていた。

「どこだ、くそ。お姫様がどっかに隠れているはずだぞ。捜せ!!」

基本的に護衛対象であるエリートだが、彼女が銃を携帯しているかどうかは不明だ。クローゼットや冷蔵庫の中からいきなり銃撃される危険性も否定はできない。

ここまで来て撃破ボーナスを手放すのは惜しいので、ヘイヴィア達は一つ一つの部屋を慎重に調べていく。

「クリア！」

「クリアです!!」

「こっちもクリアだよ。くそ、何でクリアしちまうんだ！　お姫様はどこに消えた!?」

うっかり安全を確保し終えてしまったヘイヴィアは、あちこちを見回しながら叫ぶ。

と、そこで彼はわずかな風の流れを肌で感じ取った。

発生源に向かい、冷蔵庫の扉を開け、やがて本体そのものを抱えて横にどかす。

「くそ……」

マホガニーの内壁が大きく破れていた。

重量軽減のため、外壁は防刃仕様の分厚いシートだ。とはいえ、専用の工具などがあれば裁断だってもちろん可能。縦に大きく裂かれたその隙間からは、人間だって脱出できるはずである。

（……車体の真下でドンパチ始めた時点で、すでに突入のリスクは向こうにも知られていたって訳かよ。ちくしょう！）

一五〇センチはあろうかという縦一直線の裂け目に手をやり、軽くめくる。方々では操縦士エリート専用宿舎とオブジェクトの格納庫を繋ぐルートの争奪戦が繰り広げられていた。両陣営に分かれて派手に撃ち合う中、専用の特殊スーツをまとった小柄な少女と、彼女の手を引っ張って砂地の上を走っている少年の背中が見えた。

思わず叫ぶ。

「やっぱりテメェか……クウェンサーっ!!」

対して、少年は一度だけ振り返ってこちらに中指を立てた。

直後の出来事だった。

「やべっ!!」

慌てて室内へ戻り、床へ跳ぶように身を伏せた直後、用済みとなった専用宿舎を叩き壊すような勢いで、戦車の砲撃が立て続けに二階部分へ襲いかかってきた。

5

ひっそりと特別待遇の宿舎へ忍び込み、襲撃前にお姫様との合流、脱出を果たしたクウェンサー一行。しかし現在、戦車を盾にしているクウェンサーやお姫様達は、通常の銃撃戦について自信がある方ではない。

「クウェンサーは何しにきたの？」

「ははは刺さるなあその質問は。お姫様が女の子でなければ裏切ってヤツらに突き出していたところだ」

ここで活躍しているのは、少年に同行していた『黒軍服』の女性だった。そもそも『軍内部での犯罪者の粛清』を掲げているためか、オブジェクト同士の激突が戦争の象徴とされる時代においても、人間同士の殺し合いに慣れているのだろう。

その『黒軍服』の女性が、うんざりしたようにエリート専用宿舎へ目をやる。

複数の大型車両の上に鎮座している四角い建物、その上半分が毒々しい真っ赤な色彩で埋まっていた。悪趣味なクランベリータルトのように見えなくもない。

「……模擬弾とはいえ戦車……。下手したら死んでいるんじゃないか、あれ？」

「ペイント弾は壁を貫通しません。つまりノーカン。死んだと思って除外していると、最後の最後に痛い目見ますよ」

模擬戦独自のルールができてしまうと、実戦の役に立てるという本来の意味は失われる恐れがある。しかし一方で、『完璧な実戦』ができない以上、どうしても偏りが生じてしまうのは避けられない、というのも事実ではあった。

「格納庫まで二〇〇メートル」

「あそこまで入れれば、あとは『ベイビーマグナム』にのるだけね。たいじんセンサーをつかってみなごろしにしてあげる」

物騒な文言に苦笑しながら、『黒軍服』はこう尋ねてきた。

「さて、敵ならどう動くと思うかね？」

「格納庫の出入り口か、もしくはオブジェクトのハッチ。お姫様が必ず通るルートにワイヤーの一本でも張っているでしょう」

今回の模擬戦は『軍内部から反逆者が出た可能性』を想定したものだ。兵士についてはバンダナを口元に巻いて区別がつくようにしているが、整備兵についてはグレーを維持している。味方のふりをして近づいてくるメンバーが敵側である可能性も否定できない。

「そんなかんたんなのには引っかからないよ」

「そういう風に思っているヤツを上手に引っ掛けるよう研究されてるの」

「む。クウェンサーはわたしをドジか何かだとおもってる？」

「残念だけど、お姫様のシャープなところってあんまり見た事ないよ！　言っておくけど、こ

っちは何度か『ペイビーマグナム』の誤射で死にかけてるんだからね。ジブラルタルのあの時だって……!!」

「クウェンサーはガミガミうるさい」

「何でだと思う？　答えは俺達の命がかかっているからだっっっ!!!!」

まあまあ、と『黒軍服』からたしなめられた。

「本題に戻ろうじゃないか。基本、ワイヤーは受動的だ。東洋風に言うところの、当たるも八卦、当たらぬも八卦ってヤツだな。敵は本当に全作戦の命運を預けるものかな」

「トラップは足止めの時間稼ぎでしょう。もたもた解除を待っている間に、本命の狙撃や砲撃で遠距離から仕留めようっていう動きがあるはず」

「つまり？」

「俺が罠を見つけて排除します。そっちは適当にメンツ集めて周囲の警戒を」

6

戦車とはいえ、ペイント用の模擬弾であるため、砲撃は分厚い防刃シートを貫く事はない。が、至近での爆音の炸裂にミョンリは目を回していた。鋭い耳鳴りにのたうちながらヘイヴィアはガーリーの方を見る。こちらは意識が残っているようだが、完全に腰が抜けたらしい。

へたり込んだまま、涙目で手をパタパタと振っていた。一歩でも動いたらチビる、といった顔だ。スタングレネードをもろに受けた時のショック反応に似ていた。

「……くそったれ……。ん……の、野郎……」

数秒かけて復帰したヘイヴィアはエリート専用宿舎の階段を下り、一階部分から外へ出る。鉢合わせになった敵側の兵士を拳銃のペイント弾で仕留めると、物陰に潜んでから改めて寝そべる。

彼が手にしているのは連射性と貫通力に優れたアサルトライフルだが、センサーをフルで使えば中距離の精密狙撃も可能となる。

（射線さえ通りゃ狙えるんだ。ここからでもオブジェクトの格納庫が！）

スコープというより、もはや多種多様な情報を映す小型モニターのようなレンズを覗き込み、ヘイヴィアは舌なめずりする。

狙っているのは、罠を仕掛けてある格納庫の正面出入り口だ。

性質上、あそこを駆け抜ける事はできない。そして相手が一瞬でも立ち止まればペイント弾を叩き込める。

「……来い、来い、来い！　男をべちょべちょにする趣味はねえが、今のに仕返ししねえと気が済まねえ!!」

ペイント弾を使った模擬戦は、体のどこに当たっても『ヒット（死亡）』扱いになるため、

標的の足を撃って他の敵兵が助けに来るのをさらに狙う、といった手は使えない。
小細工抜き。本人を直接狙うしかない。
ヘイヴィアは寝そべったまま、その時を待つ。
人差し指で引き金の表面を撫で、緊張感を少しでも緩和させようとする。
しかし、
（……何だぁ？　まさかと思うが怖じ気づきやがったか）
数分待つが、動きがない。
要人暗殺の際は二日でも三日でもひたすら待ち続けるものだが、今は乱戦のまっただなかだ。標的の大雑把な位置を把握した上で常に細かく動き続けなければ、ヘイヴィアだって他の敵兵に後ろを取られる危険もある。
（狙撃手を全部排除するまで動かねえ、なんて悠長な事は言ってらんねえはずだ。何しろ護衛対象のお姫様が野晒しのままなんだから。野郎、一体何を考えて……）
と、そこでヘイヴィアの動きが止まった。
スコープに嫌なものが入り込んでいる。
巨大な鋼鉄の塊の正体は、今時の戦争では時代遅れと称されるＭＢＴ……主力戦車と呼ばれるものだ。お分かりの通り、すでに名前からして形骸化しているが。
「何だクソ!!　狙撃対策にお姫様を放り込みやがったか!?」

あの戦車が斜めにかけたスロープを上ってゲートへ突撃してしまえば、狙撃も罠もない。対人用の仕掛けは全て踏み潰され、オブジェクト格納庫までお姫様が安全に運び込まれてしまう。

ヘイヴィアはアサルトライフルを放り捨て、肩に掛けていた携行ミサイルを摑む。

戦車や攻撃ヘリは携行ミサイル（もちろんペイント弾）の直撃で無力化される、という模擬戦ルールがあった。『建物の薄い壁は貫けないのに……』という意見もあるが、この辺は『なあなあ』に決めておかないと機甲兵器最強説が浮上してしまうので仕方がないのだった！

とはいえ、

（……ちくしょうめ。ライフル弾と違って一回こっきりってのが気に喰わねえぜ）

サイズがサイズなので、ミサイルは複数所持できないのだ。

基本的に、ほぼ使い捨てと考えて良い。

「だが一発で決めりゃボーナス確定だ！　標的が馬鹿デカくなったと思えば悪い事ばっかじゃねえわな!!」

携行ミサイルの発射筒を肩で担ぎ、側面にある照準器を覗き込む。

赤外線と紫外線の両方を照射して格納庫へ向かう主力戦車をロックオンする。

直後だった。

戦車の砲塔が示し合わせたように回転した。

ビタリと、ヘイヴィアを睨みつけるように。

「……、やべ」

（敵の狙いはお姫様の強行突入じゃねえ！　派手な戦車を動かして、遠くから格納庫の扉を狙ってるヤツの数と場所を特定するためのブラフ!!　クソが。こっちがロックに使っている赤外線を読み取られちまったか!?）

慌てたようにエリート専用宿舎を支える大型車両から飛び降り、巨大な車輪の陰へ身を隠そうとする。

が、それより早く。

砲塔上部のハッチから身を乗り出した『黒軍服』の美女の手によって、対人掃射用の重機関銃が唸りをあげる。

ヘイヴィアの位置から中距離狙撃ができる以上。

向こうからも、全く同じ射線を通す形でヘイヴィアを狙う事もできてしまう。

そして向こうの有効射程距離はアサルトライフルの三倍強もある。至近で受けると『訓練中の事故』になりかねないほどだ。

「ぶっほ!?　がばごほ!!　ちくしょ、痛ってえ！　さっきっから、俺を戦車嫌いにしてえのかッッッ!?」

7

ふう、とフローレイティアは紫煙の混じった甘い息を吐き出した。

作戦指令室の巨大なモニターには整備基地ベースゾーンの詳細な見取り図と、両陣営の位置情報が表示されている。

操縦士エリートのお姫様がベイビーマグナムのコックピット内に入り込んだ事を確認し、彼女は軽く拍手を送る。

「勝負はついた！　こちらの危機管理マニュアル通りにエリートは保護され、オブジェクトによって戦況は決定的となった。これにて模擬戦を終了する!!」

この辺はやはり、第一世代のオブジェクトの特権だ。

オブジェクト対オブジェクトのみを追求する第二世代と違い、ベイビーマグナムは対戦闘機、対戦車といったものから対人用の索敵センサーや駆逐兵器も十分過ぎるほど搭載している。整備基地ベースゾーンへの被害を無視すれば、敵兵がどこに隠れていても瞬時に粉微塵にしてしまえる訳だ。

つまり、お姫様がベイビーマグナムに乗り込んだ時点で、あらゆる戦闘は終わっていると考えて問題ないのである。

（……それにしても、今回も食べ放題の栄冠はお預けか。想定通りとはいえつまらん）

そんな事を考えているフローレイティアの元に、女性オペレーターがオドオドした声で報告

してきた。

「あ、あのう、少佐。入電があるのですが」

「？　ならさっさと……」

「いえ、その、少佐の携帯電話に直接、なんです。プライベートなものなのでは？　え、ええと、もちろんこちらの交換機を通させていただく必要があるのですが!!」

フローレイティアは軽く手を振って許可を出した。

軍務に服している以上は通信を監視されるのは避けて通れない道だ。不穏な事はしていない、と第三者が証明してくれるものだとポジティブに受け取るしかない。

（……こういう非常識な事をやってくれるのは、まさか『実家』絡みじゃないだろうな……）

やや憂鬱な調子で、彼女は軍服のポケットから携帯電話を取り出す。

古い刑事ドラマのように、わざわざ合図を出す必要もないだろう。フローレイティアはそのまま通話ボタンを押して電話に出る。

男の声だった。

しかも奇妙な事に、ボイスチェンジャーなどで加工された音声だった。

開口一番、ヤツ（？）はこう言ったのだ。

『お前の娘は預かった』

……。

薄暗い作戦指令室に嫌な沈黙が舞い降りた。

しかし完全な無音とも違う。あちらこちらから、『えっ？　カピストラーノ少佐って、え!?』『子持ち!?　まさか、いやまさか！』『でも、一八かあ……早ければ、そんな歳なのかあ……？』といったヒソヒソ声が聞こえてくるのが分かる。

フローレイティアは、しばし黙っていた。

その体が小刻みに震えていた。

何やら警察に通報するなとか身代金の額と受け渡し方法はとか一方的にまくし立てるヤツ（？）に向けて、彼女はゆっくりと、噛み潰すような声でこう切り出した。

「私は処女だ」

『えっ!?　カピストラーノ少佐!?』『まさか、いやまさかだぞ!?』『一八かあ……ま、ありって言えばありなのか？』といったヒソヒソ声が、さっきより二倍以上のテンションで繰り広げら

れる。男子フケツ、とやたらドスの利いた女性陣の声も混じっている。

ようやく、電話の向こうのヤツ（？）も事態に気づき始めたのか、

『あれ……？　処女、あれ……。ち、ちょっと待て！　あれ、九歳の娘がいるんじゃ？　でも、ひょっとして、まさかそれって……!!』

「ま・ち・が・い・で・ん・わ、だ馬鹿野郎!!　軍の回線相手に脅迫電話とは良い度胸だ。我が『正統王国』は売られたケンカを全力で買う主義だというのはもちろん分かっているんだろうな!?」

あわわわわ!!　と慌てたような声と共に、ブツッと通話が切れる。

オペレーターがヘッドセットに片手を当てたまま、椅子ごとフローレイティアの方へ振り返る。

「あ、あのう。位置は逆算できましたけど……いかがいたしますか？」

「……」

通常、フローレイティア達『正統王国』駐留軍は、情勢の混乱するオセアニア内で、軍を失った同国に代わって他国からの侵略を防止する任務を与えられている。

つまり国内で発生する犯罪やテロ活動の鎮圧は任されていない。それは現地の警察系機関が決着をつけるべき『事件』であり、『戦争』ではない。下手に軍が介入すると内政干渉と難癖をつけられかねなかったりもするのだ。

だが、

「……情勢不安なオセアニア内では、増長する犯罪組織に抱き込まれた不良警官も多いと聞く。身代金目的の誘拐なら組織的犯行だろうし、安全に事を進めるためにも警察内部に手駒を隠している事だろう。つまり現地警察系はあてにならん」

「良いんですかね？」

「脅迫を受けたのはオセアニアではなく我が軍だ。売られたケンカを買うのは内政干渉とは呼ばない」

フローレイティアは煙管を咥え直し、肩をすくめながら、

「現時刻より状況を開始する！　必要なだけの人材と機材を投入し救出部隊を編制しろ!!　強制収容所攻撃相当の武装を許可する!!」

『処女だって』『カピストラーノ少佐処女だって！』『「貴族」のご令嬢で高級軍人だろ？　チョー狙い目じゃね!?』『男子フケツ!!』というヒソヒソ声は留まるところを知らない。

フローレイティアは魔王のように口から紫煙を吐き出す。

わなわなと震える『正統王国』の将校は、名誉を傷つけられるのが何より嫌いなのだった!!

「……誰にケンカを売ったか思い知らせてやるぞ、コソ泥」

8

そんな訳で。

クウェンサー、ヘイヴィア両名は、模擬戦でクタクタになった他の兵士達と同様に軍用トラックの荷台に押し込まれ、バッキバキに割れたアスファルトの上を運ばれているのだった。震動の一つ一つさえ神様に呪われているような気分にさせられる。

「笑えねえぜ……。何にも笑えねえよクソが!!　食べ放題の撃破ボーナス見逃すわ義憤を覚えた上官の命令で見知らぬガキを助けに行かされるわ！　良い事が一個もねえ。そろそろマイクロビキニの姉ちゃんが出てきたって不思議はねえはずだぜ!!」

「さらわれたのは九歳の女の子って話じゃん。一〇年後に素敵なマイクロビキニと出会えるようにするためには、今から努力をしなくちゃいけないねって話だよ」

心底うんざりしたように、ヘイヴィアは頭上の太陽に目をやる。

オレンジジュースのパッケージに使われてもおかしくないくらい燦々と照りまくっている。

「つーかよ」

ヘイヴィアは吐き捨てるように言う。

今回は『正統王国』公認の戦場カメラマンも軍用トラックに同行していた。それ自体は問題ないのだが、重要なのはその人物に嫌な意味で心当たりがあるという点だ。

「……何でこいつが一緒なんだよ」

「正式な手順に則っているだけさ」

サラリとした調子で告げたのは、このオセアニアとは因縁深い男だった。

シーワックス。

かつてプレス用の非戦闘許可証を持ってオセアニアに潜り込んでおきながら、狙撃銃片手に戦況を引っ掻き回してくれた『国際ルール違反男』である。

「今回はカメラ一丁だよ。武装はしていないし、君達の行動を阻害するつもりもない」

「当たり前だっ!!　そもそもテメェが過去にやらかした結果、奪われちまった命のツケっての も払っちゃいねえだろうが!!」

思わず摑みかかろうとするヘイヴィアを、周りに座り込んでいた兵士達が押し留める。

こんなのでも民間人扱い……というのではなく、単に狭い車内で暴れられると迷惑、といった顔つきだ。

クウェンサーは肩をすくめて、

「クールになろうよ、クールに。そいつを殴ったってマイクロビキニの美女がやってくる訳じゃない」

言葉を受けて、一度だけヘイヴィアは舌打ちする。

それから低い声でボソッと呟いた。

「……いや別にね。露出があれば良いって訳じゃないのよクウェンサー。俺が言いたい美女論

っていうのはさ……」

「分かってる、全部分かってるよヘイヴィア。大切なのは中身って事だろう？　そこらの脇役がいきなりマイクロビキニになったって仕方がないんだ。俺達が求めているのは安易なエロじゃない」

ガタゴトと揺られながら、どうでも良い話をする。

この後、撃ち合いの殺し合いが待っている事など気に留めない。

「にしても誘拐だって。やっぱりこの辺りも物騒なのかね」

「戦後の混乱に乗じて世界各地のマフィアやらギャングやらが出入りしてるし、旧来の軍政派の残党も軍資金獲得のために蠢いてやがる。しかも闇市は一般人に必要不可欠なもんだから、犯罪組織のくせにそこそこ歓迎されてもいやがるって話だぜ」

「はあん？　前にオセアニア来た時ってそんなに物騒だったっけ。なんていうか、もっと平和的でみんなにこにこ笑ってなかったっけ」

「オセアニア・ドルの乱高下知ってるってもの言ってんのかよ。遠い国からやってくる支援策だの慈善家だのの資金援助ってのは、額が大きくても散発的だ。何かの流行とか思いつきとかと似たような感じで瞬間的にバカスカ金が流れる。継続的な支援ってのが一番難しいんだ。……そんなのに生命線を預けられるか？　結局、現地の連中は多少ダーティでも安定した収入と商品の供給ってヤツを選んじまうのさ」

よせば良いのに、シーワックスはいちいち会話に割り込んでくる。
彼はカメラを軽く掲げながら、
「出自はともかく質は悪くないよ。税関でレンズケース一式を奪われたが、全く同じのが闇市に転がっていた。おかげで仕事がはかどりそうだ」
いちいち噛みついても仕方がない、と考えているのだろう。ヘイヴィアはこめかみに青筋を浮かべたまま何かに耐えている。
クウェンサーはチラリとシーワックスの方に目をやってから、
「その闇市だけで潤ってるなら誘拐なんかしないだろ」
「ヤツらはロビンフッドじゃねえって事さ。口ではなんて言おうが、結局はテメェの都合で金をかき集めている悪党だ。飢えた民衆だの国の行く末だの、最後まで面倒見ようとしている訳じゃねえ」
ガタゴトと揺れる軍用トラックの車列が向かっていったのは、東海岸沿いの旧商業都市だった。軍事国時代は差別愛好家の特権階級ばかりが暮らしていたという事で、オブジェクトなんかがしょっちゅう突撃を敢行していた場所だ。
辺りのビルは片っ端から薙ぎ倒され、道路にまで大量の瓦礫が流れ込んできている。
学校、教会、病院といった『ホワイトターゲット』だけが綺麗に取り残されているのが、逆にオブジェクトによる絨毯砲撃の恐るべき精度を物語っている。

ヘイヴィアが口笛を吹いてこう言った。
「『真実の口』へようこそ」
「何それ？」
「ローマの観光名所だよ。歴史を学べよ学生」
「『信心組織』の事なんて知らないよ」
ヘイヴィアは親指で適当に風景の一角を指差した。そちらにあるのは、折り重なるように倒れ、ボロボロに崩れたミルフィーユのようになっているビルの残骸だ。
「音楽プレイヤーだの粉ミルクの缶だの、あの中に潜って使えそうなもの拾って闇市に流している訳だが、欲張り過ぎると瓦礫の顎に食い千切られちまう」
「……そんなにヤバいの、この国？」
「さっきも言ったろ、現地通貨のオセアニア・ドルが安定するまではどうにもなんねえ。物々交換の方がまだ安定してる、なんて噂も飛び交うほどなんだ。俺らのユーロだの、よそのドルだのが有難がられている内は混乱は終わらねえよ」
シーワックスはトラックの荷台から、周囲の瓦礫の山へとレンズを向けながら、
「結局、オセアニアの解放はまだ混乱期なのさ。踏みつけにされている人達は少なくない。一般市民だって日々の食料を得るために闇市を必要としているし、闇市さえ利用できない借金漬けの人達はああした場所で命懸けの仕事を強いられている。ただ働きも同然の低賃金で」

「……マジかよ。これからあそこで銃撃戦やるんだろ。俺の得意分野知ってる？　爆弾だぞ」

「危険なトコだから現地の警官はろくに巡回しねえ。巡回しねえと物騒な連中が集まってくる。でもってより危険な場所になっちまう。悪循環ってヤツだよ。中の下くらいの犯罪組織がひしめき合ってるって寸法だ」

軍用トラックの車列は、フローレイティア達が電話を逆探知した廃屋の二キロほど手前で停車した。総勢一〇〇名ほどの歩兵達がひび割れたアスファルトへ降車していく。

「戦力過剰じゃないの？　これじゃ戦争だ」

「俺らのお仕事はその戦争なの。行くぞ学生」

戦場カメラマンは何人かついてきたが、シーワックスはクウェンサー達のグループに混ざるようだ。彼らはますますうんざりする。

「ヘマをしても助けねえ。怪我を負ったら捨てていく。アンタのミスで部隊が危険にさらされたら、テメエを盾にして逃げる。国際法なんて知った事じゃねえ。俺がそうする。分かったな？」

「君の部隊は地元の犯罪集団に負けるほど貧弱なのかね？」

クウェンサーやヘイヴィア達は、敵の出方によって二通りの戦闘を強いられるはずだった。

一つ目は、逆探知されている事に気づかず本拠地に籠城している可能性。

二つ目は、迅速に逃走した敵車両を追って、砂漠にある一本道の長いアスファルトでカーチェイス。

……いずれにしても衛星で頭上は押さえてあるので敵を見失う事はないのだが、人質救出を目的に掲げる場合は、カーチェイスよりも拠点襲撃の方がやりやすかったりする。

「つーかよ、軍の交換機通しておいて、逆探されねえなんて古い刑事ドラマみてえな事信じてんじゃねえだろうな」

電話切れば探知されねえなんて古い刑事ドラマみてえな事信じてんじゃねえだろうな」

「油断大敵だよ。万全の装備で待ち構えて、第一陣を蹴散らした後に改めて逃走する腹なのかもしれないんだしさ」

「せめてそれくらい考える頭がある事を祈るぜ。この俺様がわざわざ出向いてやって良かったって思えるようにさ」

罠、カメラ、狙撃手などの危険に気を配りながら、瓦礫の陰から陰へ渡るようにヘイヴィア達は移動をしていく。クウェンサーはほぼ先行するヘイヴィアに誘導される形だ。

「……ところで学生の俺が何で駆り出されてる訳？」

「テメェ一人だけベッドでくつろぐなっていう神様からのリクエストだよ馬鹿野郎」

銃撃戦できないのにな、とクウェンサーはぼやく。

一体何を撮っているのか、シーワックスは瓦礫の山のあちこちにカメラを向けている。どんな写真にどれくらいの値打ちがつくのかはサッパリだった。

単なるウォーキングと違って、今にも崩れそうな瓦礫の山の上を登り、あるかどうかも分からない敵兵に怯えながら移動するというのは結構堪える。たかが二キロ、都会の一駅分と笑っ

ていられる疲労ではなかった。

「なあヘイヴィア。下半身ムキムキになったら女の子にモテると思うか？　返答によってはここでくじけるかもしれない」

「え？　エロい意味で言ってんの？」

完全なる〇点の解答にクウェンサーが本格的にうずくまり、ヘイヴィアが駄々っ子の腕を掴んで引きずるように移動を再開させる。

「おら！　シーワックスのクソ野郎がテメェにカメラ向けてるぞ!!」

「戦場の真実を伝えるのが私の仕事だからな」

「国際レベルの恥をかきたくなきゃ立てよクウェンサー！　歩け!!」

無線の指示通り、標的の廃屋を見下ろせる場所までやってきたヘイヴィアは舌打ちした。

「ちくしょうが、病院じゃねえか。爆撃から残してやったらこれだぜ。見取り図と人口分布ダウンロードして皆殺しにしよう」

「ちょっと尋ねたいんだけど、人質救出の話はどこ行った？」

そもそもただ殺すだけなら、建物へ突入する必要はない。遠方からの砲撃で建物ごと更地にしてやれば良いのだ。

人工衛星から取得した敵兵の分布を基に、地上にいるクウェンサー達が各種のセンサーを使って『人影』の詳細を、様々なモードで一つ一つ確認していく。

「面倒臭せえな。五〇人以上反応があるぜ」
「いた。一階の……何だありゃ？　内科の診察室か。とにかくダクトテープで縛られた子供を発見。あらまあ、目隠し耳栓、口にはテープまで。えっと、他に別口で子供がさらわれてるって事もナシ」
「世界一虚しい覗きだな。さっさと終わらせて爆乳の女風呂でも拝みに行こうぜ」
「そのジョーク機密情報管理に抵触してるって知ってる？」
一〇〇人の歩兵を五つのグループに分け、クウェンサー達は配置につく。
ここでもシーワックスはクウェンサー達についてきた。
「学生にカメラマンつきかよ。どんなバリエーションに富んだ部隊なんだうちは」
「いらないならパラソル立てて寝るよ俺は。やりたくてやってる訳じゃない」
「君達は国民の血税を正しく使っていると喧伝してやると言っているんだ。むしろ感謝をしてほしいくらいだね」
ヘイヴィアは頭痛を堪えながら、無線に向けてこう言った。
「子供は一階。それ以外はどうでも良い。死体グチャグチャになっても構わねえからさ、合図と共に壁抜きライフルでやっちまえ」
『了解。そっちは子供に気を遣って拳銃で仕留めるつもりか？　どうせ死体を見せりゃトラウマになるっていうのにご苦労な事で』

「ものには限度ってもんがあるのさ。ラインを勝手に決めちまってる時点で独善的だがね」

クウェンサー達は、いちいち警備の厳重な出入り口など目指さない。

誘拐された子供が監禁されている内科診療室の外壁へと取りつくと、クウェンサーは壁にプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を複数、規則的に取りつけ、電気信管を突き刺す。

「いつでもどうぞ」

「確認するけどよ。爆発でガキの鼓膜がやられるって事はねえんだよな？」

「目隠しに耳栓までされてるってのは外から確認したろ。上手にお片付けすれば死体を見せずに済むかもしれないぞ。どうするＰＴＡ？」

「チッ、やりますよ。ほらカウント三」

投げやりな秒読みを三つほど。

直後に、ズッッッパァァァァァン!!!!!　という爆音が炸裂した。実際には都合五三丁の対物ライフルが同時に発射されたのだが、完全にタイミングが統一されていたため、一回きりの爆音にしか聞こえなかったのだ。

同時に、壁に張り付いたクウェンサーが無線機のスイッチを押す。

外壁が粉々に吹き飛び、室内に立っていた薄汚れた男達が衝撃に薙ぎ倒される。意識が混濁した犯罪者達にとどめを刺すべく踏み込んだヘイヴィア達プロの兵隊達が、躊躇なく拳銃の引き金を引いていく。

フェイズ一、所要時間はわずか五秒。

フェイズ二は撃ち洩らしの撃破だ。運良く対物ライフルから逃れた食べ残し達が、パパン！パパパパン!!　とアサルトライフルの短い連射に追い立てられていくのがここからでも分かる。

「クリア？」

「クリアだクリア。手伝えよクウェンサー、その子の目隠し取る前に死体どっかに隠そうぜ。ほら、シーワックスも手ぇ貸せ!!」

「病院跡地って話だけど、モップとバケツはあるのかな？」

死体がその辺に転がっているため、まだ目隠しは外せない。が、口を塞いでいるダクトテープは呼吸困難の危険がある。クウェンサーは近づいて、口元のテープをゆっくりと剝がした。

盛大な泣き声が待っていると思っていた。

だが違う。

「逃げてッ!!　早く!!」

嫌な予感がした。

女の子の上着が不自然に盛り上がっている事にようやく気づいたクウェンサーは、彼女の上着を軽くめくってみる。

携帯電話とカラフルなリード線が見えた。

「冗談だろオイ!!」
ヘイヴィアが叫んだ直後だった。
遠く離れた場所で、どこかの誰かが短縮ボタンを押した。

9

その瞬間。
クウェンサーとヘイヴィアが取った行動は、それぞれ全く正反対だった。
爆風から逃れようとするため、ヘイヴィアはとっさに真後ろへ下がった。それとは逆に、クウェンサーは椅子にダクトテープで固定されたままの女の子の両肩を掴む。そのまま滑り込むように、診察室のベッドの下へと彼女の小柄な体を投げ込んだのだ。
ちなみにこんな時でもシーワックスはファインダーを覗いていた。
「なっ、なんだっ？」
ヘイヴィアはスチールデスクの陰へと飛び込みながら、息を詰まらせるように質問する。
耳が痛くなるような沈黙がある。
「何だよっ、おい！　爆発しねえぞ!?」

「携帯電話！」

クウェンサーは叫び返す。

「起爆装置に使われているのは型遅れの安物だ。廃墟だらけのゴーストタウンに屋内基地アンテナなんかない。ここで飛ばした電波は一度、隣街のアンテナに向かってから、もう一度ここまで戻ってくる。ビルの廃墟に分厚い壁、さらに医療用ベッドの鉄パイプとスプリングがあれば十分だ。ここに放り込めば着信はしない!!」

言いながら、彼はベッドの下に潜り込む。サバイバルキットの中から小さなナイフを取り出す。突然狭い場所へ投げ込まれた女の子は、自分の身に何が起きたか分かっていないようだった。目隠しと耳栓をされた状態なら誰でもそうなるだろう。

耳栓を片方だけ外し、クウェンサーはゆっくりとした声で言う。

「大丈夫だ、もう大丈夫。爆弾は爆発しない」

「ほ、本当に？」

放心しているようだが、暴れられても作業の邪魔だ。今はこれで良しとする。

と、ヘイヴィアが質問してきた。

「外せそうか？」

「下に見てんのか。こんなクソみたいな起爆装置、四五秒で無力化してやる」

爆発物は土木工事用のＴＮＴで、ダクトテープを使って背中側で負うような格好で固定され

ていた。起爆装置やバッテリーなどは脇に集中している。どれもこれも再興工事の現場から盗んできましたといった感じだ。

「まったく、スクールバッグのつもりかよ」

電子基板は三つあったが、内二つは見せかけだけの飾りだった。必要なリード線だけをナイフで切って、起爆装置を完全に殺す。

「おい一分経ってるぞ！」

「馬鹿、装置潰すだけなら三〇秒で終わってるよ。優しくダクトテープ剝がすのに苦労してんの!!」

完全に機能を奪っているので、ベッドの下に留めておく必要もない。ダクトテープだらけの爆弾をベッドの下から放り投げると、クウェンサーは九歳の人質を引きずり出す。

ヘイヴィアは息を吐いて、無線機に声を掛ける。

「状況終了。人質は無事だ。繰り返す、状況終了！　どうせ無理だと思うけど、キンキンに冷えたノンアルコールビールと生ハムをリクエストしておくぜ。ああちくしょう、どうせ無理だろうけどな!!」

「うちに帰るまでが遠足ではないのかね？」

「あと救急車を一台頼む。そろそろクソうざってえカメラマンを殴り倒しそうだ!!」

人質の女の子は、周囲をキョロキョロと見回していた。

犯罪組織の連中の死体は別の部屋に移し、簡単にモップもかけている。しかし部屋の中に漂

う不穏な空気までは完全に消せない。

シーワックスはカメラのファインダーから目を離しつつ、クウェンサーに声を掛けた。

「この後は？『うちの猫知りませんか』のポスターでも探して回るとか？」

「軍の情報収集能力舐めるなよ。今頃この子のご両親は整備基地にご招待されているだろうさ。感動のご対面はフェンスの内側で、だ」

と、女の子がクウェンサーの顔を見上げてきた。

爆弾を解除した関係か、一番話しやすいと認識されているのかもしれない。

「……ねえ、どこなの？」

「ああ、ああ、心配はいらないよ。君のお母さんとならすぐにでも」

「そうじゃない」

言葉を遮るように、女の子はこう言った。

まだ事件は終わっていない。そんな不安を抱えるように。

「他のみんなはどこにいるの？」

10

やる事がない。

率直な、お姫様の感想だった。

いかに対人センサーなどを多数備えた第一世代と言っても、繊細な人質救出作戦となると『超大型兵器』の出番は乏しくなってくる。あまりにも強大な戦力を提示してしまうと、追い詰められた犯行グループが勢い余って人質を殺してしまうかもしれないらしいのだ。

よって、模擬戦の一仕事を終えたお姫様は、プールの水面で仰向けになって浮かんでいた。

一〇〇両以上の大型車両を組み合わせて構築される整備基地ベースゾーンだが、流石に広大な屋内プールを備えるほど設備は充実していない。これは足元が砂漠であるのを利用して作られた屋外施設だった。

平たく言えば、素行不良な兵士達にスコップを持たせて大きな穴を掘らせ、表面をビニールで覆ってから水を流し込んだだけの即席のプールだった。近くには『女性兵士専用。カメラ持ち込み厳禁』という立て札が突き刺してあり、お姫様の周りには水着姿になった非番の女性達が、水の掛け合いだのビーチボールのぶつけ合いだの本気のケンカだのを繰り広げている。

目的は二つ。

一つ目は、現場で働く女性兵士達の対ストレスプロジェクト。プールそのもの、というよりは、普段の軍務中にはお目にかかれないものを提示して、ちょっとしたイベント効果を狙ったという方が近い。似たようなプロジェクトに、ＨＡＮＡＭＩやカーニバルといった記念行事や、ある日突然水着姿のサンタクロースが現れたり、といったものもある。

二つ目は、言うまでもない懲罰。このくそ暑い炎天下、自分達とは一切関わりのない優等生達のために延々と穴を掘らされるというのは、なかなかに堪える。実際のところ、主に爆弾使いの学生や銃器の取り扱いに長けたレーダー分析官などが半分以上拵えたと言っても過言ではなかった。

「ふう……」

そんな訳で、お姫様は他の女性兵士達と一緒に水着姿のまま、およそ一〇メートル四方のプールの上に浮かんでいられるのだった。

と、

『おほほ!!　おほほほほ!!　まーったくどろくさい「正統王国」のエリートは、つかれきったためいきにかんろくがありますわね。なんだかおばちゃんくさいですわ』

「……なんでこんなのとかいせんがつながっているわけ？」

手首にゴムバンドで固定してある携帯端末から聞こえてきた『情報同盟』の操縦士エリートの声を聞き、普段は無表情なはずのお姫様の眉が、明確に不快に歪む。

画面の向こうのナイスバディは、頬に手の甲を押し当てるような仕草をしながら高笑い。

『おほほ、外交ルートというものをしりませんの、こむすめ？　かいせんを切るのはけっこうですが、エリートのぶさほうはしょぞくぶたいのつらよごしになりますわよ。おほほ。もっとも、そんなことを気にするようなこむすめには見えませんけど!!』

「……分かったからケンカしよう。『ベイビーマグナム』でこなごなにしてあげるから」

『おほほ、この私がオセアニアにいるとおもって？　せんそうとはどろくさいうちあいだけでなりたつものではありませんのよ。私は今、コンサートのじゅんびのまっさいちゅうです。あなたみたいなこむすめのあいてなどしているひまはありません』

「なら、なんでいちいちれんらくしてきたし……」

『そして、あのとのがたを「ろうらく」するためのしたじゅんびもちゃくちゃくと』

ビキリ、と妙な音が聞こえた。

携帯端末を掴み直したお姫様の手の中で、防水加工の外枠が危うく壊れかけた音だ。

「……くわしくせつめいして」

『いやですわ。こうごきたい☆』

言うだけ言うと、通信はいきなり切れてしまった。

お姫様はしばし仰向けでプールの水面を漂い、真上を横切っていくビーチボールを眺めながら、

「……コンサート……うた……」

ぼんやりとした眼で青空を見上げて、彼女はポツリと言う。

「こんど、カラオケボックスでクウェンサーといっしょにしゃしんでもとって、あのこにくたらしいヤツをくやしがらせようかな……」

その言葉に整備大隊の諜報部門が密かに耳をそばだてた。
理由は簡単。彼女のコンディションは部隊全員の生死に直結するからだ!!

11

空は夕暮れのオレンジに染まっていた。
あれだけガンガンに降り注いでいた殺人的な陽射しは見る影もない。オセアニアの空は、一度暮れ始めれば闇に覆われるのは早い。あと数十分で完全な夜が待っているはずだ。
そんな中で、
「つまり構図は簡単だ」
ヘイヴィアは廃病院の床を軍用ブーツの踵で蹴飛ばしながら言う。
心の底から面倒臭そうな調子で。
「人身売買だよ。老若男女お構いなし。この病院は中継地点っつーか、集配所だった。近郊の街から無防備な人間をさらって、一度、特に治安の悪いここへ運び込む。警官達は尻込みして大したパトロールをしねえから、車を変えて移動しちまえば足取りは全部消せるって訳だ」
間違い電話から始まった『誘拐事件』は、すでに解決したものとして扱われていた。人質の女の子も軍用トラックに乗せられて、整備基地ベースゾーンへ向かっていった。

ここにいるのは、クウェンサー、ヘイヴィア、ミョンリ、そして戦場カメラマンのシーワックスだけだ。

人質になっていた少女の話では、つい数十分前まで、ここには老若男女関係なく、三〇人から四〇人の人間が連れて来られていたらしいのだが……。

クウェンサーは片手を上げて、

「じゃあさっきまでの誘拐劇は何だったんだ？　人身売買目的だったら、脅迫電話なんかかける必要ないだろ。売り払えば金は手に入る」

「副収入ってヤツだろ。どこか遠くへ売り払う前に、両親から奪えるだけ金を巻き上げておく。どうせ最初っから子供を返すつもりなんざ一ミリもなかったんだ」

「でも、一体どこの誰が……？」

ミョンリが不安そうに言うと、シーワックスはカメラを手入れしながら答えた。

「『人間』なんて、どこでだって需要はあるさ」

「けどおかしいのは老若男女ってトコじゃね？　臓器、兵隊、労力、変態趣味のオモチャまで色々あるが、素材は若いに越した事ねえだろ。あの手の犯罪組織が、わざわざじいさんばあさんをさらって商品化するとは思えねえぞ」

「場合によりけり」

シーワックスは躊躇なく即答する。

「餓死者であれ戦死者であれ、世の中には分かりやすい戦争の犠牲者ってのを欲しがる連中もいるんだ。例えば、オブジェクト体制の整っていない混乱した国の首脳陣が、『安全国』からの人道支援物資を欲しがっている時なんかにな」

「……マジかよ」

「支援物資……つまり食料や燃料なんてのは特定のルートを通せば換金できる。その金を使って銃や傭兵を買えば供給不足で不満の溜まった支配体制の引き締めに使える。独裁と弾圧の分かりやすい政治形態だ」

「『死体役のエキストラ』の輸出ビジネス、か」

クウェンサーは吐き捨てるように言う。

ヘイヴィアは眉をひそめて、

「けどよ、オセアニアの人間が別の国で死体になったら状況が矛盾しねえか？」

「その場合は、観光客をさらえばある程度は地域に合わせたニーズっていうのにも応えられるんじゃないか。そこのカメラマンみたいに、世の中には危険な場所へわざわざやってくる連中だっているんだしさ。適当に一定数さらってから、リクエストに応じた『仕分け』をすれば良い」

うんざりした調子でクウェンサーは呟くが、シーワックスは涼しい顔だ。

学生は顔の汗を手の甲で拭いつつ、

「しっかし、道理で老若男女関係なしな訳だ。死体が子供や女性ばっかりだったら、テレビの前の暇人の感情を揺さぶるのには使えるけど、その分演技臭くなる。『らしさ』を演出するため、適度にマッチョだのじいさんだのも混ぜておきたいってところなのか……？」

「それ、格ゲーのキャラのバリエーションみたいな理由でさらわれて殺されるって事ですよね……」

「ダミーの作戦とはいえ、自国の民を犠牲にする事へ抵抗を感じる兵隊だっているかもしれねえ。独裁国家の中でもな。だが、自国の民を守るために他国の民を殺すって構図にしちまえば罪悪感はいくらか削がれる。そもそも『軍』の存在意義や『兵士』の教育ってのはそういうもんだしな」

目的の推測はこの辺りか。

シーワックスは話題を切り替えるようにこう告げる。

「廃病院を使っていた連中の銃に心当たりは？」

「旧式のアサルトライフル。しかも屑鉄を溶かして再利用した粗製品だぜ。つまり軍事国時代のオセアニア装備」

「旧、軍政派の残党が関わっているって事ですか……？」

ヘイヴィアの言葉に、ミョンリは信じられないものを見るような目で応える。

クウェンサーは慎重に言葉を選びながら、

「多国籍軍のオブジェクト駐留で、圧倒的に戦況が傾いているにも拘らず、未だにオセアニア奪還を標榜している残党がいるって話は聞くよな」

シーワックスは薄く笑う。

「彼らは同じような『オブジェクト支配』に否定的な混乱地域とのパイプを作ろうと躍起になっているという話も聞く。だが貿易には商品が必要だ。物資の枯渇した旧軍政残党は、外交商品っていうのを求めている訳さ」

「それが、死体役のエキストラ。老若男女の人材派遣」

ヘイヴィアは小さく呟き、

「旧軍政の残党が掲げているのはオセアニアの再転覆だ。……そう考えれば、辻褄が合わない事もねえかもな」

「どの辺が？」

「連中が欲しいのは人心掌握術だ。そのための下拵えだってすでに見え隠れしていやがる」

少し考え、そしてクウェンサーは苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「……闇市か」

「一般市民だって利用しているコンビニ以上の庶民の味方。こいつがなければその日一日のパンだって手に入らねえ。だが、瓦礫の中を這いずるだけで闇市の商品を全部揃えられる訳じゃねえわな。どっかで資金を手に入れて、商品を買い揃える必要がどうしても出てくる」

「人間を売って得られる食料」

美味い美味いと絶賛していた料理の中から、大量の髪の毛がごっそりと出てきたような顔でミョンリは言う。

「そんな真実を知ったら、それこそ民衆は旧軍政残党の闇市なんて毛嫌いするのでは？」

「するだろうさ」

シーワックスは嘯いた。

「だがその頃には、闇市は完全に一般市民の生活に溶け込んでしまっている。嫌悪感を抱いたってもう抜け出せない。水やパンが手に入らないんじゃどうしようもないからな。……そして肯定するしかなくなるんだ。残党のやってきた事を。彼らの行いが正しかった、という結果が出ないと自分達も困るって状況に民衆を追い込んでいくって寸法だろうな」

「悲惨な事件を利用して、一つの国の中にある善悪や常識の基準そのものを押し流す。これも立派なテロリズムだぜ」

「ふざけやがって……」

吐き捨てるように、クウェンサーは言う。

シーワックスは薄く笑いながら、

「不幸中の幸いなのは、おそらくこれが人身売買の第一陣という事だろう」

「あん？」

「今まで闇市を覗いてきたが、商品の在庫状況が結構不安定だった。おそらく今までは、瓦礫の中から商品を掘り返してきただけだったんだ。だけど流通が滞りがちになってきて、残党達も焦ってきた。民衆の怒りが『商品不足の闇市自体』に向けられるのを避けるために、急いで策を講じたに違いない。以前から人間を売って安定した収入を得ていたのなら、あんな不安定にはならない」

「だったらどうした」

クウェンサーはシーワックスを睨みつける。

「どっちみち、ここから消えたオセアニアの老若男女が箱詰めされる前に救出しなくちゃ結果は同じだ。三〇人？　四〇人？　何しろ死体役のエキストラだぞ。『クリーンな戦争』が通用しない泥沼へ輸出された彼らが、どんな惨たらしい写真になって世界中へばら撒かれるか分かったもんじゃない」

「そこが問題だぜクウェンサー」

ヘイヴィアは頭を掻きながら、

「うちの爆乳の大義名分は何だった？　『子供が誘拐されて軍の司令部が脅迫を受けた。その自衛行動のため、部隊を動かして犯罪組織を壊滅させる』だ。言いたい事は分かるか？」

「……そうか。間違い電話から始まった今回の作戦は、脅迫電話の中にあった女の子一人分にしか適用されません。あの子が救出されてしまった以上、そこから先は軍事作戦を行う名目が

ない!!」

「じゃあどうするんだ？　このまま放っておけっていうのか!?」

「こっちだってベッドに潜って目を瞑るたびに、一列に並んだ死体袋の悪夢に苛まれるなんてごめんだ。けどよ、それとこれとは話が違う！」

「どっちみち、さっき助けたあの子が整備基地に送られれば、同じ報告をフローレイティアさんだって聞くはずだ。つまり何を選んだって、最終的には部隊が動く。にも拘らず、わざと開始時間を遅らせて死体袋を増やすなんてありなのか!?」

「だったら許可をくれよ許可を!!　正義のヒーロー気取るのは結構だが、『安全国』に銅像が立つ代わりに鉄格子の中にぶち込まれるなんてのは勘弁してほしいぜ!!」

「ふう……」

シーワックスが、分かりやすいため息をついた。

そして静かに割り込む。

「状況を確認しよう。君達は無事に作戦を終了させ、これから整備基地ベースゾーンに帰るところだったはずだ。そして、率先して現地勢力へ先制攻撃を加える事は許されないが、突発的戦闘への自衛行為として軍事力を行使する事は許可されている。ここまでは良いか？」

「砂漠で方角を見失って遭難。闇雲に車を走らせたら誘拐組織と鉢合わせ、とかって言いたいのか？」

「そいつは相当苦しいぜ！　どう転んだって爆乳からどつき倒されるのがオチだ!!」
「……銃で撃って人を殺せばな」
クウェンサーは自分の頭の中で考えをまとめながら、
「だけど調査活動、長距離偵察の範囲なら何とか誤魔化しが利くはずだ。……どのみち、フローレイティアさんも女の子の証言を聞けば動く可能性が高いんだろ。だったら襲うべき建物の場所や具体的な人員配置なんかを先んじて調べておくだけでも、助けられる人数は変わってくるかもしれない」
「楽観論だぜ。爆乳が動かなかったら？　犯罪組織とはいえ相手は分類上民間人だ。組織丸ごとぶっ潰す『軍による殺戮』を正当化させられる大義名分を作れなけりゃ、あの爆乳だって指を咥えて見ている事しかできねえはずだ」
「その場合は」
クウェンサーは、そこで一度だけ言葉を区切った。
迷いを振り切るように、やがて言う。
「営倉にぶち込まれるのを覚悟でやるしかなさそうだ」

12

偵察にも作法というものがある。

そしてクウェンサーやヘイヴィア達には、専用の機材はない。

そんな訳で、

「……にしても、まさか連中の闇市で装備を固めるとはよ」

「自業自得って感じがして味があると思おうよ」

盗聴用の集音マイクやレーザー式盗聴装置などを軸に、軍用偵察機材を言い値の半分以下で買い叩いていく。一般の土産物屋などと違って、闇市は夜になってからが本番とばかりに活気に満ちていた。熱帯夜と人々の欲望が生み出す異様な熱とが絡み合い、昼間の直射日光とは違う、体の内側に籠るような蒸し暑さで空間が満たされている。

「うだるようだるー……。夜の砂漠って寒くなるんじゃなかったっけ？」

「この辺はあっちもこっちもコンクリだらけじゃねえか。ヒートアイランドだの何だので熱気が籠ってんだろ、クソが」

「そこらじゅうの照明が時代遅れの白熱電球だったり、みんな揃ってディーゼルの発電機回してんのも積もり積もっているのかな……」

ちなみに値切り交渉役は主にクウェンサーだった。

機械部品に詳しい事と、何より『平民』故の細かい金銭感覚がものを言ったのだろう。

「怖いのは整備基地に派遣されてきた黒軍服の姉ちゃん達だぜ。こんなのバレたら軍法裁判抜

きにその場で射殺されるかもしれねえぞ」

「ついでに軍服も買ってけば？　『情報同盟』とか『資本企業』とかのが流れてるじゃん」

「んな事してみろ。バレたら国際問題だぜ。俺は戦争の火種になるつもりはねえよ」

粗悪な偽札でも使ったのか、酔っ払いが店員達に袋叩きにされているのを横目に見ながら、氷だらけのクーラーボックスに突っ込んである瓶のサイダーなども追加購入していると、無線からシーワックスの声が飛んできた。

ミョンリとシーワックスには、一足先に大まかな情報収集を頼んである。

『やっぱり不安定な国じゃ「安全国」の通貨は強いな。「正統王国」のユーロ紙幣より「資本企業」のドル札の方が喜ばれたのは複雑だが、面白い情報を手に入れたぞ』

「……くそ、炭酸が抜けてやがる」

『は？』

こっちの話だ、とヘイヴィアは誤魔化した。

「犯罪組織の末端とでも接触したのか？」

『そこまでじゃない。例の「真実の口」の瓦礫の中で働いている作業員達からの目撃証言だよ。戦災復興のために国際港のいくつかのドックが一般開放されているんだが、その内の一つをペーパーカンパニーが独占しているようだ。見られても困らないものを運んでいるだけなら、そんな配慮をする必要はないな』

「そこに死体役のエキストラが運び込まれたって物証はあんのかよ？」

『さあね。ファストフードのハンバーガーがいつもより数十人分多く注文されたっていうのは根拠としては弱いかな？　ついでに水と塩も運び込まれているらしい』

ヘイヴィアとクウェンサーは目を合わせた。

「……一度食事をさせたら、後はコンテナにぶち込んで長い船旅コースか？」

「つーかそんな雑な方法で詰め込んだ全員をホントに目的地まで運べんのかよ？」

『まあ、どこへ輸出されるかにもよるんだが……。最初の二週間で半分が、あとは一日ごとに生存者が一割ずつ減っていくって考えるべきかもしれないな』

ミリも笑えなかった。

犯罪組織の商品は安価な労働力でも変態趣味のオモチャでもなく、死体役のエキストラだ。生きている状態で売れれば最良だが、死んでも冷凍して叩き売りすれば良いくらいの気持ちなのかもしれない。凄惨な焼死体にしてしまえば死斑もクソもなくなるし、そもそも検死なんてさせない可能性もある。

『港の見取り図は手に入れた。「商品」が詰め込まれている予想箇所はいくつか候補があるが、確定はしていない。こればっかりは、実際に目で見て確かめるしかなさそうだな』

「ま、軍の衛星を無制限で使える訳じゃあないからなあ」

「……最短コースは見えてるっつーのによ。わざわざ回り道しなくちゃならねえってのは疲れ

が増すよな」

クウェンサーとヘイヴィアはジャンク品を一つずつ買い叩いてはメモの文字列を横線で消していきながら、無線機に尋ねる。

「装備は一通り揃いそうだ。偵察用具の基本セットの他に、必要なものは？」

『ブロンドの美女と、シェリー樽で八年以上寝かせたブランデーに余計なフィルターなんぞついていない葉巻、プール付きの別荘。……後はそうだな』

シーワックスは適当な調子でこう付け足した。

『弓矢一式』

「？」

13

問題の国際港は、『真実の口』などと呼ばれる瓦礫の街の端にあった。

クウェンサー、ヘイヴィア、ミョンリ、シーワックスの四人は、港から三キロほど離れた路上に停めた軍用車両から、ひび割れたアスファルトの上へと降り立つ。

明かりのない廃墟の群れは、昼間とはまた違った雰囲気があった。

廃ビルの方に、懐中電灯のような光は見えない。やはり暗闇の中でゴミ漁りをしても効率

が悪いと考えているのか、あるいは掘り出し物を見つけても襲撃されると考えて夜間は動かないようにしているのか。

「治安悪くてジャンク拾いにも余念がないんでしょ？　こんなトコに車置いて大丈夫なのかね。やだよ。一仕事終えてへとへとになって戻ってきたら帰りのアシがなくなってた、なんてのは」

「昼間あれだけ暴れたんだぜ。少なくとも半日程度は、スラムの住人だって軍相手にケンカを売る気はなくなってんだろ」

クウェンサーとシーワックスは偵察用具一式、ヘイヴィアとミョンリは火器類を抱える形で、戦災復興のために一般開放されているとされる、その国際港へと歩を進めていく。

「……にしても、戦災復興っつったって、見方を変えりゃ金のなる木だろ」

ヘイヴィアはうんざりした調子で顔の汗を拭いながら、

「大量の物資が行き交う以上はそれをつけ狙う連中だって出てくる。こんな人気のねえ、遮蔽物も多い、襲撃ポイント目白押しな廃墟群を抜けるルートなんて、そりゃあこっちの治安だって悪くなるってもんだぜ」

「治安が悪いから陸路のコンテナが襲われるのか、コンテナが陸路で通るから治安が悪くなるのかは難しい論点ではあるがね」

シーワックスは流れるような調子でそう答えた。

クウェンサー達は港の敷地へは直接入らなかった。一応は金網のフェンスで覆われ、銃で武

装した港湾職員などが巡回しているのが見える。無条件に開放してしまうと武器や麻薬の密輸に使われる恐れがあるため、当然と言えば当然の対応ではある。

「……実際に人身売買の出入り口に使われてんじゃ世話ねえぜ」

崩れた瓦礫の陰に身を潜め、ヘイヴィアが小さく呟く。

クウェンサーが呆れたような調子で、

「念のために確認するけど、あれは撃つなよ。区分は現地の一般人だ」

「分かってるよ馬鹿野郎。だが悪党に金を摑まされている可能性までは否定できねえ。戦闘になったらイエロー扱いだ。殺しはしねえが無力化させるってヤツだな」

国際港というだけあって、その敷地は広い。コンクリートで固めた海岸線に沿って一～二キロはあるだろう。そして敷地の半分ほどは過去の激しい戦闘で破壊されていた。巨大なクレーンが折れて海中に没し、コンテナヤードでは山積みされていたであろう大量の金属の箱が雪崩を起こしたように広がっていた。

「ミョンリ、問題のドックってのはどこだ？」

「きゅ、九番です、聞いた話では」

国際港の周辺は、やはり折れたり崩れたりしているビルの瓦礫が並んでいた。クウェンサー達四人は、砂に埋もれるような格好で屹立している廃ビルの一つに入り、階段を上る。ドック全体を上方から観察できる窓を探し、壁に沿う形で身を潜める。

「ったく、いきなり崩れたりしねえだろうな」
「アスベストとかも超怖いよ。安全な建材使っているんだろうね？」
馬鹿二人はブツブツと言い合う。
「……有名人がいるな」
双眼鏡を使って眼下のドックを見下ろしながら、シーワックスが平坦な調子で呟いた。
「頬の傷に右手の義指の大男。スクープ対象として大手の新聞社が賞金を懸けている人物に似ている。おそらく『ブルーボトル』とか呼ばれている大物だ」
「何それ？」
とクウェンサーが馬鹿正直に質問すると、ヘイヴィアがうんざりした調子で、
「そういや諜報部門が内緒話してたっけな。衛星だの検問だのをかいくぐって、オセアニアの大陸で荒稼ぎしている運び屋だかマーケットの元締めだかを非正規作戦で暗殺するしねえって話。整備基地のゲストＩＤを乱発して、専門の暗殺部隊を招く足掛かりにするんだとか何とかって」
「おいおい。俺達の専門は『戦争』だろ？　『事件』は現地警察に任せるんじゃなかったのか？」
「何事にも例外はあんのさ。例外を設けねえとまずい程度にはやり手って訳だ。『正統王国』『情報同盟』『資本企業』『信心組織』……いろんな世界的勢力が利害を巡ってここオセアニアで暴れちゃいるが、万人に平等な被害をもたらす犯罪者なんぞ誰も歓迎しやしねえ」

ふうん、とクウェンサーはいまいち良く分かっていない顔で、
「その『ブルーボトル』っていうのは？　青い瓶に札束丸めて持ち運んでいるとか？」
声に、シーワックスは肩をすくめた。
「クラゲの名前だよ。猛毒クラゲ。オセアニアじゃサメよりクラゲで死ぬ人間の方が多いらしい。幽霊みたいに網の目をくぐって商売している事への揶揄でもあるようだが」
という事は、件の人身売買や闇市に深く関わっているのは、その『ブルーボトル』が率いる犯罪組織という事になる。
「おーおー、一目で分かるな」
双眼鏡で覗くまでもなく、ヘイヴィアが口笛を吹いた。
「明らかに港湾職員って感じじゃねえ、ゴツいアサルトライフルぶら下げた連中が。ざっと見て五〇から九〇人ってトコかね」
「え……？　見たところ、表を歩いているのは二〇人程度しかいないみたいですけど」
「だから二シフトか三シフト換算で五〇から九〇っつってんの。サッカーだって一一人ピッタリでやるもんじゃねえだろ」
「なあヘイヴィア。金と装備だけ渡された港湾職員って線は？」
「ねえよ、何しろ血色が違う。肌の張りくらいなら短期間で結構変わるもんだが、白目の鮮やかさについちゃ一週間一ヶ月で変えられるもんでもねえ。あいつらは普段食ってるもんからし

て、ヒエラルキーが明らかに上。その場限りの日雇い職員じゃああはいかねえ。殺してみたら民間人でしたなんつー間抜けな展開にゃならねえだろ」

つまり遠慮はいらない。

クウェンサーは、シーワックスの手で埃だらけの床に広げられた見取り図と、窓の外に広がる実際のドックを交互に眺めながら、次の話題を持ち出す。

「一番は『ブルーボトル』の連中の『商品』がどこに収められているかだ。ドックには中規模の貨物船が停泊しているみたいだけど」

典型的な、金属製のコンテナを大量に積み込んだ船をクウェンサーは指差す。

だがシーワックスが即座に否定した。

「……船はないな。人間の寿命は気温と湿度に直結しているはずだ。出港ギリギリになるのを待ってコンテナへ詰め込むだろう。果物の輸出と同じだよ、そっちの方が長持ちする」

だとすれば、コンテナヤードにある数百のコンテナの方も除外して良い事になる。

あれが全部候補と言われたら、流石にお手上げだったかもしれない。

「でも、じゃあどこに？」

「布陣を見ろよ学生さん」

ヘイヴィアはクウェンサーの肩を叩いてから、顎で窓の外を指す。

「出入り口、狙撃ポイント潰し、見張り台代わりのクレーンのてっぺん。……そういう教科書

通りの配置パターンの他に、明らかに効率的じゃねえ場所に兵隊をばら撒いてる。ありゃ逃亡者対策だろ。『商品』は事務所の中だ」

「だろうな」

これにはシーワックスも同意した。

「炎天下を遮る屋根がある。そして熱中症を防ぐエアコンも。何より四方を壁で覆われているから脱走はできない。人が閉じ込められているなんて衝撃の事実を、誰に知られる心配もない」

クウェンサーは一瞬納得しかけて、しかし眉をひそめた。

もう一度、窓の外へ目をやる。

「敷地のフェンスからそう遠くない。大声を張り上げれば外に洩れるだろうし、脱走のチャンスだって……」

「外へ出てどうすんだよ」

ヘイヴィアは皮肉げに唇を歪めて、

「一帯は廃墟の街。ジャンク漁りしている連中はみんな『闇市』の下働きだぜ。積極的に人身売買に関わろうとはしねえだろうが、親玉の『ブルーボトル』が一喝すれば全ては黙認だ」

「無害な港湾職員はどうだ？」

「生きて家まで帰るためには、廃墟の街を通る必要があるんだ。無用なトラブルに巻き込まれてえと思うか？」

言うだけ言うと、ヘイヴィアはミョンリに向かって指先で何かサインをした。
それからクウェンサーの肩を叩く。
「今の何？」
「一応軍の世話になってんだからよ、共通言語くらい身につけたらどうなんだ？」
ミョンリとシーワックスを残し、クウェンサーとヘイヴィアの二人は一度廃ビルを出る。身を低くし、路面にまで広がるコンクリートの残骸の陰を縫って進む。
クウェンサーはヘイヴィアが抱えているものを見て怪訝な顔をした。
「そんなの持ってきてどうする訳？」
「『商品』が詰め込まれている事務所は、フェンスからそう遠くない。テメェが言った台詞だぜクウェンサー」
フェンスへギリギリまで近づいてみると、事務所までの距離はざっと一〇〇メートルあるかどうか、といったところだった。もちろん、これ以上は近づけない。瓦礫の陰から顔を出せば、即座に『ブルーボトル』率いる犯罪組織との銃撃戦が始まってしまうだろう。
言うまでもない事だが、金属製のフェンスを挟んでの戦闘だと、人質を救出しなくてはならないクウェンサー達にとっては圧倒的に不利だ。
問題の事務所は鉄筋コンクリート製の二階建て。階段は建物の外壁に張り付くように取り付けられていた。

一階部分は窓に全てブラインドが下りていて、中を覗く事はできなかった。
そして二階部分。
「いたぞ」
双眼鏡片手に、クウェンサーは呟いた。
「おばあちゃんだ、一人いる。八〇歳くらいのおばあちゃん。こりゃまた『分かりやすい』保護欲の象徴だね。エキストラにぴったりってか、ふざけやがって」
「またかよくだらねえ！　いい加減に巨乳のウェイトレスとかビジネススーツの美人秘書とか出て来ねえのか!?　俺にやる気を注入してくれよ!!」
「それより」
クウェンサーはうんざりした調子で、
「ここから見た限り、窓の傍にいるのは一人だけだ。聞いた話じゃ三〇人くらいいるって話だろ。他はどこ行った？　バラバラの場所に閉じ込めてあるとしたら厄介だぞ」
と、無線機の方から声があった。
シーワックスのものだ。
『……だとすると、そこは多分、最後の晩餐に使われる場所だ』
「あん？」
『さらわれた人間はコンテナに詰めて海を渡る。彼らがどれだけ生き残るかは、気温と湿度、

そして食糧事情に大きく左右される』

クウェンサーは改めて事務所二階の窓へ双眼鏡を向ける。

小柄な老婆は窓際の椅子に腰掛けていた。丸いテーブルの上には、ファストフードのものらしきハンバーガーとフライドポテトがある。炭酸飲料の入ったカップもあるようだった。

『コンテナに詰めた後は水と塩だけの生活だ。まともな食料を渡したって高温高湿ですぐに腐ってしまうからな。となると、箱詰めする前に食べられるだけ食べさせておいた方が、「商品」の鮮度を保てるという寸法だな』

「……だからハンガーストライキをされちゃ困る、って？」

『銃を突き付けて無理矢理口に詰め込んでも、多大なストレスで吐いてしまっては元も子もない。そのための「希望」さ。エアコンの効いた快適な部屋で、敷地外周のフェンスからそれほど離れてもいない、そして見晴らしの良い二階の窓際。……もしかしたら逃げられるかもしれない、そのためには食べておいた方が良いかもしれない。そんな風に思わせて、あくまでも自発的に食べさせる。それで出港準備完了さ』

言われてみれば、小さな老婆は目の前に食べ物があるのに、それを口にする雰囲気ではなかった。椅子に座ったまま、ただ俯いている。ハンバーガーはすっかり冷めていて、フライドポテトの油は紙の容器に染み出していた。どれだけの時間そうしていたのかは、クウェンサーには想像もつかなかった。

「……食べたら終わり。それが分かっているんだ」
「くそったれめ。うちのレーションより不味そうなメシを見るのもなかなか珍しいぜ」
適当に言いながら、ヘイヴィアは瓦礫の陰で軍用の弓を組み立てていた。競技用のアーチェリーの各部を頑丈にし、砂漠用の迷彩を施したようなデザインだ。
「おい。この人数で本当にやるのか？　人質が全員どこにいるか把握さえすれば、フローレイティアさんだって動いてくれるかもしれないのに」
「殺すためじゃねえよハッピーちゃん。距離一〇〇、二階の窓。狙いを上へ向けた曲射弾道なら部屋の中まで届く。大した音もしねえから外をウロチョロしている見張りにも気づかれねえ」
何が言いたいのかは分かってきた。
クウェンサーは砂まみれの金髪を軽く掻きながら、
「あのおばあちゃんに無線機を投げるって言っているのか？」
「元々こいつの矢は発信機つきだ。オブジェクトに破壊目標を知らせて砲撃させるための装備なんだよ。ちょちょいと改造すりゃ声のやり取りだってできんだろ」
「誰が改造するの？」
「口だけ君になりたくなけりゃ手を動かせよクウェンサー。イヤホン分解して振動子取り出すくらい、爆弾の起爆装置殺すよりは簡単だろうがよ」
「誰が給料払うの？」

「それについては俺も答えは出てねえよ！　真面目な顔して何やってんだ俺は!?」

はんだごてもニッパーもない中、ほぼ調理用として知られるサバイバルキットの小さなナイフ一本で電子機器を分解し、必要なパーツを組み合わせていくクウェンサー。手つきは大雑把ながら的確で、船の上で作る漁師メシと似た雰囲気があった。

クウェンサーは組み上げた矢をヘイヴィアに渡しながら、

「窓は？」

「開いてる。中はエアコン効いてるだろうが、窓が開いていた方が『希望』も増すんだろ」

「使えるのは一本しかない。本当に一発で部屋の中へ送れるのか？」

「弾道計算プログラムを通しゃ簡単だよ。テーブルの上のハンバーガーでもぶち抜いてやろうか？」

「……何そのヤバそうなの？　そんなの闇市に流れてて大丈夫な訳？」

「馬鹿言え、こんなもん好事家のゴルフ愛用品だぜ。悪用すりゃ迫撃砲の照準補正なんかに使えるがな」

「クラブで路上のＡＴＭかち割って札束抜き取るようなものか……」

「これも貧富の格差ってヤツだよな。闇市漁って食べ物値切るしかないヤツもいれば、砂漠のど真ん中に緑色のゴルフコース作って遊んでやがるヤツもいる。でなけりゃこんなもんが流れる訳がねえ」

問題の弾道計算プログラムというのは、弓のグリップに携帯端末を取りつけ、小さな画面を覗き込む形で使うものらしい。カメラのレンズで捉えた映像の中に、野球の遠投のコースをなぞるようなラインが追加されている。

ほとんどスポーツだった。

上向きに構えられた弓から大きく矢が放たれ、見張りの頭上を音もなく飛び越し、宙で弧を描いて、事務所二階の窓へと斜め上方から落ち、室内へ正確に飛び込んでいく。

ダガッ！　と。

まるでお子様ランチの旗のように、テーブル上のハンバーガーの中心を矢が貫く。

「へっ、見たかよクウェンサー。この超天才美形富豪貴族ヘイヴィア様の腕前をよ。ホールインワンってのはビギナーズラックに頼るもんじゃねえ。紳士の実力と余裕が生み出すもんだ」

「ばかっ、おばあちゃんびっくりし過ぎて椅子からひっくり返ってるだろ！　それに弾道計算ナンタラ使えば誰でも精密射撃できるって話じゃなかったっけ？」

「そんな事上から目線で言うなら自分でやりなさいよ！　いつもいつも肉体労働を人に任せてばっかでさあ!!」

馬鹿二人は軽く殴り合いに発展しそうになったが、それどころではないと思い直す。パニックに陥った人質がショックで黙ってくれればやりやすいが、大騒ぎでもされたらせっかくのチャンスをみすみす失う。

クウェンサーは無線機の周波数を合わせ、口を寄せる。

改造した矢にはイヤホンの振動子と電極が追加されており、声……つまり空気中の振動、振幅を〇と一の電気信号に変換してやり取りができるようになっている。平たく言えば電話と同じ状態だ。

「へい、へい。こちら『正統王国』軍第三七機動整備大隊所属、戦地派遣留学生のクウェンサー＝バーボタージュだ。舌を噛みそうなら正義の味方かナイト様でオーケー。レッド的なポジション希望だが生憎、軍服は地味めの砂漠仕様だな」

「汚ねぇ!!　まるで全部テメェの手柄であるかのように!?」

「ヘイヴィア。残念だが俺はあのおばあちゃんに娘さんか孫娘でも紹介してもらうためなら、そして素敵なマイクロビキニを拝める可能性が一ミリでもあるのなら何だってするつもりだ。……ていうかせめてそれくらいの希望がないと今すぐふて寝しそうなんだよ」

「だからそれが汚ねえっつってんの!!」

またもや掴み合いになりかける馬鹿二人だったが、そこで無線機の向こうで動きがあった。恐る恐るといった調子で、人質の老婆がテーブルの上の（正確にはハンバーガーのど真ん中を）貫いた矢へと近づいていったのだ。

『……ぐ、軍隊の人？』

「ああそうだ、テレビのニュースは観てるか？　俺達は多国籍軍とかいうののメンバー。道路

工事から悪党の排除まで何でもこなす騎兵隊ってヤツさ」

『鉄砲持ってる人なのかね……？　外をウロウロしている人とは違うのかい？』

「ピアノ、バイオリン、外国語、ダンス。習い事にも色々あるが、淑女であればいくつになっても、必ず覚えておくべき事がある。何だか分かるか？」

『……？』

「良い男の見分け方だ。こいつは人生を左右するからな。今から『お嬢ちゃん』にお手本を見せてやろう。冴えてるヤツが一人いれば、どんな鉄火場に放り込まれたって世の中はまだまだ捨てたもんじゃないって思えるようになる」

そこから、しばらく。

無線機の向こうから、老婆の声は返ってこなかった。

通信が途絶えたのではない。

嗚咽のような、断続的な息遣いだけが薄いノイズと共に耳に入る。

廃ビルの方でドック内を観察していたシーワックスが、ボソリとした声で状況を説明した。

『……泣いているようだ』

「いちいち報告すんじゃねえよ、そんな事」

ヘイヴィアが毒づく。

クウェンサー達二人は、瓦礫の陰に身を潜めたまま、しばしの時を待つ。

「……煙草でも吸いてえ気分だ」

「未成年が何言ってんのさ」

三〇秒か、一分か。

無線機に老婆からの声が届いたのを、クウェンサー達は続行可能の合図と判断する。

『……どうすれば良いんだい……？　ここからこっそり出るには何をしたら……』

「まずは『お嬢ちゃん』の名前だ。俺はクウェンサー、あなたはなんて呼んだら良い？」

『ドロシー』

「後は……そうだな。家は？　助けた後に送らなくっちゃならない」

『南ブリテン方面』

……クウェンサーとヘイヴィアは思わず顔を見合わせた。

てっきりオセアニアの街の名前が出てくるかと思っていたのだが、ドロシーの口から出たのは『正統王国』の『安全国』だった。

「観光客……だったのか？」

『うん、娘夫婦はショッピングモールに出かけてしまってね。キラキラした電飾を見ていると目を回すから、私は車の中でお留守番していたんだけど、ずっと陽射しの下だったから温室みたいに暑くて、我慢できなくて、それで……』

「（……どう思う？）」

「（大義名分としては五分五分。軍の人員と装備はいかなる時も人民の命を優先すべし。ただしドロシーが本当に『正統王国』の民と照合された訳でもねえがな）」

ヘイヴィアは細く息を吐いて、瓦礫の陰からアサルトライフルの銃口だけを覗かせる。正確には、ライフルに取り付けてある各種のセンサー類を、だ。

「（……事務所の周りをぐるぐる回ってるのは三人。西と南西の高所を狙撃で潰せば、まあ強行突破できなくもねえが……）」

ヘイヴィアの言葉を、シーワックスが引き継ぐ。

『リスクも否定できない。また、他の「商品」がどこに放り込まれているか分からない以上、そちらを救出できる見込みはなくなるな』

「道は一つ」

慎重に、クウェンサーは言葉を選ぶ。

『情報』に最も近い位置にいるドロシーに向けて。

「とりあえず確実に、あなた一人だけでもここで救出するか。一緒にさらわれた人達……三〇人から四〇人の人質がどこにいるかを調べるため、もう少しそこに留まってもらうか」

『……』

「どっちみち、協力がない事には俺達はどっちの道も選べない。一番大事な場所にあなたは立っている。だからそっちで選んでくれて構わない。……どっちが良い？」

『……やるよ』

ドロシーは、噛み締めるように言った。

『やらせてもらおうかね……。こうしてチャンスをもらうまで、ご飯の味も分からないくらいだった。やっと私は人間に戻れた。なのに、チャンスの温かさを知っている私が、同じような人達からチャンスを奪うなんてやっちゃいけない事なんだよ』

「言っておくが、その選択は危険が増す。せっかく手に入れたチャンスを棒に振る可能性だってある。それでもやるか？　見も知らない人達のために」

『……知らなくなんかないよ。トラックの中に詰め込まれて、鉄砲を突き付けられて震えているだけだったけど、それでも知らなくなんかない』

クウェンサーはわずかに、無線機にかける言葉に迷った。

彼自身、どちらの選択が正しいかどうかを規定できない状態にあった。

だが言う。

迷いを知らせる意味はない。

「良い返事だ」

『これから、私は何をしたら良いんだい……？』

クウェンサーはヘイヴィアの方を見た。戦友から手渡されたのは、事務所の窓へと放たれた矢と同じものだ。

無線機を頬と肩で挟み、クウェンサーは改めて金属製の矢を両手で分解していく。
「……テーブルに刺さっている矢は、後部を取り外せるようになっている。ネジみたいに回すんだ。ボールペンくらいの長さのパーツが取れると思う」
『うん、うん。これでみんなの居場所を教えれば良いんだね？』
「いいや、声を掛ける必要はない。そのボールペンがある場所は、俺達の方でも分かる。ドロシー、あなたはそれを服の中に隠したまま、犯人側の指示通りに案内されれば良い。人質全員は船に乗せられる前に、一度どこかに集められるはずだ。そこがどこかさえ分かれば、あとは『軍』の力を使って港を制圧できる」
『そっか……』
「服の下にそんなものを隠しているとバレるのはまずい。分解した矢の余りは……そうだな。天井近くにエアコンがあるだろう。何か台を使って、エアコンの上にでも置いておけ。ハンバーガーをしっかり食べて、ああ、テーブルにも傷があるか。そこは事務所だから椅子くらいはあるな？　ストレスで感極まったふりをして、椅子を叩きつけてテーブルを破壊するんだ。細かい傷の有無なんて分からないように！」
一通りの指示を出したクウェンサーは、通信を切ってヘイヴィアの肩を叩いた。
「俺達も動こう」
「へえへえ。何だか美味しいトコだけ持っていきやがってさ！　ひょっとして男の娘だろうが

ゾンビ少女だろうが、とりあえず目についたもんにゃ片っ端から声かけるタイプかよ？」

「ドロシーの返事を待ってからフローレイティアさんに救援を要請するんじゃ時間のロスが惜しい。今からでも部隊を動かさせないと」

「どうやって？　軍を動かすに足る大義名分と確実な勝算ってのを提示できねえ限り、待っているのは爆乳の罵声だけだぜ。そしてその片割れは、愛しのドロシーちゃんからの連絡待ちになっちまってる。知恵の輪が解けてねえぞ」

「ドロシーは正確な情報を持って来てくれる」

クウェンサーは人差し指を立てて、

「……ただ、フローレイティアさん達はそれが『どのタイミングで』もたらされるかを知らない。スケジュールより多少前倒しで人質が見つかりましたと報告したって、部隊が現地到着する前にドロシーが正しい答えを教えてくれれば、最終的な作戦開始時刻までには辻褄を合わせられるさ」

「虚偽の報告は罪に問われるって知ってんのか？」

「知らない事にしておく。何しろ俺は『学生』だし」

「はっは、評議会の『記憶にございません』じゃねえんだ。そう都合良くいくかよ」

クウェンサーやヘイヴィア達の肩から力が抜けているのは、やはりその戦力差のためだろう。港のドックをならず者が占拠していようが、古いアサルトライフルや手榴弾で武装していよ

うが、フローレイティア率いる『軍』の力が動員されれば一発でケリがつく。

彼らにとっての正念場は軍事作戦を始められるか否かのラインだ。

ドロシーはオセアニアではなく『正統王国』の民、そして彼女は他の人質全員の情報を遠からず教えてくれる。

これだけあれば十分だ。

文句を言いながらもフローレイティアはとりあえず兵を回すだろう。後でクウェンサーとヘイヴィアは二人揃ってぶん殴られるかもしれないし、下手をすれば営倉にぶち込まれるかもしれないが、それもこの場を収めた後の事だ。

ゴーサイン一つで、ドロシーや他の人質達は助かる。

クウェンサー達がこの場に留まる理由はない。ドロシーの答えや部隊の展開が終わる前に『ブルーボトル』率いる犯罪組織の見張りに見つかって突発的な戦闘に陥るのが、この場においての『最悪』だ。それを防ぐためには、港の敷地から至近に位置する瓦礫の陰でうずくまるより、ミョンリやシーワックス達のいる廃ビルまで下がるべきだろう。

そう思い、クウェンサーとヘイヴィアの二人が腰を浮かせた時だった。

無線機から声があった。

シーワックスのものだ。

『ちょっと待て』

「あん？　何だどうしたついに見かねた神様がお空の上からグラビアクイーンでも突き落としてくれやがったか？」

ヘイヴィアの適当な言葉に応じず、シーワックスはさらに続けてこう告げた。

『……様子がおかしいぞ』

14

無線機から飛んできたシーワックスの言葉を信じられなかった。

自分の目で確かめるため、クウェンサーとヘイヴィアの二人は急いで廃ビルへ戻る。上方から敷地全域を見渡せる窓へと張り付き、シーワックスの手から双眼鏡を奪い取る。

特に嫌な顔もせず、シーワックスは港の一角を指差した。

ドックの中で停泊している中型の輸送船。その船首に近い位置にある、細いポールのようなものだ。

「嘘だろ、おい、嘘だって言ってくれよ!!」

ヘイヴィアが歯噛みし、何度も双眼鏡で確認する。しかし情報は変わらない。何かの見間違いでもない。

「……考えてみれば、妙な点はいくつもあったんだ」

シーワックスが、呻くように言う。

「仮に港の一角をペーパーカンパニー経由で『ブルーボトル』の犯罪組織が独占したって、外の海は多国籍軍の海洋オブジェクトが多数警備している。抜き打ちの立ち入り検査だってもちろんある。武器、麻薬、偽札、そして人間。怪しいものを積んでいる連中は、港『だけ』を牛耳ったって安心はできない」

では、その安心を手に入れるために何をすれば良いか？

答えは例の輸送船の船首にある。

「ふざけやがって……」

クウェンサーは額に手を当てた。

「見える、ああ見える！　ポールのてっぺんで風に揺られているのは『情報同盟』の旗じゃないか!!」

「つまり、これって、例の人身売買に『情報同盟』が噛んでいるって事になるん、ですかね？」

ミョンリの言葉に、シーワックスは首を横に振った。

「……何を積んでいるかまでは関知せず、金と引き換えに兵士が検査のフリーパスを与えている、というのが妥当な線だろうな」

「そう予防線を張っておけば、いざ問題が明るみに出ても泥沼に引きずり込まれずに済むってヤツだろ。全部秘書がやりましたって叫ぶのと一緒だぜ」

ヘイヴィアはうんざりしたように、

「おそらく『情報同盟』は人身売買自体に興味がある訳じゃねえ。たとえ利益はあっても外聞が悪すぎる。興味があるのはオセアニアに深く浸透している犯罪組織そのものじゃねえか。ヤツらの闇市は市民生活にまで直結しているからな。大ボスの『ブルーボトル』とコネ作って犯罪組織にパイプを通す事ができりゃ、オセアニア内の世論操作も思いのまま。表と裏の両方から刺激を与えられる。現地民衆の支持を受ければ、多国籍軍の間で揉めてる『南の大陸の暫定支配における区分け問題』ってヤツだって有利に事を進められるって寸法だぜ、こりゃあ」

「だと思うけど、憶測でものを言えばこっちが痛い目を見るようにはセッティングされているだろう」

クウェンサーは舌打ちし、

「それより問題はドロシーだ！『情報同盟』から免罪符をもらっている以上、俺達の敵は単なる犯罪組織じゃなくて『情報同盟』の準軍事作戦現地協力者って扱いになる。無暗に攻撃する事をフローレイティアさんは望まないはずだぞ!!」

「……区分としては民間人で、なおかつ軍としての側面も持つ人間、か」

シーワックスは少し考えるような素振りで、

「確かに、大部隊を使って一方的に殲滅すれば角が立つ。『情報同盟』が民間人を不当に攻撃する『正統王国』を食い止めるため、などと言い出してしまえば、小競り合いから大規模な戦

闘へと飛び火しかねないな」

「爆乳は動かねえ」

ヘイヴィアは吐き捨てるように言う。

「たかだか三〇人四〇人のために、戦争の引き金を引くほど愚かじゃねえぞ、俺らの上官は！　でも、だったら、どうすんだ!?　まっとうな手続きで書類通りの大部隊を使えりゃあんなの五秒で潰せる。だからって俺ら四人だけで倒せる数か？　しかも人質を道連れにされねえように、迅速精密な殲滅なんて無理な話だぜ!!」

「その、ちょ、ドロシーさんはどこにいるんです？　彼女とは連絡が取れるんです。せめて一人だけでも……」

「無理だ」

ガン！　とクウェンサーは床を蹴った。

「渡した通信装置の反応が、別の建物へと移っている。おそらく他の人質が閉じ込められている場所だ。今からドロシーだけを強行突破で助ける事も、もうできない」

勝てない戦いを挑んでも仕方がない。

ヒロイックで感動的な突撃をすればならず者の数を多少減らせるかもしれない。だが結局は多勢に無勢で返り討ちに遭う。下手をすれば人質が掃射を受ける危険さえある。

挙げ句、『ブルーボトル』率いる犯罪組織が『情報同盟』の庇護を受けている事が判明した

以上、政治的な問題まで浮上したと言うしかないだろう。彼らが『これは誘拐ではなく、劣悪な環境から豊かな国へ逃がすための非正規作戦だった』などと言い出したらとことん事態は面倒になる。死人に口なし。コンテナの中の人質を全員撃ち殺し、『正統王国』が短絡的な武力行使をしなければこんな事には……という言いがかりでもつけられたら。

良くても『正統王国』と『情報同盟』の上層部の水掛け論から戦争に発展。

最悪、クウェンサー達四人は浅薄な先走りで民間人を多数殺戮した重要戦犯扱いだ。

「……残念だが、手の出しようがねえ」

ヘイヴィアは両手で顔を覆って、指の隙間から重たい声を洩らした。

「向こうのセッティングの方が一枚上手だった！　当たり前だ!!　連中は長い時間をかけて安全な舞台装置を組み上げていったんだからな。パパッと出てきた俺らが即行のアドリブだけで越えられるような壁で済ませる訳がねえ!!」

「じゃあドロシーはどうするんだ」

「言ったはずだぜ。二〇人四〇人のために、戦争の引き金を引いてどうすんだ!?」

「ドロシーに協力を仰いだのは俺なんだ！　そんなので納得できるか。地球の裏側のニュースを観ている訳じゃないんだぞ!!」

「だったらテメェが一人で戦えば良い！『学生』さんなら戦争条約も何とかなるかもな。だがそうすりゃテメェはただの犯罪者で人殺しだ。何より!!　あの犯罪組織は『情報同盟』の準

軍事現地協力者って扱いだ。テメェの敵は街のならず者だけじゃねえ。『情報同盟』って国際規模の軍隊を丸ごと相手取る事になっちまう。それでもケンカを売るつもりなのか!?」

パチン、という軽い音が聞こえた。

クウェンサーが指を鳴らした音だ。

「それだ」

「ああん？　……ちょっと待て馬鹿野郎、テメェ今なに考えてやがる？　そのニヤニヤ笑いは何なんだ。俺は！　テメェの心を折るために畳み掛けてる最中なんだぞ!?」

「準軍事現地協力者。ヘイヴィア、確認するけど『軍人』にはそういう立場の民間人を助ける義理があるって事で良いんだよな？」

「それがどうした？　そこからどう屁理屈をこねたって『情報同盟』の出番を奪う事はできねえぞ。人身売買やってる『ブルーボトル』のクソ野郎を叩けば絶対にヤツらが顔を出す。これはもう決定事項なん……!!」

と、そこでおずおずと、しかし的確に割り込んだのは女性兵士のミョンリだ。

「……あれ？　ちょっと待ってください。という事は……？」

「ドロシーに戦う理由なんかない」

クウェンサーは親指を使って、自分の胸の中心を指す。

「俺が！『正統王国』軍に従事しているこの俺が!!　無理に協力を仰いだから、今もドロシー

は敵地のど真ん中に取り残されているんだ。……彼女は『正統王国』軍の準軍事現地協力者だろう。このまま放っておけば命に関わる事態に陥るのも目に見えている。だとすれば、バックについている『軍』の俺達はどう動くべきだ？　答えろヘイヴィア!!」

「嘘だろオイ……」

「なるほど」

呻くヘイヴィアとは対照的に、シーワックスは面白そうに唇を歪める。

「『情報同盟』が準軍事現地協力者として『ブルーボトル』率いる犯罪組織を庇護するというのなら、『正統王国』が同じ建前でドロシーを守ると言っても頭ごなしに拒絶はできんだろう。双方の民間人の間で争いが生じた場合、バックにいる『軍』の手で仲裁するのも筋だろうしな」

「笑わせんな」

ヘイヴィアは首を横に振った。

「そんな簡単に、お涙頂戴のハッピーエンドになんかなるもんか！　何しろ爆乳はドロシーを雇った事を知らねえし承知もしてねえ！　それを証明する書類だってねえんだ!!　戦争になるならないの段階で、いきなりドロシーなんて意味不明な人名を出してみろ。キョトンとされるのが精一杯だ。結局、大義名分があろうがなかろうが爆乳は部隊を動かさねえよ!!」

「かもしれない」

クウェンサーはまずそれを認めた上で、

「……けど、少なくとも、この四人が動けるだけの理由はキープしてる」
「ドロシーが準軍事現地協力者って証明するものは!?」
「彼女自身。生きて証言させるためには、やっぱり助け出すしかない」
目的と行動は一致しているな、とシーワックスが呟いた。
ヒロイックな気分になるのは構わないが、実際に銃弾の前にさらされるのは彼ら四人だ。その脅威が身に沁みているからだろう、苛立つヘイヴィアに向けて、クウェンサーはこう続けた。
「そもそも、もう逃げられないだろ」
「何が!?　何でだ!?　特別ボーナスが待ってる訳じゃねえ。血路を開かなくちゃ整備基地に帰れねえって訳でもねえ。そもそも、俺らがこの場にいる方がおかしいんだぜ？　今回ばかりは逃げるも何も責められる理由を探す方が難しいだろ!!」
「それで？　軍の知らないところで勝手に民間人を雇って、その面倒を最後まで見る事もなく見殺しにして自分達だけ安全に帰ってきましたって報告するとでも？　たとえルールで問題なくたって、その後で部隊の中に居場所なんて残っていると思うのか」
「くそったれが!!　テメエがドロシーを焚きつけたおかげで俺まで不名誉の極みだぜ。家の相続権にまで関わるようなトラブル持ち込みやがって……!!」
ジタバタしたところで始まらない。
本当にクウェンサーを糾弾したければ、彼がドロシーと会話していた段階で横から口を挟

むべきだったのだ。

「だがどうする？　具体的には!?　こっちは『学生』と戦場カメラマンを入れたって四人だけだぜ。相手は犯罪組織のならず者だけで五〇から九〇。さらに下手すりゃ『情報同盟』の増援までであり得る状況だ。騎兵隊気取りで闇雲に乱射したって何とかなる兵力差じゃねえぜ！」

「……俺達の目的は、あくまでもドロシーや他の人質の救出だ。一人残らずな。それは西部劇みたいに動くものがなくなるまで鉛弾をぶち込み続ける事じゃない」

「あん？」

「的を絞ろう。こんなのはパズルゲームみたいなものさ。何も、全部が全部、俺達の手で片付ける必要なんかないんだ。一つを崩せば、後は次々連鎖して消えてくれる」

15

一番大事な大前提だが、クウェンサー達はドロシーの居場所が分かる状態にある。軍用の矢から取り外した通信装置をドロシーが服の中に隠しているからだ。

そのドロシーの反応が中型の貨物船へと移っていったのを確認して、クウェンサー、ヘイヴィア、ミョンリ、シーワックスの四人もまた行動を開始した。

「……ったく、冗談じゃねえぜ」

ヘイヴィアが呻くような調子で呟く。

「ボートもなし。足ひれもシュノーケルもなし！　何にもねえ!!　これで夜の海に飛び込めだって？　こっちはライフルもミサイルも抱えているっていうのによ!!　ああくそ重てえ全部捨ててえ!!」

「叫んでいる暇で貨物船が港から離れちゃうよ。追い着ける内に飛び込もう」

彼らは『ブルーボトル』率いる犯罪組織が牛耳っているドックから一度離れ、通常の港湾職員が巡回しているブロックへと向かっていた。もちろん、正面ゲートなど通らず、金網のフェンスを丸く切り取っての不法侵入だ。見張りの目をかいくぐって敷地を横断したクウェンサー達は、港の突端から暗い海へと身を投じていく。

「ぶはっ、くそ！　相手はディーゼルエンジン搭載だぜ。こんなので本当に追い着くのかよ!?」

「この辺りの海図は複雑だ」

答えたのは、器用に立ち泳ぎしているシーワックスだ。海の中でも特に顔色を変えていないので、おそらくカメラは防水なのだろう。

「オブジェクトの砲撃で吹き飛ばされた大量の瓦礫が海の中に流れ込んでいるからな。暗礁どころの話じゃない。安全に外洋まで出るには、S字に蛇行しながら進むしかない。そのルート上を泳いでいけば、貨物船の方からこちらに近づいてきてくれるはずだ」

「……この辺りの警備を担当している『情報同盟』の連中は、敵味方を信号で識別するスマー

ト機雷を敷設して『海の道』を塞いでいるって話です。人間大の体積に反応するかは疑問ですけど、一応気をつけてくださいね」

暗い海をしばらく泳いでいると、問題の貨物船が見えてきた。やはり、クウェンサー達が近づいているというよりは、細く狭い安全地帯を縫って進む船の方が彼らへ近づいてきているのだろう。

「おいおいおい。あっちこっちにサーチライトを向けてやがるぞ……」

「実際にはレーダー頼みだろうが、自分の目で確かめて安心したいというのが人情だろう。とはいえ、灯台下暗しだ。強烈な光はかえって瞳孔に間違った拡縮を促す。ライトに直接照らされない限りは見つかる事もないだろう」

シーワックスの言葉を聞きながら、クウェンサーは口を挟む。

「ヘイヴィア、ロープの準備は？」

「へいへいナイト様、仰せの通りに！　どうせいっつも俺が料理をしてテメェが美味しくいただく係だよ!!」

間近まで接近すると、貨物船の船壁は崖のようにそびえていた。その上、垂直ではなくこちらに向けて緩やかに傾斜しているため、普通に手を付けて登る事はまず不可能だろう。

ヘイヴィアとミョンリは、先端に鉤爪を取りつけたロープを軽く振り回してから、遠心力を借りて真上に投げる。甲板の手すりへ力強く噛んだのを確認してから、まずは『軍人』の二人

が崖登りの要領で船の上へと身を乗り上げていく。
貨物船自体が、かなりの体積を持つ巨大な塊だ。
海面でサインを待つクウェンサーとシーワックスは、人工的な海流に翻弄されそうになるのを、ロープを掴んで必死に耐える。
と、真上から何か重たいものが降ってきた。
クウェンサーのすぐ横の海面に落ちたものの正体は、首を真一文字に刃物で切り裂かれた犯罪組織の見張りの死体だった。
うんざりした顔で、彼は無線機に口を寄せる。
「容赦のない事で」
『寝言吐いてる暇で上がって来いよ。サメってのは血の匂いに敏感なもんだぜ』
……とはいえ、クウェンサーはただの『学生』なので、ロープ一本でビルの壁を登るような芸当はできない。
自力で手早く船壁を突破していくシーワックスを尻目に、クウェンサーはロープを掴んだまま、ヘイヴィアとミョンリの二人がかりで一本釣りしてもらう事に。
「……おいコラ。俺が『貴族』でテメェが『平民』って図式に疑問が浮かぶブルジョワぶりじゃねえか」
「それより時間は？」

「どうせ定時連絡で数が減ってる事はバレるよ。長くて一〇分。どっかの馬鹿がロスしてくれたおかげでちっとも心に余裕が生まれねえぜ！」

ミョンリは光が洩れないように小さな画面を手で覆いながら、携帯端末へ目をやる。

「ドロシーの反応は船首の方です」

「やれる事をやろう。どっちみち、一〇分でシージャックをするのは不可能だ」

クウェンサーとヘイヴィア、ミョンリとシーワックスでペアを作り、互いにフォローをしながら大量のコンテナが積まれた甲板の中を移動していく。

顔から嫌な汗を流しながら、ヘイヴィアが自分に言い聞かせるように小声で言う。

「……銃は使うな、ナイフを頼れ、銃は使うな。一発でも銃声が鳴ったら海に飛び込むしかねえんだ……」

幸い（おそらくは人身売買を露見させないためのデコイだろう）大量のコンテナのおかげで遮蔽物は多い。見張りとうっかり鉢合わせにならないよう気を配りながら、クウェンサー達四人は船首側に向かって慎重に移動していく。

その時だった。

ゴォ!!　と風が唸るような音が聞こえた。

しかし違う。ただの夜風ではない。

「（……伏せろ、馬鹿、動くな!!）」

ヘイヴィアが声を潜め、クウェンサーの首根っこを掴んで甲板の上へ倒れ込む。先行していたミョンリとシーワックスは金属製のコンテナに背中を張り付けるようにして、息を殺していた。その顔に、異様なほどの汗が伝っているのが分かる。

クウェンサーは、一歩遅れてようやく気づいた。

夜風のように思えたものの正体は、地下鉄のホームへ列車が走り込んできた時のような、大質量の物体の移動によって引き起こされる空気の攪拌だという事に。

密閉されたトンネル内ならともかく、これだけ開けた海の上で、そんな現象を起こせるものは限られている。

戦争の象徴。

その他全ての兵器を片っ端から駆逐していった、一つの時代のトレードマーク。

つまり、

「……オブジェクト……!!」

クウェンサー達は甲板の上で身を伏せたまま、呻くように言う。

彼らが乗り上げた中型の貨物船だって、海面からよじ登る時は崖のようにそびえていた。だがオブジェクトは桁が違う。全長五〇メートル前後、一〇〇門以上の砲台を備えた球体状本体は、間近に近づかれただけであれだけの巨体を誇っていた貨物船を、プラスチックのミニチュアか何かと錯覚させてしまう。

存在感。
威圧感。
危機感。
何もかもが、あまりにも違う。
「……『情報同盟』だ」
上から覆い被さるような格好になっているヘイヴィアが、ほとんど泣き出しそうな声で言う。
「『情報同盟』の第二世代。ありゃ『シンプルイズベスト』と『カタパルトカーゴ』か……。冗談じゃねえ。まともにやり合って勝てる相手じゃねえぞ……」
ヘイヴィアは、名前を二つ呼んだ。
その意味を、倒れたまま首だけ無理にひねって周囲を確認したクウェンサーは、絶望と共に知る。
貨物船は、暗い海を哨戒している二機のオブジェクトの間を通るように航行していたのだ。
こちらに向かってそびえる装甲や無数の砲台を見上げると、何やら木々でできた分厚い緑のトンネルを連想させる。
どれでも一発でも撃ち込まれれば、クウェンサー達など魚の餌にもならないレベルで粉砕されてしまうだろう。
しかし。

同時に。

「……やっぱり、推測は間違っていなかったんだ」

クウェンサーは呟く。

「いくら対オブジェクトに特化した第二世代だって、本気でセンサーをフル稼働させれば俺達の位置なんかすぐに分かるはずだ。にも拘らず砲撃はない。連絡を受けた『ブルーボトル』が部下の見張りを急行させたりもしない」

「この船はノーマークって事かよ。下手にスキャンして、コンテナの中に大量の人間が詰め込まれている事を透視しちまっても面倒だ。作戦記録のデータは機内のレコーダーに格納されちまうからな。性質上、あれを改ざんするのは骨だろうしよ」

だが、そうと分かっても無暗に動けない。

オブジェクトというのは、戦場の王者なのだ。天敵の存在しない、ただ目の前の生物を好き放題に貪り食うだけの、何かのバグやミスで生じたようにすら見える規格外の怪物。

目の前の猛獣が飼い慣らされているか否かを確かめるために、自分の腕を獣の口元へ運んでみる馬鹿はいないだろう。

誰だって哀れな実験台にはなりたくない。

クウェンサー達はひたすらに息を潜める。二機のオブジェクトが貨物船からゆっくりと離れていくのを見ても、なお動けない。軍服の内側を気持ちの悪い汗が流れていく。

結局は、理論ではなく感覚の問題だった。
オブジェクトが数百メートル離れたところで、ようやくクウェンサーは息を大きく吐く。
実際には、第二世代の砲撃なら十分に届く距離ではあるはずなのだが……たとえ錯覚でも、今は『助かった』という安堵感に身を委ねるしかない。
クウェンサーの上からどきながら、ヘイヴィアが顔の汗を袖で拭う。
「何と戦っているか思い出したかよ色男」
「どのみち、ここまで来たらやる事は変わらないさ」
四人は再び移動を開始する。
と、コンテナの山から別の山へと小走りで先行していたミョンリが、親指で山積みのコンテナの一段目を示した。
「……どうしますか、ドロシーです」
「この際だ。救えるもんは全部救っちまえ。クウェンサー、テメェは予定通り小細工だ！」
バラバラと四人は別の方向へ向かって移動していく。
ヘイヴィアとミョンリは金属製のレバーへと摑みかかる。
が、ここでミョンリが眉をひそめた。
「……ちょっと待ってください。これってもしかして」
「何だよ？　ワイヤー張ってあるようには見えねえぞ？」

「いえ、そうではなくて」

ミョンリは扉を開閉させるレバーから手を離し、金属製の扉の表面に印字してあるアルファベットの文字列を指でなぞっていく。

「これ、保冷仕様のコンテナですよ。つまり大きな冷蔵庫……いえ、この規模だと冷凍庫って呼ぶべきでしょうか」

「ちくしょう、どういう事だ。中にゃ八〇歳のばあちゃんが詰め込まれているんだぞ！」

改めて、レバーを強引に引いて扉を開放する。

金属製の扉を開けた瞬間、頬を切り裂くような冷気が流れ込んできた。ミョンリの言った通り、壁の内側は真っ白な霜のようなもので覆われてしまっている。

そして。

中に、胎児のように体を丸めたまま、横倒しになっている小さな影があった。

一人だけ。

ぽつんと。

「ふざけやがって……、ふざけやがって！　何なんだこりゃ？『ブルーボトル』の連中の目的は人身売買だろ。端っから氷漬けにしちまうなんて何考えてやがる!?」

「待って、不用意に抱き上げないでください！　コンテナの床と露出した肌が貼り付いている可能性があります！」

幸い、ミョンリが危惧するような事はなかった。老婆の髪の毛がパキパキと凍っているような印象があったが、肌の方は床とは貼り付いていない。

ヘイヴィアはドロシーを抱き上げてコンテナの外へ出る。

何やらコンテナの文字列を目で追い駆けていたシーワックスが、こんな事を言った。

「……これは、冬眠の真似事かもしれないな」

「あん？」

「雪に埋もれた車内で一ヶ月以上飲まず食わずで生還した事例もあるくらいだ。九死に一生ってヤツだが、それを人工的に再現できれば長期の船旅でも『商品』を死なせずに済むだろう。蒸し暑いコンテナの中で水と塩だけ渡して運試し……なんていうのより効率的だな」

「そうか……それで一つのコンテナに一人きりなんですね……」

ミョンリが、悪魔の計画を前に呻き声をあげる。

「これ、麻酔と同じです。被験者の体重を基に低温設定の数値を細かく算出しているんです。だから一人に一つのコンテナが必要になる」

「だったらどうした？　そんなもん一〇〇％必ず成功するもんでもねえだろ。そもそも人間は熊みてえに冬眠を前提とした生き物じゃねえ！　無理に真似事を強いれば凍傷や低体温症で駄目になっちまうヤツの方が多いはずだ!!」

「そうだな。だが対処法は冬山の遭難者と同じでポピュラーだ。ぬるま湯で体を外から温めつ

つ、食料を摂取させて体温自体の上昇を促せば良い」
「この熱帯夜なら水筒の水でも十分か。メシについては不味いレーションしかねえが」
「それに文句を言えるくらい意識が回復すれば一安心だ」
と、間近で話し合うヘイヴィアやシーワックス達の言葉に意識を揺さぶられたのか、異様に肌の冷たいドロシーがうっすらと目を開いた。
起き抜けの顔にも似ているが、事情は全く違う。
そもそもドロシーは眠っていない。記憶の呼び出しがあやふやになるほどに、意識が混濁しているのだ。
「……兵、隊……さん……？」
「ああ、ああそうだ！　あなたを助けに来た。もうこれ以上何も心配する事はねえ」
「クウェンサー、とかいう……人かい……？」
「悪いが、世の中にはもっと良い男だっているんだよ」
これ以上の無理強いはできない。
ヘイヴィアは大急ぎで無味無臭の消しゴムみたいなレーションと、熱帯夜と自分の体温で気味が悪いほど温められた水筒を取り出す。
と。
直後の出来事だった。

ガサリ、という音が聞こえた。コンテナの山の陰から、何者かが顔を覗かせていた。それが誰かは知らない。だが手にした粗製のアサルトライフルを見てヘイヴィアは判断した。犯罪組織の巡回だ。

距離はわずか七メートル。

肩にはスリングベルトを使って粗製のアサルトライフルが下げてあったが、その見張りの男はライフルを握っていなかった。別の武器を持っていた。

だがそれは拳銃でも軍用ナイフでもない。

ゴルフボールより一回り大きいくらいの、黒光りした球体。

正体を、総毛立ったヘイヴィアが看破する。

「……手榴弾!?」

その瞬間。

まるでホルスターから拳銃を抜くように、何故かシーワックスは重たいカメラのファインダーを覗き込んでいた。

ああ。

これは、死んだな。

体感的には奇妙なほどゆっくりと流れていく時間の中で、しかし、身を隠す事も両腕で顔を庇う事もせず、ほとんど棒立ちのまま彼は正確にカメラが区切る小さな世界の中心に、武装したならず者を捉え続けていた。

旧オセアニア軍政派で採用されていた、Gr-021。『情報同盟』軍の粗製コピーとも噂された手榴弾の完全殺害半径は五メートル、有効殺傷半径は一二メートル。支給された兵器の取り扱いを正しく知らないのか、下手をすればならず者自身をも巻き込むほどの威力を持った、『爆風そのものではなく破片の嵐で殺す』爆発物だ。

球体を握り込むように持つ見張りの男が掌から力を抜き、ピンを抜き、押さえている安全レバーを離せば、きっちり五秒後に二〇〇発以上の金属の粒が殺人的な速度で全方位へ放たれる。男も女も大人も子供も、均等に平等に挽肉へ変えていく事だろう。

それでも。

シーワックスは、それが何かの使命であるかのように、正確にカメラを操作する。

……世界を変える一枚を撮りたかった。

結局のところ、鉛弾を何百発撃ち込んでも戦争は終わらない。金食い虫のオブジェクトを派兵すればするだけ懐が潤う連中は流血のたびに暗い部屋で拍手をしている。真の終結とは、『利害の外』にいる人達の心をどれだけ動かせるかにかかっているのだ。それは、鉛弾にはできない仕事だ。たとえどれだけの悲劇が起こっていても、戦場カメラマンの一枚がなければ誰

の心にも響いてはくれないのだ。
だから。
そのきっかけが欲しかった。
たとえ、ここで数人の命が散っても。その中に、シーワックス自身が含まれる危険があったとしても。手足など惜しくない。体の半分を削り取られても良い。歴史を変える、平和のための一枚を持ち帰る事ができれば、きっとシーワックスは『勝った』と胸を張る事ができる。
それが。
かつて、この国で『鉛弾』に頼ってしまった自分が、絶対にやり遂げなくてはならない事だと思っていた。

しかし。
だが。

（……それで良いのか？）
ファインダーの端に、体を硬直させるヘイヴィアがいた。屈み込んだ彼の足元には、極低温環境から助け出されて、意識が朦朧としたまま寝そべっている小さな老婆もいた。
彼らが死ねば、誰かの心は揺さぶられるだろう。

ショッキングな流血を小さなメモリーに収めて持ち帰れば、戦場の真実とやらを伝える格好の材料になるだろう。

（……でも、本当にそれで良いのか!?）

たった数人の命を救ったって意味はない。日々の退屈なニュースに紛れて、誰にも伝わらないのでは存在しないのと一緒だ。誰にも伝わらない情報とは、世界から存在が消えるのと何も変わらないのだ。こうしている今も、『安全国』の庇護にある人々は世界が平和だと思っている。心の底からそう信じている。オセアニアの戦争は、本当の意味ではまだ何も終わっていないのに。究極的に戦争を終わらせるには、そうした人々の力こそが必要なのに。

だから？

しかし？

悲劇を食い止めるために悲劇の発生を願う。相反する矛盾した心境に、シーワックスは肯定と否定、どちらの句で繋げるべきかを迷う。

そして。

彼は、一つの決断をする。

ガッシャ!!　と。

金属質な激突音と共に、ヘイヴィアは我に返った。

戦場カメラマンのシーワックスが、自分の命よりも重たいカメラを首紐のアタッチメントから取り外し、手榴弾を握り込んでいた見張りの男に向けて投げつけたのだ。

「……ここで後戻りなんかしてたまるか。『そういうの』は、もうやめると誓ったんだ!!　あのオセアニアの戦争でな!!」

ヤケクソ気味に叫ぶシーワックスの声に叩かれるように、ヘイヴィアもまた動く。カメラは重たいが、上半身に当たった程度で大男を昏倒させるほどの威力はない。だが自分の身を守る事を優先した見張りの男は、両腕を使って自分の体を庇っていた。その手には、まだ手榴弾は握られたままだ。ピンも安全レバーも解放されていない。

活路はある。

ヘイヴィアはレーションも水筒も即座に手放すと、右手で流れるように大振りな軍用ナイフを鞘から引き抜いた。左手でドロシーの両目を覆う余裕さえあった。

そして。

躊躇なく、刃を投げつける。

ドガッ!!　と。

きっちり九〇度だけ回転したその切っ先が、見張りの喉を正確に貫く。

（……ちくしょう……）

だが、ヘイヴィアの顔は音もなく歪む。
見張りの男は倒れない。致命傷だが即死には至らなかった。
数秒から十数秒のラグがある。
(わずかに中心から外れた。ヤツの脊椎はまだ生きてやがる!!)
ヘイヴィアの見ている前で、見張りの男の指先が芋虫のように蠢き、手榴弾の金属製のピンへと伸びていく。輪の形をしたピンの中央に、その指が通る。
男は、力を抜くだけで良かった。
重力に引かれて、爆発物が真下へ落ちる。人差し指に引っかかっていたピンが抜ける。丸い手榴弾が甲板に激突した途端、その衝撃で安全レバーが分離されていく。
起爆の準備が。
整う。
「ッ!!」
とっさに、ミョンリがホルスターから拳銃を抜いたのを確認して、ヘイヴィアも行動に出た。身を低く屈めた状態から、一気に獣のように走る。喉を刃物で貫かれた男は声も出せず、しかしヘイヴィアを睨みつけていた。その人差し指に引っかかっていた輪の形のピンが、悪趣味な指輪のようにギラリとした光を返す。
完全殺害範囲は半径五メートル。

有効殺傷範囲は半径一二メートル。
爆発までの猶予は五秒。
（殺すだけじゃ駄目だ。爆発に全員巻き込まれる!!）
今にも後ろへ倒れそうになっている見張りの男の襟首を、ヘイヴィアは強引に掴む。彼の体を支えるため、などという紳士的な行動ではない。そのまま右腕を掴み、振り返るように体をグルリと回すと、男の体を背負うような形で、腰を支点にして一気に投げ落とす。
自ら落とした手榴弾の真上に。
ずむっ!!!!　という、くぐもった破裂音が炸裂したのは直後だった。
安物の防弾プレートと、生身の骨肉。『爆風よりも破片で殺す』手榴弾なら、これで爆発を抑え込む事はできる。……もっとも、教科書では友軍を守るために身を挺する方法として書かれている項目ではあるのだが。
返り血と臓物でずぶずぶに汚れたヘイヴィアは、鬼気迫る顔でヤケクソ気味に叫ぶ。
「うえっ、くそ!!　テメェら怪我は!?　ないなら海に飛び込め。今の爆発で馬鹿どもが全員集まってくるぞ!!」
「く、クウェンサーさんはどうするんですか!?」
「あの爆発が聞こえねえほど間抜けじゃねえだろ!!」
ろくに手足を動かせないドロシーを抱えて、慌てたようにミョンリが手すりから飛ぶ。商売

道具のカメラを拾い上げたシーワックスもその後に続いた。ヘイヴィアは手すりにくくりつけてあった発泡ポリウレタン製の浮き輪をいくつか海に投げてから、自分自身も暗い海面へと飛び降りていく。

落下の衝撃か、あるいは生ぬるい海水に全身を覆われた事で、低体温の症状から少しでも回復してきたのか。

ミョンリの手で沈まないように体を支えられているドロシーが、目をパチパチと瞬かせた。

「……みんなは……？」

混乱していた頭が回復するにつれ、記憶のピントも合ってきたのだろう。

疑問は、焦りと共に言葉を促していく。

「他のみんなはどこだい!?　あの船に乗せられているはずなんだよ!!　私の他にもたくさんの人達が!!」

その質問はもっともだが、ヘイヴィア達には応じられない。

厳戒態勢に入ったあの貨物船にもう一度侵入するのは難しい。たった四人で数十人の武装したならず者と戦うのも相当に厳しい。そもそも、ここから無事に生還できるかどうかさえ保証のできない状況だ。

と、そこで新たな人物が黒い海面を突き破るように貨物船から落ちてきた。

別行動を取っていたクウェンサーだった。

「ううん、駄目だ沈む……。俺にも浮き輪をくれ浮き輪を」
「間抜け面して逃げてきたって事は、最低限そっちの『準備』は終わったって考えて良いんだろうな？」
「誰にモノ言ってんの。そっちこそ何だよあの爆発!?　派手にヘマやらかしちゃってさー！」
???　と混乱の極まった顔でクウェンサーとヘイヴィアの顔を交互に見やるドロシー。
そんな老婆に、クウェンサーはこう話しかけた。
「たった四人で『ブルーボトル』の犯罪組織を丸ごと潰すのは難しい。バラバラのコンテナに閉じ込められている人質を全員見つけ出して保護するのはもっと難しい。救援を出そうにも、あの貨物船は『情報同盟』の庇護を受けているからなかなか手出しができない状態にある」
「じゃあ諦めるのかね？　私だけ助かるなんてそんなの嫌だよ!!」
叫びかけたドロシーに、クウェンサーは笑って人差し指を振った。
「……ただ、そんな絶望的な状況を一発でひっくり返す素晴らしい魔法のアイテムがある」
「？」
虚を衝かれてキョトンとしたドロシーに、クウェンサーは『戦利品』を広げてこう告げる。
「こいつだよ。何だか分かるかな？」

16

我ながら奇妙な船だ。

巷では猛毒クラゲの『ブルーボトル』などと揶揄されるその男は、貨物船の操舵室で椅子の一つに腰掛けながらそんな事をぼんやりと考えていた。

船というのは燃料を使って動く。そして燃費は船の積載重量によって大きく左右される。普通、この手の貨物船がシステムのほとんどを自動化し、十数人程度の乗組員しか採用しないのもそのためだ。人間そのもの、彼らが口にする数週間から数ヶ月分の水や食料、居住スペース、寝具、衣服などなど。少しでも船を軽くして運搬費用を減らすためなら、できるだけ乗組員の数を減らそうとするのがセオリーなのだ。

にも拘らずこの大所帯。

書類上ではオセアニアの廃墟で手に入れた屑鉄をリサイクル目的に輸出している事になっているが、ちょっと計算すれば割に合わない事はすぐに分かるはずだ。

「爆発があったな」

「調べさせて対処します」

『ブルーボトル』の言葉に、計器を眺めていた一人が即答した。

人身売買の『商品』を詰め込んだ保冷用コンテナが内側から開くとは思えないし、低体温下にいる『商品』がろくな抵抗や逃走ができるとも思えない。

だが、ここにいるのは正規兵や訓練された傭兵などではない。所詮はならず者。コンテナの鍵をかけ忘れていたり、冷蔵モードの電源を入れ忘れたままにしている可能性だってもちろんある。

もっとも。

流石に、丸腰の民間人に銃や手榴弾を奪われて反撃されるほど間抜けとも考えていない。

『ブルーボトル』の顔に焦りや緊張がないのはそのためだ。

「脱走者を殺す場合は気を配れと伝えておけ。生簀の魚と同じで、死んでしまっては値が下がる。死なせる場合も作法を守るか否かで減額の幅が変わってくる。手榴弾で粉々なんていうのは論外だ」

「伝えはしますが、守るかどうかまでは保証できかねます」

『ブルーボトル』は、部下の言葉を最後まで聞かなかった。

この貨物船は『商品』の輸出国まで直接は向かわない。オセアニア圏のギリギリ外にある島まで行って、別の船へとコンテナを積み替える。『ブルーボトル』もまた、貨物船と一緒に短い距離を往復する。この貨物船は、『情報同盟』との間で取り決めているフリーパスを最大限に発揮するため、できるだけ頻繁に該当海域を行き来できるような仕組みを作っておく事が重要なのである。

その時だった。

先ほどの部下が、会話を断ち切ったのにさらに声を掛けてきた。

「……『情報同盟』のオブジェクトからです。私では対応できません」

「回せ」

コンソールの前に座っていた部下が、頭から取り外したヘッドセットを軽く放り投げてくる。

『ブルーボトル』は片手で摑み取ると、頭には付けずにマイクを口元へ寄せる。

「何だどうした？　通行料なら払っている。ここで余計な問題を起こして他の勢力のオブジェクトに異変を察知されてみろ。パブリックイメージを傷つけられるのはお前達『情報同盟』だろ。私達との繋がりが露見しては困るはずだ」

『……そのことだ』

やや苛立った調子で、ノイズ混じりの声が返ってきた。

『なぜ、おまえたちは「とりきめ」を守っていない？　それではこちらのフリーパスがきのうしない。つうじょうどおりに対応しなくてはならなくなるぞ』

「待て、状況を把握できない。詳しく教えてくれ」

『「はた」だ』

ゆっくりと。

言葉を覚えたての幼児へ話しかけるように、操縦士エリートは丁寧に答える。

『かもつせんのせんしゅになければならないはずの、われわれ「情報同盟」のはた。それをか

かげていないことには、ひごのたいしょうにあるとしょうめいできなくなる。マニュアルどおりにしたがわない以上は、われわれもつうじょうどおりの立ち入りけんさをするしかなくなるぞ』

暗い海でやたらと硬い浮き輪に命を預けるクウェンサーは、『情報同盟』のロゴが印刷されている布切れを放り捨てながら、こんな事を言った。

「連中の船が特別視されているのは、『情報同盟』の旗を掲げて庇護下にあると喧伝しているからだ。だから『情報同盟』についてはフリーパス状態だし、ヤツらがお墨付きを出しているところへわざわざ『正統王国』とか『資本企業』とかが横槍を入れて立ち入り検査をするっていうのも角が立つ。……そういう『構図』をわざと作って、見つかると困るものを好き放題に運び出しているって訳だ」

「じゃ、じゃあ……」

ドロシーは、波に揺られてどこかへと消えていく旗を見ながら、

「その旗を取っちゃえば」

「少なくとも、見た目の上では特別性は失われる。『情報同盟』は普通の船と同じように立ち入り検査をしなくちゃならない。仮に見逃せば、『正統王国』だの『信心組織』だのが代わり

に検査をしようと考えるからな」

「で、でも！」

人命が関わっているからか、ドロシーは慌てたように質問を重ねる。

「ホントにそれでみんなを助けてもらえるのかい？　聞いた話だと、あの船と『情報同盟』っていうのはお友達って話じゃ……。わざと手抜き検査をして、コンテナの中なんか調べないで、そのままお墨付きっていうのを出しちゃうんじゃないのかね？」

「かもしれない。というより、連中にとってはそれが最善策だろう。他の世界的勢力が介入する前に、いち早く『情報同盟』が手抜き検査をする。さっさとお墨付きを出して、あの船は安全だからもう調べなくて良いよと喧伝する。そうすれば、コンテナの中の人間がバレる事もなくなる」

「だ、だったら!!」

「だから」

ドロシーの言葉に被せるように、クウェンサーは言う。

その手には、無線機が握られていた。

「……もう一つ、策を用意した」

『情報同盟』の海洋巡視艇は迅速に急行してきた。

貨物船の操舵室の中がわずかにざわつくが、『ブルーボトル』には余裕があった。

見限られた訳ではない。

逆だ。

他の世界的勢力の警備チームが介入する前に、息のかかった『情報同盟』が迅速に動いてくれた。彼らはこの貨物船に強制乗船した後、わざと手抜き検査をして、さっさとお墨付きを出してしまうだろう。……以降、この船を再検査するという事は、我々『情報同盟』を疑うという事であり、多国籍軍を編成する上で互いの良好な関係に亀裂を入れる事に繋がるぞ、と暗に脅しをかけるために。

何故、彼らの旗が消えたのか。

それについては謎が残る。指示を忘れた部下がいたのか、結びが甘くて風に流れてしまったのか、何者かが悪意的に取り外したのか。

だが、いずれにしてもリカバリーは可能。

この程度のイレギュラーでは、『ブルーボトル』は倒れない。

「交信あり。『情報同盟』の警備チームが乗船の許可を求めています。いかがいたしましょう？」

「……何も隠すな。通常通りの手続きで乗船を許可するんだ。特に、不自然な行動の記録を残すな。ここで荒立てる必要はない。『情報同盟』の連中はきちんと『分かっている』」

言うだけ言うと、『ブルーボトル』は複数の部下を引き連れて、操舵室を出た。こちらに乗船してくる『情報同盟』の警備チームを迎えるためだ。もちろん、犯罪組織としての鉛弾を使った隠語ではなく、本来通りの意味でだ。

甲板へ出ると、金属製の手すりにいくつもの太い金具が取り付けられていた。それは化学繊維製のロープと直結していて、真下を覗き見れば黒ずくめの男達が登ってくるところだった。

乗船した男の一人は、『ブルーボトル』に向けて律儀に敬礼しながら、テキスト通りの文言を一字一句間違いなく発音した。

「多国籍軍の間で取り決められている、オセアニア圏内における国際犯罪防止のための抜き打ち検査です。乗員、および貨物を改めさせていただきます」

「結構。好きなだけやってくれ」

許可を聞いてから、黒ずくめの男達は二人一組のチームを作ってバラバラと船内の各所へ散らばっていった。

こんなものは予定調和だ。

ひょっとすると、多国籍軍を構成する他の世界的勢力……『正統王国』や『信心組織』などが、衛星やオブジェクトの超望遠を利用してこちらの動きを観察しているかもしれない。だから、安全を期すためのロールプレイ。それがこの抜き打ち検査である。実際にはトラブルなんて起きないし、まずいものが見つかっても記録はされない。そういう風にできている。

『ブルーボトル』は、間近に佇む黒ずくめに声を掛けた。
「どれくらいかかりそうだ」
「コンテナの数が数です。一時間は見積もっていただきたい」
「……かかるな」
「私もやりたくてやっている訳ではない」
暗に、『旗』についてのミスを咎められているように聞こえた。
安全を得るための行動ではあるが、無駄と分かっているものに付き合っているのもなかなかに堪える。一分一秒の単位が引き延ばされているかのようだ。遠方から観察されている可能性もあるため表情や態度を崩す訳にはいかないが、正直、気を抜くとあくびが出てしまいそうだった。
しかし。
そこで。
パン!!　という軽い破裂音が炸裂した。
船の上から。
明確に、火薬の弾ける発砲音が。

「……そう上手く終わらせてたまるかよ」

クウェンサーは無線機のスイッチに手を掛けながら言った。

「『情報同盟』と犯罪組織。上の連中の間で取り決めができていて、阿吽の呼吸で意思伝達ができていたとしても。下についているならず者にまでその全てが伝達されている訳がない。何しろ、秘密の内緒話ってのは密室でやるものだ。大ボスがワンマンで剛腕を振るっていればいるほど、部下は細かい事情なんか知りようがない」

「へっ。実際にゃ安全な茶番劇だったとしても、犯罪組織の下っ端はその事に気づいちゃいねえって話だろ。何かのミスがあって『情報同盟』の警備チームが乗船してきた。貨物船の中には人身売買の『商品』が瀕死の状態で転がしてある。バレたらまずい。そんな訳で汗だらだら心臓バクバクで『情報同盟』の銃口を眺めているって訳だ」

もちろんそれは『情報同盟』の警備チームについても同じだ。

リーダー格の人間は犯罪組織との間で、具体的にどんな取り決めがされているかを知って安心しているだろう。部下の兵士も説明は受けているかもしれない。だが、ならず者の犯罪組織なんて本当に信じられるだろうか。相手は嘘をついているかもしれない。統制されていない犯罪者なんて何のきっかけで発砲するか分からない。そんな風に、心のどこかで不安に感じているとしたら。

「だから」

クウェンサーは、ゆっくりと無線機を振って、

「……ちょっとしたきっかけがあれば、ヤツらはポーズで向けている互いの銃口を暴発させる。例えば、無線信号で破裂する電気信管の爆発音を、『最初の一発目』と勘違いしてしまう事だって」

ちなみに。

信管とは爆薬に強い刺激を与えて起爆を促すための道具の事だが。

それ自体も、爆竹よりは強烈に破裂するようにできている。

そして。

パパン!!　パパパパンパンパパパン!!!!!!　と。

夜の海に、いくつもの連続した破裂音が続いた。

いくつかはクウェンサーが事前に撒いておいた電気信管によるものだが、明らかにそれ以外の音が混じっている。よくよく注意深く聞き比べれば音の質が違う事に気づけたかもしれないが、そんな余裕はどこにもない。

「やめさせろ!!」

両手で耳を塞ぎ、金属製のコンテナの山に身を寄せながら、『ブルーボトル』はすぐ近くにいた『情報同盟』の黒ずくめに大声を張り上げる。それくらいしなければ、声が届かないほどの爆音が辺りを埋め尽くしていた。

「どちらが撃った!?　どちらでも良いからやめさせろ!!　こんな戦闘には何の意味もない。そっちの『上』とは話はついているん……!!」

『ブルーボトル』の声が途切れた。

ぼぐっ!?　という湿った音と共に、先ほどまで話していた黒ずくめが真横に薙ぎ倒されたからだ。コンテナに叩きつけられた頭から、果物を潰したように真っ赤な血が壁へ撒き散らされる。ただぶつけただけでここまでの出血は起こらない。明らかに、銃弾で頭の中身をかき回されている。どちらの陣営が放った弾丸かも区別がつかないほど、貨物船は混乱に包まれていた。

「くそ……!!」

『ブルーボトル』は背筋に走る嫌な感覚に従い、思わずホルスターから拳銃を抜いていた。

そこで、『情報同盟』の兵士と目が合った。

しばしの空白があった。

そして思考が回復した途端、『ブルーボトル』は自分が致命的な間違いを犯した事にようやく気づいた。

「ち、違う!!　戦う意思はない……!!」

言葉は届かなかった。

『情報同盟』の兵士の銃口が、明確に照準のための『生きた』動きを見せた直後、『ブルーボトル』は反射的に間抜けな兵士の上半身の正中線に鉛弾を三発ぶち込んでいた。

当然、それは混乱する船内の全ての人間が目撃していた。

もう後戻りはできない。

仮にも世界的勢力の一角を為す大組織との、絶望的な戦闘の火蓋が切って落とされる。

17

フローレイティア＝カピストラーノは頭を抱えていた。

作戦指令室では、女性オペレーターの控え目な声だけが響いている。

「聖フランク国際港近海にて、貨物船ミストラル号の突発的戦闘は終了したとの事です。先行していた『情報同盟』側の被害は不明。彼らは無事に撤退したものと推測されます。一方の乗組員の方は、死体を数えている最中です。おそらくは全員死亡」

オセアニア近海の貨物船で突発的な銃撃戦を確認。建前としては攻撃を受けている『情報同盟』を、多国籍軍の一角として『正統王国』の海洋警備チームが支援する形で横やりが入った。

……問題なのは、その貨物船のすぐ近くにクウェンサーやヘイヴィアといった第三七機動整備大隊の人間が浮かんでいた事。彼らは何やらしたり顔で、訳ありの老婆を抱えていたという点だ。

「なお、保冷用コンテナの中からは三九名の民間人が発見されました。クウェンサー＝バーボタージュ、ヘイヴィア＝ウィンチェルらの証言と合致します」

「……そうか」

「また、死体の中に『ブルーボトル』の異名で知られる重要犯罪者と酷似した人物を発見。現在、身元を照合中ですが、仮に本物だった場合、やはり彼らの証言通り、ミストラル号はオセアニア圏で幅を利かせる犯罪組織の所有物だった可能性が濃厚となるでしょう」

小汚い男の首一つじゃ割に合わん、とフローレイティアは口の中だけで呟いた。

それから意識を切り替え、遠方にいる『正統王国』の上官との通信に専念する。仮にも大隊を一つ任されているフローレイティアからして、上官と名をつけなくてはならないほどの相手と。

「人身売買組織の壊滅を確認。……ただしその過程で、私の隊の人間が介入したらしき痕跡を『情報同盟』側に掴まれてしまっている状態です。遠からず外交圧力が発生するでしょう。場合によっては、武力衝突の引き金になるやも」

『ああ、うん。一〇〇％そうなるだろうね』

気軽な調子で、若い男の声が応じた。

『……ただ、たとえ君の部下が動かなかったとしても、結果は変わらなかっただろう』

「？」

『人身売買組織の存在を知りながら黙認して安全に帰投していたら？　あるいは、そもそも君が誘拐犯からの間違い電話に応じなかったら？　……その場合は、オセアニアの民間人から具体的な被害が出た後に、「情報同盟」は匿名からの密告と称して我々「正統王国」をこう糾弾しただろう。ヤツらはマフィアやギャングから自分の身を守るために民間人を犠牲に差し出した卑劣漢であり、そのような輩にはオセアニアの平和を暫定管理する多国籍軍に属する資格はない、と。どっちみち、事が始まった段階で売られたケンカを買うしか道はなかったのさ』

「……あの間違い電話」

『今にしてみればおかしな話だと思うだろう？　おそらく犯罪組織と繋がっていた「情報同盟」が、わざと人質の子の家とは違う電話番号を渡しておいたんだろう。それに、廃病院での救出作戦時には、子供に爆弾が巻きつけてあったという報告もある。電話で吹き飛ばせる爆弾がね』

「そうか。家族から金を巻き上げるだけ巻き上げて、子供を解放するつもりがない……という『だけ』だとしたら、そんな物騒な小細工を弄する必要はないはずですね」

『手っ取り早く「民間人からの被害」を演出したかったんだろうね。あそこで対応を失敗していれば、「正統王国」はオセアニアの民間人を危険にさらした、だからオセアニアのために彼

らを追い出そう、という大義名分が成立する訳だしさ』

一理ある。

利害も分かりやすい。

『安全国』のリビングでポップコーン片手にワイドショーを眺めている奥様方も納得の戦闘理由だ。

ただし、

「……だとすれば、『情報同盟』は墓穴を掘った事になりますね。よりにもよって、人身売買組織とパイプを繋げようとするだなんて」

『決定的な証拠が残るような雑な仕事はしていないだろう。何しろ、彼らは何よりも情報を重んじる勢力なんだから。誰が何をどう主張したところで、「それは犯罪組織が破れかぶれのブラフを言っているだけだ」で収まるようにセッティングしてあるさ』

あくまでも、『上官』の口調は軽い。

一方、その言葉は的確に人の歴史を切り分けていく。

『……だが、どちらにしても戦争をする事態だとすれば、せめて後味の良い理由をもらった方が、「政治」とのすり合わせを行う僕達としてもありがたい。君達は良くやってくれた。お膳立ての通りに、後は全力で売られたケンカを買ってくれ』

「了解しました」

通信が切れた。

フローレイティアは細く長い息を吐くと、やがて静かにこう告げた。

「……じゃあ、そろそろ戦争の話をしよう」

18.

クウェンサー、ヘイヴィア、ミョンリ、シーワックス、そして人質だった老婆のドロシー。

彼らは『正統王国』の海洋警備チームの巡視船に乗せられて陸まで送られ、そこで待っていた第三七機動整備大隊の軍用車両に乗せられ、整備基地ベースゾーンまで向かった。途中、物珍しそうな顔で事情を尋ねられるたび、それが武勇伝ぽくなったところで決まって拳で小突かれまくる羽目になった。ただ、文句を言いながらクウェンサーやヘイヴィアに殴りかかる兵士達はどいつもこいつも目は笑っていた。

ドロシーは窓の外に広がる雑多な街並みを眺めながらこんな事を質問してきた。

「どこに行くの？」

「家に帰る……というか、旅行者だからホテルかな？　とにかく帰るのが当然だろうけど、あなたの娘夫婦は俺達の基地の方に案内されているみたいだからな。感動のご対面はそっちでだ」

クウェンサーは適当な調子で答えた。

軍用の四駆が見慣れた整備基地ベースゾーンまで戻ってくる。通用ゲートを警備していた兵士は話を聞くと、珍獣でも見るような目つきで後部座席のクウェンサー達を眺めていた。

「よおクウェンサー。……なーんかもう基地中の噂になってるっぽくねえか？」

「それをプラスの意味で受け取れるお前が羨ましいよ。このままリアルに営倉送りかもしれないっていうのにさあ」

この整備基地は一〇〇台以上の大型車両によって編成されている。宿舎として使われている一角まで案内されるかと思ったが、軍用車両はその途中で停まってしまった。

おそらく窓から確認していたのだろう。

待ちきれなくなったのか、宿舎の中から旅行者と思しき男女が飛び出してきたのだ。

ドロシーは、目を見開いたまま、震える唇を動かして言った。

もう二度と会えない相手の顔を、その目で見たような声で。

「娘夫婦だ……。孫もいる」

クウェンサーは四駆のドアを開けた。

夜の闇を感じさせないほどの、大量のライトに照らされた整備基地の敷地内を、ドロシーは精一杯の力で走っていく。

「……、」

その時だった。

戦場カメラマンのシーワックスは、自然とカメラのファインダーを覗き込んでいた。
涙交じりで抱き合う家族の写真は、『戦場の真実』なんて銘打つほどのセンセーショナルな刺激はないかもしれない。
それは世界的に有名な賞なんて取るほどのものではないし、写真家としての個展を開くほどの目玉になるとも思えない。
だけど。
きっと、その一枚には。
世界を大きく動かすほどの『何か』がある。

第二章　私の仕事は絵具を運ぶ事　〉〉　オセアニア情報戦

1

「状況は簡単だ」

フローレイティア＝カピストラーノ少佐は多数の兵士達を集めた作戦前会議ブリーフィングの場でそう切り出した。

「『情報同盟』から冤罪を仕向けられた。我々、『正統王国』軍第三七機動整備大隊は売られたケンカは全力で買う主義を貫く。現時刻より、総員即応態勢へ移行する。第二世代のオブジェクトが向かってくるぞ。死にたくなければお姫様の得点稼ぎに付き合ってやるように」

広い壇上に立つフローレイティアの背後は白い壁になっていて、プロジェクターによって映像を映すためのスクリーンとしても使えるようになっていた。

そこへ、『目下最大の脅威』が表示される。

「今のところ、確定している敵は『情報同盟』の第二世代、『シンプルイズベスト』だ。こい

つの主砲は下位安定式プラズマ砲、推進方式は水陸両用のエアクッションだが、最大の特徴は機体前面にある嘴のように尖った追加装甲板と、補助推進装置として取り付けられた無数の高出力イオンスラスターだ」

いくつかの資料が同時に表示された。

それだけ、諜報部門でも研究と解析が進められている機体なのだろう。

そうしなければならないと脅威を感じさせるほどの相手、という事だ。

クウェンサーの隣で、ヘイヴィアがこそこそと声を掛けてくる。

「（……高出力ナントカって何だよ？）」

「（……イオンエンジンの亜種。普通、宇宙探査機とかに取り付けて『無重力下で弱く長く効果を発揮する』のがイオンエンジン。でもあれは、オブジェクトの動力炉のエネルギーに任せて無理矢理馬鹿デカい出力を叩き出す。ま、真横に寝かせたスペースシャトルだとでも思ってよ）」

「（……何でまあ、そんな面倒臭い方式をわざわざ……）」

「（……色々噂されてるよ。『情報同盟』は完全飛行オブジェクトを建造するつもりだとか、太陽系外の居住可能惑星を探すための完全循環システムを開発するつもりだとか。『シンプルイズベスト』はその足がかりになる、蛹のプロジェクトだって）」

「（……あん？　飛行オブジェクトって言えば『信心組織』が躍起になってなかったか？　天空城計画だとか何とか。科学色の強い『宇宙』じゃなくて、あくまで『雲の上の国』に留める

方が、宗教色の強いヤツらは喜ぶとかでよ）」

「（……今のところは無謀な計画だけどね。でも、その悲願を先に他の世界的勢力が達成しちゃえば、『信心組織』の民衆の心をへし折れるでしょ）」

「（……なるほど、『情報同盟』のヤツららしい搦め手だ）」

「（……でも机上の空論で終わって欲しいよ。完全飛行オブジェクトなんて、撃ち落とすのも大変だし、落としたら落としたで小惑星突撃並の衝撃で氷河期に入っちゃうかもしれないぞ）」

図面を見る限り、『シンプルイズベスト』の足回りはスキーのようなハの字の板状パーツと、後部へ大きく伸びた直線パーツに分けられる。全体として、矢印みたいな形だった。球体状本体は、三本の線が交わる場所の上に取り付けてある、と考えれば良い。

ハの字の部分は水平方向の調整用、後部の直線は問題の『高出力イオンスラスター』を設置するためのスペース。直線的な板状のフロートの上に、何本もの円筒形のスラスターが斜めに取り付けてあった。あの一本一本が、二〇メートル以上もの長さを誇る。

「こいつの取る戦術はその名の通り単純だ。……一切回避せず多少のダメージを無視して最短最速で標的へ接近し、ほぼゼロ距離から主砲をぶち込む。オブジェクトにあるまじき事に、こいつの最高速度は音速に届く。一度捕捉されたら並のオブジェクトじゃ逃げ切れない訳だ」

「音速……」

聴衆の一人と化していたクウェンサーが、思わず呟く。

「だって、二〇万トンの鋼の塊だろ。そんなもんが地表で音速叩き出して姿勢制御なんてできるのか……？」

「私語は慎め戦犯」

「マジであだ名に定着しそうだから勘弁してくださいっ!!」

涙目で叫ぶクウェンサーを無視してフローレイティアは話を続ける。

「前面にある嘴のような装甲の正体は、極めて薄い金属箔の集合体だ。いわゆるリアクティブ防御技術の粋を集めた結晶。下位安定式プラズマ砲やレールガンなんかの有効攻撃を感知するたびに薄い装甲が剝離する事でダメージを軽減させる。根気良く撃ち続けていればトイレットペーパーを切らす事もできるだろうが、さっきも言った通りあの速度だ。そんな悠長な事をやっている内にゼロ距離まで詰められる。……つまり、ヤツはそもそも回避挙動なんか取らない。盾の強さを信じて、真正面から突っ込んでくる。どんな種類の主砲を向けてもな」

その数字から惑わされそうになるが、敵の最大の特徴は速度ではなく装甲だ。速度重視で標的の至近へ迫ろうとするだけなら、『正統王国』でもすでに開発されている。だが途中で一切回避せず、何をされても最短コースを維持し続けるなど異形過ぎる。

真正面からの攻撃を堪えながら、回避を一切考えず一直線に突っ込んでくる直進兵器。

しかも彼我の速度差を考えれば、『ベイビーマグナム』には逃走も不可能。

これでは狙われた時点で試合終了と考えるのが妥当だろう。

「例のトイレットペーパーは機体の前面にしか装着されていない。真横や背後、あるいは上から攻撃すればこちらの砲撃はまともに通る。……んだが、『シンプルイズベスト』側も自分の弱点は理解しているだろう。『ベイビーマグナム』が回り込もうとしても、その動きを先読みして向こうも位置取りを変えてくるはずだ。こちらにも二機以上のオブジェクトがあれば事情は変わってくるが、現状の一機だけで、速度に勝る『シンプルイズベスト』の背後を取るのは極めて難しいだろうな」

何の気なしに聞き流していたヘイヴィアが、そこで眉をひそめた。

「……ちょっと待った」

「何だ戦犯二号」

「せめて一号にしてくれよ！　こいつ以下なのが何より気に喰わねえ!!」

叫ぶだけ叫んだ後にヘイヴィアはこう質問した。

「こちら『にも』二機以上の？　今アンタそんな事言いました？」

「その話か」

フローレイティアは面倒臭そうに前髪を掻き毟った後、

「諜報部門が摑んだ情報によると、『情報同盟』は我々に仕掛けた冤罪を上手く利用して、他の勢力ともコンタクトを取っているらしい。共通の敵を一緒に倒しましょうってな。具体的に誰が喰いつくかは分からんが、これを機に『正統王国』にダメージを与えたいと考えている輩

が出てくれば、今度の件、二機以上のオブジェクトと同時に激突する可能性も出てくる」

クウェンサーとヘイヴィアの二人は揃って嫌な顔をした。

今はオブジェクト主導のクリーンな戦争などと呼ばれる時代だ。戦争の全てはオブジェクトに左右される。互いのつぎ込んでいる資金や技術はもちろん、重要なのはその数。一機対三機なら、戦う前から結果は目に見えているから速やかに退け、とまで譬えられるほどだ。

「……だが一方で、新手はあくまでも漁夫の利狙いだ。敵側の主柱である『シンプルイズベスト』をへし折れば、残りのオブジェクトは余計な戦いに付き合って損害を拡大させようとは考えなくなるはずね」

となると、やはり本命は『シンプルイズベスト』。

一対多数の不利な戦闘を回避するためには、迅速に中心の柱を破壊するしかない。

2

都市部から完全に離れ、熱を溜め込むアスファルトやコンクリートもなくなった完全な砂の砂漠は、夜になると一気に冷える。

それなりに計算されているはずの軍服を纏ってなお、歯をカチカチ鳴らしているクウェンサーは、軍の携帯端末でワンセグ放送を眺めていた。バックライトに照らし出され、懐中電灯

を下からかざしたようにぼんやりと顔が浮かんでいる。
『おほほ。本日はニューヨーク・ミラクルネットフェスタへようこそ！　モニターのまえにいるせかいじゅうのみなさん、みわくのうたとおどりでたーっぷりよわせてさしあげますわ!!　いえーい!!』
「いえーい！　おっぱいがたゆんたゆんでお尻がぷりんぷりーん!!」
「馬鹿クウェンサー夜間作戦中に何観てんだ!?」
「現実逃避だよ！　オブジェクトの設計学ぶために戦場へやってきたのに、何で凍え死にそうな夜の砂漠に放り出されなくっちゃならないんだ!?」
「良いから消せよ馬鹿、死にてえのかテメェは！　……やっぱちょっと待って、切る前に俺にもちょっと観せて!!　ていうか何でネットコンサートの招待コード持ってんの!?」
「何だか知らんがヤツから頻繁にメールが来るのさ。コードの使用状況はモニターできるから、観なかったらどこかの戦場で砲撃するとも書かれていた」
その時だった。クウェンサーの無線機が短い電子音を発した。
聞こえてきたのはお姫様の声だった。
『……クウェンサー、ちょっとくわしくせつめいして』
「わお！　何だか知らないけどお姫様がキレてる!?　ちょっとと詳しくで相反しているところに気づいていない辺り、これは自覚なく頭に血が上っているタイプだぞ。でも何で!?」

クウェンサーは慌ててヘイヴィアへ救援を求めたが、戦友は右手の中指を立てるという大変紳士的な仕草で『知るか馬鹿!!　天罰だ!!』と喚いていた。

『ぐんのつうしんは1どサーバーでチェックされるってしってるよね？　一体そこでなにしているの……？』

「わおー!!　対『情報同盟』の夜間作戦中に『情報同盟』のアイドルの尻を追い駆けてたからそれでキレてんの？　まったく頭カタイっていうか優等生っていうか……」

『……』

まずい、それはまずい、と同じ砂漠に展開している名前も知らない皆の衆からコメントが差し込まれてきた。ヘイヴィアは総毛立って『天罰ならこいつだけにしろよ!!　ここで主砲持ち出されたら俺まで吹っ飛ばされちまう!!』とクソ野郎丸出しの懸念を表明していた。

『まったく、なんでおとこの人っていうのはうたをうたう女の人にふり回されるんだろう。べつにそんなのだれだってできることなのに』

「ヘイ、聞き捨てならないねそいつは。そこまで言うならお姫様の歌唱力にご期待させていただきましょうか。『島国』にはＫＡＲＡＯＫＥなる文化があってだな!!」

『（ぴくっ）……の、のぞむところだよ』

俺を殺せ!!　こいつが死ぬならオブジェクトの砲撃に巻き込まれても良い!!　と隣で叫ぶヘイヴィアを無視して、クウェンサーは額へ上げていた暗視ゴーグルを目線まで引き下ろす。

視界がデジタルに補正された、緑色の光で埋まる。

でもやっぱりクウェンサーはヤケクソ気味にふざけていた。

「ついに出ました全身黒ずくめに暗視ゴーグル付き」

月明かりの下、暗闇の中で突き刺すような冷気に誘われるように、その口から洩れる息は白く色を変えている。

「やったね、これで俺もトクシュブタイの仲間入り!　『資本企業』のハリウッドムービースターと肩を並べたゾ?　遊園地で僕と握手!!」

「……おいクウェンサー鬱陶しい事やってねえでさっさと伏せてくんねえ?　向こうの狙撃銃に頭ぶち抜かれたって骨は拾わねえぞ。重たいし」

同じように全身真っ黒な軍服で身を固めたヘイヴィアは、きめ細かい砂の上にうつ伏せになったまま、先に精神的な限界を迎えつつある腐れ縁へ面倒臭そうに言い放つ。

夜の砂漠は寒い。

砂漠と言ってもひび割れた大地や、むさ苦しいオヤジの無精ひげ程度に雑草の生えた平原など色々あるが、本当に、観光パンフレットに載っているような『一面が砂だけの砂漠』はとにかく昼間と夜間で寒暖の差が激しい。季節が真夏であるためか氷点下には届かないとはいえ、

伏せたまま電子温度計の先を砂に突き刺したヘイヴィアは、表示を見て思わず舌打ちするほどだった。

「六度。摂氏六度だってよ馬鹿野郎。青魚を放り出しておいたらそのまま保存できちまうような気温だぜ。どうなってやがるんだ」

「それより問題なのはこの距離だよ」

クウェンサーは砂の上に寝そべりながら、

「ここから一〇キロだってさ。……何でこんな遠いトコから車降りなきゃならない訳？　スポーツ工学的に整えられた競技場じゃないんだぞ。行って帰ってくるだけで寿命が縮むっての」

「うるせえ馬鹿、どうせ給水ポイントだらけのシティクォーターマラソンだって完走できねえだろテメェは」

吐き捨てるようにヘイヴィアは言って、

「地上〇メートルの有視界の限界は大体五キロくらいだ。地球は丸いからな、それ以上は地平線の向こうに隠れちまう。が、ここは何もねえ砂漠だぜ？　下手にタイヤで砂を掻き乱しながら移動してたら砂埃が舞い上がるだろうが。そういうのは地平線からひょっこり顔を出しちまうんだよ」

「……言いたい事は分かるけど、これって専門のスカウトがやる長距離偵察だよね？　おっかしいなあ、もうみんな忘れていると思うけど俺はオブジェクトの設計を現場で学ぶためにやっ

てきた『学生』なんだけどなあ」

「それ言ったら俺なんてレーダー分析官だよ！　内勤!!　エアコン効いた部屋でミネラルウォーターのボトル片手にクールでインテリなお仕事こなす予定がよ、何の因果で夜の砂漠に放り込まれて凍えながら地獄のピクニックなんかしなくちゃならねえんだ!?」

そこで彼らの無線機から上官の言葉が飛んできた。

フローレイティアのものだ。どいつもこいつもうんざりしているのは同じようだった。

『黙れ戦犯ども。仕事を選べる立場とでも思ったか？　必要とされている余地がある事を死ぬほど感謝しろ』

「わお。前々から思っていたけどよ、この無線機にはモニターをつけるべきなんじゃねえの？そしていい加減に誰でも良いからマイクロビキニを提供すべき時が来てるって」

「分からない人だねヘイヴィア。これはイメージの世界だよ。何でもかんでもオープンにされれば興奮するって話でもないだろう？」

『……さて戦犯ども。私はいつでもお前達を不敬罪で減給処分にできる立場にある訳だが？』

ならばクウェンサーとヘイヴィアは無線機の前で全力の土下座を粛々と敢行していくだけである。

ただし彼らの謝罪は映画館のホットドッグよりも安い。

「（……クウェンサー、テメェがイメージの世界とかキモい事言うからだって！）」

「（……ヘイヴィアが誰でも良いからなんて口滑らせたからじゃないの!?）」

『悪いが全部聞こえているんだ』

平淡な指摘に背中を押されるように、クウェンサーとヘイヴィアの二人は身を低くしたまま夜の砂漠を移動していく。

砂漠では月明かりの照り返しがあるため、鬱蒼と茂る森よりはほんのりと明るい。が、その恩恵を受けられるほどクウェンサーは充実した基礎訓練をこなしていない。先ほどから、全体的に緑色っぽい映像を吐き出す暗視ゴーグルのお世話になりっ放しだった。

「目がチカチカする……。こんな超至近で目玉に光浴びせちゃってさ。これ本当に視力に悪くないんだろうね？　ブルーライトとか大丈夫？」

「注意一秒で全身粉々になるかもしれねえ戦場で何ブツブツ言ってんだ。おい、それよりもパイプラインの残骸を目印にして歩こうぜ。四方八方全部砂漠だから、地図を見てても方向感覚が狂いそうだ」

ヘイヴィアが人差し指で示した先、数百メートルほど向こうには、直径二メートルくらいの鋼鉄の管が走っていた。前方の地平線から後方の地平線まで一直線だ。ただし、全体的に茶色く錆びついていて、所々は大きく破れていたり、途切れていたりする。

「旧オセアニア軍政時代の遺跡だっけ？」

「ああ、ありゃ大深度地下から水を汲み上げて大規模農場へ運ぶためのパイプラインだったん

だろうな」

「原油じゃなくて？」

「水資源ってヤツだよ。金になれば何でも良いのさ。今時は何でもケツに『資源』ってつけて金に換算するのがトレンドみたいだしな。水資源に地下資源、動力資源、食料資源、人的資源、観光資源、生物資源、森林資源に知財資源。テメェら値札がついてなけりゃ絶滅危惧種を心配する事もできねえのかって感じだぜ」

「『資本企業』が好きそうな話だね」

「『信心組織』が好きそうな話もあるぜ。パイプラインの集中する汲み上げ施設だの精製施設だのの跡地にゃ幽霊が出るなんて噂もあるってよ」

「金の亡者の間違いじゃないの？」

「……つーか言ってて虚しくなってきた。女の子が一人もいねえってのに肝試しの話なんてあまりにも不毛すぎるぜ……」

砂漠は平坦ではなく、嵐の海のように大きくうねっている。歩くルートを慎重に選ばないと、何度も何度も大きな起伏を上ったり下りたりしなくてはならなくなる。無駄な体力の消耗を抑えるためにも、クウェンサー達は可能な限り高低差の少ないルートを通っていく。

「火星で迷子になった気分だ……」

「もうちょいマシだろ。足元にはタングステンが埋まってるって話だしな」

「タン、何だって？」
「言っておくが一攫千金は狙えねえぞ。含有率が悪すぎる。そもそもここら一帯が優れた鉱脈だったら、資金不足だった旧軍政派があっちもこっちも掘り返してんだろうさ」
しばらく進むと、月明かりしかないはずの夜の砂漠の地平線の辺りに、ぼんやりとした光が見えてきた。
思わずヘイヴィアは身をさらに低く屈め、ボソリと呟く。
「……あれだろうな。派手にやってやがるぜ」
「問題の『シンプルイズベスト』って今どうしてる訳？」
『私達の整備基地から二〇キロほど離れた場所で突撃準備中。お前達が見ている光よりもずっとずっと向こうの話さ。地平線の向こうに隠れているはずだ』
周囲に敵兵がいる様子はないが、『目的地』に近づくにつれてカメラやセンサーなどが敷設されているリスクも高まってくる。クウェンサーとヘイヴィアの二人は暗視ゴーグルのセンサーをフルに使って、それらの有無を確認しながら先を急ぐ。
「それにしたってイカれてるよ」
クウェンサーは冷たい砂の上を歩きながら言う。
「先行した諜報部門は連絡を断ってそれっきりって話でしょ？　そんなヤバい場所に『学生』なんて連れて行くもんかね普通？」

『別にお前だけが今回の件に関わっている訳じゃない』
「ですけどねえ……」
『お互いプロだ。最悪の結果とやらも覚悟の上ではある。それでも現場でドジを踏んだ諜報部門を見つけた場合は拾ってやれ。以上だ』
「だから俺はプロもクソもない『学生』だってばさ!!」
と、こんな感じの馬鹿二人だったが、流石に『目的地』まで二キロの地点までやってくると口数も少なくなってきた。
嵐の海のように大きくうねる砂の丘を、腹這いのままゆっくりと進む。頂点に近い部分まで身を乗り上げると、視界が一気に広がった。
「っつ……」
暗視ゴーグルが蛍光の緑一色に染め上げられる。
軽くこめかみに痛みを感じながら、クウェンサーは暗視ゴーグルを額へ上げて、肉眼で視界を確保し直す。
暗闇と静寂に支配されていた砂漠の風景が一変していた。
光の正体は、大小様々なライトのものだ。
「……出やがったぜ。情報通りだ」
ヘイヴィアは低く呻くように言う。

数キロ先に広がる景色は、仮設の補給基地にも似ていた。とにかく目立つのは、二〇台近い大型のトレーラーのような車両。さらに、一〇〇人以上の兵士が寝泊まりできるプレハブの宿舎や、見張り台代わりのゴンドラ付きクレーン車、通信施設、戦車や移動式地対空ミサイル車両などの各種防衛兵器なども散らばっている。

ライトの種類はクレーン車のゴンドラに取り付けられたサーチライトから、車両のヘッドライト、個人携行の軍用ライトまで様々。共通する特徴と言えば、この暗闇の中で彼らが全く光源を隠す気がないといったところだろうか。

ヘイヴィアはうつ伏せのまま、トレーラーのような大型車両の一つを指差して、

「『資本企業』の可動式バリケードだ。『EXウォール』だったか？　これで確定だな。やっぱり『情報同盟』の『シンプルイズベスト』の宣戦布告に合わせて、他の勢力まで俺らを潰すために肩入れしてやがる」

「バリケードって……あの車が？」

トレーラーの特徴としては、『荷台』にあたる部分が四角いコンテナではなく、円筒形を横倒しにしたようなものである事。車体の前方だけでなく、後方にも運転席らしきものがついている事だろうか。まるで電車を連想させる。

クウェンサーの質問に対して、ヘイヴィアは素っ気なく答えた。

「すぐに分かるよ。ほら動き出した」

声と同時だった。

車体の前と後ろにある二つの運転席が、それぞれ正反対の方向へ動き出したのだ。縮んでいたアコーディオンを伸ばすように、間にあった金属製の円筒形が伸張していく。あっという間に、直径七メートル、全長三〇〇メートルほどの巨大なバネに似たバリケードが展開されていく。

うんざりしたような顔で、クウェンサーは理解を示した。

「……ああなるほど、そういう事」

「馬鹿みてえだろ？　あれを一〇台ずつ二列並べて、ざっと左右三キロほどの有刺鉄線の壁を作るって寸法さ」

「で、あれでうちのお姫様の身動きを封じてから、『シンプルイズベスト』の突撃で叩き潰すって？」

有刺鉄線といえば人の侵入を防ぐためのもの、というイメージが強いかもしれないが、コイル状に巻いた有刺鉄線を地面に敷設する事で、戦車の履帯や装甲車のタイヤなどに絡めて走行不能にするための使い方もあるにはある。

が、クウェンサーは伏せたまま眉をひそめて、

「……『資本企業』のヤツら、本気でそんな事考えているのか？　有刺鉄線どころか核シェルターに使う強化コンクリートの壁で世界を覆ったってオブジェクトの主砲で吹っ飛ばせばおし

まいだろ」

「良く見ろよ、そして考えろ。連中のオモチャが『EXウォール』なんて呼ばれてやがる理由は何だと思うよ？」

「なに？」

「エクスプロージョン。大爆発。ちゃんと倍率変えて観察してみろ。あのコイル状の有刺鉄線、砲撃とかで強い衝撃受けるとバラバラに分解するようにできてんだ。でもって、一つ一つが対人地雷として機能する。大体あれ一台で二〇〇〇個から三〇〇〇個くらいかね」

「……何でまた？　地雷なんか撒いたって、それこそお姫様には何も……」

「だって困るだろ。オブジェクトを使ったクリーンな戦争ってイメージ的に」

ヘイヴィアは口の端を歪めて笑う。

「戦争条約じゃ無秩序な地雷の敷設・散布は禁止されている。でもって、自分達の手でばら撒かなくても、敵が暴れたせいで散らばっちゃいました、って建前を作っておきゃあ国際会議の場で追及されるのを避けられる。つまり、下手な事すりゃ引き金引いたお姫様が悪者にされるって訳。戦災復興の手伝いってお題目でオセアニアに駐留しているのに何やってんスかって言われると気まずいだろ。そういう風に脅す事で足止めしようって考えの兵器だな」

「馬鹿馬鹿しい……。実用無視の言葉遊びのための兵器だって？　連中は貴族の遊びでも楽しんでいるのか」

「その言葉、『正統王国』の『安全国』で口に出したらろくな目に遭わねえぞ」

無線機の向こうから、フローレイティアが淡々と指摘していく。

『……ワンブロックで横一線に三キロ。その可動式バリケードが、私達の整備基地と「ベイビーマグナム」を囲むように、八ヵ所で同時に展開されつつある。展開が終われば、今度は包囲網を縮めるために接近してくるだろう。痺れを切らしてお姫様が出撃すれば、その隙を衝くように「シンプルイズベスト」が音速超過で突撃してくる』

消えた諜報部門はその八ヵ所のどこかに探りを入れていたようだが、それがどこかは分からない、という訳だ。

「あのバリケードは『可動式』だからな。軍用ネットと繋がる事でオブジェクトの位置情報と連動できる。お姫様の動きを最大限に封じつつ、『シンプルイズベスト』の突撃状況に合わせて生き物みたいに『道を譲る』機能までついているって訳だ。……正直、まともに連携を取られるとかなりヤバい」

『シンプルイズベスト』自体の戦法はかなり大雑把で、前面追加装甲の分厚さと高出力イオンスラスターの加速力にものを言わせて、多少の被弾は無視して真っ向から突撃し、超至近距離で自前の主砲を叩き込む、といったものだ。

お姫様の活路は、やはり交差の瞬間だろう。

最高速度だけなら怪物級の『シンプルイズベスト』だが、それ故にUターンなどの鋭角な挙

動は取れない。そして重量軽減のためか、追加装甲は前面のみ。例の『突撃』を左右へ高速移動する形で回避してしまえば、今度はお姫様のターンだ。尻を見せた『シンプルイズベスト』へ砲撃をお見舞いすれば、ヤツは為す術もなく撃破される。

その、『真っ向から突撃してくる敵機に対して、左右へ回避するためのルート』をバリケードで効率的に封鎖されてしまう事は、お姫様にとって致命的と言っても良い妨害手段だ。

「……だから諜報部門がこっそり何とかしようとしたんでしょ？　そして失敗した。『資本企業』だか『情報同盟』だか知らないけど、連中だって馬鹿じゃない」

「軍用ネットで連動してやがるからな。外からのハッキングは受け付けねえにしても、バリケードの通信施設に直接忍び込んでウィルスを流し込めば連携は断ち切れるんだ。たった二五ユーロの安物チップ一枚でケリがつくはずだった」

「それをこれから俺達二人で？」

「必要なけりゃ、わざわざ俺らがこんなトコまで呼び出される事もなかった。それに八ヵ所同時に潜入作戦が実行されてんだ。どっか一ヵ所でもウィルスが流し込まれれば俺らの勝ちって寸法さ」

「……つまり七ヵ所は失敗したって問題なしっていう使い捨て戦術なんじゃあ……？」

オブジェクトの関わらない通常戦闘では割と役に立たないクウェンサーの泣き言を無視して、ヘイヴィアは迅速にこれから攻め入るバリケード施設の布陣を再確認していく。人員の配置、

巡回ルート、ライトの向きと強さ、各種センサーの有無などなど。自分の命がかかっていると分かれば、どれだけ眺めていても飽きない情報の宝庫に映るはずである。

「……見慣れねえ装甲車があるな。あれだけ『資本企業』のもんじゃねえぞ？」

「となると『情報同盟』側？」

「だなあ。ひょっとすると『資本企業』が密約通りに働くかどうか、睨みを利かせるために派遣されてきた『情報同盟』の将校のための乗り物かも。アンテナもやたらと多いし。貴賓仕様ってヤツだ」

「貴賓ってゲスト用って意味の？　じゃああの中は二四時間エアコンがガンガンに効いてて、炭酸飲料の入った冷蔵庫があって、フライドチキンを温め直すための電子レンジがあって、家庭用のミニシアターなんかがあって、インターネットができて、簡易シャワーもベッドに変形するソファなんかも置いてあるって事？」

適当に言うクウェンサーだが、その顔に相手を羨むような色はない。

「……護衛チームをつけているとはいえ、よくもまあ将校サマ一人で敵国の部隊のど真ん中に飛び込む気になったもんだね。『資本企業』が考えを改めて『お偉い将校からは情報が取れる』なんて判断したらそのまんま拷問と自白剤が待っているかもしれないっていうのにさ」

「そういう命令なんだろ。毎度お馴染み、上からの無茶ぶりには逆らえませんってヤツさ。……テメエは『学生』だから分かんねえかもしんねえけど、基本的に軍って窮屈で世知辛い

もんなのよ？」

「お前を見ていると、とてもそんな風には思えないよ」

軽く殴り合いになる馬鹿二人だが、そこで貴賓仕様の装甲車のハッチが開いた。慌てて観察を再開する。

「……おいおい。おいおいおい！　何だありゃあ？　一二歳かそこらじゃねえか。この前人身売買組織から助けたガキと同じくらいの女の子が軍服着てふんぞり返ってやがるぜ」

「軍は世知辛いって事でしょ」

「ああ……『情報同盟』の低年齢化将校って事は、向こうで進められていた天才少女プロジェクトの産物かな。正式名称なんざ知らねえが」

「何で少女限定な訳？　おっさんの趣味？」

「あながち間違ってもねえな」

冗談で言ったら真顔で返された。

「記号性ってヤツさ。英雄と聖女じゃ民衆の前に立つにしたって意味合いが変わってくる。華奢で、か弱く、可憐な、見目麗しい乙女が戦争のために頑張ってますってスローガンを叩きつける事で、保護欲と戦意高揚を勘違いさせるんだとさ」

「それ真面目に考えたお偉いさんには拍手と爆弾を送ってやりたいね……。お茶の間ってのは生々しい金で雇われた子役タレント相手にいつまで無邪気に感動しているつもりなんだ？」

「どこぞのオホホだって『情報同盟』の『安全国』じゃ立派なアイドルなんだろ。それと一緒さ。『情報同盟』じゃ明らかにズレてる正義を『これが正しい』って言い張れる力を持てるか否かで身分が変わるって話だしな。下手なサラリーマンよりCMで人気のお犬様の方が、健康診断で良い機材を使わせてもらっているらしいぜ」

クウェンサーは、ヘイヴィアが肩に下げているアサルトライフルへ目をやった。基本的には中距離メインで扱うものだが、各種センサーで補強されているため、ある程度の狙撃も行えるはずだ。

「で、やっちゃうの？　今なら頭でも心臓でも撃ち抜けそうだけど」

「あれは『情報同盟』から送り込まれた哀れなお目付け役だろ。周りのバリケードは全然無関係な『資本企業』が敷設してんだから、将校だけ撃ったってパニックは起こらねえよ」

「そりゃ良かったね」

「まったくだ。敵を選んでいられる余裕があるなんて、神様に感謝しなくちゃな」

そもそもウィルスを流す前に騒ぎを起こしても、クウェンサー達は自分の首を絞めるだけである。

敵の布陣を一通り確認したヘイヴィアは、ゆっくりとした動作で伏せた状態から起き上がった。

「……じゃ、クソ仕事をさっさと終わらせますか」

「マジであの中に忍び込むの？　どこもかしこもライトでビッカビカに見えるんだけど。最低でも透明コートと体力無限回復救急箱と荷電粒子バズーカは用意してくれるんだろうね？　じゃなきゃ無理だ」

「うるせえな。人は木綿の服と木の棒があれば大魔王とだって戦える生き物なんだよ」

ほとんどヘイヴィアに道案内される形でクウェンサーも動く。二人して、正面からではなく側面から大きく回り込むように闇の中を進んでいく。

莫大な光量で夜の砂漠の景色から切り離されたように見えるバリケード施設だが、それ故に、ライトに照らされている場所と照らされていない場所の落差は激しい。そして屋内施設ではないためか、ライトの数自体は多くても、その敷設は決して均等にくまなく行われている訳ではない。

平たく言えば、むらがある。

「（だからって本当に誰にも気づかれずに闇の中を進んでいけると思う？　目には見えないセンサーが大量に仕掛けてあったらどうすんのさ？）」

「（もちろん気は配るっつーの。だが知ってるか？　トラップってのは獣道には仕掛けねえもんだ。誰だって一晩中、猪だのウサギだの全く意味のねえ警報に付き合いたくはねえからな。あれだけあっちもこっちも急ピッチでバリケード展開準備を進めている中、辺り一面をデリケートなセンサーでガッチガチに固めてみろ。味方の足が引っかかりまくって警報だらけになっ

ちまうよ）」

そんなもんかね？　とクウェンサーは首をひねる。

毎度の事ではあるのだが、自分でも良く分かっていないものに命を預けなくてはならないのはなかなかにスリリングだった。ただ、ここまで敵地に近づいてからヘイヴィアに置き去りにされるのもそれはそれで困るのもまた事実だが。

「（砂漠じゃ足跡は隠せないよ）」

「（あっちもこっちも作業中だ。そこらじゅう足跡だらけだから問題ねえよ）」

と、最初の一歩を踏み出した時だった。

「……何だ？」

クウェンサーはゴーグルを額に上げたまま、怪訝そうな顔で周囲を見回した。

意識を集中しているのは、目ではなく耳だ。

「変な、唸りみたいな音が聞こえるぞ……？」

「っ!?」

直後に、ヘイヴィアは棒立ちのままのクウェンサーを思い切り突き飛ばした。自分自身も冷たい砂漠の上に身を伏せながら、ヘイヴィアは転がったクウェンサーに小声で注意を促す。

「（へい、この馬鹿！　今すぐ全部のセンサーを切れ、ゴーグルも双眼鏡も全部だ!!　爆乳が何か通信してきても絶対に応えるな。電波だろうが赤外線だろうが、何か飛ばした瞬間に

粉々にされちまうぞ!!）」

「（何が……？）」

「（寝ぼけてんじゃねえぞクウェンサー、この地響きってアレだろ。伝説のドラゴンでもねえ限り、こんな馬鹿デカいもんが移動している『副産物』なんて、アレ以外にゃありえねえ!!）」

「（……おいおい……!!）」

一瞬で、クウェンサーの全身から嫌な汗が噴き出す。

だが時間は待ってくれない。

彼は砂漠の上に倒れたまま、上着のポケットをまさぐった。中から電子温度計を取り出し、砂の表面へ突き刺す。

「（七・五度！）」

「（嘘だろオイ、さっきは六度だったぞ。くそ、そこらじゅうにライト浴びせてるから地表の温度が上がってんのか!?）」

小声で言い合いながら、クウェンサー達は別のポケットへ手を突っ込む。取り出したもの自体は特別なものではない。手首を捻挫した時などに使う、コールドスプレーだ。

電子温度計を軍服に突き刺したまま、クウェンサーは全身にスプレーを吹き付けていく。そう、ちょうど地表と同じ七・五度をキープするために。

「（急げ急げ急げ!!　『あいつ』のセンサーに捉えられたら一発で終わっちまうぞ!!）」

「（何でも良いけど本当に最新電子装備の塊を誤魔化せるんだろうな？　サーモ以外にも人間の位置探るセンサーなんて山ほどあるじゃん!!）」

「（聞いた話じゃ体温と電磁場の乱れを複合してモグラを見つけるタイプなんだろ。大量の砂鉄がある砂漠には不向きなはずだぜ!!）」

ゴオ!!　と、風が唸るような、空間がひしぐような音がクウェンサーの耳を叩く。

もはや指一本動かせなかった。

冷たい砂漠の空は、無数の星とほんのりと色づく月の光が広く薄く広がっているはずだった。その一角を、巨大な影が食い破るように埋めていく。人工物。超大型兵器。核の時代に終止符を打ち、今もなお最強の座をほしいままにしている戦争の代名詞。

オブジェクト。

『資本企業』軍の第一・五世代。

「……これも消えた諜報部門が残した最期の通信の通りだぜ」

心の底からうんざりしたような声で、

「『資本企業』から派遣された『ホーネットストーム』。他のオブジェクトと決定的に違って、大都市侵攻を目的として開発された悪魔の機体って話じゃねえか……」

オブジェクトを象徴する巨大な球体状本体を支えるように設置されているのは、エアクッション式の推進機関か。機体後部を覆うように、何か孔雀の羽を丸めたような巨大な金属板が何

【ホーネットストーム】
HORNET STORM

全長…75メートル

最高速度…[illegible]

装甲…2.[illegible]センチ[illegible]

[illegible]…大[illegible]攻用対人大[illegible]

分離…水[illegible]用[illegible]

運用者…『資本企業』

主砲…[illegible]

副砲…レーザービーム砲のみ

コードネーム…ホーネットストーム

[illegible]

HORNET STORM

枚も展開されていた。

しかし。

何よりこの『ホーネットストーム』が異彩を放っているのは、全く別のところにある。

「……主砲が存在しないオブジェクト」

クウェンサーが、思わずといった調子で呟いた。

「あるのは対人用の一〇〇門のレーザービーム砲だけ。それで他のオブジェクトと戦う時は、孔雀の羽を使って全レーザーを屈折・反射させて敵機の装甲へ一点集中させるんだっけか……」

元々、お姫様の乗る『ベイビーマグナム』なども、七門の主砲を分散、集中させる事で適時、敵機の逃げ道を封じ込め、その隙に一点集中攻撃を行えるようにはできている。

だが、ここまでピーキーに調整を施した機体も珍しいだろう。

あれでは分散、集中砲撃戦法のために、他の全てを削ぎ落としていると評価しても良いくらいだ。

「……あれはクリーンな戦争のために造られた兵器じゃねえ」

呻くようにヘイヴィアは言う。

「大都市に逃げ込んで大量の一般市民を盾に取った独裁者なんかを交渉の余地を与えず問答無用で殺すためのオブジェクトだ。人質なんて無視して街中に突っ込み、群衆の中に紛れたターゲットだけを正確にピックアップして一斉狙撃する現代の死神。あんなもんに一回でも捕捉さ

れたら検索エンジンに名前を入力する感覚で殺されちまう。対人特化なんて、まさに俺らにとっては天敵そのものじゃねえか……」

小型のレーザービーム砲と言っても、あくまでもオブジェクトのサイズと比較しての話だ。一発で戦車を飴細工のように溶かし、戦闘機を撃ち落としてしまうだけの破壊力は秘めている。一〇〇門の砲はいずれも五キロ圏の精密狙撃を可能とし、まともな遮蔽物を丸ごと貫いて標的を粉々にする。当然、光の速さで迫りくるレーザービーム砲を、生身の人間の動きで回避するのも不可能。

たったワンアクションで、一〇〇の敵兵が正確に精密に削り取られる。

それが数秒の冷却・再捕捉ラグを経て延々繰り返されたら？

どんなに人質をかき集めて隙間のない盾を作ったつもりでも、隙間を縫うようにターゲットだけが撃ち抜かれるとしたら？

人間側の反撃など、オブジェクトお得意の重装甲で丸ごと無視されたら？

……そんなものはもう戦いではなく、一方的に降り注ぐ天罰に等しい。その圧倒的な威圧感は、単に『遠い国の戦争』をしているだけの第二世代をある意味で凌駕する。究極的には、戦場も『安全国』も区別なく派遣可能なオブジェクトなど、未だにクリーンな戦争に反発し、街に潜むゲリラやテロリストにとっては悪夢のような存在だろう。

そのオブジェクトは。

機体を浮かばせるためのエアクッションを使って周囲の砂を舞い上げながら、悠々と戦場を横断していく。

全身から嫌な汗を流し、息さえ殺して命を繋げようとするクウェンサーやヘイヴィア、そして人工的なライトの光の中でバリケード展開作業を進めている『資本企業』の兵士達のすぐ近くを舐めるように移動していく。

闇の中で球体状本体に取り付けられた無数の砲台が小刻みに動き、照準用のセンサーが常に地表を走査していた。

食物連鎖の王。

逃げも隠れもせず、ただ獲物を探して世界を渡る者の歩み。

……その傲慢を目の当たりにしてなお、地を這うクウェンサーには『悔しい』と思う事すら許されない。ただ、時が流れるのを待つ。助かった、と。過去形でそれを話せる時がやってくるのを頭の中で夢想する事で、今すぐ叫んで走り出したくなる衝動を必死に抑え込む事くらいしかできない。

『ホーネットストーム』の、ゆっくりとした品定めのような移動は、五分ほど続いた。

それが通常通りの対応なのか、獲物を見つけるに至らなかったオブジェクトは急加速し、バリケード施設から離れていく。

息が詰まる。

その巨体が地平線の向こうに消えても、しばらくクウェンサーは起き上がれなかった。

「……ああやって、八ヵ所のバリケードを順番に見て回っているって訳だ」

「その通り。だが上の予想じゃ最高速度は時速五五〇キロオーバーって話だろ。どっかで警報が鳴りゃあすぐさま飛んでくる。こんなコールドスプレーなんていつまでも使える手じゃねえ。そもそも砂漠のど真ん中じゃ逃げ場もねえよ。感知された時が俺らの寿命が終わる時だぜ」

「ちなみに次の巡回は？」

「八ヵ所全部、みんながみんなあのパターンだとすりゃあ、一時間弱ってところか？　もちろん、俺らが警報を踏まなけりゃの話だが」

あんな怪物と、二度も会いたくはない。

クウェンサーとヘイヴィアは迅速に用件を済ませる事で意見を一致させる。

本番はこれからだ。

3

やるべき事だけなら簡単だ。

敵は『情報同盟』と『資本企業』の混成部隊。第二世代の『シンプルイズベスト』と第一・五世代の『ホーネットストーム』、さらには複数の可動式バリケード『EXウォール』でこち

らのオブジェクトの動きまで封じにかかってくる。

これら全てをお姫様の『ベイビーマグナム』だけで対処するのは骨が折れるため、クウェンサーやヘイヴィア達が秘密裡に可動式バリケードの通信施設へ侵入。ハードウェアに直接ウィルスを流し込む事で、激突の土壇場でバリケードの制御を乗っ取る。

可動式バリケードは敵側の混成部隊に混じって味方のふりをしているが、いざ激突の段になって『シンプルイズベスト』および『ホーネットストーム』の動きを阻害するために展開方式を切り替える。

通常であれば圧倒的火力によって難なく蹴散らせるだろうが、事はオブジェクト対オブジェクトの戦闘の真っ最中。一瞬の判断が戦争の趨勢を左右させる真剣勝負の最中に、『たった数秒』のラグは致命的な結果をもたらすはずだ。

第一優先目標は、『情報同盟』の『シンプルイズベスト』。

漁夫の利を狙う『資本企業』の『ホーネットストーム』は少しでも自分の不利を知れば速やかに撤退すると睨んでいるが、そうしない場合はお姫様が続けて第一・五世代の撃破に向かうだろう。

二機同時に攻め込まれるからこそ危険な状況なのであって、それぞれ個別に戦えるよう場をセッティングしてしまえば、お姫様にも十分勝機はある。

「……相変わらずものすげえ青写真だぜ。ホントにスパコンでシミュレートしてやがんのか？」

「青写真だけでも描けるくらいの希望は残っているって考えを切り替えた方が良いかもよ。嘆いたって事態は何も変わらないんだし」

ほとんど先行するヘイヴィアに誘導される形で、クウェンサーは月夜の砂漠を進んでいく。そこはもう『資本企業』の可動式バリケード施設の敷地内だ。

施設の目的自体は、大型トレーラーに似た可動式バリケードの展開と軍事ネットの接続なのだが、それ以外にも様々な建物や車両もたくさんあった。

「こいつら何でこんなに大所帯でやってきているんだ？　可動式って事は、バリケードの展開が終わったら俺達の整備基地に近づいてくるって事だろ。車両団はともかく、プレハブの宿舎なんて置いてきぼりにされるんじゃあ……？」

「オブジェクトの足元に絡めて動きを止めようってんだぜ。むしろ最前線から遠ざけられた方が安全だっつの。余計な荷物は戦闘が終わった後に回収すりゃ良いんだしよ」

ライトは多い。見張り台代わりのゴンドラ付きクレーン車には専用のスポットライトがあるし、辺りに停められている多くの車両のヘッドライトや、演劇や工事現場なんかで使う、大きなスタンドのついたハロゲンライトなどもあちこちに立っていた。

光の下に出るのは自殺行為だし、ライトの前を横切れば巨大な影ができてしまう。

しかし一方で、ライトの布陣は必ずしも均一で死角のないものではない。裏側に回って、闇に紛れるように進めば、強烈な逆光がクウェンサー達のシルエットを隠してくれる。膨大な光

や熱を生み出すライトは各種のセンサーを誤魔化すための一助にもなるだろう。
事実、一〇メートル以内に『資本企業』の敵兵がいる状況でも、ライトの裏側にいるクウェンサー達が見つかる事はない。
砂地の地面を踏み締めながら、クウェンサー達は小声で話し合う。
「ウィルスを流すって話だろ。問題の通信施設は？」
「あれだろ、五〇メートル先。プレハブの小屋がある。屋根にやたらとアンテナが突き立っているヤツだ」
「……あれもバリケードを動かして包囲網を縮める時には置いてきぼりにするのか？」
「別口の指揮管制装甲車だってあるだろ。系統はいくつも分けておいた方が、軍用ネットが寸断されるリスクも少なくなる。まあその分、窓口が増えて侵入ルートは増えちまう訳だが」
流石に通信施設は可動式バリケードの要であるためか、警備は厳重でライトも多い。ただ暗闇に紛れて歩いていけば辿り着ける、といったものではなかった。
ヘイヴィアはその近くにある、横一列に停車している軍用トラックの車列を指差して、
「おいクウェンサー、あそこに潜って近づこうぜ。馬鹿ヅラ下げて歩き回るよりゃ見つかりにくいだろ」
言うなり、彼はきめ細かい砂の上にうつ伏せになり、荷台の下へ横から滑り込む形で潜っていく。こうなるとクウェンサーには選択権はない。ほとんど見よう見まねに近い格好で、何が

正解の動き方なのか分からないまま軍用トラックの下へ這いずっていく。
デミグラスソースのような匂いが鼻についた。
「……くそったれめ。一体、荷台に何載せてやがる。敵のくせに良いもん喰ってやがるな」
「バリケードの敷設だけで一〇〇人以上が動いているって話でしょ。石鹸だのトイレットペーパーだのの補給にも忙しいのかもしれないね」
その時だった。
ザクザクと砂を踏む音が聞こえてきた。
一つだけではない。複数のものだ。トラックの下に潜り込んだクウェンサーの頬に嫌な汗が伝い、砂をへばりつかせる。
「(……三つ、四つ、いや五つか。ああくそ、ほとんど出たとこ勝負じゃねえか)」
ブツブツ言うヘイヴィアは、ホルスターから抜いた拳銃に消音用のサプレッサーを取りつけていた。クウェンサーは思わず目を剝く。
「(……異変に気づかれたら『ホーネットストーム』がすっ飛んでくるって話だろ!?)」
「(……俺だって使いたくて準備している訳じゃねえよ馬鹿!!)」
そうこうしている間にも、複数の軍靴は明確にこちらへ近づいてくる。音だけでなく、圧のようなものまで感じられる。単に軍用トラックの周りを歩いているのではない。どう考えても、彼らはこの軍用トラックを目指して移動している。

ヘイヴィアが車体下にある狭いスペースで軍用拳銃を構えようとしているのを見て、クウェンサーはとっさに両目を閉じてしまった。

しばらく待つ。

しかし何も起こらない。

「……？」

軍用トラックの扉が開閉される音が響いた。それから、ギシギシとベッドが軋むように車体が揺れる。ありえないとは思うが、クウェンサーは自分の体が押し潰されるかもしれないと思った。ここは硬いアスファルトの上ではなく、柔らかい砂の上なのだ。車体下のスペースが常に一定とは限らない。

そしてようやく気づく。

そんな事より、もっと率先して神経を尖らせるべき事柄がある事に。

「（……へい、へい、クウェンサー、この馬鹿！　呆けているんじゃねえ!!）」

「（……え、あ？）」

「（……連中はトラックに乗り込んだ。何故だ？　暇を弄んでのイモ臭せえカーセックスじゃねえ限り、このトラックを動かすために決まってんだろ!!）」

バルン!!　というエンジン音が響き渡った。

クウェンサーは排ガスの嫌な臭いを肺いっぱいに頂戴するが、咳き込もうとする本能的な

動きを必死に押し留める。

ここでトラックが発進してしまえば、下に隠れているクウェンサー達はバースデーケーキよりも注目を集める羽目になるだろう。

すでにヘイヴィアは這うような格好で、横並びに停車されている隣の軍用トラックへと移動を始めていた。

「(……早くしろ、クウェンサー！　間抜けが捕まると俺まで危機に立たされちまう。だから早く!!)」

「(……おいおいおい！　もうすぐ発進するんだろ。今、下手に動いたらタイヤに体を潰されないか!?)」

「(……コンビニレジ横にある『戦争のための善意の募金箱』とやらで大量購入された鉛弾使って、額の真ん中から足の指までくまなく蜂の巣にされるよりゃマシだろ。ビビってねえで早くしろ!!)」

ほとんど『マシな死に方』を選ぶような感じで、クウェンサーはヤケクソ気味の行動力を得る。ガタゴトと不気味に振動しているトラックの下から這い出て、数トンの荷重を一手に支えるタイヤのすぐ横を抜け、隣の軍用トラックへと逃げ延びる。

間一髪のところで、横一列の車列の端にあったトラックが走り出す。

だが安心はしていられない。

バルン!!　とエンジンをかける音が、再び真上から響いてきたからだ。

「（……何だ何だ、ちくしょう!?）」

「（……並べてあるトラックを順番に走らせる気だ。車両団を組んで砂漠を走らせるつもりなんじゃないのか!?）」

「（……何だよあれだけ美味そうなもん喰っててまだ足りねえっつーのか！　『貴族』の俺様だって食後のデザートなんざ期待できねえってのによ!!）」

次々と発進していこうとする軍用トラックに合わせて、白日の下にさらされては困るクウェンサーとヘイヴィアは、ゴロゴロと転がるような格好で次の車体の下へと潜り続けていく。

一〇台以上並んでいた軍用トラックは、二台を残してどこかへ行ってしまった。

「（……な、何だよくそ、やっと終わったか？）」

「（……いや、ちょっと待て……）」

トラックを運転する他にも、荷物や木箱などを積み込む手伝いをしていた兵士達もいたのだろう。彼らはバラバラと元の配置に戻っていく。

そんな中で、

「……ん？」

一人分の軍靴だけが、その場に留まった。

怪訝そうな顔をした後、こちらに踵を見せていたその軍靴が、一八〇度回る。爪先がこちら

を向く。地面は柔らかい砂地だ。軍用トラックが発進した後にはタイヤの跡が残るが、その他に、不自然に大きな塊が這いずるような跡があるのに気づいたのかもしれない。

屈むように、足が折れた。

車体の下を覗き込むように、同い年くらいの兵士がこちらに顔を見せたところで。

バシュ!!　ボスボス!!　と。

躊躇なく、ヘイヴィアはサプレッサーをつけた軍用拳銃で兵士の顔面を撃ち抜いた。

クウェンサーは思わず両手で自分の目元を覆った。

「(……何してんのさ自殺志願かアンタ!?)」

「(……うるせえ、放っておいても騒ぎになるのは変わらねえよ！　それよりクウェンサー、テメェは血だまりに砂を被せろ。俺は死体をこっち側に引きずり込む!!)」

「(……だったらせめて俺にも撃たせてほしいんだって。お前の尻拭いで大ピンチになっているのが何より許せないよ)」

心臓と違って、脳を狙った射撃はそれほど出血量は多くない。ヘイヴィアが小麦袋でも動かすように死体を車体の下へ隠すのを横目で見ながら、クウェンサーは指示通りに砂漠の砂を使って血の跡を隠していく。

「どっちみち車が動けばすぐ見つかっちまう。さっさとウィルス流してズラかろうぜ」

血まみれの手も気にせず、クウェンサーとヘイヴィアは軍用トラックの下から這い出ると、至近にある平屋のプレハブ小屋へと近づいた。砂の流入を防ぐためか、海の家のように床の位置は高くなっている。クウェンサーはその床下に潜り込んだ。扉の前に張り付いているヘイヴィアが、ライフルの先端から取り外した集音マイクをアンダースローでクウェンサーへ放り投げる。受け取ったクウェンサーは、そのマイクを真上にある床面へと押し付けた。

（……東を除く部屋の四隅に足音が一人分ずつ。あと、硬い音が一つ。これは椅子の脚か？　場所は中央付近）

必要な情報を手に入れたクウェンサーは、メモに大雑把な印をつけて、紙飛行機にしてヘイヴィアへ放り投げる。

確認したヘイヴィアは大振りの軍用ナイフの刃をプレハブ小屋のドアの隙間に突き込み、強引に鍵の構造自体を破壊してしまう。

軒下に潜っていたクウェンサーがドアの方まで戻るまで、十数秒。

小屋の中を覗き込んでみると、すでに内部はヘイヴィアの手で制圧されていた。

「……うへえ。あっちもこっちも血まみれだね」

「お茶の間に届けるつもりはねえよ。それより仕事の時間だクウェンサー」

軍用拳銃のマガジンを交換しながらヘイヴィアは言う。

プレハブ小屋の中には無秩序にテーブルが並べられていた。上には無数の電子機器が置かれていたが、『パソコン』と明確に分かるのは二台だけだった。他は、占いオーディオ機器なんだか無線マニアが電気街で追い駆けている幻の一品なんだか良く分からない機材が多い。

「あーあー、あっちもこっちもびっちゃびちゃ。まっかっかでどれが何の表示か読めないよ」

「文句言うなよ『学生』。これでも鉛弾で機械ぶっ壊さずに制圧するのに苦労したんだぜ」

クウェンサーはとりあえず専門的な無線装置は無視して、パソコンの形をしているものへと近づいていく。『正統王国』からはウィルスの入った切手大のチップを渡されていた。これを感染させれば彼らの仕事は終わる。

「あれ？　何これ、Shift どこにあるの？　こっちは Ctrl だよな……」

「『資本企業』式だろ、頭を切り替えろって」

「……ていうか、チップのスロット、ちゃんとついてるよね？」

顔を見合わせた後、慌てたようにパソコンの外周を見て回る馬鹿二人。幸い、使用メディアには共通性があるらしい。切手大のチップを差し込める小さなスロットは確かにあった。

「なあクウェンサー、テメェって専門的なハッキングとかできる訳？」

「そんなもんできたらもっと高給取れる部署に居座ってるよ。面倒な作業は全部プログラムがやってくれるってさ」

適当に嘯きながら、クウェンサーは慣れない『資本企業』式のキーを叩いていく。

「ええと、チップを挿し込んで、通常モードだと弾かれるからこれは無視。一度再起動。ファンクション連打でBIOSの画面を呼び出して、優先起動設定を外部メディア起動に切り替えて……」

「おい、あと何分だ？　兵士を殺したのは定時連絡の有無でバレちまう。さっさとズラかる準備しねえと」

「待て待て、これでもう一度……再起動！　よし出た!!　軍用セキュリティが噛む前にウィルスがシステムの上書きを始めたぞ。あとは放っておいても大丈夫だ！」

アクセスランプの点滅が切手大のチップから本体のＨＤＤの方へ移ったのを確認して、クウェンサーはチップをスロットから取り外す。

ドアを薄く開いて外の様子を確認していたヘイヴィアの傍へ近づいていく。

「あとは逃げるだけだ。脱出ルートは？」

「歩いて逃げるルートは駄目だな」

クウェンサーとヘイヴィアは、横一列に並んだ軍用トラックの車列の下に潜り込む形で監視の目をかいくぐっていた。しかし、そのトラックの車列は二台を残して、どこかへ移動してしまった。同じルートは使えない。

「じゃあどうすんの？」

「残りのトラックの荷台に潜り込もうぜ。あれだって一晩中ここで留守番している訳じゃねえ

だろ」

言うが早いか、ヘイヴィアは身を低くしたまま、幌で覆われた軍用トラックの荷台へと走っていく。後から続くクウェンサーは、ヘイヴィアに引っ張り上げられる形で荷台の中に潜り込んだ。

荷台の半分ほどは木箱で埋まっていたが、火気厳禁や振動注意など兵器にありがちな表示はない。

「ちくしょう……バナナに牛乳だってよ！　体に優しい朝食でも用意されてんのか!?」

「……その組み合わせにエロい何かを感じる俺ってちょっとカウンセラーに相談した方が良いのかなあ……？」

勝手に木箱を開けて、保冷容器の中から取り出した牛乳で喉を潤す馬鹿二人。

そのまましばらく待つ。

いくつかの足音が軍用トラックの方に近づいてきた。一つは運転席の方へ。二、三人分は荷台の方へ。木箱の陰に隠れていたヘイヴィアは、トラックの荷台へ彼らが完全に身を乗り上げたところで、軍用ナイフを使って静かに襲いかかる。

全員分の絶命を確認したクウェンサーは、トラックの運転席側へと近づいた。運転席と荷台を遮る金属板を、ゴンゴン、と二回ほどノックする。

積み込み完了の合図と勘違いした運転手が、滑らかな挙動で車を発進させた。

「……そろそろ真剣に議論しようぜ。俺とテメェの給料が同じなのは絶対におかしい」
「文句なら金を払っている人に言ってよ」
カタン、と。
同じ荷台の中から、不自然な音が聞こえたのはその時だった。
「っ⁉」
「っ‼」
とっさに身構えたものの特に何もできなかったクウェンサーを片手片足で足払いするような格好で倒しながら、ヘイヴィアはもう片方の手で軍用拳銃をホルスターから引き抜く。いくつか置かれた木箱の一つ、その陰から動きがあった。盾にできない、と考えたのか、正体不明の誰かも迅速にヘイヴィアを仕留めようとしたらしい。
一メートル以内の超至近で拳銃を突き付け合う二人は、そこで動きをふと動きを止めた。
ヘイヴィアの眉が怪訝に動く。
「あん？　何だそりゃ、『正統王国』の拳銃か？」
「……そっちも、『資本企業』じゃ……ない？」
戸惑ったような声をあげて（それでも銃を下ろさずに）木箱の陰から出てきたのは、クウェンサーよりもやや年上の、金髪碧眼の女性だった。
着ている軍服は彼らと迷彩のデザインが違うが、『正統王国』のフォーマットのもの。

肩には見覚えのないエンブレムが縫い止められていた。
何もできずに床に転がっていたクウェンサーが、ポツリと呟く。
「……そういえば、先行したまま消息を絶った諜報部門がいるとかって話なかったっけ？」

4

そろそろ兵士が殺されている事に、可動式バリケードの連中も気づいた頃かもしれない。だがすでに、クウェンサー達を乗せた軍用トラックは敷地の外へと出ていた。
適当に距離を稼いだところで、荷台のヘイヴィアは運転席に向けて何発か銃弾を撃ち込んだ。
あわや横転しかけた軍用トラックは、砂の丘へと激突する。
荷台から降りたヘイヴィアは運転席のドアを強引に開け、中の死体を砂の上へと引き摺り下ろした。
先ほどの金髪の女性は、両手で死体をまさぐって銃弾やレーションなどをかき集めていく。
「リサ＝ドービルだ。階級は少尉。今回は身内のヘマに付き合ってもらって助かるよ」
「……良く、あの状況で逃げ出せましたね。他の人間は？」
「残念ながら」
リサと名乗った諜報部門の兵士は短く言った。

クウェンサーは、詳しく聞こうとは思えなかった。取り調べなら整備基地ベースゾーンで専門の人間が行うだろう。今は一人でも生き残っていた事を喜ぶべきだ。

クウェンサーは親指で軍用トラックを指してから、

「一〇キロほど先に俺達の四駆があります。まずはそこまで向かって、車を乗り換えてから整備基地に向かいましょう」

「どうせ運転すんのは俺だがな。へい、クウェンサー！　助手席に回ってナビしろよ。ろくに仕事もしねえくせにナンパだけは一番乗りなんてなあ俺は認めねえぞ」

運転席のヘイヴィアがシフトレバーを操作し、砂の丘に突っ込んだ軍用トラックを引っこ抜くような形で、再び自由を得る。まだ完全に停まっていないトラックの助手席側に張り付いたクウェンサーは、ドアを開けて中へと転がり込んだ。

と。

追従してきた金髪碧眼のリサ＝ドービルが、そのままクウェンサーの膝の上に乗っかる形で、助手席へとさらに乗り込んできた。

もはやヘイヴィアは軍用ナイフを抜いていた。

「クウェンサーちゃーん!!」

「説明はこの人に求めてよ!!　（……いや嬉しいのは事実だけど）」

無骨な軍服を通しても感じられる、女性特有の柔らかいのとか温かいのとかに翻弄されなが

らクウェンサーは叫ぶ。

一方のリサは大して気にしている様子はないような口振りで、

「座席は二つしかない。荷台に押し込まれても協力できる事はない。運転席側に回っては邪魔になるだけだ。よって、私の居場所はこの助手席しかないだろう」

「今からでも場所替われクウェンサー!!　運転免許？　地平線の向こうまで砂漠しかねえんだ。アクセル踏んでハンドル回す頭だけありゃ誰でもできるっつーの!!」

最新式のセンサーで走査されてしまえば元も子もない事ではあるのだが、それでも、堂々とヘッドライトを点けて夜の砂漠を進むほどの度胸はない。

しかし以前にも言った通り、砂漠は平坦ではない。高低差数メートルの丘などいくらでもある。時間の止まった嵐の海の上を車で進んでいるようなものかもしれない。

そんな訳で、

「おおっ、おおおおっ、おおおっ。ゆ、揺れ、揺れる揺れる。おい少年、下でもぞもぞ動くな。さっきから尻に何か当たっているぞ」

「思春期を舐めるなよ士官候補生！　こちとら『女性のくびれのように見えなくもない大木』だけでエレベーター待ちの間のちょっとした小話ができるんだ。自分の意思で膝の上に乗っかった以上ある程度は覚悟してもらおうか!!」

「せめて地図を見ろよ馬鹿野郎ども!!　腹立つ！　てっ、テメェらっ、敵地潜入から人質救出

まで何でもござれな超天才美形富豪運動神経抜群大貴族ヘイヴィア様が涙と鼻水で顔をくっしゃくしゃにして周囲をドン引きさせても良いのか!!　良いのな!?」

そんな事を言われたところで、世の中には譲れないものがあるのだ。

割とアイスクリームの蓋の裏についているアレさえ譲れなかったりするクウェンサーとしては、運転席と助手席のポジションを変わるぐらいならプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を持ち出しても良いと考えていたりもする。ついでに言うとリサ＝ドービルが一人で運転席というポジションになったらそれはそれで嫌だ。舌を噛むに値する。

「あれ？　そうだヘイヴィア、ウィルスの感染報告と俺達の脱出ルートを整備基地とかお姫様とかに連絡しないと。可動式バリケードさえ乗っ取ってしまえば、『ベイビーマグナム』の攻勢を始められるんだろ。このトラックが巻き込まれないようにしないと」

「バーカ!!　んなもん感染した瞬間に敵のサーバーからうちの電子シミュレート部門に向けてログが飛んでるよ！　つーか！　俺は!!　両手でハンドル握ってる訳!!　新しい仕事を見つけたらテメエで手を動かせよ!!」

とはいえ、報告はしておくべきだ。

可動式バリケードは八ヵ所。その全てで危険な潜入作戦は同時進行していた。できるだけ早く感染報告が出れば、他の味方は危険な最深部到達への挑戦を破棄してさっさと帰還できる。あと、ないとは思うが同時に（あるいはクウェンサー達より遅れて）ウィルスを流し込んだ他

のグループが感染報告だけ先に出して、手柄を取られるなんて間抜けな展開も避けたい。
　という事で、クウェンサーは無線機を取り出そうとしたのだが、
「あれ？　くそ、届かない」
「丸太みたいに私を抱えているんだから当然だ。無線機か？　私のポケットのを使うと良い。チェストポーチの中だ」
「んぐ……胸の辺り……これですか？　あれ？　なんか柔らかい……」
「おいよせそれはっ！　どこを触っている、いやそれを私に言わせるつもりか!?」
『……もーこのトラック今すぐ縦に真っ二つになってバイクみてえに独立しねえかな』などとブツブツ呟いている運転席のヘイヴィアは放っておいて、クウェンサーは四苦八苦しながら、時折身をよじるような動作をするリサの軍服からようやく無線機を抜き取る。
　二人羽織みたいな状況で周波数を合わせて、無線暗号用のキーを数値入力。作戦行動用の帯域を確保すると、背中側に流れるリサの金髪に顔を埋めるような格好で、クウェンサーは無線機に口を寄せる。
「こちらA班、状況終了。ウィルスの内部感染を確認。俺達は、えーと……」
「ルート32、ライトなしの『資本企業』製スチールファーザー八トン車。オブジェクトで誤射しねえように気をつけろと言っとけ」
　うんざりした調子で言うヘイヴィアの助言を、そのまま復唱しようとするクウェンサー。

「えーと、ルート32……」

その時だった。

割り込むように通信が入ってきた。八ヵ所ある可動式バリケード施設の内、クウェンサー以外の場所へ潜入していた別働隊からだ。

『最悪だっ、くそ！　本部、聞こえているか!?　返事をしてくれ!!』

『本部よりF班。通信状態は良好だ。問題があるとすれば貴君の言語能力によるものだろう。平たく言えば落ち着け』

『落ち着いていられるか！　ちくしょう、何だっていうんだ、何がどうなって……』

クウェンサーとヘイヴィアは思わず顔を見合わせた。それから、クウェンサーの膝の上に乗っていたリサ＝ドービルが、片手でヘイヴィアの顔を前へ向け直す。

（……どっかの部隊がヘマして敵に見つかったか？）

すでに目的のウィルスは『資本企業』の軍事ネットに流してある。これ以上の危険な潜入任務に意味はない。下手な無駄死にをさせないよう、クウェンサーは改めて無線機を掴み直そうとする。

その動きが、止まる。

どこか別の可動式バリケード施設を攻めていたF班は、こう報告したのだ。

『連絡途絶の諜報部門を発見。数も数えた、全員だ！　全員死亡!!　ちくしょうが、ヤツら捕らえた兵士を一ヵ所に集めてから「調理」しやがったんだ……。戦争条約無視して捕虜を拷問しやがって!!』

クウェンサーの背筋に、ゾワリとしたものが走り抜けた。

今まで膝の上に乗せていたものが、可愛らしい子猫などではなく得体のしれない肉食獣だった、と後になってから聞かされるような……。

直後に、ヘイヴィアはブレーキペダルを全力で踏みつけた。

がくんっ!!　と何かに引っかかるように軍用トラックが急停車する中、ヘイヴィアはホルスターから拳銃を引き抜く。

しかし。

ヘイヴィアが狙いを定めるより前に、すでにリサ＝ドービルは手にした軍用拳銃を彼のこめかみへ正確に突き付けていた。

クウェンサーやヘイヴィアと違い、シートベルトに守られている訳でもなく、ともすればフロントガラスを突き破って車外に飛び出していてもおかしくないほどの衝撃にさらされていたにも拘らず、だ。

「……何なんだ、アンタ……？」

半ば呆然としたように、ヘイヴィアはそう言った。

技量は明らかにリサの方が上。それを肌で感じ取っているのだろう、ヘイヴィアの顔から嫌な汗が噴き出している。

リサは自分が尻に敷いているクウェンサーについては気にしている素振りすらない。何か動きがあれば即座に無力化できると考えているに違いない。

「F班からは諜報部門は死体で見つかったって報告があった。数も数えたって言ってやがった。だったらテメェは!?　一体どこの誰なんだ!?」

「私は『正統王国』軍の人間だ。名前も階級も偽ってはいない」

「ハッ、本気で言ってやがるのか？　やましい事がなけりゃあ、俺らに話を合わせて同行する必要なんかなかったはずだぜ。流れに合わせたのはテメェが抱えている情報を俺らの前に出したくなかったからだ。違うか!?」

「どうせ軍のデータベースと照合したって私の情報は出てこない。そういう性質の部隊に所属していたんだ！　あの場面で頓着していれば可動式バリケードを守る『資本企業』だの『情報同盟』だのに見つかっていた。安全な場所まで退避してから事情を話すつもりだった!!」

「だったら!!　そいつは一体何なんだ!?」

「私は、私の所属する部隊は……っ!!」

わなわなと震えながらリサが……そう名乗る金髪碧眼の女がさらに唇を動かそうとした時だ

った。

ゴッ!!!!!!　と。

軍用トラックの間近に、巨大な砲弾が落ちた。

クウェンサーから見て左手側からだった。

凄まじい衝撃が襲いかかる。

ドア側の強化ガラスが一瞬で砕け散った。と思ったら、ドア自体が外れた。鋼鉄の塊に防弾装備まで施した重たい軍用トラックが、ぶわりと宙に浮く。何の冗談でもなく、空中で二回は横に回転した。タイヤの側から砂地に着地したが、勢いを殺し切れず、結局は横転してしまう。

「げっ、ぼ!?」

ほとんどシートベルトに吊られるような形になり、クウェンサーの息が詰まる。首を絞められているのではなく、肋骨や肺を圧迫されているような苦痛だ。

「な、にが……」

ビキリ!!　と、何かが割れるような甲高い音が響き渡った。ぐらぐらと揺れる視界に意識を集中させると、リサ＝ドービルが足でフロントガラスを叩き割っているのが分かった。彼女はしなやかな体を折り曲げ、開いた穴から夜の砂漠へと身を乗り出していく。

「待ち、やがれ……っ!!」

同じようにフロントガラスを割ったヘイヴィアが、外へと躍り出ていく。一人残されたクウェンサーだけが、シートベルトと格闘を継続する羽目になった。

「く、そ……そもそも何が起きたんだ!?」

変に荷重がかかっているせいか、ボタンを押してもシートベルトは外れない。クウェンサーは自分の軍服を両手でまさぐり、サバイバルキットを収めたケースを取り出す。中には調理用の小さなナイフがあったはずだ。

(爆発……砲弾……砲撃!? このトラックを狙った訳じゃない。かといって、こんなだだっ広い砂漠に、他に標的になるようなものがあるとも思えない。っていう事は、流れ弾? どこの誰が!? いや……まさか……っ!!)

直後に答えが来た。

ザザザザザッ!! と。

横倒しになったトラックの正面を、何か巨大な影が通過する。数メートル大の砂の丘などそのまま地均ししてしまいそうなスケール。鋼と兵器の塊。莫大な軍事予算を全て一点に結集して建造したような、戦争の象徴。

オブジェクト。

「お姫様か……っ!!」

『ベイビーマグナム』だけではない。その巨体は、ボクシングや総合格闘技の選手が小刻みにステップを踏むように、生物的な動きで右へ左へ絶えず移動を続けている。あれは回避挙動だ。そしてオブジェクトが被弾を恐れるような相手もまた、自ずと決まっている。

もう一つ。

まるで数百メートル単位で苛烈なダンスを踊るように、夜の砂漠を高速で移動する巨大な影がある。

『資本企業』からの増援。

第一・五世代を標榜する、主砲を持たない大都市侵攻用オブジェクト。

「……『ホーネットストーム』……」

ものによっては一〇キロ先からでも平気で主砲を当てにくるオブジェクトにとって、七、八〇〇メートル程度の距離は極接近戦と表現しても良いくらいだ。

そこまで考えて、クウェンサーはハッと我に返った。

「俺もそのリングの上に上がっているんだってば!!」

慌てたようにサバイバルキットの中から調理用のナイフを取り出したクウェンサーだったが、結局、使う機会には恵まれなかった。

その前に。

夜の砂漠の、黒い闇が引き裂かれた。

攻撃そのものではなく、空気中を舞う砂塵や水分などが瞬間的に焼けた残像が目に映っているのだろう。数十本もの細いオレンジ色の光線が束ねられ、クウェンサーがもがく軍用トラックの近くへ落ちるのが分かった。

地面の着弾地点から、溶接のように凄まじい光が迸る。

しかし、突発的な頭痛に文句を言っている暇もなかった。蓄積した莫大な熱が周囲の空気を一気に膨張させたのか、ゴッ!! と、爆風に似た現象が軍用トラックをまともに叩いた。ただでさえ横倒しになっていた八トントラックが、さらにゴロゴロと風に吹かれるペットボトルのように転がる。シートベルトの金具が耐えられなくなったのか、バギリという音と共にクウェンサーはいきなり拘束を解かれた。運転席側のドアへとそのまま叩きつけられる。

「ぐぶっ……!! ち、くしょ……」

トラックはまたもや横倒しになっていた。割れたフロントガラスから、クウェンサーは這うような格好で外へ出る。

こうしている今も二機のオブジェクトは小刻みな回避挙動を繰り返しながら大規模な砲撃を続けている。

直接戦闘のきっかけが何だったのかは不明だ。

クウェンサー達がウィルスの感染報告を出す前に、『正統王国』の電子シミュレート部門がそれを知って『ベイビーマグナム』の出撃を決定したか、あるいは『ホーネットストーム』の

方が整備基地ベースゾーンに近づき過ぎたせいで、『ベイビーマグナム』が勝算の読めない中でスクランブル発進をしてしまったのか。

いずれにしても、

（……おいおいおい!!　本命はあくまでも超遠距離から突撃の機会を窺っている『シンプルイズベスト』の方だろう。この局面でヤツに超音速で突っ込まれたら、お姫様は二対一の多面同時攻撃を受けてしまう……。バリケードの制御を乗っ取ったくらいで切り抜けられる状況なのか、これって!?）

そもそも、『正統王国』の計画では、まず突撃してくる『シンプルイズベスト』を乗っ取った可動式バリケードで足止めし、その間に『ベイビーマグナム』の手で撃破。続く『ホーネットストーム』の様子を窺い、交戦必須と判断した場合は個別に撃破……となっていたはずだ。

いきなり構図が壊れている。

一対一を二回繰り返すのと、二対一をまとめて強いられるのは事情が違う。

「……とにかく……呆けていても仕方ない。まずは情報だ。フローレイティアさんとでも連絡をつけて、何かできる事を探さないと……」

ともすると体中を襲う激痛に呑まれて意識を手放しかねない状態だった。きめ細かく凍えるように冷たい砂の大地に突っ伏したまま、クウェンサーは小型の無線機を取り出す。

その時だった。

新たな動きがあった。

先に逃げたリサ＝ドービルと、彼女を追ったヘイヴィア。彼ら二人が、来た道を引き返すように、横倒しになった軍用トラックの方へと駆けてきたのだ。

「……？」

倒れたまま、しかしクウェンサーは警戒する。

この遮蔽物のない夜の砂漠で、追う側と追われる側が一八〇度向きを変えるなんていうのは珍しい。何かがあった、と判断するほどには。例えば、何かの理由で銃を失ったヘイヴィアを、逆にリサが追い回し始めた、などだ。

（……でもヘイヴィアの武器は拳銃だけじゃない。弾詰まりを起こそうが映画の悪党みたいに銃だけ撃ち抜かれようが、アサルトライフルに持ち替えれば良いだけなんじゃあ……？）

細かく考えている暇はない。

リサ＝ドービルが何者かは知らないが、敵性人物である可能性は高いのだ。

全身を走る緊張に従うように、プラスチック爆弾の『ハンドアックス』とボールペン状の電気信管を取り出したクウェンサーだったが……予想はあっさりと裏切られた。

ヘイヴィアはクウェンサーの真横を全力で駆け抜けたのだ。

通り過ぎる直前、慌てたように彼は悪友にこう叫んだ。

「ばかっ、この野郎!!　いつまで間の抜けた事やってやがんだ情報弱者か!?」

「……？」

二機のオブジェクトが暴れ回っているので、ひとまず退避する方向で意見を一致させたのか。

それはある意味で正しく、ある意味で間違っていた。

数秒経って、ようやくクウェンサーはヘイヴィアやリサが何から逃げていたのかを把握した。

地面が。

消えていた。

一〇〇メートルか、もっと手前か。まるで得体のしれない砂の滝のように、次々と地面が奈落の底へと消えていく。その領域はどんどん拡大していく。クウェンサーが寝ている方へと近づいてくる。

「な、何だぁ……!?」

「知るか。砂漠の地下に何かあったんだろう。そいつがオブジェクト同士のケンカに巻き込まれて崩れたんだ!!」

意外にも、質問に答えたのはリサ＝ドービルだった。

それどころか、金髪碧眼の美女はクウェンサーの目の前で立ち止まり、夜の砂漠に倒れているクウェンサーの腕を掴んだ。強引に立ち上がらせる。

「足は挫いていないな？　流石にこの状況で君を担いで地面の崩落からは逃げ切れない。巻き込まれたくなかったら走れ！　今すぐだ!!」

訳が分からないままクウェンサーはリサと一緒に後退していく。

ゾゾゾゾザザザ!!　と、きめ細かい砂の崩落はまだまだ続く。巻き込まれたらどこまで落ちるかは分からない。数メートル程度の高さではないのは間違いない。

「何なんですかあれ!?　天然の洞窟が広がっていたとか!?」

「知らないと言っただろう！　あるいは人工物かもしれない。今は拘泥している場合じゃない!!」

「くそ、足元に埋まっているのはタングステンって話じゃなかったのか!?」

「何の話をしている!?」

きめ細かい砂が一面に広がる砂漠では、細かい地形図や等高線に意味はない。何度も『嵐の海のようだ』と表現している通り、強い風などで絶えず地形を変えているからだ。数メートル大の丘くらいなら簡単に形成する。ひょっとしたら、何かの倉庫や工場跡地のようなものがまとめて砂の下に隠れていたのかもしれない。

「ヘイヴィア、待てこの馬鹿！　一人で逃げるなー!!」

「うるっせえ!!　天罰だ天罰！　イチャイチャ罪で死刑！　クールでストイックな俺様まで巻き込むんじゃねえ!!」

薄情者の背中は遠い。

その時、『崩落』の向こうで砲撃を繰り返していた二機のオブジェクトから、恐るべき流れ弾が飛んできた。逃走経路とは無関係な真横の地面、それも三〇〇メートル以上は離れた場所に砲弾は落ちたが、それでもクウェンサーの体がまともに浮かび上がった。一瞬で呼吸困難に陥る。ゴロゴロと地面を転がるクウェンサーを、またもや何故かリサ＝ドービルが拾い上げようとした。

それが災いした。

『崩落』の顎に追い着かれた。地面の感覚が消失する。垂直の滝というより、急角度のウォータースライダーを滑り落ちるようなものに近い。クウェンサーとリサの二人は、容赦なく光の届かない奈落へと落とされていく。

5

意識が断絶していた。

よって、クウェンサーには時間の経過は分からなかった。

「ぐ……っ」

呻き声をあげて、額に手を当てる。一体どれくらいの高さから落ちたのか。どこかの床のよ

うな場所に寝かされているにも拘らず、バランス感覚が安定しない。ぐらぐらと揺れる小舟の上に乗っているような感覚だった。吐き気も酷い。

自分のゲロで窒息するつもりはないクウェンサーは、痛む頭を無視して無理矢理に身を起こした。

リサ＝ドービルは軍服の上を脱いで、濡れたタオルのようなもので自分の腋を拭いていた。

「……ん？」

「ひやァァァあああああああ

「頭を打ったようだな。レーションに余裕があるなら全部吐き出してから栄養補給した方が体調は安定するだろう。一応、内容物に血が混じっていないかどうかだけ確認しろ」

「あ、アンタは……」

ほとんど反射的にプラスチック爆弾に手を伸ばそうとするクウェンサーは、そこで怪訝に思った。武装が没収されていない。

「……一体、どこの誰なんだ？　何であの土壇場で、俺を助けようとした」

「リサ＝ドービル。『正統王国』軍所属の少尉。いずれも間違っていない。なら、自軍の兵士を助けるのに理由はいらないだろう。むしろ見捨てるとのちのち面倒になる」

彼女は兵士と呼んだ。クウェンサーが戦地派遣留学生である事は知らないようだ。

もちろん彼の所属する第三七機動整備大隊は一〇〇〇人規模の大所帯なので、みんながみんなクウェンサーの事を知っている訳ではない。クウェンサーだって顔も名前も知らない兵士がたくさんいる。これだけで判断するのは早計だろうが……。

「ただ、君とは所属する部隊がちょっと違う。軍のデータベースには一般登録されていない。一定以上の閲覧権限があれば話は別だが、今この状況で私は自分の身分を証明する手段を持っていないんだ」

「その胡散臭い話を信じるのは、ＵＦＯ開発部隊の存在だって疑わないヤツくらいだろうさ」

「良く言われるよ」

言いながら、リサ＝ドービルは肩をすくめた。折れた柱のようなものに背中を預けるように座り直す。改めてクウェンサーが周囲を見回すと、砂の流入が激しく天井が完全になくなっているものの、ここは何か巨大な倉庫のような場所だった。

「七月・インド洋西側海域、一〇月・グリーンランド海地下資源採掘プラント群、一二月・アラスカ方面、一月・南大西洋方面」

「？」

「……仮にも軍人だろう？　負け戦となった戦地くらい暗記していないのか」

「それが一体……？」

「私の職場だよ」

リサは体を拭くのにも使っていたものだろう、水筒を手に取ると、飲み口に唇をつけて一口飲んでから、そんな事を言った。

「……私の任務はね、このオセアニアに絵具を持ち込む事だったんだ」

人道支援の目的で、教材や画材、絵本なんかを戦地に運ぶ『平和な作戦』の話はクウェンサーも聞いた事がある。

しかしリサ＝ドービルが言っているのは、それとは全く違った。

「ストークキラー部隊。私の仕事は、言ってみれば撤退戦のエキスパートってところかな。負け戦が確定すると、その戦場に私みたいなのが秘密裡に送られる。目的は、オブジェクト絡み

の重要なテクノロジーや、お偉い高官・操縦士エリートなんかが敵軍に捕らえられるのを阻止する事。つまり、味方を選んで脱出させる、胸糞悪い汚れ仕事ってヤツなんだ」

吐き捨てるような口調だった。

それを聞いたクウェンサーは、思わず眉をひそめる。

「……撤退戦？　今はオブジェクトによるクリーンな戦争の時代だろ。戦争は全部オブジェクトとオブジェクトのぶつかり合いに任せて、それで白黒ついたら『白旗』の信号を出して戦場を去る。そんな時代に撤退戦専門の部隊なんて必要ないはずだ」

「本気で言っているとしたら青いな少年。現実の戦争なんていうのは、往々にして理性が焼き切れるようにできているものだ。オートメーションで組み上げられる家電の中に、一定割合で不良品が混じってしまうようにな」

「……」

言われてみれば、アラスカ方面で『ウォータースライダー』に追われた時もそうだった。『白旗』の信号なんていうのは、敵味方の相互信頼がなければ成立しない。そしてクウェンサー達がやっているのは、言うまでもなく戦争だ。

「追っ手は撒かなくちゃならない。ただ足跡を消せば良いって訳でもない。撤退戦では大量の罠を張ってハンターの足を潰す。ぶっちゃけ、廃墟となった一つの街を横断する時には一〇〇〇個から二〇〇〇個くらいの爆弾を設置して逃げる。それも、誰の目にも見えるように設置し

たんじゃ意味がない。……だから『絵具』がいるんだ」

「カムフラージュの、ために……？」

クウェンサーは普段、自分が良く使うプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出した。ヘラで形を整えて絵具で色を塗れば、煉瓦にもブロック塀の一部にも、路上の石ころにも、割れたアスファルトにも、発泡スチロールにもできるだろう。状況に合わせて影や汚れを足していけば、高精度カメラで撮影したって風景の中に溶け込んでしまうかもしれない。こうなってしまえばテレビや映画の小道具と同じだ。飴で作ったビール瓶や食紅と包帯で作った傷口と同じように、間近に設置された爆弾の存在には誰も気づかない。

実際に爆発するその時まで、疑いすらしない。

リサ＝ドービルは重たい息を吐いて、

「……間抜けな『貴族』サマが、人気取りのためにオセアニアへ電撃訪問を仕掛けた。情報はしっかり筒抜けで、地元のゲリラなんだかそういう風に偽装した『情報同盟』の兵隊なんだか良く分からん連中に包囲された。私達ストークキラー部隊は、いつも通りに地獄の現場へ派遣された。隊を束ねるリーダーは、まともな方法じゃ逃げ切るのは難しいから、入り組んだ市街地を通って最寄りのオブジェクト整備基地へと逃げ込もうなんて言い出した。……当然、追っ手を撒くために大量の罠や爆弾を設置する形で、だ」

「まさか……」

「私はやめようと進言したんだ」

くしゃりと。

金色の前髪を掴むように、リサは片手で頭を抱える。

「トラップは効果的だ。だが引っかかる人間を選べない。戦災復興の最中と言っても、街には活気が戻っていた。少しでも珍しいもの、金になりそうなものなら何でも拾って売り歩くのが、街で生きる人達の鉄則だった。こんな中で、風景へ完璧に溶け込むような爆弾を一〇〇〇個も二〇〇〇個も敷設したら何が起こるかなんて目に見えている。ようやく笑顔を取り戻しかけていた街は流血と絶叫に沈む。本当の敵はのた打ち回る被害者を踏み越えて、爆弾のなくなった道を安全に追ってくるだけだ。……だから、無意味な事はやめようって……」

その非人道的な撤退戦は決行され、成功したのか。

一瞬、そんな事を考えたクウェンサーだったが、そこで自分の意見を否定した。

だとすれば、リサ＝ドービルが一人でこんな所にいるはずがない。

「……何がきっかけだったかはもう覚えていない。だが私達の言い争いは一線を越えた。誓って言うが、先に銃を抜いたのはリーダーの方だった」

しかし、現に生き残っているのはリサの方だ。

彼女の言い分が正しければ……どれだけの『味方』に取り囲まれた絶望的状況だったかは知らないが、彼女は悪夢のような銃撃戦を制した事になる。

その行いに、分かりやすい利害があった訳ではない。

『正統王国』お得意の、名誉が絡んでいた訳でもない。

リサ＝ドービルはただ部隊の暴走を防ぎ、本来ならば絶対に失われるべきでない大量の民間人を守り抜こうとしただけだった。

そのために、何度も背中を預けた味方まで撃ち殺した。

「だったら、何でアンタは『資本企業』の可動式バリケード施設なんかに潜り込んでいたんだ？　それじゃ辻褄が合わない」

「私が潜り込んだんじゃない。『正統王国』軍の基地へ出頭するために砂漠を進んでいた私の前に、ヤツらが先回りするように部隊を展開し始めたんだ。……それを言うなら、君達の整備大隊についても似たようなものだろうがな」

「……？」

「君が言った通り、今はクリーンな戦争の時代だ。『白旗』を無視した非人道的作戦を恒常的に展開しているのがバレたら困る人間だっているだろう。一方で、口ではクリーンな戦争などと嘯いておきながら、実際には保身のために撤退戦専門の部隊なんて運用していた事がバレたら困る軍上層部だっている。自分自身でクリーンな戦争なんて嘘っぱちだと認めるようなものだからな。結局、私は敵からも味方からも不要な人間になってしまった訳だ」

敵は『情報同盟』や『資本企業』。

味方は『正統王国』。

「戦争の構造そのものに対する矛盾。私はその象徴だ。挙げ句、軍から離れた制御不能な動きを見せた事で、上層部を震え上がらせたらしい。おかげで、彼らはどんな手を使ってでも私を殺す事にしたようだ。……私が殺された事で、私の抱えていたものがクローズアップされないよう形式を整えた上で」

つまり。

リサ＝ドービルが言っているのは……、

「ここにバリケードの『EXウォール』が展開されたのも、今夜このタイミングで戦争が始まったのも、ただの布石？　『大きな流れ』の一つに過ぎなかった……？」

呆然と。

クウェンサーは呟いていた。

「全ては、アンタ一人を暗殺するためだっていうのか？　単に『ベイビーマグナム』だけじゃない。『シンプルイズベスト』や『ホーネットストーム』まで入れれば、合計三機ものオブジェクトが派遣されているこの戦争全体が、たった一人の脱走兵を確実に仕留めるためだけにゴーサインが出されているだって!?」

三機もあれば大規模な戦争が起こせるレベルの大戦力になる。

彼女の意見は、たった一人の個人を殺害するために、一国を核兵器で攻撃すると言っている

ようなものだ。

「現場で指揮を執っている基地司令官クラスの思惑じゃない。もっと大きなパワーバランスに直接関与できる人間じゃないと、複数の世界的勢力のいがみ合いを演出するのは不可能だ。現場の司令官達は戦場に私という本当のターゲットが紛れている事すら把握できていないまま、何も知らずに上っ面の任務を消化しているだろう。だから『顔が見える範囲の上官』に君が不審を抱くのは間違いだ。その行為には意味がない」

……暗に、お姫様やフローレイティアを庇うような言動だった。

クウェンサーとしても、彼女達がこの手の陰謀に率先して関わるタイプとは思っていないが……。

「どうすれば良いんだ……」

クウェンサーは呻くように呟いた。

「……軍のデータベースにも載せられないような撤退戦専門の部隊の生き残りだって。そいつ一人を殺すために、三機ものオブジェクトが戦線投入されている？　ふざけている。そんな中でちっぽけな生身の人間が生き残れる方法なんてどこにあるんだ……？」

「自分で言うのもなんだが。こんな話を、信じる気になったのか？」

「客観的な証拠なんて何もない」

吐き捨てるように、クウェンサーは即答する。

その上で、

「……でも、『崩落』の土壇場でアンタが俺に手を差し伸べたのは演技じゃなかった。ヘイヴィアさえ見捨てるような状況でも。アンタが単に『資本企業』だの『情報同盟』だのの兵隊が味方に化けているだけだったら、あそこであんな行動を取る必要はなかったはずだ」

そうか、とリサは口の中で呟いた。

ズズン……ッ!!　と、地下構造自体が不気味に震動したのはその時だった。

地上では、こうしている今もオブジェクト同士の死闘が継続しているのだ。

「アンタの真偽については、無事に整備基地ベースゾーンまで辿り着いてからゆっくり調べれば良い。問題はこのどうしようもない乱戦をどう切り抜けるかだ!!　『ベイビーマグナム』はこうしている間にも『ホーネットストーム』と交戦を続けている。このアドバンテージを有効に使うため、すぐにでも『シンプルイズベスト』が音速超えで突撃してきてしまう！　そうなったらもうおしまいだ。うちのお姫様が二面同時攻撃に耐えられるとは思えないし、お姫様がやられてしまえば、どこかの誰かの思惑通りに全てを吹き飛ばされる！　俺も、アンタも！　今回の戦闘に動員された整備基地の連中も、みんながみんなだ!!」

「……」

リサ＝ドービルはわずかに沈黙し、何かを思案していた。

だが、すぐに顔を上げる。

「……いいや、まだ終わらない。こんな形で終わらせてたまるか」
「おい……？」
「ついてこい。何はともあれ、まずはこの地下構造体から地上へ抜け出さない事にはどうしようもないだろう」
さっさと先に進んでしまうリサに導かれるように、クウェンサーも正体不明の廃施設の中を歩いていく。
ざっと見ても三〇〇メートル以上ある巨大な空間だった。
「何かの備蓄基地だろうな。旧軍政時代の遺跡かもしれない」
リサ＝ドービルはそんな事を言いながら、ライトもなしに砂の降り注ぐ廃施設を横断していく。しばらく進むと四角い通路があり、そこを抜けると、今度は上に向かう錆びたらせん階段にぶつかった。
踏み抜かないよう慎重に階段を上っていく。
地上まで出たところで、ようやくクウェンサーはここがどこなのかを把握した。
「これ……砂漠を縦断するパイプラインの……」
「かつては大深度地下の未使用水脈から大量の水を汲み上げて食料基地へ送り出すためのターミナル施設だったようだな。言ってみれば、ものすごく乱暴でものすごく大規模な井戸のようなものだ。ヤツら、いくら砂漠とはいえ地盤沈下が怖くはなかったのか……？」

こちらもあちこちボロボロに錆びていて、天井も一部が抜け落ちている。幽霊が出る、などとヘイヴィアは冗談めかして言っていたが、こんな所にいたらいつ自然倒壊に巻き込まれるか分かったものではない。『幽霊量産装置』としてだけなら、あながち間違ってもいないかもしれなかった。

廃施設の外まで出てみると、夜の砂漠に大量の砂煙が立ち上っているのが見えた。

五〇〇から七〇〇メートルほど先だ。

「……あれだ。『ベイビーマグナム』と『ホーネットストーム』!!」

「今にもう一機……何だったか。『シンプルイズベスト』とかいうのもやってくるんだろう?」

ザザッ!! とクウェンサーの無線機がノイズを発したのはその時だった。

フローレイティアの叫び声が届く。

『「シンプルイズベスト」の本格駆動を確認! ルート09から37を一気に南下してくるぞ!! 計算が正しければお姫様への到達まで三分弱!! 間にいる全兵士は巻き込まれないよう気をつけろ!!』

「……始まってしまう……」

呆然と、クウェンサーは呟いた。

『「ホーネットストーム」と『シンプルイズベスト』、二面同時攻撃になったらもうおしまいだ! くそ、お姫様を支援しようにも、連中の弱点どころかまともな情報すらないっていうのに!!」

「……」

そこで、リサ＝ドービルが妙な動きをした。

彼女はその場で屈むと、軍服のズボンの足首の所から何かを引き抜いたのだ。

掌に収まる小型拳銃やナイフなどではない。

そもそもオブジェクトが激突する局面において、そんなものを取り出しても意味がない。

リサが手にしているのは、太さは硬貨ほど、長さはボールペンほどの、円筒だった。

「……少年、合図はいらない。今すぐにも、全力で、ここから立ち去れ。できるだけ私から距離を取るように、だ」

「何を……」

「言ったはずだ」

硬さの混じる声で、リサ＝ドービルは円筒から蓋のようなものを取り外した。違う。その円筒は『容器』ではない。故に蓋という表現は正確ではない。

正しくは、擦過面。

あるいは、着火用具とでも呼ぶべきか。

「今回の戦闘行動は、全て表に出せない私を確実に仕留めるための、『巻き込ませるための』戦いだ。現場で動いている人間はそうとは知らないだろうが、真のターゲットが顔を出したと分かれば、もっともっと上にいる腹黒い連中は率先してソレを狙うよう巧妙に指示を変えるは

ずだ。……つまり、私を狙わせれば二面同時攻撃の構造は崩れる!!」

ガツッ!!　という硬い音が響き渡った。

それと同時に、赤い、そう、花火のように不自然に赤い炎が、円筒の先端から飛び出た。今は夜なので分かりにくいが、おそらくケミカルに色づけされた煙も大量に噴き出しているはずだ。

「発煙筒!?　馬鹿野郎、こんな場面で使ったら……!!」

「馬鹿は君の方だ!!　いいか、今からでも遅くはない、少しでも私から離れろ!!　今すぐにだ!!　それで君は助かる!!」

叫ぶだけ叫ぶと、リサ＝ドービルは自分からオブジェクトの争う激戦区に近づくように走り出してしまった。

クウェンサーにはどうしようもなかった。

軍用衛星でも、オブジェクトのセンサー群でも、ひょっとしたら周囲の闇に紛れているかもしれない兵士達の銃器に取り付けられたセンサーでも、発煙筒の熱と光は正確に捉えられた事だろう。

その情報が、どんな経路を辿って、どんな人物の元に届いたのかは知らない。

直後、迅速に『戦況』が切り替わった。

三文芝居か、誰の目で見ても分かる八百長試合でも見せられるように。

『ホーネットストーム』から、無秩序なレーザービームの砲撃がいくつも夜の砂漠へ降り注いだ。『ベイビーマグナム』がさして重要度の高くないその砲撃を小刻みに回避する。狙いの逸れたオレンジ色の閃光が、砂漠の砂地へと着弾する。溶接のような閃光と共に爆発的に空気が膨張し、周囲一帯へ恐るべき衝撃波を撒き散らしていく。

所詮は人間の肉眼しか持たないクウェンサーに、その動き全てを観察できた訳ではない。

だが。

まるで出来損ないの模型飛行機が風に煽られるように、金髪碧眼のちっぽけな人間が舞い上げられるのだけは、はっきりと確認できた。

「くそったれが……」

その時、クウェンサーの頭の中が真っ白になった。

詰将棋のように追い詰められつつあった『ベイビーマグナム』が、今の寄り道を経る事で形勢を立て直していた事も、当のリサ＝ドービル自身に言われた事もかなぐり捨てて、気がつけばクウェンサーは走り出していた。

「くそったれがァァァあああああああ

壊れたおもちゃのように砂の上へと叩きつけられた、リサ＝ドービルの元へ。

喉がひりつくような痛みを発する。空気が異様に乾燥していた。周囲一帯の砂が、月明かりを反射してギラギラと光っている。『ホーネットストーム』から放たれ、砂の地面へ落ちたレーザービームのせいだ。その圧倒的な高温は着弾地点の空気を爆発的に膨張させるに留まらず、砂の中に含まれる珪素を溶かしていたのだ。夜気に当てられ、再冷却させられた珪素は、うっすらとしたガラスの膜へと変じてしまったのだろう。

クウェンサーはリサのすぐ近くへ、滑るような格好で屈み込む。

その体を慌てたように抱き上げると、異様に軽かった。心理的な効果の話ではない。物理的な問題として、彼女の体には尋常ならざる『変化』があった。

「……逃げ、ろ……」

発煙筒の煙や炎は消えていた。

元々の効果時間が切れたから、ではない。

「黒幕どもが、喉から手が出るほど……欲しがっていた獲物を見つけて……我を失っている間に。こんなイレギュラーは、すぐに修正される……。ヤツらの腐りきった理性が回復して……しまったら、システマティックな破壊が……一帯を覆い尽くすぞ」

なくなっていた。

消滅していた。

発煙筒と、それを握っていた腕が丸々一本。千切れた腕の断面は絞った雑巾のようにねじれていて、それが幸か不幸か大量の失血を防いでいた。

「……意味なんかあるか」

クウェンサーは慌ててサバイバルキットのケースを取り出す。包帯どころか、針や糸を使っても傷口を塞ぐ事はできないだろう。考え方を改め、包帯を腋に通して肩全体をきつく縛り上げる事で、太い動脈自体を潰してしまうしかない。

「こんなの意味なんてあるか!!　稼いだ時間は二〇秒もない。多少の波なんかすぐに均一に均される！　お姫様は『ホーネットストーム』相手に苦戦している。こうしている今だって遠方からは音速以上の速さで『シンプルイズベスト』が突っ込んできている!!　もう戦況は何も変わらない。嵐の夜に投げ出された人間に、浮き輪なんて投げたって助からないのに、アンタは何で自分の命を投げ出した!?　そんなに自分から溺れたいのか!?」

「ストークキラー部隊でも、言われたよ」

派手に跳ねた血を頬に受けたまま、弱々しくリサは笑う。

その顔が、本当に間近のクウェンサーを見ているかどうかも分からなかった。

「……でも、これは性分みたいなものでね。そういう、合理的思考ってヤツが死ぬほど嫌になる瞬間っていうのが……たまにふっと湧き上がる。ああ、私はきっと……軍人には向いていなかったんだろうなあ……」

リサ＝ドービルは、きっと何も間違ってはいなかった。

ただ、多数決の大多数が間違った答えに賛同してしまった中で、たった一人だけ正しい答えを導き出してしまっただけだった。

「それに、意味ならあった」

「何が……」

「こうして、君に話す事ができた。私達、ストークキラー部隊が、この国に大量の絵具を持ち込んだ事……。黒幕の手から逃れる事はできなかったけど、こうして、一人だけでも、真実を伝えられた。それなら、私の勝ちだ。これで良かったんだよ」

その結果が、これなのか。

大量のブービートラップで無差別に殺戮される一般市民を守ろうとして、さらにこうしている今も、見ず知らずのたまたま戦場で居合わせたクウェンサー達の部隊を守ろうとして。いつも正しい答えを出した彼女だけが、たった一人で孤立するように息を引き取っていく。

それで良いのか。

そんな世界を、認めるつもりはあるのか。

「約束しろ」

「……？」

「この戦いが終わったら、屁理屈でも何でも良い、とにかくここを切り抜けたら！　必ず軍法

裁判に出廷しろ。アンタが見てきた事を全部、公式の場で明らかにしろ!!　撤退戦専門の特殊部隊の存在、ストークキラー部隊が今までやってきた事、その事実を隠すために動いていた黒幕!!　一つ残らずだ。約束できるか!?」

「したら、何が変わるというんだ……？」

「俺も約束してやる。法廷までどんな手を使ってでも連れて行ってやるって!!」

激痛で意識が朦朧としていたリサの両目が、わずかに見開かれた。

クウェンサーは抱き上げていた彼女の体をもう一度砂の上に横たえ、それからゆっくりとした動作で立ち上がる。

覚悟を、決める。

現実問題として、リサ＝ドービルはこのままでは助からない。

腋の動脈を無理矢理縛って出血を抑えたところで、一五分が限界だろう。それまでに、クウェンサー達が世話になっている第三七機動整備大隊の整備基地ベースゾーンへ彼女を連れて行かなければリサは死ぬ。奇跡も偶然も起こらず本当に死ぬ。だが、対空兵器としては絶対的な性能を誇るレーザー兵器を山ほど積んだオブジェクトが行き交う戦場では、救援信号を出したって輸送用のヘリはやってこない。往復の距離と時間を考えると、軍用の四駆では間に合わない。時速三〇〇〜四〇〇キロを出せるヘリと、最高でも時速一五〇キロ辺り、さらに砂漠という立地を考えれば二〜三分の一が限界の四駆では決定的に条件が違うのだ。

つまり。

たった数分で状況を終了しなくてはならない。

『ベイビーマグナム』、『ホーネットストーム』、そして遠方から迫り来る『シンプルイズベスト』。三機ものオブジェクトが入り乱れる悪夢のような戦況を。

「……聞こえるか、お姫様」

無線機を手に、呟くように言う。

夜の砂漠の冷たい風に吹かれ、その金髪がザラリと揺れる。

『『シンプルイズベスト』の事は考えるな。一対一で、『ホーネットストーム』だけを撃破するために全力を尽くせ。二面同時攻撃を恐れなければ、いつもの最大のポテンシャルを引き出して『ホーネットストーム』を倒す事はできる。そもそも、アレは対人専門、大都市侵攻を第一目標に掲げたイレギュラーなオブジェクトだ。対オブジェクトとしても運用できるが、そちらがメインって訳じゃない。第二世代を相手取るよりは楽なはずだ』

『……わたしがかつのはあたりまえでしょう？　だから何だっていうの？』

「役割を分担しようって言っているんだ」

吐き捨てるように。

クウェンサーは断言する。

「お姫様は『ホーネットストーム』。俺は全ての元凶になった『シンプルイズベスト』をぶっ

壊してやる」

6

夜の砂漠。

外気は摂氏七・五度。

地中には粗悪なタングステンあり。

目印として、砂漠を縦断するような、錆びて折れた長大なパイプラインに、大深度地下に眠る未使用水脈から大量の農業用水を汲み上げる大規模ポンプ施設の廃墟。

地下にはそれら施設と付随するものらしき、広大な人工地下空間。

「ヘイヴィア。ヘイヴィア!!　どこかにいるのは分かってる。今すぐ返事をしろ!!」

『ああ見えてる。スコープ越しにテメェの顔を捉えてるぜ。でもって本音で話し合おうか。俺は絶対にテメェとは合流しねえぞ！　前から思ってたが、テメェと関わると大体ろくな事にならねえからな。卑怯だろうが何だろうがこのまま背景に紛れて危機が去るのを待つ。文句なんか聞かねえぞ!!』

『正統王国』の第一世代『ベイビーマグナム』と、『資本企業』の第一・五世代『ホーネットストーム』は依然交戦中。

レーザービーム主体で主砲を持たない『ホーネットストーム』は、一〇〇門以上の副砲を孔雀の羽のような設備で反射、収束させてオブジェクトを貫く機構を持っている。

事態を操る複数の黒幕の目的は、『正統王国』軍内部で秘密裡に設立されていた撤退専門の特殊部隊・ストークキラー部隊唯一の生き残りであるリサ＝ドービル少尉の確実で自然な暗殺。

流れ弾を装った複数のレーザービーム砲が砂漠のあちこちに照射、着弾し、周囲へ甚大な被害を与えている事を確認。

威力は恐るべきもので、照射地点の砂地が瞬間的に融解し、再冷却する事でガラスの膜のようなものが張ってしまうほど。

「別にそれで良い。俺は一人で『シンプルイズベスト』をぶっ壊してやる」

『前々から思ってたけどよ、テメェはやっぱりどっかネジが外れてやがるぜ……』

「その上でお前に確認しておきたい。前に世間話の中で出てきたタングステンの話だ!!」

『かき集めてヤツらに上納金でも払う気か？　やめておけって。商売になるほど高純度じゃねえって前に言ったはずだ』

『ベイビーマグナム』では『ホーネットストーム』一機ならともかく、遠方から突撃してくる『情報同盟』の第二世代『シンプルイズベスト』と二機同時に相手にしてしまうと、勝ち目がほぼなくなってしまう。

クウェンサーの優先破壊目標は『シンプルイズベスト』。

エアクッション機関と複数の高出力イオンスラスターを併用する事で、全長五〇メートル以上、総重量二〇万トン以上の鋼の塊でありながら、最高速度は時速一二〇〇キロを超えるという正真正銘の怪物。

機体前面には嘴に似た形状の特殊な分厚い追加装甲を有する。これは薄い金属箔を電話帳のように積み重ねたもので、オブジェクトからの攻撃を感知すると、衝撃が内部に伝わる前に火薬の力で表面の金属箔を分離する事でダメージを抑える、リアクティブ防御技術の塊。主砲を何度も叩きつければいつかは貫けるかもしれないが、その前に持前の超高速突撃で懐まで潜り込まれてしまう。

真正面から向かってくると分かっているのに、あらゆる迎撃方法が利かない恐怖。それを通常兵器対オブジェクトではなく、オブジェクト対オブジェクトの域で限定的に実現した悪魔の機械。

「採掘技術に興味はない。それがどれくらいの深さに眠っているものかだけ教えてくれれば良い。トンネル式か、露天掘りか。どっちなんだ!?」

『露天式だよ。鉱脈は地表に直接顔を出している。バケットかなんかで掘り返すだけで良いはずだ。でもなクウェンサー、さっきも言ったが実用レベルの量は採れねえぞ！　辺りを見回してみろ、サラッサラの砂しかねえだろ。この中に粉粒みてえなタングステン……ああいや鉱石の鉄マンガン重石なんかが混じってるっつったってどうにもならねえだろ!!』

「それで良い。どうせ気休めの一つに過ぎない」

『ちょっと待て。テメェ一体何を考えてやがる!?』

主砲は下位安定式プラズマ砲。極至近、ほとんどゼロ距離から叩き込む事によって、敵対オブジェクトの分厚い装甲を一撃必殺で貫くという、あまりにも乱暴で凶暴な使用方法が想定されている。飛び道具というよりは、プラズマで形勢した巨大なパイルバンカーのようなイメージの方が近いのかもしれない。

備考として、『シンプルイズベスト』は最高速度が桁外れであるものの、その巨重と組み合わせる事によって莫大な慣性の負荷がかかる事から、通常のオブジェクトのような小刻みなフットワークはほぼ不可能。

最初の交差で標的を撃破できなければ、そのまま無防備な背中を見せる羽目になる。音速以上の速度を維持したまま交戦区域を脱し、大きく仕切り直した後に再び最高速度の突撃を敢行する事も可能だが、そもそもオブジェクトが保有するレーザービーム系の主砲を浴びせられれば、無防備な背部への被弾は避けられないだろう。

「『シンプルイズベスト』のネックだよ」

『あァ!?』

「全長五〇メートル以上、総重量二〇万トン以上の塊が、音速以上の速度で一直線に突撃。想像するに恐ろしい怪物だけど、でも考えてみればおかしな点がある」

『待てよ……。それって』

「空気抵抗だ。基本的にオブジェクトの本体は球体状。あんな巨大な塊が時速一二〇〇キロ以上で突き進んだら、莫大な空気が攪拌される。そのまま機体が空中へ持ち上げられない方がおかしいんだ。つまり、浮かび上がろうとするオブジェクトを頭から押さえつけるためのネックが必ず存在する。それを壊されただけで『シンプルイズベスト』っていう巨大なシステム全体が立ち行かなくなる一点が」

『所詮は希望的観測だろ。カジノなら負け始めるシグナルだぜ。オブジェクトは二〇万トン以上の巨体なんだ。単純にその重さで機体を地面に縫い止めているだけかもしれねえじゃねえか』

「ありえない。その巨体を音速以上でかっ飛ばすほどのイオンスラスターを搭載しているんだ。機体が大きければ大きいほど、高速移動時の空気の攪拌も莫大なものになる。あれは完璧にオーバースペックなんだよ。マニアが喜ぶゲテモノのカスタムカーと一緒だ。黙っていれば空を飛んでしまうものを、無理矢理に地面に縫い付けて走らせる」

『だとしても、その弱点は一体どこにあるってんだよ？』

「機体の要だ。一番頑丈で、壊れにくい箇所を割り当てるに決まってる」

『まさか……』

「断言してやる。機体前面の追加装甲。嘴みたいな形のアレだ。アレを使って空気の流れを制御して、機体の上側へ逃がす。その逃がした空気が頭を押さえ込むような形で、巨体が浮かび

上がるのを阻止しているんだ。つまり」

『一番頑丈な嘴をぶっ壊しちまえば、制御を失った「シンプルイズベスト」は勝手にバランスを崩して転げ回る……？』

今回の一件は、クウェンサーとヘイヴィアが『情報同盟』が裏からオセアニアの人身売買組織と手を組んで影響力を拡大しようとした諜報計画を意図せず潰してしまった事から始まる報復戦争だった。

『情報同盟』の『シンプルイズベスト』はともかくとして、『資本企業』に属する『ホーネットストーム』には積極的に戦う理由がない。倒せる敵は倒せる時に倒しておくという、漁夫の利の精神で戦略上厄介な『ベイビーマグナム』を撃破したい、くらいの気持ちなのだろう。

作戦の柱である『シンプルイズベスト』が潰れた時点で、その優位性は失われる。

命懸けの闘争を嫌う『ホーネットストーム』が撤退すればそれでよし。仮に『ホーネットストーム』が戦闘を継続したとしても、一対一なら『ベイビーマグナム』にとって特段に危険な相手ではない。

……裏ではリサ＝ドービルの自然な形での暗殺、という真の目的があるものの、それだって表向きの建前が失われてしまえば、『自然な形での』という条件が失われてしまう。顔も見えない誰かは歯噛みし、手を引くしかなくなるはずだ。

『だがどうやって「シンプルイズベスト」の前面装甲をぶっ壊すつもりだ!?　あれはリアクテ

イブ防御技術の結晶で、オブジェクトの主砲を浴びたってダメージが伝播する前に表面の金属箔を瞬間的に爆破・パージしちまう。理論上なら一〇発二〇発と直撃したって「嘴」のシルエットが崩れる事はねえんだ。そんなもん相手に生身の人間がどう立ち向かうってんだよ!!』

「……、」

『そもそも「シンプルイズベスト」はこうしている今も音速以上の速度で真っ直ぐ突っ込んで来てやがる。お得意の爆弾なんて機体に設置している暇はねえぞ。「島国」のＮＩＮＪＡだって貼り付けるか！　ハエ叩きみてえに叩き潰されるのがオチだぜ!!』

戦地派遣留学生が爆弾片手に立ち向かおうとしたところで、相手はこちらを見ようともしない。注視する必要もなく、最高速度の突撃で挽肉にしてしまうはずだ。

あれだけの塊なら、ちょっとした小屋や車両くらい文字通り吹き飛ばしてしまうかもしれない。

「今日は良い風だ。運にも恵まれている」

『何言ってやがんだメルヘン野郎』

「ウォータージェットって工作機械、知ってるか？　超高水圧の水をレーザーみたいに発射して、金属板を切り裂くためのものだ。じゃあ、こいつを使っても切断できない分厚い素材を加工するためには、ウォータージェットにどんな改造を施せば良いと思う？」

『さっきからどうしちまったんだ!?　ビビって錯乱でもしてんのか!!』

「条件は揃った、ってヤツだよ」

クウェンサーは粘土のようなプラスチック爆弾『ハンドアックス』を取り出すと、ボールペンのような電気信管を真ん中に突き刺した。

「さあ来い豚野郎。丸々太ったその体、俺の胃袋に収まる時がやってきたぞ」

7

赤外線レーザー、およびマイクロ波の反射による気象条件の確認作業完了。

第一から第四スラスターまで点火。

突撃開始。

標的までの距離をリアルタイム演算。

予想回避挙動に合わせて扇形・行動可能枠の確保に尽力。

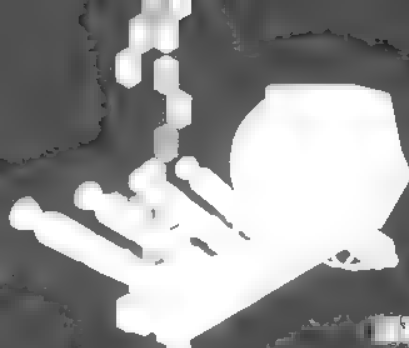
データ修正。

交差まで一八〇秒。

「……、」

ゴッッッ!!!!!!　と、爆音がコックピット内まで炸裂する。

『シンプルイズベスト』には、通常のオブジェクトと違って敵性オブジェクトからの主砲攻撃



【シンプルイズベスト】
SIMPLE IS BEST

全長…125メートル

分類…水陸両用第二世代

メインカラーリング…白

を回避するような挙動は必要ない。というより、できない。この速度域でボクシングや総合格闘技のように小刻みなフットワークを試そうとすれば、たちまちにバランスを失って転げ回る羽目になるだろう。

感覚としては、サーチライトを浴びせるようなものに近い。

あるいは、自由落下する爆弾をテレビカメラと電波操縦で軌道修正していくようなものか。

こちらの動きに勘付いて逃げようとする敵性オブジェクトを追うような形で、突撃していく機体の向きを少しずつ修正していく。扇形の狭い行動可能範囲の中央へ常に敵性オブジェクトを当てはめ、相手が前後左右どう逃げようが必ず『中央』へ収められるよう、常に進路を修正し続けていく。

最短最速。

真っ向から突撃しての、一閃。

頭脳戦も駆け引きも一切存在しない、ただ敵を殺すだけに特化した、正真正銘の第二世代オブジェクト。戦術コンセプトを極限まで突き詰めた結果、そのスタイルはかつてオブジェクトの手によって根絶されてしまった弾道ミサイルに似通うというのも時代の皮肉か。ただしこちらの場合は、一切の迎撃手段は通用しない。分厚い盾が全てを弾く。標的の情報を入力して一度事態が動き出してしまえば、数十発数百発の被弾を確認しながらも、そのまま標的の絶対破壊可能距離まで一直線に突き進み、たった一撃の主砲発射で確実に貫いてしまう。

被弾前提。

無傷での帰還は想定されず。

追加装甲板の莫大な修理コストを背負ってでも確実に倒しておきたい敵がいると判断された時、『シンプルイズベスト』は完璧な戦果を叩き出す。

故に。

出撃が決定された時点で勝負は決まっているのだ。

発射されてしまえば、そこでもう終わりなのだ。

駆け引きとは『シンプルイズベスト』が表に出てくるまでに済ませておくべきであり、この機体が戦場に現れたという事は、敵性オブジェクトは必ず破壊される事を意味している。

『正統王国』からは『シンプルイズベスト』。

『信心組織』からは『グリムリーパー』。

いがみ合う他の世界的勢力からつけられた敵性コードネーム一つを取っても、強い畏怖が込められているのは容易に窺える。

「……、」

この場合、機内の操縦士エリートにとっての戦いとは、敵性オブジェクトを意識したものではない。真っ向からどれだけ撃ち合いになったところで、分厚い前面追加装甲と音速超えの最高速度の組み合わせによって、『殺される前に殺す』環境が整えられているのは良く分かって

いるからだ。

むしろ、全長五〇メートル以上、総重量二〇万トンの塊が時速一二〇〇キロを叩き出す事によって生じる莫大な慣性Gの方が問題となる。旧来の戦闘機など比にはならない。嘔吐感に襲われたところで、胃袋の中身が口元まで上がってこれないという世界での話。特殊スーツはもちろん、エリート自身の肉体を徹底して人工的に『改造』しなくては、到底耐えられるものではなかった。

寿命を削って乗る。

単純なGについても、そのGに耐えるべく全身に施した『えげつない技術の集大成』についても。

途中で自らの意識を手放してしまえば全てが水の泡。敵を明確に見据えながらも、極限状況下で自己のポテンシャルを維持し続ける事こそが最も肝要。……と、その勝負の性質は、孤独な戦いを強いられるゴルフと似通っているのかもしれなかった。

では。

そのゴルフについて、最もプレイヤーを悩ませるものは何か。

同じホールを回るライバル達のスコアか。

マナーを知らない聴衆達の無遠慮な話し声か。

いずれも違う。

最も恐ろしいのは、突風や降雨など気象条件の唐突な変化だ。

「……っ!!」

ボン!!　と。

いきなり、標的のオブジェクトの間近で、何か爆発のようなものが起きた。

交戦状態にある二機のオブジェクトが辺りへ撒き散らす流れ弾とは違う。爆発によって、大量の砂埃が縦に伸びていた。砂の滝を逆さにして、夜空に向けて流しているような。明らかに、『大量の砂塵を空中へ舞い上げるために』爆風の指向性を調整された攻撃だった。

舞い上げられた砂塵が、揺らぐ。

夜風に乗る。こちらに向かってカーテンのように迫り来る。

何か、得体のしれない事が起きているのは分かる。だが今さら『シンプルイズベスト』の軌道は大きく変えられない。急制動などもってのほか。そんな事をすれば慣性Gの急激な変異によって、操縦士エリートは機内で水風船のように破裂してしまうかもしれない。

突撃する。

目の前の危機を察知したからこそ、最大スペックでねじ伏せるために。

8

「……ウォータージェットだよ」

クウェンサーは呟く。

彼がやった事は簡単だった。プラスチック爆弾の『ハンドアックス』をきめ細かい砂漠の地中に埋めて爆発させただけだ。爆風を全て上向きに誘導するため、防弾のジャケットなどを爆弾の下に敷いてはいたが。

「考えてみればおかしかったんだ。追加前面装甲？　嘴？　オブジェクトから攻撃を受けると、そのダメージが伝播する前に火薬の力を借りて表面の金属箔をパージするって話だったけど、そもそも『シンプルイズベスト』は音速以上の圧倒的な速さで突撃を続けている。空気抵抗も並大抵じゃない。機体の表面が赤熱していたっておかしくないくらいのエネルギーなんだ。……オブジェクトで攻撃するまでもなく、あの嘴は常に莫大なダメージを受け続けている！　俺は、その後押しをするだけで良い!!」

『それで大量の砂を舞い上げて、夜風に乗せたっていうのか？　超高水圧の水を使って鉄板を切るウォータージェットの威力を増すには、人工ダイヤの粉末なんかを水に混ぜる事で水の抵抗力や摩擦力を増強させちまえば良い。それと一緒で、音速超過で突っ込んでくる「シンプルイズベスト」の空力的ダメージを増強させるために、空気の中に砂を混ぜ込むだと!?』

これはヤスリやグラインダーと一緒だ。

表面が滑らかなゴムのベルトを高速で回しても金属を削る力は弱いが、接着剤などを使って

ベルトの表面へ均一に金属の粉などを噴き付けて固めれば、ものの数秒で鋼板を削り取る圧倒的な研磨力を獲得できる。

『シンプルイズベスト』は、その圧倒的な速度でもって自らの身を削り取る。差し詰め、大量の釣り針を垂らした高速道路を、オープンカーで突っ切るようなものだろうか。

「おそらく一定以下の熱や衝撃なら、許容範囲って事で嘴は作動しないんだろう。だがその範囲を超えるダメージを検知したら？　あの嘴が、一体何百何千の金属箔を重ねて作られたかなんて知らない。ヤツは鉄壁の防御のその全てを、空力制御に絶対必要な嘴のシルエットを、ありもしない誤検知によって全てパージしてしまうはずだ!!」

『悪い方法じゃあねえとは思う。だが甘いぜクウェンサー。敵の強度を低く見積もり過ぎてやがる!!　ただ砂漠の砂を舞い上げた程度で、オブジェクトの一番頑強な装甲を破壊できる訳ねえだろ。砂嵐や砲撃戦で撒き散らされた砂塵への対策くらい、調整を施してから出撃してきてるはずだぜ!!』

「……ただの砂、ならな」

クウェンサーは笑う。

「忘れたのか。『ホーネットストーム』は主砲を持たない、副砲を束ねて一点に集中する事でオブジェクトを貫こうとする特殊な機体だ。そして兵装はレーザービーム一択！　リサ＝ドービルを狙った流れ弾が着弾したおかげで、地面の砂は莫大な熱で急激に焼き入れされて、摂

氏一〇度以下の夜の砂漠の夜気に当てられてすぐに再冷却された。どこぞの日本刀みたいに完璧な鍛造とは言い難いが、砂鉄の質は大きく変わっているし、ガラス化した珪素に包まれているから粒全体の大きさも通常通りとはいかない。おまけに……」

『まさか、地中に混じったタングステンまで織り込み済みって事か!?』

「そんな都合良く硬質化が進むとは思えないけど、何もないよりははるかにマシ。そして、舞い上げられた砂塵が『シンプルイズベスト』側の想定を超える摩擦力を生み出すとしたら、事情はまるで変わってくる!!」

ズヴォウ!! という轟音と共に、夜の砂漠の一角が真っ赤に輝いた。

『シンプルイズベスト』だ。その表面全体が真っ赤に赤熱している。それは、大気圏に突入する小惑星を連想させた。莫大な摩擦を受けて、球体状本体の表面全体がひたすらに薄く削り取られている証拠だ。

いいや、そこに留まらない。

ばら……と、『シンプルイズベスト』のシルエットが崩れた。例の嘴だ。それは分厚い書物を綴じる紐が外れるようにも見えた。表面の金属箔が火薬の力でパージされているのだ。想定以上の摩擦の力を受けて、『オブジェクトからの攻撃』と誤検知してしまったが故に。

崩壊は、一度では終わらない。

ばらばらばら!!

ばらばらばらばらばらばらばらばらばらばらばら!!!!!!　と。

数百枚、数千枚と、あっという間に堅牢な装甲が剝がれ落ちていく。吹き飛ばされていく。

『嘴』としての流線形のシルエットが消えていく。最も堅牢であるが故に全幅の信頼を置いて預けていた、『シンプルイズベスト』の生命線とも呼べる機能が失われていく。

そう。

頭を押さえるような格好で、空気の力を借りて機体が浮かび上がらないよう地面に縫い止める、最大の安全装置が。

そして、尋常ならざる現象が目の前に広がった。

ぶわっ!!　と。

二〇万トンの塊が、機体制御を失って夜の砂漠に浮かび上がったのだ。

思わずクウェンサーは指を鳴らしていた。

「仕留めた!!　嘴を失った『シンプルイズベスト』はもう音速超えの突撃なんかできない。ゼロ距離射撃を前提とした下位安定式プラズマ砲の主砲は有効射程が短いから怖い相手じゃない。お姫様が距離を保って砲撃するだけで粉砕できる!!」

『馬鹿野郎!!　調子に乗ってる場合か!?』

どこかで、ゴソリという音が聞こえた。
月明かりに照らされた砂漠の一角で、身を伏せていたヘイヴィアが起き上がったようだった。
あくまでも無線越しに彼は叫ぶ。
『墜落した「シンプルイズベスト」が制御を失ってボウリングみてえにゴロゴロ転がって来てやがる！　あのざまじゃ中のエリートは水風船状態だろうが、それでも脅威は絶賛進行中だ。スケール感分かってねえかもしんねえが、全長五〇メートルの鋼のボールが時速数百キロで転がって来てんだぜ！　間抜けなストライク喰らって挽肉にされたくなけりゃあ、さっさと金髪美女を脇に抱えて逃げ回れ!!』
「……っっっ!?」

9

「走行不能の『シンプルイズベスト』、『ベイビーマグナム』からの主砲攻撃によって大破。『ホーネットストーム』、交戦継続するも中破した途端に撤退開始。一対一のアドバンテージが失われた時点で引き際を図っていたものと推測されます。『ベイビーマグナム』の損害は軽微」
第三七機動整備大隊の作戦指令室で、女性オペレーターの声を聞きながら、フローレイティアは細い煙管から口を離した。甘い煙と共に息を吐く。

「了解。状況終了だ。各自、危機管理体制のレベルを一つダウン。早期警戒シフトを維持しつつ、兵員の回収や戦後処理の手続きを始めろ」

「シドニーに滞在中の准将様より祝電を賜っております。〝対〟の状況を損害軽微で乗り切った事がよほど予想外だったようです」

「後にしてくれ」

「……私見ですが、この手の入電を後回しにすると、軍内部の派閥抗争でいらぬ軋轢を生む火種になりかねないかと」

「なら私もオフレコで言わせてもらうが、多分、その准将様とやらが報告にあった『自然な暗殺』を企てた一人だろう。今さら脂汗まみれで穏便な関係を築こうとしたところで、こちらが仲良くしてやる必要はない。整備基地に駐留している『黒軍服』にご登場願え」

言うだけ言うと、フローレイティアは畳んだノートパソコンを脇に挟んで作戦指令室を出た。建物の外に出て、一〇〇台以上の大型車両で構成される整備基地の敷地内を歩く。大量のヘッドライトに彩られたそこはナイター試合を行っている球場よりも光で満たされていた。夜の砂漠である事を忘れてしまいそうな光景だった。

途中、兵員輸送用の大型ヘリが牽引車の力を借りてハンガーへと格納されていくところへ出くわした。一仕事を終えた兵士達へ軽く手を振りながら、フローレイティアはさらに歩みを進めていく。

整備基地ベースゾーンの一角。

医務室……と呼ぶにはあまりにも広大な施設へと足を踏み入れる。アラスカ方面での『ウォーターストライダー』の一件以降、衛生兵や軍医、医療設備の拡充は一〇〇〇人規模の大隊を預かる者として課題に挙げていたのだ。一番の問題は、その重要性を認めようとしない上層部を丸め込むため、あの手この手の屁理屈で予算をもぎ取る事にあったが。

中にいた衛生兵に声を掛ける。

「意識の方はどうだ？」

「何とか話せる程度には。右腕は駄目ですね。あれじゃ神経を繋げ直す事は難しい。まあ、今はＡＬＳ患者向けの、皮膚表面の電位差を利用したアーム制御技術も開発されつつありますから、奮発して『便利な義手』を購入すれば日常生活には困らないかもしれませんが」

「それくらいは国の税金で賄ってやるべきだな。……できなければ、『黒幕さん』とやらのポケットマネーでも毟り取るか」

肩をすくめて道を譲る衛生兵の横を通り抜けて、フローレイティアは一枚のドアを軽くノックした。返事を確認してからドアを開ける。

いくつかのベッドがあったが、使っているのは一人だけだった。

「リサ＝ドービル。残念だが、軍のデータベースには名前は登録されていなかった。秘匿扱い、という事なんだろう。佐官でも閲覧権限のないデータはなかなか珍しいんだがな」

「……つまり、あなたは私の『お客』ではない、という事です、少佐。私の名を検索できるのは、己の保身のために『撤退戦』の切り札を欲しがっていた高官だけですから。あなたが誠実な軍人であって良かった」

「『准将』と聞いて心当たりは？」

「三人ほど。その内、オセアニアに滞在しているのは一人だけでしょう。残りは軍属でありながら、『安全国』から出ようともしません」

……上層部がオブジェクトを動員しても暗殺したがる訳だ、とフローレイティアは率直な感想を抱いた。ＶＩＰ専門のボディガードに近い仕事をしていた以上、彼らの秘密に触れる機会も多かったのだろう。とはいえ、独立性の高い『黒軍服』に身柄を預けてしまえば、腹黒い連中も容易に手を出す事はできなくなるだろうが。

フローレイティアはベッド脇の椅子に腰掛けると、膝の上に乗せたノートパソコンを開いた。

「聞きたい事は色々ある」

「どうせ、全ては軍法裁判でお話しするつもりですが。理由が何であれ、私は同僚や上官を撃った事のケジメをつけなくてはなりません」

「そのための事前資料も必要なんだ。実を言うと、私もさっさと安全を確認して祝杯パーティの馬鹿騒ぎに混じりたいのを我慢してここにいる。分かったらつべこべ言わずに協力したまえ、少尉」

「……それはどうも」

「そもそも、少尉が所属しているとされるストークキラー部隊では何があった？　クウェンサー＝バーボタージュ戦地派遣留学生の話だけでは要領を得なくてな。ヤツは頭は回るが伝達力は足りないらしい。理系人間の哀しい性かもしれんが」

「……そうですか。では、どこから話しましょうか」

ベッドに寝かされたまま、リサ＝ドービルは一度だけ目を瞑った。

言うべき事を頭の中で整理し、そして瞼を開く。

やはり、ここから始めるべきだろう。

フローレイティア＝カピストラーノの顔を正面から見据えて、彼女はこう言った。

「私に与えられた任務は、このオセアニアに大量の絵具を持ち込む事でした」

第二章　警察は戦争を止める手段〉〉オセアニア解放戦

1

『軍内部でのスキャンダルが止まりません。オブジェクトの出撃命令を悪用しての軍人暗殺計画を戦争行為ではなく殺人未遂事件として取り扱うと「評議会」が異例の決定を下した事により、同計画の首謀者としてオセアニアから緊急帰国を余儀なくされた「准将」こと……』

オブジェクトの整備場の近くにある建物、その金属製の階段の上に、お姫様は腰掛けていた。暇なのか、携帯端末でワンセグのテレビ番組をぼんやりと眺めている。この整備基地ベースゾーンは一〇〇台以上の大型車両を組み合わせて作られているが、タイヤの大きさは直径二メートルを超える。乗り込むだけで階段が必要なのだ。

湿度の低い砂漠は影にさえ入れば涼しく感じられる。そんな話を聞いていたお姫様だが、特殊スーツの前を開いて地肌に直接風を当てているところを見ると、普段エアコンの効いたコックピット内に長く滞在する彼女の上限値はそれほど高くはないらしい。

そして少し離れたところでは、スコップを手にした馬鹿二人がそこらじゅうの熱砂を手当たり次第に掘り返していた。

「馬鹿クウェンサー！　テメェどこに埋めたか覚えてねえのかよ!?」

「印つけたんだって、ちゃんと昨日の夜に！　こっそり木の棒刺しておいてさ」

「そこ掘ったミョンリは大量のセミの死骸を見つけて目を回してやがったよ！　くっそ！……何がどうなってやがんだ。前の戦勝パーティで余った缶詰とかレトルトパックとか、どこに埋まってやがるんだ!?　消しゴムみてえなレーションからしばらくおさらばできると思ったのに!!」

「急げよ急げ！　この整備基地って移動式だろ。部隊全体の移動が決まったら、あれだけあった缶詰ともさようなら、だ！　牛肉の角煮だぞ。ここで失ったらトラウマになる!!」

「……あれは一体何をやっておるんじゃ？」

と、オブジェクトの整備場から顔を出した婆さんが、お姫様へと声を掛けてきた。

お姫様は画面から、婆さんの方へ視線を向けながら、

「たからさがしみたい」

「？　お姫様は参加しないのかい？」

「わたしはちょっと、たべものの気分じゃないっていうか。セミのおはかを作ったばっかりだし」

「？？？」

いまいち要領を得ないので、整備兵の婆さんは直接尋ねてみる事にした。

「おいサボり学生」

「ひいいーっ!!　『説教組』にロックオンされた!?」

「あの爆乳に話が伝わらねえ限りは大丈夫だ！　色仕掛けでも何でも良いから味方に取り込め!!　俺はちょっと、向こうの方を掘ってくる!!」

「汚ねえ！　一人で逃げないでーっ!!」

「こんな所で一体何をやっとるんじゃ」

婆さんは釘を刺して地面に縫い止めるように言う。

『こんな所で』という前置きがついているのは、クウェンサーがオブジェクトの整備場にいなかったからだ。

ぎぎぎとクウェンサーはゆっくりと振り返りつつ、

「ら、ランチョンミートの缶詰二つで手を打ちませんか？　おおっとう、今なら桃やパイナップルの果物系だって……！」

「そういう事を聞いているんじゃない。小僧、何のためにわざわざ戦場へ足を運んでおるんじゃ？　普通は少しでも多くを学ぼうとして、一秒でも長く整備場にいようとするもんだろうがな」

「本気で言ってます、それ？」

クウェンサーは闇雲にスコップで地面を掘りながらも、呆れたように答えた。

「中で今やってるのってオブジェクトの表面塗装でしょう。塗り替え。あんな密閉空間で有機溶剤ドバドバ使っちゃって、まー大変。俺はシンナー中毒でらりぱっぱーになるために鉛弾かいくぐって来た訳じゃありませんってば」

「……確かに、オブジェクトの表面塗装に使われる技術には、それほど専門的な技術は使われておらん。そいつは認める」

「一般の艦船と同じですもんね。オブジェクトのタマネギ装甲は高耐火反応剤を混ぜた日本刀みたいな性質の特殊鋼板……つまり風雨で錆びる。『国家の威厳』とやらが錆だらけになるとみっともないっていうんで、錆止めの技術に気を配っているってだけでしょう？　フェライト混ぜて高度なステルス性を付加させるとか、心理学とか認識学使った迷彩パターンで人の脳から上手に隠れる仕組みとか、そういうもんを出してもらえないと『学生』としてはやってられん訳なのですよー」

旧来の戦闘機や戦車には、そうした技術が用いられていた。

理由は単純で、撃墜・大破されるリスクがそれだけ高かったからだ。ところが、核兵器の直撃にすら耐える超大型兵器オブジェクトにはそうした努力は必要ない。

そもそも、レーダーや肉眼において、全長五〇メートルを超える装甲兵器を隠し通す事は至

難なのである。

「技術的な問題はもちろん、塗装に関しては軍だの政府だのの『上の事情』も大きいだろうがな」

「『英雄』はコソコソ隠れるな、ってヤツですか？」

「オブジェクトという、あからさまに戦力過剰な兵器を実戦投入するからには、平和主義者を黙らせる『ひねくれた正論』がどうしても必要になる。だから、憎き敵を真正面から蹴散らしていく『英雄』という記号性が好ましいんじゃろうな。オブジェクトには力技で核の時代を終わらせたという実績がある訳じゃから、その鮮度を可能な限り保っておきたい。歴史に風化させるには、あまりにもメリットが惜しい訳じゃな」

「……莫大な軍事予算をひねり出すためには、分かりやすいコマーシャルが必要って事でしょう。だから機体だっていつもピカピカ、モーターショーの展示品みたいに磨いて、脇にはコンパニオンみたいに可憐な操縦士エリートまでついてる。……そんなのは俺の求める設計士の仕事じゃない。広告代理店の職分だ」

クウェンサーは肩をすくめて、

「そんなのより、もっと、こう、センシティブで核心に迫るようなトコに触れさせてくださいよ。JPlevelMHD 動力炉とか、照準センサー群管制システムとか」

「アホ、んなもん触らせる訳なかろう。寝言を言う前に国際試験を一五個以上はパスしてみる

事じゃな」

そこで、ぼんやりと青い空へ目を向けていたお姫様が、金属製の階段に腰掛けたままクウェンサーへ声を掛けてきた。

「く、クウェンサー？」

「？？？　なに？」

「あの『情報同盟』のエリートとなにかあった？　ろ、『ろうらく』とか、まえにふおんなことばが出てきたものだから……」

「ええと、それだけだといっぱいいると思うんだけど、どのエリートさん？」

「……いっぱいいるの……？」

藪をつついてみたら蛇がどっさり出てきたような顔になるお姫様。

クウェンサーとしては、元々何が聞きたかったのかも理解できていない。

「そんな事よりＫＡＲＡＯＫＥだぞ!!　忘れてはいないだろうなお姫様。先の『シンプルイズベスト』『ホーネットストーム』戦の折、歌なんて誰でも歌えるからアイドルなんぞに価値はないとのたまった事を!!」

「うっ……お、おぼえてはいるよ」

「よろしい。今はもうネットダウンロード型のサービス使えばどこでだって設営はできるからな。このオセアニアにだってそういう店もあるだろう。次の休暇において、大口を叩いたお

姫様の真の実力がいかほどか見せてもらおうじゃないかー!!」

整備兵の婆さんはこっそりと息を吐いた。

実はこの段取り、ある意味でお姫様の読み通りというか狙い通りではあるのだが、予想以上に事態が上手く回り過ぎて、彼女の方もテンパりつつあるらしい。

策士策に溺れるとはこの事だ。

互いのスケジュールを突き合わせて決戦日の日取りを決める若者達だったが、それが終わったところで、ふとクウェンサーがこんな事を言った。

設計バカ降臨の瞬間である。

「そうだ、お姫様からも口添え頼むよ。動力炉は流石にヤバいかもしれないけどさー、照準センサー群管制システムとか、もっとオブジェクト設計の勉強に使えるようなトコに触らせてくれるようにさー」

「……」

……

……

……

……」

「あれ、ひょっとして信頼ゼロなのですか……？」

「小僧の技量の問題じゃない」

婆さんは呆れたように、

「一口に技術系と言ってもいろんな種類がある。理論を積み重ねて仮想体系を作り、そこから物質化・現実化を果たす学者系。一発のアイデアに取りつかれ、分野の垣根を超えて必要なものを片っ端からかき集めて実現させる発明系。言語化不能の指先の感覚や経験則に従って精密機器の加工技術を超える結果を叩き出す職人系。……小僧の言ってる照準センサー群管制システムは、それらが複雑に絡み合っとるブラックボックスじゃ。わしやお姫様でさえ軽々しく触ろうなんぞとは思えん」

「はあ。誰にも触れないものに命を預けてる？」

「そういうはなしじゃない。メンテナンスするときは50人以上でセッションするようにやるの。レシピの分からないカクテルのあじを、みんなでいけんを出し合ってさいげんするようなかんじかな。『あじ』をしらない人がさんかすると、それだけいけんがブレる。さいしゅうてきにできあがるドリンクも、かんせいけいからはなれていくかのうせいがたかくなる」

「オブジェクトの砲は大小合わせて一〇〇門以上。その一つ一つに複数方式のセンサーがあって、さらに主格のレーダーやセンサーが別にあるんじゃ。これを統合するだけでも人間業じゃない。ま、大部分はコンピュータ制御に頼る訳じゃが、そうも言っていられない事情がある。流石にこれくらいは分かるじゃろうな？」

「レーザー兵器？」

「そういう事。あれだけは『目で見て避ける』が通用しない。文字通り光の速さで飛んでくる

からのう。すると重要なのは、敵対オブジェクトの砲やセンサーレンズの微細な動きから発射前動作を先読みして回避挙動を取る事になるが、これはコンピュータ制御には任せておけないんじゃ。攻撃する側も、防御する側も」

当然ながら、オブジェクト対オブジェクトの戦争は、相手の攻撃を避け続ければ良いというものではない。こちらも攻撃を当てなくてはならないのだ。

発射前動作を読んで的確な回避挙動を取る敵に対しては、こちらも敵の予想回避位置を先読みして砲を構える必要がある。

「結局、精密なセンサーと高度なコンピュータ、何より恐怖を感じる人の指先があって初めて成立する仕組みなんじゃよ。『情報同盟』辺りは完全な自動照準アルゴリズムの研究をしているようじゃが、現実性には不透明な部分も多い。ま、その名の通り情報の取り扱いに最も長けた連中の事だ。うちの諜報部門がかき集めたデータもどこまで信用できるかは分からんのじゃが」

「……わたしはあんなのにまけないよ」

微妙に対抗心を煽られるのか、お姫様が若干拗ねたようにジュースのストローへ口をつける。

と、クウェンサーの軍服に装着してあった小型の無線機から電子音が鳴った。

抜き取って口元に寄せると、フローレイティアからだった。

『お勉強の時間は一時中断だクウェンサー。他の連中と一緒に会議室へ来い。作戦前会議ブリーフィングを始めるぞ』

「次は何しろって言うんですか？」

『それを説明すると言っている。ま、誰でもできる簡単な作戦だよ。最新式のオブジェクト相手に生身で突撃しろとかいう話じゃない』

「そんなのは金輪際勘弁願いたいです!!　別に好きでやってる訳じゃない!!」

『前の「シンプルイズベスト」、および「ホーネットストーム」の一件があっただろう。戦闘終盤になって、地盤の崩落と共に砂漠の地下で巨大構造体を発見したはずだ。お前の報告だぞ、クウェンサー』

「え、ええまあ」

『今回はその廃施設の調査だ。いわゆる戦後処理。警察で言うなら現場検証ってところか？正直、戦争とはあまり関係がないように思えるが、交戦領域にあったものは全て掌握しておかなくてはならなくてな。面倒な報告書を書いて上へ提出するのは私なんだ。少しくらい手伝ってくれても良いはずだが？』

「となると、今回はどこの軍も関与していない？　銃撃戦とかになったりもしない訳ですか？」

『そうなるだろうな。「資本企業」やら「情報同盟」やらが、ほら穴で暮らしているという報告は聞いていない』

「……待って、待ってください。すると何ですか？　ここは慎重に確認を取りたいところなんですが……本当に、何も、起きない？　ピクニック気分で砂漠へ車を走らせて、デジカメ片手

に謎の遺跡をパシャパシャ撮ればハイおしまい。ホントにそれだけ？　ホントのホントに？」

『しかも驚くべき事に給料が発生する。国民の血税でな』

「ふっふーう!!　馬鹿馬鹿そんなの楽し過ぎる!!　是非とも班分けでは女性兵士多めのところにぶっ込んでくださいよ！　北風と太陽作戦にはぴったり。絶対途中で飽きて緊張感もなくなってみんな薄着になるに決まってる!!　ばんざーい、ばんざーい!!」

『分かった分かった。お前はいつも通りヘイヴィアと一緒のむさ苦しいオトコ班だ。存分に汗だくの薄着ワールドを楽しんで来い』

「はっはっは。……ホントにそんな事しやがったらクーデター起こすぞこの野郎」

『はっはっは!!　……私が冗談でこんな事を言う人間とでも思ったか？』

通信は一方的に切れた。

フローレイティアがそう言ったからには、問答無用の男祭りが催される事は間違いないだろう。しかしクウェンサーはめげなかった。希望はあるのだ。

「つまらない調査任務って言ったって、実際の調査班、周辺を警戒する警護班、兵員の輸送班、色々なチームが一体になって動くはずだ。つまり俺のチームが男子校モードになったからって、他のチームにピッチピチのオナゴがいる可能性はある!!　俺は、まだ何も負けていない!!」

「……はあ。そう都合良くいくもんかのう」

「いくさ!!　何故なら二月の下旬で決算期間際ですからね!!　軍上層部だって今の内に無駄金

使っておかないと、来年度の国防予算を削られる。つまらない任務のために大量の兵士を動員するなんて朝飯前！　今なら十分にあり得るんですよ!!」

「……何で、こういう時の計算だけズバ抜けるのやら」

それはもちろん、思春期のピンク色の脳細胞と、一番相性の良いものは昔から相場が決まっているからである。

とにかくクウェンサーは両手を上げて全身で喜びを表現していた。

「ふはははは!!　今回ばかりはあの上官の思い通りにはさせませんよ！　清涼飲料水のCMもびっくりの、女の子達の薄着濡れ透けパラダイスが俺を待っているー!!」

2

「……ハッ!?」

そこで、クウェンサーは勢い良く瞼を開いた。

前後の記憶があやふやになっている。視界全体がぐわりと歪んだ。彼の目の前には砂漠の青空がいっぱいに広がっていた。どうやら仰向けに寝かされているようだが、焼けつくような砂の熱さを何故か感じ取る事はなかった。

貧血の時のような、嫌に冷たく感じる汗が全身を伝っていく。

鼻には何かが焦げるような匂いと、鉄錆臭い匂いが混じり合った臭気がこびりついている。

……鉄錆臭い？

「がうっ!?　がっふ！　く、くそ……思い出した……。乗ってたヘリが落ちたんだ……。じゃ、さっきの夢は……嘘だろ……走馬灯とかいうヤツか!?　がはごほ!!」

砂漠の表面は均一に均されてはいない。嵐の夜の海のように大きくうねり、数メートルの高低差があちこちに出来上がっている。クウェンサーはそんな砂の丘を盾にする形で転がされていた。

一体、何から盾にしているのか。

答えは単純明快、こちらに向かって発砲してくる襲撃者からだ。

パパン!!

パンパパパパン！　ドタタタタガガガガガガ!!　と。

花火大会大失敗みたいな爆音の連続がいつまでも続く。クウェンサー達が攻めているのではない。一方的に鉛弾を撃ち込まれている。砂の丘がなければ数秒で挽肉にされかねないほどの、鋼鉄の嵐そのものだ。

砂の丘に背中を押し付け、ライフルのセンサーだけを丘の上から覗かせているヘイヴィアが、こちらに向けて声を掛けてきた。

「ようやく起きやがったかクソッタレ！　アドレナリンカートリッジを無駄にしちまったかと

思ったぜ!!」

「……マジかよ。あれって心臓に直接太い針をぶっ刺すヤツだろ!?　俺ってそんなヤバい事になってた訳!?」

「良かれと思ってやったんだぜ。天使サマ相手にナンパしてたんなら謝るけどよ」

「そうだ、走馬灯見た！　すごく新鮮!!　ええと、あれ……もう思い出せない……。確かお姫様とフローレイティアさんと整備兵のばあさんが出てきたはずなんだけど……」

「テメェがどこまでも節操なしのクソ野郎かは分かったよ。命に別状はなさそうで何よりだ！」

血流が正常化していくにつれて、クウェンサーの頭の中のデータが少しずつ正しい順に整列していくのが分かる。

そう、そうだ。

確か、フローレイティアから命令があった。

内容は、先の対『シンプルイズベスト』、『ホーネットストーム』戦の最中に偶然見つけた地下構造体の調査。戦闘結果のレポートをまとめて上に提出するため、直接的な重要度の低い地形や建物であっても、交戦区域にあるものは全て精査して報告しなくてはならないとか、そんな話を聞いたはずだ。

クウェンサー達は輸送用の大型ヘリに詰め込まれて、問題の砂漠の一角まで向かわされた。

一面に何の目印もないクリーム色の熱砂が延々と続くその風景は、上から見下ろしてもゾッ

とするものだった。絶対に迷いたくない。南米のジャングルだって、もう少しサバイバル術的な『取っかかり』は残っているものだと思う。

唯一の特徴は地球の血管みたいにあちこちへ延びている、錆びついたパイプラインの遺物くらいのものか。だが、もしも遭難したとして、これだけ伝えても救援部隊は遭難者の位置を正確に特定する事は多分無理だ。……何しろ、真っ直ぐ一〇〇キロ、下手すれば一〇〇〇キロ単位でひたすら延びているのだから。

『熱心に覗き込んだってオアシスもマイクロビキニの姉ちゃんもいねえよ』

とか何とかヘイヴィアは言っていたはずだ。

『それより戦場の空をヘリで移動とか信じられるかよ。直接オブジェクトとやり合う作戦じゃねえっつってもさ、突発的に狩りを始めるデカブツだっているかもしれねえってのによ』

とはいえ、この日中の炎天下で、地面の悪い砂漠をちんたら進む軍用トラックに詰め込まれて揺さぶられたら、作戦が始まる前に熱中症と乗り物酔いのダブルパンチに翻弄される羽目になるのも事実だった。

複数の大型輸送ヘリの編隊がしばらく進むと、やがて複数のパイプラインの残骸が集まるターミナル施設の跡地が見えてきた。確か、石油ではなく大深度地下から水を汲み上げて輸送するためのものだったか。

その時だった。

施設跡地の近くに、いくつかの幌付きのトラックが停車しているのが見えた。
クウェンサーは眉をひそめて、
『廃品回収のハイエナさん？』
『あんなトコにまともな機械が残ってる訳ねえだろ。幌んとこ見ろよ、青十字だ。世界最大の医療系人道組織。殺人細菌のサンプル採るために南極やら密林やらに突っ込んだり、ナノテク医療に使える研究団体に金ばら撒いたり、色々やってる一環だろ。食糧支援とか何とかじゃねえの？』
『ナノテク？　ああ、エリートの身体調整の新方式に使われるかもって「ミリタリーサイエンス」で取り上げられていたっけ。小さなシャボン玉みたいな膜の中に薬の粒を入れて、脳とか腎臓とかのフィルターを潜り抜けた先にあるターゲットへピンポイントに投薬するとか何とか。任意のポイントで外殻を割るのには、超音波辺りを使っていたっけ？』
『テメェはもうオブジェクトに少しでも掠ってりゃ何でも興奮すんのな。気持ち悪いから鼻息抑えてくんねえ？』
『……ところでさ。その青十字さんが、誰もいない無人の廃墟で何やってる訳？』
ブツン!!　と。
そこで、クウェンサーの記憶の連続性が唐突に断絶する。
仰向けに転がったまま、冷たい汗にまみれた額へ手をやった少年は、呻き声を発する。

「そうだ……。あのくそったれ、何が青十字だ。どっかの馬鹿がトラックに痛車みたいなペイント施して騙していただけだったんだ。いきなりトラックの幌が外れて……中からミサイルが……」

「コーヒーとトーストがねえと寝起きに頭が回らねえタイプか？　でなけりゃ動け!!　放っておいたら囲まれちまうぞ!!」

焦げ臭い匂いの正体は、どこかに落ちた輸送ヘリの残骸のものだろう。

銃声の渦は、一方向からだけではない。Ｃの字のように取り囲まれつつある。

敵がどこの誰なのか、一体何十人なのかは不明。

少なくとも、今ここにいる全員よりは二回りも三回りも多いはずだ。この砂の丘には、クウェンサーの他にも二〇人以上が寝かされていた。全員が止血帯で強引に手足を縛っていたり、カービン銃から引っこ抜いたストックを折れた骨にあてがっていた。意識が戻っていない者も珍しくない。ちょっとした野戦病院だ。

クウェンサーはどこまでも突き抜けた青空に目をやり、

「……味方のヘリは？　俺達の脱出口はどこだ!?　このままやり合ったって削り合いになるだけだ。そもそも、機動力を確保できなきゃ砂漠じゃ戦えないだろ!?」

「使えるヘリはみんな一時的に撤退しやがったよ！　連中の地対空ミサイルは友情努力勝利で何とかできるレベルじゃねえ。こんな中でのんびりホバリングなんかしてたら簡単に落とされ

る！　あれを黙らせねえ事には救援なんかやってこねえぞ!!」

「輸送ヘリって言っても、ドアには機関砲が取り付けてあったろ？　あれで撃ち下ろすだけでも大分違うのに!!」

「このクリーンな時代に、誰だって超重量級の西部劇の早撃ちなんかしたくねえだろ。ないものねだりしたって仕方がねえ。いい加減現実にピントを合わせやがれ!!」

四方八方、見渡す限り地平線の向こうまで砂漠だけ。

こんな状況では、車などのアシがない限り逃げ場はない。徒歩で多少逃げたとしても、すぐに追い着かれて蜂の巣にされるのがオチだ。後ろに下がっても事態は好転しない。そもそも、空中のヘリから投げ出された負傷者の多くは自力で歩けるとも思えない。

敵側に進軍されて。

この砂の丘を越えられたら、後は全てが流血に沈む。

「……ふざけんな。ふざけんなよ、何が誰でもできる簡単な作戦だ……」

クウェンサーはブツブツ呟きながら、砂の上を転がって、仰向けからうつ伏せに体勢を変える。そのまま砂の丘をよじ登り、ヘイヴィアの隣に並ぶ。

「敵はどれくらい？」

「五〇から六〇。サムライかニンジャじゃねえ限り、真っ向勝負じゃ勝てねえな。ヘリの支援があれば話は変わってくるが、そのためにゃあちらさんの装甲車両を黙らせねえと」

「そもそも一体どこの誰なんだ？」

「俺も知らねえよ。生きるに値しねえクソ野郎って分かりゃ十分だ」

吐き捨てるようにヘイヴィアは呟き、

「ただ、装備は比較的新しい。見たところ、『資本企業』や『情報同盟』が外貨獲得手段としてダウングレード販売している兵器類の寄せ集めって感じだ。性能を落とした道具を高値でさばいているんだから、金欠のギャングだのスラムの住民だのが進んで摑むとは思えねえぜ」

ドパン!!　タタタタン!!　と、いつまでも続く連射音に、クウェンサーはうんざりしたように顔をしかめながら、

「……あれが訓練されたプロの兵隊だって？　そこらじゅうに適当にばら撒いているだけじゃんか。一発一発狙い撃ちならとっくの昔に鉛弾人間にされてるよ」

「良いかモヤシ野郎、世の中にはな、探りを入れるって言葉もあるんだよ。標的の位置が分からねえ時に、辺り一面に弾ばら撒いてこっちがリアクションするのを待ってるって訳だ。……場所を特定されたら終わりだぞ。向こうは車に取り付けた機関砲だのミサイルだのを死ぬほど持ってる。具体的に言うと一〇台以上持ってる。こんな砂の盾なんか何の意味もねえ。地対空だろうが、二発三発とミサイルをぶち込まれれば地形ごと粉々にされちまう」

クウェンサーは一度だけ、ゆっくりと長く息を吐いた。

それから、改めて尋ねる。

「で、具体的には何をすれば？」
「その切り替えだけは褒めてやるぜ」
ヘイヴィアは砂の丘の上から覗かせていた、センサーだらけのアサルトライフルを一度引っ込めると、命懸けでかき集めた情報を砂の上に指で描いていく。
「……クソ野郎は例のターミナル施設、水を汲むポンプの跡地を守るように、機関砲だの対空ミサイルだのを積んだトラックで陣取ってやがる。ここからの距離は五〇〇から六〇〇メートル。ライフルだって機関砲だって十分届く。でもって、カービン銃だの軽機関銃だので武装した五、六〇人の兵士達が、向こうからゆっくりと近づいてきてる。これが一定のラインを越えたら俺らは皆殺しだ。その前に、何とかしなくちゃならねえ」
「戦っても勝てないんだろ？　数の差とかで」
「さっきも言った通り、ヘリからの機銃掃射で歩兵達は殲滅できる。だが、そのヘリがやってこれねえのが問題なんだ。例のトラックの上であぐらかいてる対空ミサイルコンテナ。あれさえ黙らせられれば……」
「でも……」
クウェンサーはチラリとヘイヴィアを見た。
彼は肩に携行ミサイルを下げていた。それを使えば装甲車両でも吹き飛ばせるが、ここにも一つ問題がある。

「そう、弾は一発限り。クソ野郎の装甲車両が全部で一〇以上。これじゃ計算が合わねえ、だから参ってる」

「……、」

クウェンサーはわずかに黙った。

腐れ縁が砂の上に書いた、雑な見取り図を睨みつけながら、

「ヘイヴィア。俺はショックで記憶が飛んでるから教えてほしいんだけど」

「俺は記憶を失う前の婚約者とかじゃねえぞ」

「ヤツらのミサイルが、最初に俺達のヘリを襲った時の事だ。輸送用の大型ヘリじゃ回避なんて期待できなかった、ってのは分かる。でも、だからって何の抵抗もなく黙って落とされたって訳じゃないんだろ」

「あん？　そりゃまあ、確かに警報鳴ると同時にチャフとかフレアとかばら撒いて、向こうのレーダーを誤魔化そうとしたさ。赤外線のジャマーとかも点灯させてたんじゃねえかな。でも、結果はご覧の通りだ。俺らはきっちり落とされて、他の仲間のヘリも退却せざるを得なくなっちまった」

「つまり、回避策は講じていたのに全く通用しなかった」

クウェンサーは、一つ一つ区切るように言った。

「……何か大型のレーダー設備で照準がサポートされてる。だから欺瞞を見破られて落とされ

た。でも、全ての対空火器がそいつに頼り切っているとしたら？　専用設備を一つ破壊するだけで、連中は『大空の網』をまとめて失う。銃もミサイルも基本は一緒だ。狙って撃つための仕組みがなければ、いくら撃ったって被害は出ない」

「一理ある……」

ヘイヴィアは呻くように言った。

「連中のトラックには、揃いも揃って不自然にデカいアンテナが取り付けられていた。情報戦専用の作戦指揮車両から正確なデータを受け取って狙いを定めている可能性は否定できねえが」

「が？」

「具体的に、そりゃどこにある？」

ヘイヴィアは砂の上の見取り図の真ん中へ、アサルトライフルのストックを突き刺して、

「さっきも言ったろ。こっちの携行ミサイルは一発、向こうの装甲車両は一〇台以上。ぶっつけ本番で作戦指揮車両を当てられなけりゃおしまいだ。切り札を失ったらもう逆転の目はねえんだぜ!!　それとも何か見分ける方法でもあるってのかよ!?」

「……そうだな」

クウェンサーは軽く腕を組み、人差し指で口元をなぞる。

今日の夕飯の献立を考えているかのような素振りだった。

「ヘイヴィア。アサルトライフルと、あと拳銃。弾はどれくらい残ってる？」

「何だって？」
「足りなきゃ怪我して動けない連中から集めるよ。どうせ宝の持ち腐れだ」
「待て待て！　青十字に偽装してたっつっても、連中のトラックだってどうせ手製のプレート入りだ。装甲車両相手に鉛弾で戦ったってどうにもならねえよ!!」
「トラックを壊すつもりはないし、そもそも鉛弾にも興味はないよ」
「？？？」
怪訝な顔をするヘイヴィアを放って、クウェンサーはいくつかのアサルトライフルやカービン銃を本当に集めてきた。
工具もなしにバキバキと分解していくと、中から細長いパイプ状の銃身を取り出していく。
「一体、何をしようってんだ？」
「巨大なロケット花火」
クウェンサーは細長い筒の一方をへし折って潰すと、今度はマガジンから取り出したライフル弾をザラザラと砂の上へ落としていく。
「火箭って言ってさ、その昔は本当にアジアでこういう兵器が使われていたんだ。城とか船とかに火を点けるために。……距離は五〇〇から六〇〇だったよな。軍用のインテリな発射装薬をこれだけ詰め込めれば十分に届く。先端にプラスチック爆弾と信管を取りつけたとしても」
「手数を増やせば一〇台以上の装甲車両にも対抗できるってか？」

ヘイヴィアは嫌そうな顔で、

「忘れたのかクウェンサー。兵器にとって一番重要なのは『照準』だ。届くのと当たるのは全く違う！　火薬を詰めた筒に姿勢安定用の長い棒を取りつけただけのロケット花火じゃ当たるもんも当たらねえよ!!」

「当たらなくても良いんだ」

あっさりと。

クウェンサーは、前提を覆すように言った。

「投げても届かない距離からいきなり爆発物が飛んできて炸裂したら、安心していた向こうはだからこそ絶対にビビる。一番大事なものを真っ先に退避させようとする。連中がどこの馬鹿だか知らないけど、レーダー車両を壊されちゃ困るって事が分かる程度の頭があれば、それが仇になる。……コソコソ動いて逃げようとする『安全牌』に、ヘイヴィアが本命のミサイルをぶち込めば良い」

唖然とするヘイヴィアに、悪知恵だけが働くクウェンサーはこう続けた。

「探りを入れる、だったっけ？　どうせなら派手にやろう」

3

予定通りに大量のロケット花火……手製の『火箭』がオセアニアの空へ放たれた。

ヘイヴィアが大規模なレーダーアンテナを備えた作戦指揮車両を特定して携行ミサイルをぶち込むと、後は一方的な『正統王国』軍の反攻作戦へと続いていった。

対空火器の脅威が取り除かれた事で、一時的に退却していた複数の大型輸送ヘリが戻ってきたのだ。

ドアの近くには、ボルトで直接床に留めて使う大口径の機関砲が取り付けられている。

ドドドドドガガガガガガガガガッッッ!!!!!　と頭上から爆音が炸裂すると、クウェンサーは思わず片手で口元を覆った。

「……何でこう、人間ってのは負けてる方を応援したくなっちゃうんだろうね。一瞬前の憎悪が嘘みたいだぞ」

「実はそれが上から目線の優越感って訳だ。心配すんな、テメェはしっかり人生を楽しんでるよ」

砂の丘の斜面へ仰向けにぶっ倒れたまま、クウェンサーとヘイヴィアの二人は破壊の轟音を耳にし続ける。

それなりに改造を施していた手製の装甲車両が一薙ぎで蜂の巣にされ、ガソリンタンクや火薬類に引火して勢い良く爆発した。そんなにも凄まじい破壊力を持つ機関砲の掃射が、クウェンサー達を追い詰めていた歩兵達の一団にも均等に降り注いだ。もはや悲鳴も絶叫もない。砂

漠という巨大なフライパンの上に、赤黒いソースがぶちまけられていく。

思わずクウェンサーは哲学的な気持ちになった。

「平和って何なんだよ……」

ヘイヴィアは小指で鼻をほじっていた。

「俺らが生きてる事だろ」

ものの一〇分ほどで、機関砲の爆音が完全に止んだ。

輸送ヘリは何機かが空中に留まって睨みを利かせ、何機かが負傷者を収容するためゆっくりと降下してくる。

ヘリから地上へ足を着けた同僚の兵士が、ローターの突風に負けない大声で叫ぶ。

「お勤めご苦労!!　おたくら負傷組は全員、帰還の許可が出ている。後はこちらに任せて、消毒薬の匂いが染みついたベッドで養生する事だな!!」

「はいはい分かった分かった！　後ろ見てからもの言え馬鹿野郎。ヘリが全く飛び立つ準備をしてねえぞ。テメェらが調査終わらせねえと俺らも帰れねえんだよ!!」

護衛付きの調査チームが、巨大な地下構造体へと繋がるポンプ施設跡地へと向かっていくのを、クウェンサー達は見送った。

前回の戦闘時に地下構造体の天井部分は大きく崩落しているので、地上からも丸出しの状態ではあるのだが、安全ならせん階段があるのに、一〇メートル以上の落差がある断崖絶壁を、

わざわざロープでラペリングしようとは思わないだろう。
　クウェンサーは額の汗を軍服の袖で拭い、この世の終わりみたいにジリジリと焼け付く太陽を見上げながら、
「……これからどうすんの？　やだよ、こんな所で待ちぼうけなんて。干物になる方が早い」
「向こうにパイプラインあるだろ。ボロボロに錆びてるヤツ。その陰で休もうぜ。湿度は低いんだ、日光さえ遮れりゃ少しはマシになるはずだ」
　パイプラインは直径二メートル以上の巨大な筒だ。座って休む程度の日陰を作っている。クウェンサー達が歩いていくと、すでに歩兵達の大半がアリの行列みたいに錆びついた鋼管へ寄り添っていた。
「最悪、最悪」
「……ねえこれホントに涼しくなってる？　密集し過ぎて熱がこもっているように感じるんだけど……」
　軍服に取り付けていた水筒を取り外して、飲み口に口をつけるクウェンサー。太陽光と自分の体温ですっかりぬるくなっていて、思わず吐き出してしまった。
「気持ち悪い！　自分の汗飲んでるみたい!!」
「頭使えよ『学生』。そういう時はだな、機関砲を冷却する時に使うアイシングスプレーで水筒を冷やしてから飲むんだよ。衛生兵ーっ!!」

ふざけたように大声を張り上げるヘイヴィア。
自分達の危機がようやく去ったと、クウェンサーにも実感が湧いてきた。
「それにしても、結局、何だったんだ？　ポンプ施設って言ってただの跡地だ。使えそうな機材も全部運び出されている。ミサイルって一発で一万ユーロ以上するんだろ？　わざわざ死守する理由がない」
「こっち見てみろよ、クウェンサー」
ヘイヴィアは、パイプラインの破れた箇所から中を覗き込んでいた。パイプ、と言っても太さは直径二メートルを超える。配管というより、もはやちょっとした金属製のトンネルのようだった。
いいや。
ようだ、ではない。そのものだ。
「……砂が入り込んでる。底に溜まった砂に、何か太い筋みたいなのがあるぞ。タイヤの跡みてえだな。この細さだとバイクかもしれねえ」
「タイヤの、跡？」
怪訝そうにクウェンサーも破れたパイプから中を覗き込む。
そして気づいた。
「砂漠の全域を縦横断する、廃棄されたパイプライン網。中には水も石油も流れていないから、

安全な空洞って事になる。まさか、これって……」

「軍事政権がオセアニアを牛耳っていた頃は、秘密の資金なり武器なり麻薬なりが幽霊みたいに横行していたもんだ。軍の検問や衛星の監視を奇麗にすり抜けてな。当時は金や脅迫で現地の兵士が抱き込まれていた、なんて言われてやがったか、こりゃもしかすると」

「……秘密のトンネル？　マンホールの下をくぐるみたいに、検問も衛星もノーチェックで、オセアニア全土を自由に行き来するための……」

重要なのは、ポンプ施設跡地でも地下の巨大構造体でもなかった。

どこかの誰かは、辺り一面に張り巡らされたパイプラインを利用した、大規模な密売ネットワークそのものを隠し通そうとしていたのだ。

「軍の最新装備で身を固めた人間が、密売網を死守するために一戦交えた……？　どうにも、きな臭い感じだね。麻薬売買が諜報機関の軍資金になってますとかさ」

「結局、そもそもどこの誰だったんだ？」

ヘイヴィアはうんざりした調子で、ぐずぐずに崩壊してしまった死体のある方へと目をやった。

「装備自体は『資本企業』だの『情報同盟』だのの寄せ集めっぽいんだよな。軍で使ってる正規品じゃなくて、外貨獲得用のダウングレード版だ。質を落としてますって喧伝しているくせに値段だけは高級品。こんなの、地元のギャングだのマフィアだのが使いたがるとは思えねえ

が」

「どういう事？」

「さあな。連中が兵員のかさ増しのために雇った準軍事協力者か……。いや、それにしたって戦術指揮を執るために何人か本職のプロを混ぜるはずだよな」

その時だった。

ポンプ施設外周を警備していた歩兵の一人が、クウェンサー達に話しかけてきた。

「陰謀論なら、こいつを調べりゃ詳しい事が分かるかもしれんよ」

「あん？」

ヘイヴィアが怪訝な声を出すと、その歩兵は何か四角い小さな機械を投げてくる。

携帯端末だ。

ただし『正統王国』軍で支給されているものとは違う。そして所々に赤黒い汚れのようなものがついていた。

歩兵は肩をすくめて言った。

「スカベンジャーの真似事さ。表でグチャグチャになってたゴロツキどもがいたろう。そいつらから何か転売できんか色々拾い集めてた」

「……マジかよ。あの毒の沼みたいなとこに足突っ込んだ訳？」

「代わりに、面白いデータがいくつかあるよ。正規のデータっていうよりは、下っ端が、自分

が何に関わっているかを知りたくて勝手に集めたものかもしれんけど」

「……」

電源を入れてみると、不用心な事にパスロックはついていなかった。

データファイルの中には、一〇桁前後の数列だけがびっしり並んでいるものもある。クウェンサーは一六進数で意志疎通ができる人間ではないので、これだけで何が分かるというものではないが……。

「おい、これって」

隣から覗き込むヘイヴィアが、何か思いついたような声を発した。

「先頭の四桁はみんな同じだな。どっかで見た事あると思ったら、これって銀行の預金口座じゃねえのか？　確か『情報同盟』の大手のヤツだ」

「……何で『正統王国』の『貴族』サマがそんなの知ってる訳？」

「バッカ、この戦争の時代で突然いつ何を徴収されるか分かったもんじゃねえのに、『貴族』なんて金の亡者が真正直に一系統の口座に大金を収めておくと思ってんのかよ？　いろんな方法で資産を分散させておくのは物事の基本だぜ。『家』じゃ専門の会計士集団まで居座ってやがったもんだ」

クウェンサーは鉄錆臭い携帯端末の画面をスクロールさせながら、首をひねる。

ざっと見て、口座番号は一〇〇以上ありそうだった。

「……で、この預金口座のリストが何なんだ？」
「そりゃまあ、送金リストってヤツだろ。つまり、黒幕さんの『協力者』の名前に繋がるもんだ。ほら見ろ、口座の末尾の番号も一緒だ。これって南の島のタックスヘイヴン支店のものだぜ。毎度お馴染みの秘密口座で、ロンダリングなんかにも悪用されてるはずだ」
「黒幕さんって言ったって……俺達はまだ何の陰謀に巻き込まれているかも分からないんだぞ」
「そこに載ってる今週のＭＶＰサマの顔と名前を全員暴けば、共通点が見えてくるかもな。パイプライン使った秘密の通路を隠すために、わざわざ青十字に偽装したトラックから機関砲だのミサイルだのバカスカ撃ってきたんだ。ろくなもんじゃねえのは間違いねえだろ」
悪食の歩兵は疲労困憊といった調子で肩をすくめた。
「相手は『情報同盟』の秘密口座でしょ？　どうやったって僕達からの要請じゃ情報はもらえんよ」
「クウェンサー」
「そんなに俺って頭良く見えちゃう？　困った時は大先生に投げてみよう的な」
うんざりした顔のクウェンサーだったが、周りの兵士達からアイシングスプレーを放り投げられて渋々了承した。
自分の水筒にぶしゃぶしゃ噴き付けながら、
「……口座番号だけなら分かっているんだよな。ハッキングに見せかけてリストを丸ごとネッ

トに流しちゃえば？　タックスヘイヴンの秘密口座なんて信用第一のはずだ。サーバーから情報を丸ごと抜かれたなんてなったら、顧客も経営者もてんやわんやだろ」

「そりゃそうだけどよ。それって嫌がらせ以上の効果があんのかよ？」

「『あなたの口座番号が盗まれたかどうかすぐに分かるサイトです』って嘘のウェブページをいち早く公開するんだよ。口座番号の入力者を特定するＩＰを掠め取るようなスパイウェアを組み込んでおけば、誰がどの番号を打ち込んだか特定できると思う。やましいヤツほどレスポンスも早いはずだし」

その瞬間。

パイプライン沿いの日陰で休んでいた全員がクウェンサーを無言で眺めた。

得体のしれない沈黙に、彼は軽く身をよじる。

「お前達ー？　ちゃんとリクエストに応えたのに、この評価はないんじゃないのかー？」

「やっぱダメだ、こいつは軍で囲っておかねえとろくな事をしねえぞ」

整備基地ベースゾーンの諜報部門と無線で連絡を取り合うが、嘘のウェブページをしっかり作るのに何日もかかるとの事だった。

ヘイヴィアは舌を出して、

「デスク組め。ここと向こうじゃ時計の針の動き方が違うっつーのか。バカンス時計でも使ってんじゃねえだろうな」

「どこを切り取っても羨ましい限りだよ」
「あの分だと乗り気じゃねえな。面倒臭せえ。おいテメェら、話はご覧の通りだ。なんか使えるもんあったらじゃんじゃん出してくれ。及び腰で企画倒れにしちまいそうな諜報部門から手柄を奪っちまおうぜ」
詳細は省くが、結果だけを並べると、『海外のサーバーに、様々なコンピュータウィルスを圧縮して保存してある』『騙しサイト用のテンプレ倉庫を知っている』『サイトの基本テンプレートさえあれば、クラウドサービスを使って細部を編集し、偽装サイトをものの数分で作って登録する事ができる』などなどの意見が出てきた。
「……どいつもこいつも腹にイチモツ抱え過ぎだぜ」
「技術者の卵に言わせてもらえば、役に立つオタクは善玉として迎え入れられるべきだと助言しておくよ。じゃなけりゃ組織なんてすぐに『恐竜の化石』になるのがオチさ」
宣言通り、暇人達の協力によってものの数分で嘘のウェブページが完成してしまった。完全にゼロから作ったというより、あらかじめ数百数千とある『騙しのデータベース』からテンプレートを一つ選び取って、今回の件に必要な装飾を加えていったのだろう。ウィルスやスパイウェアについても同様だ。
「で、誘導アドレスってなどの辺に撒くんだ？　大手の掲示板なら何でも良いのかよ？」
「『正統王国』なら三〇〇年以上続く『貴族』の血筋でないと入会もできない『ブルーブラッド』、

『情報同盟』なら一日五〇万アクセス以上のサイト運営者が最低条件の『ランクリテラシー』辺りかな。四つの世界的勢力にそれぞれあるだろ、そういう選民思想サービス」

「どいつもこいつも閉じたＳＮＳじゃねえか。『ブルーブラッド』なら何とかなるが、俺のＩＤなんか使うんじゃねえぞ」

「そんな事しないよ。ネットじゃみんないくつもの顔を使い分けてるだろ。お上品な『貴族』サマが、仮面舞踏会気分で罵詈雑言を吐いてストレス解消している匿名掲示板だってある。そういうトコに情報を撒けば、そいつが閉じたＳＮＳの中に汚染情報を持ち込んでくれる。せっかく隔離して安全を確保しているのに台無しってヤツだ」

「……なんつーか、ゴキブリ用の殺虫剤みてえだな。美味しいご飯に見せかけて、巣に持ち帰らせてから全滅させるってヤツ」

クウェンサー達の近くで背中を丸めて携帯端末をいじくっていた男の兵士が、親指と人差し指をくっつけて丸のサインを作った。

彼らは興味深そうに、小さな画面を覗き込みながら、

「ウィルスサイトって言っても、空き箱をテープで留めてロボット作るようなもんだって話だったけど」

「とか言っている内に、もういくつも個人情報収集しているぞ……」

まずネット上にリストを流して『臨時速報』を蔓延させ、不安になった顧客を嘘のサイトへ

誘い込み、口座番号が入力されるのを待つ。一連の波状攻撃がいつ始まったのかも分からなかった。

「リストにある口座番号は……いくつか顔と名前が出てきたな。一〇人くらいだ。こいつら調べて共通点を探し出そう」

「ていうか」

ヘイヴィアは画面上の名前を一つ指差して、

「これは国際衛星テレビの重役さんだ。情報統制されてる独裁国家だの空白地帯だのに笑いと真実を届けるとかっていう触れ込みのヤツだ。オセアニアのマスメディアも復旧はしたけど未だに不安定らしくてな。衛星テレビの信頼性と影響力は結構あったはずだぜ」

他にも、と彼は別の名前を指差し、

「ブログの王様。オセアニアの皮肉屋なんて呼ばれてるヤツ」

指差し、

「ボランティア活動で有名な芸能人」

指差し、

「缶ジュースの国際メーカー重役。いろんな番組でCM打ってるから、いろんな番組に融通が利く」

指差す。

クウェンサーは一つ一つ解説されて、共通する印象を口に出す。
「……メディアを使った印象操作？」
「何に対する、どんな操作だよ」
「いくら金を積んだって、元々の思想だの信条だのから大きく外れた意見なんて口にしようとは思わないものだ。金は、こいつらの背中を押して行動をエスカレートさせるための起爆剤。だとすれば、そもそもこいつらの主義信条はどういうものなんだろう？」
それを聞いて、ヘイヴィアは苦い顔になった。
そもそも、名前を指差して説明をしていたのは彼だ。その人となりについても、大雑把に理解はしているのだろう。
「だとすると……こりゃあ、俺らにとっては頭が痛いかもしれねえぞ」
「何が？」
「オセアニアが真に独立するためには、『ならず者』が立ち去らなければならない。……平和主義の皮を被った、働いたら負け集団なんだよ、そいつら。何にもしてない自分が一番偉いって本気で信じてる」
「企業の重役なんかも？」
「革張りの椅子に座ってふんぞり返る事を、一般的にゃ仕事とは呼ばねえな」
このオセアニアに、作為的に偏った情報をばら撒く事で、多国籍軍の駐留を嫌う『風潮』を

常態化させようとする謎の勢力がある。

ここで問題なのは、その謎の勢力は砂漠に張り巡らされたパイプラインを駆使した秘密の輸送路を使って『何か』の受け渡しを行っており、その痕跡が露見するのを恐れてクウェンサー達『正統王国』と撃ち合いまでやらかした。

単なる新聞の社説とは訳が違う。

謎の勢力には、具体的な暴力装置としての行動力が備わっている。

「……パイプラインの秘密の運搬網に、オセアニアの民衆を印象操作するため有力者にばら撒かれる大量の金。一体何が始まろうとしているんだ……？」

「なあ」

色々なアイデア出しに協力してくれた兵士達の一人が、こんな事を言ってきた。

「例の携帯端末何人分か調べてみたんだけど、頻繁にアクセスしているネットストレージがある。ひょっとしたら、端末に入らんデカいデータはみんなそっちに移しているかもしれんよ」

「……パスワードってどうなってる？」

「ネットバンクと同じ、ワンタイム制ってヤツだよ。……ただ、こいつは外注でね。セキュリティを請け負ってる会社は、前に何度かファイアウォールをすり抜けられてる。ひょっとすると、メンテ用のマスターキーが使えるかもしれんけど？」

「何週間も何ヶ月も同じ鍵を使うかなあ」

「でも、定期的に更新される鍵のアルファベット変更パターンの規則性さえ分かってしまえば、今使われている鍵を分析すんのも夢じゃない。時間をくれれば何とかしちゃうよ」

「やっちゃって」

クウェンサーが適当に言うと、無線機から電子音が鳴った。

上官のフローレイティアからの連絡だった。

『……お前達。ちょっと尋ねたいんだが、まさか『情報同盟』のタックスヘイヴン銀行宛てに無許可で電子戦を仕掛けてはいないだろうな？　諜報部門が現在、とても興味深いデータの流れを観測している訳だが……』

やべぇ!!　とその場の全員が背筋を伸ばした。

『正統王国』と『情報同盟』は戦争中だが、戦争にも取り決めというか、条約なんていうものがある。挙げ句、ヘイヴィアも言った通り、タックスヘイヴンの秘密口座は、非公式に『貴族』だの『王族』だのがリスクを軽減するため、偽名やダミー会社などを通してこっそり資産を分配するのにも使っている。『敵国』とはいえ、不用意につつきたくないお偉方もいるのだろう。フローレイティアはクウェンサー達の知らない所で吊るし上げにされかかっているのかもしれない。

とはいえ、誰がどう謝ったって事態が好転しない状況で、長話なんかしたくない。

クウェンサーは適当に受け答えしながら、周囲に助けを求めた。

ヘイヴィアは親指でポンプ施設跡地を指し示した。

「（……分厚いコンクリの中に入っちまえば電波は遮断されるはずだぜ!!）」

「オーケーオーケー。え、はい!?　いえいえ、そんな事ではなくてですね!!」

適当に返答を引き延ばしながら、クウェンサー達はポンプ施設の跡地へと走っていく。

赤黒いソースの池となったエリアを迂回する格好で、クウェンサー達はまずポンプ施設の跡地の方へと向かった。その中に地下へ続く階段があるのだ。

跡地の周辺には青十字に偽装した装甲車両の残骸が今も炎と煙を上げて燃え盛っていた。今さら動くとは思えないが、弾薬だのミサイルだのがいきなり破裂する可能性を考慮し、やはりできるだけ遠回りして跡地を目指す。

中は広大な空間だった。

元々は大深度地下から未使用地下水を汲み上げて穀倉地帯へ送り出すための施設だったようだが、放棄された段階で重要な機材は全て持ち去られたのだろう。そこには鉄筋コンクリートで造られた、映画館ほどのスペースが広がっているだけだ。基本的に何もない。所々に複雑に折れた金属製の階段や通路があったが、元々は『何かしらの大型機材を取り囲むように』敷設されていたんだろうと推測するのが精一杯だ。

そしてどうでも良い。

今問題なのは、

「（……おいヘイヴィア！　まだ電波届いてる!!　フローレイティアさんが超怒ってるよ!!　これじゃ逃げ切れない!!）」

「（……地下だ。らせん階段下りて地下通路まで逃げようぜ!!）」

馬鹿二人は地下へのらせん階段を下りて、細いトンネルのような通路へと飛び込んでいく。

ようやく、無線通信に大量のノイズが混じってきた。

待望の瞬間だ。

『……ざざざ、おい、どうなっ、ちゃんと説明に答……ザザザザ!!』

「えーあー聞こえません！　聞こえませんったら聞こえません!!　以上通信終わり!!」

適当に言って無線機を切る。電源スイッチも根本的に切ってしまった。

ヘイヴィアはコンクリートの壁へ背中を預けながら、

「ここでうろちょろしてたら調査チームに睨まれて雑用押し付けられるぜ。どっかで適当に働いているふりしよう」

完全に苦痛の先延ばしをしているだけだが、考える時間があれば上手に切り抜けるための言い訳を整理整頓するチャンスにも恵まれるだろう、と超ポジティブシンキングを馬鹿達は貫く事にした。

直線通路を通り抜け、問題の地下構造体へと辿り着く。

とはいえ、

「……すっげえな。本当に天井何にもねえじゃん。世界一のオープンカーって感じだぜ」

前回の戦闘で地上の地面にあたる部分が丸ごと崩落してしまったため、地下構造体と言っても青空は完全に見えてしまっている。高さが一〇メートル以上あるので、階段を使わずに直接行き来しようとは思わないが。

その関係で大量の砂が入り込んでいて、先ほどのポンプ施設跡地よりは雑多な印象がある。一抱えもある木箱をいくつも積んであるのも、イメージを高めているのかもしれない。

「こっちはもう全部調べ終わったみたいだね。じゃないと俺達を土足で入れるとは思えないし」

「この木箱ってのは何なんだ？　中は空っぽって訳でもねえだろ」

辺りにカメラを向けていた調査チームの男に許可を取ってから、クウェンサー達は木箱の釘を外して蓋を開けてみる事にした。

中から出てきたのは、

「なんかの粉末みたいだな……。ビニール詰めされている」

「末端価格おいくらって感じのじゃなさそうだけどな」

袋の表面には何かラベルが貼ってあったので、クウェンサーは携帯端末のカメラで撮影しておいた。

他の木箱もいくつか開けていくが、中にあるのはリールで束ねた光ファイバーケーブルや、サイズごとに袋分けされたボルトやナットなどだった。

「お父さんが秘密基地で日曜大工でもやってたっつーのか……」
「あれ……？　でも、さっきの粉末って、ひょっとすると……」
クウェンサーが何かを呟いた時だった。
ゴトン!!　という、何かが倒れる音が響き渡った。
馬鹿二人がそちらへ目をやると……。

4

戦災復興。
そういうお題目で、オセアニア各地では急ピッチで家屋、商店、道路、上下水道……様々な工事が進められていた。『正統王国』、『情報同盟』、『資本企業』、『信心組織』。いわゆる世界的勢力から派遣された多国籍軍は治安回復を最優先に掲げているが、『少しでも怪しい者は完全排除』とはいかない。スーツや作業服の似合わない様々な専門職、銃をぶら下げた警備員なんだかゴロツキなんだか判別できない連中。
そうした胡散臭い人間を金持ちの外国人観光客と同じ空間に放り込むと、雄雌の仕分けを間違えたハムスターみたいな事にもなりかねない。
住み分けの意味も込めて、胡散臭い人間ばかりが利用する裏町なんかが形成されていくと、

金の流れに誘われるように、『暴力的なレストラン』やら『バーでいつも泣いている結婚詐欺師の女』やら、さらに色々な職種の人々が集まってくる。いわゆる、元の国でやり過ぎた連中だ。こうして雪山の斜面から雪だるまを転がしていくように、暗黒街はゆっくりと静かに勢力を広げていく。

そうした場末の酒場の一つ。

値段の安さが、普通の店と比べて一体何を差し引いているのか考えたら負け、という薄暗い店の一角、四方を垂れ幕だけで区切ってある『個室』で、テーブルを陣取る小さな集団があった。

「失敗だ」

夏場の砂漠地帯という環境を全く無視した、漆黒のスーツと帽子の青年。サングラスは陽射しから目を守るというより、単に顔を隠すといった色の方が強いだろう。

「ターミナル52は『正統王国』に制圧されたらしい。金で雇った連中は全滅、と」

「元から負ける事は分かっていたでしょう」

特異なのは彼一人ではない。

同じテーブルに着いている女もまた、ネクタイまで黒一色で統一していた。

「一時的に押し返す事はできたとしても、世界的勢力にはオブジェクトがある。問題が大型化してアレが派遣されてしまえば、どのみち負けるのは決定していたわ」

いいや。

二人だけではない。テーブルを囲む全員が、示し合わせたような黒ずくめだったのだ。

「勝てない事は織り込み済みだった。この場の全員がそれは了解している。その上で、敢えてこう説明したいのだが構わないかね。彼らは『目的』を達してから死んだのか？」

「でなければ、もう少し焦っているでしょ」

「途中に何が挟まろうが、最終的に隠滅さえできてしまえば我々には届かない」

全員の目が、最初に口を開いた青年へ向けられた。

いいや違う。

厳密には、青年のさらに後方。

全く同じスーツを着て、全く同じサングラスを掛け……そして全員と同じ拳銃を握った、金髪の女性に、だ。

「つまり、当初の目的は達せられた、という訳かしら」

女性の質問に対し、青年は静かに両手を上げた。

すでに、その後頭部にはサイレンサーの先端が押しつけられていた。

薄く笑いながら、青年は静かに答える。

「イエス。そしてこう付け加えておこう。よろしくたの……」

ボシュッ!!　と。

くぐもった銃声が、青年の言葉を途中で断ち切る。

丸いテーブルの上へ突っ伏すような格好で、青年は崩れ落ちる。同時に、その他全ての人間がゆっくりとした動作で立ち上がった。『必要な処置』を施していく。落ちた薬莢を拾い、指紋や唾液の付着が疑われる箇所をアルコールで濡らした布で拭き、髪の毛を回収するため、床一面をローラー状の粘着テープで掃除していく。

最初から。

何もなかったように。

「ケースナンバー022終了。管理者・アラスカ49の死亡に際し、『足取り』の途絶を確認。現時刻よりケースナンバー023を開始。管理者に私・テキサス28を設定」

鞄からピカピカのタブレット端末を取り出しながら金髪の女性が呟くように言うと、全員の視線が彼女に集中していく。

つい数秒前に殺害された青年に向けられたように。

青年の前にも、その前にも、ずっとずっと続けられてきた儀式のように。

「幸い、ケースナンバー022は達成目標を満たしている。現場とのリンクは確保されている。当初の予定通りに、状況を次へ進めよう」

「つまり」
「爆破して埋めるわよ」
彼らは陰に徹する。
そのためならば、勝っている時も、優勢な時も、確かな隠滅のために味方を殺す。
であれば。
当然ながら、敵を殺す事に躊躇をするような性根に持ち合わせはない。

5

「ヤバい……」
クウェンサーは、思わず呟いていた。
巨大な地下構造体の中。何かの衝撃で転がった『それ』を見て。
「ヤバい!!　ヘイヴィア、それから調査チームの連中も！　早く外へ逃げろ!!」
「あん？　どうしたんだよクウェンサー？」
彼らの目の前にあるのは、全長一・五メートル前後の、プロパンガスのボンベみたいな円筒形容器だった。ただし素材は透明な強化ガラス。中には何か液体が満たされていた。円筒の中

心はドーナツ状の空洞があり、その空洞を埋めるように爆薬が詰め込まれている。

「強酸爆弾だ……。軍用の証拠隠滅兵器!!　爆薬が炸裂して容器を破壊すると、衝撃と一緒に大量の強酸のシャワーが四方八方へ隙間なく撒き散らされる。そいつは数秒で空気と反応すると、気体化した酸性雲になって体積を一気に膨れ上がらせる。みるみる内に直径五〇〇から八〇〇メートルが丸ごと呑み込まれる！　巻き込まれたら『悲惨な戦争の犠牲者展』の目玉写真は間違いなしだ!!」

「マジかよマジかよ……ていうかマジか!?　じゃあさっきの連中の本来の狙いって、こいつを仕掛けて吹っ飛ばすためか！　こっちはここに何が隠れているのかも知らねえのに!!」

「あれだけ重くてデカいと、背負ってバイクで運ぶ訳にもいかない。だからパイプラインの秘密通路は使えなかった。無理を承知でトラックで乗り付けたところで、俺達と鉢合わせになったんだ」

「でも、ようは爆弾だろ？　解除とかできねえのか!?　ほら、爆弾っつったらテメェの得意分野じゃねえか!!」

「時間がない。リミットまであと一〇分！　誤作動防止のためのパスコード入力待機状態みたいだけど、そんなもん今から解析している暇もない!!　死にたくなければ走れ！　ヘリまで戻るんだ!!」

クウェンサーとヘイヴィアが迷わず地下構造体から逃げ出した事で、周りの調査チームや護

衛の歩兵達も引きずられるように走り出した。
細長い通路を走りながら、クウェンサーは無線機の電源を入れ直し、通信用のスイッチを押して、輸送用のヘリに今すぐ飛び立てるように事情を話す。
しかし、これが仇となった。
「だーっ!!　ちくしょう!!」
らせん階段を駆け上って、ポンプ施設跡地から飛び出した直後だった。
ヘイヴィアが思わず叫ぶ。
彼らの目の前で、複数の輸送ヘリが飛び立つのが確かに見えたのだ。
「待てよ、くそ、待て!!　俺らが報告しなけりゃ何にも気づかれずに酸性雲に巻き込まれてたんだぞ!　俺らは命の恩人なのにー!!」
『済まないが、負傷者の救援を優先した!　皆殺しにした敵性勢力の車両などを奪って各自退避はできないか!?』
「使えるアシが残ってるとでも思うのか!?　テメエで綺麗に吹き飛ばしておいてよお!!」
「ヘイヴィア、来ないものは言っても仕方がない!　それより残ってるヤツを全員かき集めろ。ここで選択を間違えば間違ったヤツだけドロドロに溶かされるぞ!!」
バシュシュッ!!　と、良く振った缶ビールを開ける音を何百倍にもした大音響が、クウェンサーの耳に突き刺さった。

少し離れた場所で、何か得体のしれない白い雲のようなものが広がっていた。それはあっという間にオブジェクトよりも大きく膨らんでいく。

「……酸性雲だ」

ヘイヴィアが顔を真っ青にして言った。

地下構造体から綿飴のように噴き出した大量の『雲』は、かつての崩落によって開いた大穴から地上部分の砂漠を席巻していく。それと同時に、地下通路やらせん階段を通ってポンプ施設の方も蹂躙を始める事だろう。その死に、隙間はない。ここにいれば全滅だ。

「あんなもん、山火事よりも早く広がっているじゃねえか。時速六〇キロくらいか!? 足で走ったって追い着かれちまう!!」

「逃げるんだ」

「どこへだよ!?」

「パイプラインの鋼管の中！ 分厚い鋼鉄製だから多少はしのげる！ 完全に鋼管が溶けるより前に、数百メートルって効果圏を走って脱出すれば生き延びられる。少なくとも、可能性はある!!」

ヘイヴィアに、というより、無線機に向かってその場に取り残された全員へ呼びかけながら、クウェンサーは走る。

「おいクウェンサー！ パイプラインはボロボロに老朽化してる。逃げた先でパイプが大き

く破れてたら？　前後から酸性雲に挟まれる形になっちまうぞ!!」
「じゃあ黙ってここで突っ立ってるか？　バイバイヘイヴィア、悪いが俺は〇%よりは一%に賭けさせてもらうよ。多分ドッグタグも溶けちゃうから骨は拾ってやれない!!」
「分かった、分かったよくそったれ!!」
パイプラインの鋼管はボロボロに錆びていて、所々には虫食いのような亀裂や大穴が開いていた。
そこから、砂の溜まった空っぽの鋼管の中へと、クウェンサー達は我先にと潜り込んでいく。
「冗談じゃねえ。冗談じゃねえぜ……!!」
「酸性雲との激突まであと二〇秒ない！　穴はできるだけ塞げ!!　死体袋でも何でも良いから覆って酸性雲の流入をできるだけ拒むんだ！」
どのみち、完璧にいかないのは分かっている。
おざなりに処理すると、クウェンサー達は直径二メートル前後のトンネルの中をひたすらに突き進む。
ジュワアアアア!!　と、中華料理のような音が響いたのはその時だった。
「酸性雲に追い抜かれちまったぞ!!」
「すぐに鋼管が破れる訳じゃない！　とにかく走れ!!」
一秒間に一〇トン以上の液体を運搬する目的で作られた特注のパイプラインだ。その重量や

内圧に耐えるため、かなりの厚さは確保されている。が、全周を取り囲むように炸裂する『金属の喰われる音』は、そんな前提を無視するほどにクウェンサー達の心を締め付ける。

「保っても二分とか三分が限界だぜ……」

「数百メートルだ。別にマラソンする訳じゃない。全力疾走なら効果圏の外へ抜け出せる!!」

「あのクソ野郎ども！　一体どこの誰なんだ!?　こんなメチャクチャな環境破壊してまで何を隠そうとしてやがった!?」

「生き残ってから考えろ!!」

頭の中に得体のしれない火花が炸裂し、余計な事など考えていられる状況ではなかった。

とにかく、走って、走って、走って、走る。

走り続ける。

外の世界なんてとっくになくなっていて、ゴールなんて強酸に沈んでいて、地球の全部が酸性雲に覆われているんじゃないかという妙な錯覚に襲われる。

「熱っち!?」

「所々に亀裂がある……。適当な布で頭を守りながら進め！　立ち止まっても全身の肌を薄く剝がされるだけだ!!」

幸い、亀裂自体は小さく、大した量の酸性雲は入り込んできていなかったようだった。

しかし、もはやクウェンサー達には客観的にものを測る余裕はない。

軍服の内側を濡らしているのが、自分の汗なのか、溶けた皮膚なのかも区別がつかなくなる。それでも足を止めない。

確固たる意志がある、というよりは、間近に迫る明確な死から、全力で目を逸らすために単純作業に没頭している、という方が正しい。

「……クウェンサー」

やがて、ヘイヴィアが呼びかけてきた。

何故呼びかけられたのか、クウェンサーには想像もできなかった。

「クウェンサー！　もう終わった。周りからジュワジュワ言う音がなくなっただろ。数百メートル、酸性雲の効果圏は抜けたんだ」

「あ、え？」

「俺らは助かった！　これ以上走る必要はねえ。自分の心臓を自分でぶっ壊してえのか⁉」

しばらく。

自分が生き残ったという実感を抱けなかった。

やがて、どすんと鋼管の底に尻餅をつくと、クウェンサーは自分の唇が痙攣するのが分かった。

笑っていると、数秒経ってからようやく気づいた。

6

ボシュッ!!　と。

オセアニアのどこかで、サイレンサーをつけた事による、くぐもった銃声が響いた。

額に風穴を空けた金髪の女性を見下ろしつつ、別の青年が呟く。

「ケースナンバー023終了。達成目標満たせず、失敗と評価。リカバリーのため、ケースナンバー024へ移行する」

7

のんびりゆっくり降下してきた輸送ヘリのパイロットを本気でぶん殴ってやろうとしたヘイヴィアをなだめるのにクウェンサーは苦労した。意外だったのは、インテリに見えた調査チームもヘイヴィアに同調する動きを見せようとしていた事だった。やはり同じ人間、理不尽に仲間から見捨てられて酸性雲の中に放り出されれば誰だって怒って当然か。

「ほらほら、みんなで仲良く中指立てたらそのままヘリが飛び去っちゃうかもしれないだろ。ここはにこやかに、妹のような優しさと姉のような頼りがいのある笑顔で迎えてやろうじゃないか」

「オーケークウェンサー、食虫植物の気分になれって事だろ？　ヤツらがヘリのドアを開けた時が最後だぜ。人生の終わりってヤツを教えてやろう」

流石にヘリチームもばつが悪かったのか、彼らはヘリのドアを開けるなり、一体どこで確保したのか、炭酸飲料のボトルをこちらに渡してきた。しかも機関砲冷却用のアイシングスプレーか何かを噴きつけてキンキンに冷やしてある。人間には、理性では抗いがたい感覚的な誘惑というのが確かに存在する。摂氏五〇度の中を走り回らされたクウェンサー達を黙らせるには十分な破壊力があった。

中年男性のパイロットは言う。

「酸性雲は小型の入道雲みたいに上空へも広がりを見せている。今、気象図の風向きと照らし合わせているが、整備基地への帰還中にうっかり突入しかねないリスクは否定できない。できるだけ正確な情報が欲しいんだ」

「……そのためだけに俺らを拾ったっつったら、ここから本気で突き落とすぞ」

いつまでも拘泥しても仕方はない。

多くの負傷者を抱えていた輸送ヘリチームの判断も間違ってはいなかっただろうし、クウェンサー達もこうして自力で命を食い繋げた。

であれば、もっと考えるべき事に頭を使うべきだ。

「『連中』が消そうとしていたものだけどさ」

クウェンサーは、輸送ヘリの振動に身を任せながら呟いた。

「やっぱり、あの地下構造体にあった木箱なのかな？　ほら、光ファイバーのケーブルとか、ボルトとかナットとか、あと変な粉末か……」

自分の携帯端末で撮影した何枚かの写真画像を眺めていたクウェンサーだったが、そこで、

『うわっ!?』という叫び声を耳にした。

銀行口座番号の持ち主を調べるため、嘘サイトの制作などを手伝ってくれたインテリちゃんな歩兵達の一人だ。

「なに、どうしたの？」

「ゴロツキ達の端末から辿った、ネットストレージのマスターキーを探っていただろう？……まずいものが出てきた、かも？」

全員で線の細い歩兵の近くへと集まった。

小さな画面を、いかつい男達が揃いも揃って覗き込む。

電話か何かの会話の録音、金のやり取りを表すグラフ、外部協力者向けなのか企画書のように体裁を整えた資料もあった。それらを要約した、議事録のようなファイルを表示させる。

『オセアニアの戦災復興と、それによって得られる同国に対する影響力について。重要インフラリストと、その根幹に関わる事で暫定政権に楔を打ち込む方法論』

「……おいおいおい。これも、これも、この土建屋も……。みんな、オセアニアの復興事業で大きな仕事をしている建設大手だぜ。もしもこれが全部黒幕さんのお仲間か、あるいはそうと知らずに操られる仕組みがあったとしたら……」

「ま、いくら大きな土建屋って言ったって、実際に道路にアスファルトを敷いたりガス管を地下に埋めたりするのは、現地で雇った人達だからな。雇用促進のためもあって、積極的にオセアニアで人員調達しているって話だし。……つまり、その中に胡散臭いゴロツキを混ぜる事だってできる」

「上がどんな建設計画を立てたって、下がこっそりサボっちまえば、いくらでも計画は遅延させられる」

「電気、ガス、水道、学校、病院、電話にインターネット。どれもこれも生活に必要な重要インフラ。この整備が遅れに遅れたら……」

「オセアニアの暫定政権は大ダメージだ。政権公約ってのは基本的に先出しの口約束だからな。テメェの口で言った事をテメェで実現できなきゃ人の心は離れていっちまう。となると」

「実際に遅れて大ダメージを与えるか、言う事聞かないと遅らせるぞと脅しをかけるか」

「どっちにしたって、この『どこかの誰かさん』はオセアニアの政権運営にとんでもなく強い影響力を獲得しつつあるのは間違いねえぞ」

『「正統王国」、「資本企業」、「情報同盟」、「信心組織」、これら世界的勢力の多国籍軍の支配を排し、我々が支配者として横槍を入れるために必要な事』

「どこかの誰かは、オセアニアの暫定政権をこっそりと揺さぶって、骨抜きにしようとしてやがる。自分好みの利権を貪るために、国の仕組みを全部組み替えちまおうって寸法だ」

「となると、邪魔なのは俺達、多国籍軍？」

「……ああくそ、国際衛星テレビの重役とかブログの王様とかに金撒いてたのはそのためじゃねえか!?　インフラ整備の失敗でオセアニアの民衆の怒りは沸点ギリギリまで高まっちまう。そこで多国籍軍に対する根も葉もない噂を複数の有力ソースからばら撒かれたら？　元々あった怒りの捌け口って意味合いもあって、あっちこっちで大規模なデモが起きちまうぞ!!」

「俺達がここに駐留していられるのは、オセアニアの治安の維持に貢献しているから、って建前があるから。……仮に、『多国籍軍がいるから大規模デモが頻発して、そのために無辜の一般市民が死傷している』なんていう風に国際世論が誘導されたら……」

「後は黒幕さんの思いのままだ。俺らの『上』のお偉方だって、救国の英雄ってイメージを政治や外交で有利に使うために、馬鹿高い軍事予算を税金から割いて割り当ててる。割に合わねえなんて判断されたら、マジで軍を退かせるかもしれねえぞ」

「そうしたら、新しい独裁と圧政の始まりだ。傀儡の陰に隠れてやりたい放題の時代がやってくるぞ……」

『近代司法整備という名の下に、国家構造を望みのままに作り替える方法論』

「元々、オセアニア軍事国は完璧に間違ったルールブックで国を動かしていた。それを『まともな法律』に整えるのは絶対に必要だけど」

「国をまとめるためのルールを、ゼロから刷新してやり直しましょうってんだ。テメェの利益を追求したい腹黒連中が、好き勝手な抜け穴を作るのだって、普通の国の制度や仕組みを少しずつ改造するよりずっと簡単なはずだぜ」

「大人に外国語を教えるより、赤ん坊の頃から教えた方が簡単ってヤツ？」

『「大国」の地理的基盤条件について』

「オセアニアは莫大な国土と地下資源を蓄えている。水資源さえ確保すりゃ大規模農法も実現できるから、食料についても心配いらない。平たく言えば、『長く辛い戦争』で有利に立てる条件を揃えてやがるんだ」

「大陸はほぼ一個の勢力でまとめられ、周辺は海で囲まれている。地続きで国境と国境がぶつかる国々に比べれば、攻め込まれにくい立地も整えているんだよな。……条件的には、かつての北米大陸と良く似ている。『世界の警察』なんて呼ばれていた国があった所だ」

「こんなトコに『新しい大国』を築かれちまったら、世界の軍事バランスは面倒な事になっちまうぜ。当然、黒幕さんはそれを狙っているんだろうけどよ」

資料に書かれた事を紐解きながら、そこまで議論を交わすクウェンサー達だったが、ふと根本的な疑問に眉を寄せた。

つまり、

「……でも、そんな『新しい独裁政権』を作ってどうするんだ？　現に、オセアニア軍事国はそれと似たような事をやっていた。でも結局、ヤツらの横暴は俺達多国籍軍の一斉攻撃によって終止符を打たれたんだ。表から裏から陰謀を張り巡らせたって、多国籍軍に睨まれたら何度でも瓦解させられるのがオチなんじゃあ……？」

「軍事国は分かりやすい失敗例だからな。あのお山の大将と同じ末路を迎えてえって思う陰謀家もいねえだろうし」

「それはここの民衆だってそうだ。いくら大規模デモを起こしたって、全長五〇メートルのオブジェクトを押し返せるなんて誰も思わない。そんなの子供だって分かる。そして、デモって

いうのは『数が集まれば押せる』と考えるからこそ起こるものだ。立ち向かった途端に列の先頭から薙ぎ倒されるなんて状況じゃ、呼びかけたって一人も集まらないぞ」

「……何か、『反抗の象徴』みてえなのがいるな。でも、二〇機以上のオブジェクトを倒せると思っちまうほどの、象徴？　そんなもん一体世界のどこに……」

「……、」

クウェンサーは、ふと、携帯端末に目をやった。

正体不明のゴロツキが持っていたものではない。『正統王国』軍から正式に支給された、クウェンサーの持ち物だ。

その中には、ポンプ施設跡地から続く地下構造体で撮影した、何枚かの写真画像が収められている。

主に、木箱の中身。

サイズごとに分けられたボルトやナット。

リールで束ねてある光ファイバーケーブル。

そして、袋詰めされた粉末。

「……まさか」

「あん？　ボルトだのナットだのの写真がどうしたってんだ。そんなもん、世界中のホームセンターで売ってるぜ」

「でも光ファイバーは違う。これ、チューブの中にアルゴン系のガスを注入して信号の安定性を格段に高めるタイプのものだ。メートルごとの値段も圧倒的にお高いから、一般家庭には出回ってない。超大型兵器の神経網なんて呼ばれている軍用品だ」

「ちょっと……待て。軍用品？　超大型兵器の、神経網？　それって、つまり……」

「そして、こっちの粉末」

ごくりと。

クウェンサーは写真画像を拡大し、袋の表面に貼り付けられたラベルの表示を何度も読み返す。困った事に、いくら確認しても読み違いとはなってくれない。

「高耐火反応剤。……オブジェクトの装甲板にしか使われない物質だ」

「じゃあ、黒幕どもが担ぎ出してきた、反抗の象徴ってのは……!?」

考えてみれば当然ではあった。

核ミサイルの直撃すら耐える怪物兵器に、正面切ってケンカを売れるものとは一つ。

戦争の代名詞。

全長五〇メートルを超える、圧倒的な武力の塊。

「……あいつら、オセアニアの砂漠中に張り巡らせたパイプラインを通って、オブジェクトの部品を少しずつかき集めてやがったって事なのか!?」

8

クウェンサー達を乗せた輸送ヘリの一団は、じきに整備基地ベースゾーンへと到着する。

しかし、それを待つのも惜しい事態になってきた。

「そもそも、オセアニア軍事国時代の〇・五世代だって、一体いつの間に建造されたかは詳細が分かっていないんだ。もしも、あれがパイプライン網を駆使して密造していたんだとしたら。それを丸ごと引き継いだ黒幕が、本当にオブジェクトを完成させた可能性は決して低くないぞ!!」

「自分に酔ってる暇で報告だクウェンサー！　くそ、爆乳ってまだキレてやがるかな。こっちの報告聞いてくれる状態なら良いけどよ!!」

無線機を通して状況と推測を片っ端から伝えていくと、フローレイティアの声は苦いものになった。

『お前達の処分は決して忘れた訳じゃないが……ちくしょう、そういう事か。道理で外が騒がしくなっている訳だ』

「……どういう事ですか？」

『整備基地外周を警備している歩哨からいくつか気になる報告が上がっている。地域住民が二〇〇〇人、二〇〇〇人とこちらに結集しつつあるらしい。今は整備基地の敷地を区切るフェン

スをガシャガシャ揺らしたり、小石を投げ込んでくる程度だが、これ以上派手な動きになれば実力行使で退散させなくてはならなくなる。報道陣のカメラもある中では避けたい選択肢なんだけど……』

そもそも、騒ぎの原因が分からなかった、とフローレイティアは言う。

色々な意見はあるだろうが、『正統王国』軍はオセアニアの民衆からそれほど嫌われた存在ではなかったのだ。

「インフラ整備の人為的な遅延と、民衆の怒りの矛先を俺達に押し付ける作戦はすでに始まっている……」

「ゴーサインが出たって事は、根っこにある新造オブジェクトだって完成している可能性が高くなってきやがった！　くそ、ジョークにしたってたちが悪いぜこいつは!!」

『ただ、オブジェクトをゼロから建造するとなると、丸々三年近くかかるはずだ。オセアニア軍事国崩壊のニュースを観て、パッと思いついた程度の陰謀じゃ時間的に間に合わない。だとすると……』

「ちょっと待ってください。フローレイティアさん、それってまさか!!」

『時間を逆算すれば良い。丸々三年前から黒幕の計画がスタートしたとしたら、それはまだオセアニア軍事国が、ザザ、崩壊する前の事だ……ざざざ。つまり、あの……ザザザ、ふざけ、た乱痴気騒……ぎ、ざざざ、そのも……のが黒幕、ザザ、の掌の上にあった可能性も……ザザ

ザザザザザザザ!!』

「フローレイティアさん？　ちょっと、フローレイティアさん!?　聞こえていますか!!」

「嘘だろ……。軍用の回線にジャミングだと……？　どこのどいつだ。これだけで立派な敵対行動だぜ!!」

クウェンサーとヘイヴィアは思わず顔を見合わせる。

その時だった。

雑音だらけの無線機に、今まで聞いた事もない声が入ってきた。

若い青年のものだ。

『オセアニアへようこそ。我々の国へ』

「……マジかよ。これに応えなくっちゃならねえのか。何言ったって嫌な予感にしか繋がらねえぞ」

『強酸爆弾でもしぶとく生き残ったと聞いてね。おかげでそちらもそろそろ真相には近づきつつあるだろう。近づいたところでもう遅い訳だが』

「〇・五世代のオブジェクトを使った、オセアニア軍事国時代の独裁体制の裏にも、『お前達』が関わっていたってくらいはな」

『だろうな。そもそも連中にはオブジェクトを独力で組み上げる金も技術も持ち合わせがなかった。もう分かると思うが、あれは「情報同盟」のガトリング033……いや、そちらの敵性

コードではラッシュなどと呼ばれる機体の設計データをダウングレード化した上で流したものに過ぎない』

ラッシュ……？　とクウェンサーは眉をひそめる。

『情報同盟』の操縦士エリート、オホホの声が脳裏をよぎる。

『だが、当時ヤツらが建造していたものが、その一機だけだったと何故無邪気に信じられるのだ？　一つ造れるなら二つだって造れる。砂漠の隅々まで張り巡らせたパイプラインと、それらを繋ぐ一〇〇以上のターミナル施設を利用すれば何だって可能だ。では問題。軍事国崩壊前から数年単位で計画を進めていた我々が、今日までにアリの巣の中でどれくらいのオブジェクトを蓄えてきたと思う？』

複数形。

輸送ヘリ内の全員の背筋を凍らせるには十分な言葉だった。

あんな怪物、一機だけでも十分過ぎるというのに。

「嘘だ……。オブジェクトは一機五〇億ドルもするブランド品だ。ただの一勢力に、そんなに確保できる訳がない!!」

『金を払うだけでそれ以上のものを確実に手に入れられるのだ。金とは何かを買うためのものだろう？　ならば出し惜しみをする理由など一つとして存在しない。違うか？』

「それ以上の……？」

『世界の警察だよ』

無線機越しに、青年はそんな事を言った。

ある記号。

一つの時代を象徴する用語を。

『今でこそ世界は「こんな」になってしまったが、かつては北米大陸の超大国が軍事バランスを完全に支配、掌握していた。平和な時代だった。模範と呼ぶべき国家もまた、時代の流れによって粉々に砕けてしまった！　今では「資本企業」と「情報同盟」の「本国」が腰を下ろしてしまっている。あそこに「一個の超大国」を復活させるのは現実的とは呼べない』

「……まさか」

『であれば、似たような条件を整えた立地を探して代用するより他はないだろう？　周囲を海に囲まれた広大な大地。食料、地下資源、人口、それらに申し分のない単一国家。高度な技術情報は我々が提供すれば良い。……素晴らしく良くできた立地は一つしかなかった』

「オセアニアを、第二の『世界の警察』に作り替える。それが『お前達』の狙いだって言うのか!?」

『これ以上に素晴らしい戦災復興もないだろう？　成功すれば世界中で蔓延する「クリーンな戦争」に終止符を打つ事ができる。三つも四つもある世界的勢力は一つに束ねられる。その中心にこそオセアニアは君臨する。理不尽な戦争で蹂躙され、その後も様々な世界的勢力に踏

みつけにされてきたこの大陸が担う事によって、新しい「世界の警察」はその象徴性を存分に知らしめる事ができるのだ』

「馬鹿にしやがって……」

吐き捨てるように、ヘイヴィアが言った。

「オセアニアに軍事国が樹立してからの暗い歴史の全部が、残らずテメェらの自作自演じゃねえか！　新しい『世界の警察』？　本当に戦争のない時代？　こんな血も涙もねえヤツが作った世界がろくなもんになるはずがねえ！　結局、望む世界を作るために好き放題に人を殺せる時代を作りてえだけじゃねえか!!」

『その問いに対する答えはこれしかないな。歴史は誰が作り、誰が書き残すものか知っているか？　と』

青年の声はどこまでも平坦だった。

汚い事をして罵倒されるのに慣れている手合いだ。

『そして、お前達が今からどれだけ騒いだところで、もはや情勢は覆せない。真下の街を見ろ。群衆の怒りの声は大空まで届くはずだ。地鳴りのような音の正体を知っているか？　それは街路を練り歩く暴徒達の足音だぞ。お前達にそれをなだめられるのか？』

「……」

クウェンサーは、思わず息を止めた。

聞こえる。低い低い遠雷のような音が。輸送ヘリの開いたドアから下を覗き込むと、砂漠の街のあちこちを何かが満たしていた。その一つ一つが人の頭で、建造物以外の道という道を全て埋め尽くしている光景には、うすら寒いものを感じる。

所々に、何か白いものが見えた。

どうやらそれはプラカードや横断幕のようなものらしい、と気づいたクウェンサーは、流れるような動きで双眼鏡に手を伸ばしていた。

だが、それを覗き込む前に、ヘイヴィアがクウェンサーの手首を掴んだ。

「やめた方が良い」

ヘイヴィアは、何故かライフルのスコープを取り外していた。

すでに一足先に覗き込んでいたらしい。

「あれは見ねえ方が良い。釣り針と一緒さ。最初はなんて事はねえって強がるが、後で小さな針が全然抜けねえ事に気づかされる。傷は、残るぞ」

何にそこまで拒否感情を抱いているのか、正直、クウェンサーにはイメージできていなかった。

つい先ほど、味方のヘリからの支援掃射で正体不明の敵兵がグチャグチャになるところを眺め、強酸爆弾で殺されかけた直後なのだ。そんなものに比べれば言葉の力なんて大した事はないだろう。そう考え、クウェンサーは好奇心から双眼鏡を覗いた。覗いてしまった。

そして。

「……」

……

……

……」

言わんこっちゃねえ、という言葉が、どこか遠くから聞こえてきた気がした。

クウェンサーの腕がだらりと下がり、拡大された視界は途切れたが、それはいつまでもクウェンサーの胸に穴を残していた。

今までオセアニアで血反吐を吐いて泥の中を這いずってきた全てが、一瞬で無に帰したような感覚。

こんなものは、一人二人の力で簡単に作り出せるものではない。

これは『大きな流れ』だ。

流行や風潮のように、目には見えないが人の一生を左右するもの。

普段であればCMを打つ広告代理店くらいしか意識しない『それ』が、明確にクウェンサー達の前に壁となって立ち塞がる。

「何だ。一体何であんな騒ぎが……」

開いたスライドドアから真下の街を呆然と眺めるクウェンサーに、敵から入手した携帯端末をいじっていた若い兵士が声を掛けてきた。

「ちょっと待て。ヤバいぞ、これ、とにかくヤバい!!」

「また何か資料でも出てきたのか？」

振り返ったクウェンサーに、その兵士は携帯端末を軽く放り投げてきた。

両手で受け取ると、小さな画面に表示されているものの正体がようやく分かってきた。

それは、何の変哲もない動画共有サイトだ。

ただし……、

『ははは。旬の話題にでも喰いついたか？』

無線機の向こうで、誰かが笑っている。

聞こえていなかった。

クウェンサーの頭はしばし現実から遊離し、その目がただ画面の中に流れる映像を追い駆けていた。

例えば、それはオセアニアの国際港で行われていた、人身売買事件についての数分間。

アップロード日時はわずか三〇分前。

再生回数はすでに一〇〇〇万に届く。世界的なサービスのはずだが、軽度の通信障害のようなガタつきがあった。

『報道とは娯楽だ。陰惨な事件に口では文句を垂れながら、実際には検索する手を止められない。テレビや新聞が幅を利かせていた頃とは違って、自分から調べなければ何も表示されない時代なのにな。つまり、それだけの熱があるからさ』

自分達が解決したはずの事件や戦争が、何か別の目的で再利用されている。

この事態は、この混乱は。

ある意味において、クウェンサーやヘイヴィア達が招いたものなのだ。

『そしてインフラの再整備の途上にあるオセアニアでは、娯楽に力を回す余裕なんてない。民衆の心は飢えている。そう、彼らは楽しみたいんだよ。俺達は、ダムに小さな穴を開けるだけで良い。後はお前達が見ている通りだ。圧倒的な力の奔流が大陸を席巻していく』

残酷な成り立ちを隠した子守唄を歌うように、無線機は口ずさむ。

『ナイトスカイ。この世界はまるで暗い夜空だ』

それはまるで歌詞。

耳触りは良いものの、どこか現実から遊離した言葉の羅列。

『先の見えない、皆の頭を上から重たく押さえつけてくる、星なき夜空ナイトスカイ。誰かが変えなくちゃならない。そしてそれは難しい事じゃない。難しいと思い込まされてきた事自体、

暗い時代を支配する連中の策謀だったんだ』

作っている者には、それが分かっている。

聞いている者だって、きっと本当は分かっている。

『星なき夜空に星を掲げて、一つの旗を作ろう。だから最初は、俺達の掲げる象徴は暗い夜空のような藍の一色なのだ。たった一つの星で良い。藍色の星なき夜空へたった一つの星を輝かせる事ができれば、必ずやこの暗い時代を優しく導くきっかけとなる。ここで世界の中心に立つか、永遠に端へ追いやられるか。自分の頭で考えると良い』

それでも引っかかる。

何故？

彼らオセアニアの人達は、そこまでの不満を抱えていて、それを利用されたのか。

それとも、原動力たる不満さえも、誰かの手でインプットされたものに過ぎないのか。

例えば、それはたった一人の軍人を殺すために夜の砂漠で行われた、オブジェクト同士の大規模衝突についての数分間。

ありがとう、という声を聞いた。

色々な策を練り、そのいくつかは君達に潰されてしまったが、おかげでもっと上等な起爆剤

を手に入れる事ができた、と。

『トウルースシアター。動画の名前だよ。形のないものに名前をつけて枠に収めてやると「象徴」になる、印象操作の基本だ。そして次は具体的な方向性を与えてやれば良い。例えば、誰かに押し付けられたものではなく、自分達で象徴となる一つの旗を作って、自分達の存在を世界へ広く喧伝しよう、とかな。こいつは理想と欲望を上手に混ぜ込むのがポイントだ。ナイトスカイという旗印を藍の一色にしたのも、自宅のカーテンに塗料缶の中身をぶちまけるだけで簡単に作れるからだ。下手に「複雑で格好良い紋章」じゃ、誰にも用意はできないのでな。こちらは印象操作の応用編だよ』

使われている素材に『嘘』はない。

だがツギハギのタイミングに悪意があり過ぎる。たった数分間の動画を観ていると、問題の発生とそれに振り回されて無秩序に騒ぎを拡大させているだけに思えてくる。中には、これがすでに解決したという事さえ分かっていない人もいるのではないだろうか？

『とっくに盤は詰んでいる。詰んだと分かったから安心して声を掛けた。藍色の旗ナイトスカイはすぐにでも大陸全土を覆い尽くし、軍民入り乱れる圧倒的な人の渦を前に、クリーンな戦争とやらにとり憑かれた軍高官の決断を躊躇させる。そこから生まれる時間差は決定的で、もう追い抜かれる事もない。さようなら、敗北者。我々は勝者だけが残った世界で利益を貪り、平和を謳歌させてもらうよ』

「……名前を教えろよ。お前の名前だ」
『何故？』
「墓に刻むのに必要だろ。それくらいは手配してやる」
無線機は、わずかに沈黙した。
向こうでは笑っているのかもしれない。
『カンパニーでも、ラングレーでも、ペンタゴンでも良い。かつて「世界の警察」が一度失われたその時に、我々の名前もまた力と意味を失ったのだから』
「……？　まさか」
『一つの時代の亡霊だよ。ただ、我々を指して呼びたければこう声を掛ければ良い。世界中で噂の端々にのぼる、全身黒ずくめの奇妙な影……ＭＩＢとでも、な』
声と同時に、通信が途切れた。
クウェンサーとＭＩＢの黒服、どちらかが無線機のスイッチを切ったからではない。
ゴドン!!　と。
輸送ヘリが、凄まじい爆発に巻き込まれて激しく揺さぶられたからだ。
「うおっ!?」

「何だ、パイロット!?　一体どうしたんだ!?」

輸送ヘリのドアは開いていた。そこから投げ出されないよう、全力で内壁の手すりを摑みながらクウェンサーは操縦席へ声を掛ける。

返事は切迫していた。

「地上から攻撃された！　おそらく安物の迫撃砲だ」

「迫!?　手榴弾より遠くへ砲弾を飛ばすためのもんじゃねえか。どうやったら対空攻撃に使えるんだ!?」

「知らない！　現にぶつけてきてる。本来の使い方を飛び越えて、無理矢理に当ててきた。ミサイルと違って誘導性能はない。大丈夫、そう何度も当たる訳……!!」

『民衆の怒りを知れよ。砲弾は一発二〇ドル程度だ。流石は世界中の「泥沼」でばら撒かれるロングセラーなだけはあるな』

「来た、くそ、発射音だ、地上から来る!!　振り切れよちくしょう！　右手側へ逃げろ!!」

「さっきの爆発で舵が……!?」

回避が追い着かない。

クウェンサーは揺さぶられながらも、全力でヘリのドアを閉める。

直後に、二回目の爆発があった。

閉めたはずの鋼鉄のドアがひしゃげ、内側にある反対側の壁まで一気に突っ込んだ。しかし

無駄ではなかっただろう。ドアがクッションになっていなければ、大量の爆風と細かい破片が機内をくまなく蹂躙していたはずだ。

それにしたって、今のは決定打だった。

空中で爆発四散はしなかったものの、輸送ヘリは制御を失って大きく回る。高度もみるみる下がっていく。明らかに、この鋼鉄の塊は地上に向かって落ちている。

「どうすんだよ、おい、どうすんだ!?　一日に二回も墜落に付き合うなんて冗談じゃねえぞ！　機体は立て直せねえのか!?」

「今やってる！　順調なように見えるのか!?」

パイロットの怒鳴り声が返ってくる。

クウェンサーは開いたドアから投げ出されないように踏ん張りながら、明確に眩暈を感じ取っていた。

追い打ちをかけるように、無線機からは青年の声が聞こえてくる。

『ははは。血に飢えた群衆に取り囲まれる兵隊というのは悲惨だぞ。これもまた、多国籍軍を締め出す象徴として機能するかもしれないな』

「駄目か、くそ!!」

無線通信を強引に切って、ヘイヴィアは開いたドアから外へ目をやった。

それから、今度は機内のコックピットに向けて大声で呼びかける。

「おい、機首はどっちに向けてんだ!?　人のいねえ方だろうな！」
「ああ！　街中のゴミ捨て場だ。山みたいに積んでいる。対人センサーで走査したが反応はない!!」
「ならよし」
何か覚悟を決めたらしいヘイヴィアに、クウェンサーは声を掛ける。
「これからどうするんだよ」
「決まってんだろ」
ゴオ!!　と五階建てくらいの粗雑なビルの屋根を掠めるように輸送ヘリは落下を続ける。
ヘイヴィアはコックピットへ身を乗り出し、いつまでも機体操縦に固執するパイロットのベルトを軍用ナイフで切断し、強引に引きずりながら、
「飛び降りる」
絶叫は止められなかった。
クウェンサー達は崖っぷちへ向かう列車から途中下車するような格好で、平べったいビルの屋根へと身を放り出していく。直接的な高低差はおよそ数メートル。
数秒遅れて輸送ヘリはゴミの山に激突し、大爆発を巻き起こした。

帰りのアシは、もうどこにもない。

9

輸送ヘリは市内のゴミ収集所へと墜落した。派手な爆発が起き、毒々しい黒煙が天へ上っている。クウェンサーは五階建てくらいの古びたコンクリートの屋上に転がりながら眺めていた。

「くっそ、痛い……!!　骨とかやってないだろうな!!」

「折れたりひびが入ってたりすりゃ泣き叫んだろ、学生！　プラシーボ効果に当てられてねえで、さっさと起きろ。ここから移動しねえと!!」

「そんなにヤバいと思うか……？」

「誰が俺らのヘリを落としたと思ってやがんだ。訓練された兵士じゃねえのは確かだな。オセアニアの復興は混乱期だって話あったろ。治安が悪けりゃ、自衛のために武器が……」

ヘイヴィアの言葉が、いきなり途切れた。

ドォ!!　という轟音。ハットトリックが決まった時のスタジアムの歓声のようだった。恐る恐る見てみれば、黒煙が噴き出す輸送ヘリに向かって、何か金色の津波のようなものが襲いかかるのが分かった。

人だ。

金色に見えたものは彼らの髪だ。手近なもので強引に染めたのか、まだ乾き切らずにギラギラと輝く藍色の旗をたなびかせ、数百数千もの人の群れが、乗組員を引きずり出すために近づいているのだ。

ナイトスカイ。

星なき夜空、暗い時代への不満を表す彼らの象徴。

「……拳銃、アサルトライフル、ロケット、迫撃砲、何でもありだ。連中が目立つ方へ注目している内に、ここを離れねえと、逃げ場がなくなっちまう。広場に連れ出されて公開処刑だってゼロとは言えねえ熱狂ぶりだぜ」

ヘイヴィアが肩に下げていたアサルトライフルを構え直しながら悪態をつく。

それを見て、クウェンサーは思わず喉を鳴らした。

「ちょっと待てヘイヴィア。なに構えているんだ」

「奇麗ごと言ってる場合じゃねえんだよ!!　交戦規則もクソもあるもんか。治安が回復してねえオセアニアじゃ、自衛のためとか言って主婦とかサラリーマンまで銃下げてその辺歩いてんだ。ナイトスカイとかいう旗を掲げるあの連中からいつ撃ち込まれるか分かったもんじゃねえ以上は身を守るしかねえだろ!!」

「駄目だ……。それは駄目だ!!」

火薬や燃料などが二次的な爆発を起こす危険があるにも拘らず、頭に血が上った群衆は構わ

ず輸送ヘリを取り囲み、中を覗き込んでいる。まるで角砂糖に群がるアリだ。彼らが屋上にいるクウェンサー達に気づけば、次はこのビル全体が取り囲まれるのは目に見えている。

それは分かっている。

分かっているが。

「旗持った連中は何百人、何千人といやがるんだ!!　ここまで数の差が開いちまったらプロだの素人だのは関係ねえ。全方位から味方に当たるのもお構いなしに撃たれまくるぜ。そうなったら蜂の巣どころじゃねえ!!」

「でも……！」

銃を持ってない民間人もいる？　そっちに捕まったって悲惨な事になるのは変わらねえ。むしろ簡単には死ねねえ分だけグロテスクはいつまでも続いちまう！　頭に血が上った今のあいつらに、半殺しで済ませるなんてブレーキついてると思うのかよ!?」

ガリガリ、という何かを擦る音が聞こえてきた。

クウェンサーが目をやると、輸送ヘリのパイロットが鉄の棒のようなもので、指輪の内側を擦りつけていた。元はテレビのアンテナだったのかもしれない。

「何を……やっているんだ？」

「指輪に妻の名前が刻んである。何が起こっても受け入れる覚悟はできているが、家族にまでは迷惑をかけたくない……!!」

空気がおかしくなってきた。

戦わない、という当たり前の選択肢を提案するクウェンサーの方がおかしいと言われるような。

雰囲気に当てられている。

片方が銃を持てば、もう片方も銃を持たなくてはならない。負の連鎖にしか繋がらない理論が、群衆だけでなくクウェンサー達まで蝕み始めている。

トゥルースシアター。

ヤツらが勝手に加工した動画の世界へ、呑み込まれていくように。

ナイトスカイ。

星なき夜空とは、何の皮肉か。ＭＩＢが作り出した希望のない暗い時代が、まさにクウェンサー達を侵蝕しようとしていた。

ヘイヴィアを中心に、ライフルを取り扱える数人が先導して、屋上のドアからビルの内部へと侵入していく。階段や通路には誰もいなかった。ガラスが砂埃で汚れているため、中は薄暗い。壁には何か印のようなものが多数残してあった。取り壊し予定のある廃墟なのかもしれない。

もしも、人と鉢合わせたら何が起こるか。

砂埃や雨風をしのぐため、誰かが住んでいたら？　物置代わりに使っている近所の人がいた

ら？

油断なくあちこちへ銃口を向けるヘイヴィア達を見て、クウェンサーは息が詰まりそうになる。

だけど、こんなのは違うはずだ。

クウェンサー達の敵はオセアニアの一般市民ではない。彼らを操ってほくそ笑んでいる、MIBとかいう『時代の亡霊』だ。ここで小競り合いになって発砲沙汰になれば、ヤツらをますます喜ばせるだけだ。虚構から始まった『多国籍軍という民衆の敵を追い出す』という思想が、現実のものと結びついてしまう。

そのはずだ。

そのはずなのに……本能的な恐怖を抑えられない!!

キィィーン!!　という、ハウリングのような音が、ビルの外からクウェンサー達の鼓膜を叩いた。

安物の拡声器のものだ。

『ヤツらを追い出せ!!　これ以上の横暴を許すな！「正統王国」のヘリが落ちたのは病院のすぐ近くだ。ヤツらは結局、自分達の利益の事しか考えていない！　我々の人命などどうなっても良いのだ!!』

「くそったれが……！　わざわざ迫撃砲ぶち込んできたのはテメェらだろうが!!　そもそもき

ちんとゴミ捨て場に落としたはずだぜ!!」

「応えるな!!　俺達まで頭に血を上らせたって何も解決しない!!」

「ならどうしろってんだ!?　じっとしてりゃ騎兵隊が来るとでも思ってんのか!?」

別の動きがあった。

ドオオオオオオ!!　と、サッカーの国際試合で決定的な一点が入った時のスタジアムのような、地響きに近い大歓声が遠くから聞こえてきたのだ。

クウェンサーは窓の外を確認できない。

外から発見されたらというリスクもあるし、何より恐怖心が先立つ。

とにかくクウェンサー達八人は階段を駆け下りる。

一階まで到着し、ヘイヴィアは階段の近くにあった裏口のドアに触れる。ゆっくりとノブを回し、薄く開く。

至近、三〇センチの辺りに、すでに群衆の壁があった。

息遣いや汗の匂いまで感じられる距離だ。

藍色の旗を染めるためのものか、塗料のような臭気も混じっている。

ヘイヴィアは、呻きを必死に押し殺す。

多くは拡声器の声に集中しており、こちらを向いていなかった。

地雷を処理するような繊細さで、たっぷり時間を掛けて数センチだけ開いていたドアを再び

閉める。本能的に内鍵を掛けたくなるが、どうしても硬い音が鳴る。『とりあえず』の誘惑を、理性で必死に抑えつける。

「駄目だ、表は全部埋まってやがる」

「逃げられないのか……？」

そうしている間にも、拡声器は言う。

『騎兵隊だ！　我々の騎兵隊がやってきたぞ!!　道を開けろ、ヤツらの元へ死神を届けろ!!　四駆が広場へ突入した時がヤツらの終わりだ!!』

どっ、と嫌な汗がクウェンサーの背中から溢れた。

今のがブラフでなければ……、

『我々は、どこへ敵が逃げても必ず追い詰める！　対人センサーを装着した五〇口径の重機関銃だ。木造だろうがコンクリートだろうが、遮蔽物は意味をなさない!!　走査し！　発見し！　狙いを定めて破壊する!!　……トゥルースシアターで何を見た？　ナイトスカイの旗を振った時に何が湧き上がってきた？　それこそが真実だ!!　マスコミ操作に踊らされない真の情報なのだ!!』

裏口のドアから後ろ向きに下がりながら、クウェンサーはパニックに陥りそうな頭を必死に動かそうとする。

「（まずいぞ。なんか毛色が違うのが遠くからやってくる……！）」

「（群衆を味方につけたＭＩＢとかいうのが直接やってくるってか。面白え！　機銃積んだオフロードカーだろうが何だろうが、こっちから蜂の巣にしてやるぜ!!）」

「（でも、それを見ている群衆には、どこからどこまでがプロと素人の線引きなのかは分からない！　一発の銃声で場が沸騰してしまえば、後は群衆が無限に襲いかかってくるぞ!!）」

幸い、辺りの道路を全て群衆が埋め尽くしているらしい。すぐには来ない。だが、それも結局は時間の問題だ。根本的な解決にはならない。

ここに留まって戦うか。

ここを離れてどこかへ身を隠すか。

方針を決めなくてはならない。

「（逃げるってのはナシだぜ、クウェンサー！　建物の壁ぶち抜く重機関銃にゃ対人センサーがあるって話だろ。どこに隠れたって殺されちまう。貫通力が高過ぎるから、すっかり沸騰してる群衆だって一緒に血まみれになっちまう!!　だったら戦うしかねえ!!）」

「（でも、戦ったって生き残れない！　そもそも戦う事に意味なんかない!!　始めた時点で俺達は負けているんだ!!）」

「（なら一人で逃げろよ。賭けても良いが、テメェよりは長生きできると断言できるぜ!!）」

結局、正しい答えなんてないのか。

何を選んでもＭＩＢには勝てず、いつかはこの建物も包囲されて蜂の巣や八つ裂きにされるのがオチなのか。

整備基地ベースゾーンからの救援は間に合わない。

全方位を取り囲まれた中で、都合の良い抜け穴があるとも思えない。

一発でも撃てば全てが終わる。

かと言って、武力を使わずに言葉だけで説得できる可能性がどれくらい残っている？

「……、」

緊張によって呼吸が極限まで浅くなったクウェンサーは、具体的な脅威が到達する前に、眩暈で死んでしまいそうだった。

そして。

そして。

そして。

事態が、決定的に、動く。

彼らの与り知らぬ所で、彼らの明確な命が。

10

その時。

ある少女は大勢の群衆に混じって声の主を見上げていた。そいつは路上に停めてあった欧州製のバンの屋根の上に乗り、工事現場で使うような安物の拡声器を口に寄せて大音量で何かを喧伝していた。

『「正統王国」を追い出せ！　多国籍軍を全部排除しろ!!　ヤツらは何も生み出さない。誰も守ったりはしない！　善良なる市民は銃を持って侵略者と戦え!!　騎兵隊を広場へ通して血祭に上げてやるんだ!!　対人センサーがあれば、どこへ隠れていても炙り出せる!!』

ある少女は聞き入っていた訳ではない。

逆だ。

彼女は知っているのだ。藍色の旗を肩で担ぎ、バンの上で大声を張り上げているその男の演説に、嘘が混じっている事に。実際にその目で『彼ら』を見てきたからこそ、街を行き交う話の中に明確な悪意が紛れ込んでいる事に。

だから。

『……？』

酔ったような演説が、わずかに途切れた。

小さな石が飛んできたからだ。

その場の注目が、拡声器の男から少女の方へと流れていく。
「知ってる」
少女は、言う。
「私は知ってる!!　彼らが誰も守らないなんて嘘だって。だって、実際に助けてもらったもん。悪い人さらいに連れ去られた時に、あの人達は助けに来てくれたもん!!　トゥルースシアターみたいな混乱は起きていない!!　あれにはちゃんと続きがある!!」
『この……!!　根も葉もない事を!!』
怒鳴り声に触発されたように、近くにいた数人が少女の髪を掴んだ。
そのまま引きずって、ここから遠ざけようとする。
甲高い悲鳴が炸裂する。
それを当然のものとして受け入れ、肯定する群衆がいた。
しかし、そうならなかった者もいた。
「なあ……」
「ああ」
最初は、何人かの青年達だった。
彼らは少女をどこかへ連れて行こうとする男達の前へと立ち塞がった。
髪を掴んでいた一人が言う。

「何の真似だ？」

「いやさ、俺には善とか悪とか、多国籍軍とか侵略者とか難しい話は良く分かんねえんだけどよ」

青年は一度だけ肩をすくめて。

真っ向から、顔を近づけて、至近距離で言い放つ。

「テメェらの語る正義ってのは、泣いてる子供の髪の毛掴んで引きずり回すようなクソ野郎の事を言うのか？　だとしたら、そいつにやついていけねえよ」

少女の髪を掴んだその男は、少数派を拳で黙らせようとした。

しかし、直後に気づく。

圧倒的に大多数の視線が、彼の背中に集中している事に。

どちらが多くて、どちらが少ないか。その比率が、傾き始めている事に。

その時。

オセアニアから遠く離れた海上の豪華客船で、ドロシーという名前の老婆が、型遅れの無骨なノートパソコンを開いていた。孫に勧められるままにアカウントを取ったものの、長い間放ったらかしにしていたＳＮＳのサイトへ、久しぶりにログインする。

騒ぎがあった。
熱狂があった。
すでに匿名でアップロードされたトゥルースシアターなる数分間の動画は、世界中のテレビ局でも取り上げられていた。自分の肩に担いだカメラで映像を撮るという矜持はすでに失われたのか、中には粗い動画をそのまま使い回してニュースキャスターの声を被せているヘッドラインまである。
お互いの顔が見えず、頭に血が上ったところで相手の胸ぐらを掴む事もできないネットの上では、現実世界よりもはるかに過激で毒々しい言葉が満ちていた。多国籍軍を皆殺しにしてオセアニアの独立を促す賛成派、彼らの飛躍が自分達の生活圏を圧迫するとして即時武力介入しろと促す否定派。
でも、彼らはきっと本物のオセアニアを知らない。
トゥルースシアターなる、たった数分間の動画を通してしか、あの国を知らない。
『私は知っている』
しばし考え、老婆は慣れない手つきで、ゆっくりと文字を打ち込んでいった。
ここではない、もう一つの世界において。恩人の若者達の尊厳を守るために。
抵抗を始める。
『あの国の良い所も悪い所も。都合の良い悪役を求めて映画気分に浸りたい夢想家は、私の話

を聞いてから自分の発言をもう一度読み直してみると良い。きっと、穴に入りたい気分になるはず』

その時。

極寒のシベリア。組み立て式の金属コンテナのようなテントの中で、戦場カメラマンのシーワックスはデジタル一眼レフのカメラを操作し、つい先ほど撮影してきた写真のチェックを行っていた。暑さもそうだが、極端な寒さもまた精密機器の誤作動に繋がる。せっかくの戦果が不意に吹っ飛んでしまう前に、小型の衛星通信装置を介してネットストレージへバックアップを取り始めた。

現地の、若者というより子供に近いガイドが興味深そうに装置を眺めている。

「ヘイ、それってあのインターネットもできるのか？　こっちじゃ誰も線を引いてくれないもんでさ。まあ、何百キロも光ファイバーを埋めたって、熊が掘り返しちまうから仕方ねえんだけど。電柱も雪の重みで倒れちまうしよ」

こういう作業の合間に、シーワックスはふと思う事がある。

自分は確かに真実の一端を四角く切り取り、世界へ発信している。だが、それはどれくらいの人に伝わっているのだろう？　そして、その意図は歪曲する事なく『正しく』伝わってくれ

ているのだろうか、と。

ちなみに、情報の網に憧れるガイドが言うところのインターネットは、作為的に歪められた情報で狂乱の中にいた。トゥルースシアターなるたった数分間の動画に、どれくらいの悪意が込められているかは、写真の専門家であるシーワックスにはすぐにピンときた。おそらく映像畑の人間なら、さらに二倍三倍と見つけられるはずだ。

真実は、こんな簡単に歪められる。

いちいち嘘など盛り込まなくても、悪意のある手で編集するだけで、印象は操作されてしまう。

しかし、スポーツ選手は卑怯なドーピングをした方が圧倒的に強い。倫理的にどうあれ、その強さ自体は紛れもない事実だ。同じく、なりふり構わず加工された映像のインパクトは、公正に真実を撮影した写真など簡単に吹き飛ばしてしまう。結局、聴衆が求めるのは刺激なのだ。『真実』とは、その刺激を得るための手段の一つに過ぎなくて、もはや目的などから切り離された場所へ追いやられている。

こんな世界の中で、正しさなんてものにどれくらいの意味がある？

壁を二重構造にして、空気の性質を利用して断熱されているはずの金属製テントの中で、シーワックスの背筋を得体のしれない悪寒が伝っていく。

そんな時だった。

何も知らないガイドが、無邪気とも言える声でこう言ってきたのだ。

「なあ。アンタ前はどこにいたんだ。ずっとこっちにいた訳じゃないんだろう？」

それを聞いて、シーワックスは微かに笑った。

こんな世界だからこそ、簡単に諦めてはいけない事がある。

たとえ少しずつでも、真実の種を蒔く。それは長い冬の時代を乗り越え、やがていくつも芽吹くだろう。聴衆は分かりやすい刺激を求めるのは事実。だが、『実話』という言葉の響きもまた一つの刺激ではあるのだ。

聴衆は残酷なほど素直だ。

つまらない写真はたとえ数十万の生き死にが関わっていたって平気で素通りしていく。説教臭いと罵倒する者さえいる。一方で、何の変哲もないペットの動画に世界中のアクセスが集中する事だってあり得る時代だ。

だけど同時に、聴衆は驚くほど公平を愛する。

それが面白い話であれば、虚構だろうが真実だろうが平等に喰いつく。であれば、目指す場所はそこだ。『真実』である事にあぐらをかくだけでは意味がない。虚構のエンターテイメントを打ち破るほどの強い魅力と話題性を備えた、圧倒的な実話を提示してこそ、『正しい競争』と言えるのだ。

そう、つまり。

誰が何と言おうが、より面白いものが、最後に勝つ。

デジタル一眼レフのマイクロメモリーを差し替え、かつて渡り歩いた戦場の写真を表示させながら、シーワックスはゆっくりと話し始めた。

「こいつはオセアニアっていう国での写真なんだがな、ここで一体何があったと思う?」

その時。

欧州の『安全国』で、片腕を失った女性軍人は軍法裁判に出廷していた。今はわずかに与えられた休憩時間だったが、そんな中でもマスコミのテレビカメラは彼女を離してはくれなかった。

そう。

『安全国』一つの中だけでなく、様々な国や地域へ同時配信される大きなニュース番組のテレビカメラが。

「英雄、ですか? 腐敗を暴くと言っても、むしろ、私は軍の汚れ役といった方が近しい存在です。ですから、その名誉は他の方々に譲るのが正しいのではないかと」

精密に動く義手を使って、アイスコーヒーの入った紙コップを正確に掴みながら、軍事裁判所の通路にある長椅子に腰掛けた女性は薄い笑顔と共にそう言った。

「ものの善し悪しは別として、私は間違いなく軍内部では鼻つまみでした。いや、今もそうなのかな。でも、こんな鼻つまみを暗殺するための陰謀に巻き込まれておきながら、それでも構わず私の命を助けるために銃火の中へ飛び込んできてくれた人がいました。最後には、オブジェクトの前に立ち塞がった。ああいう人達こそが正しい軍人であり、ああいう人達が損をしないよう組織を健全化に導く事が、私なりの恩の返し方だと思っています」

ゆっくりと。

何かを思い出すように、彼女は言う。

「英雄、と。そう呼ばれる人達は、確かに存在します。ただ、困った事に、そうした人達は自分でそうとは名乗らない場合が多い。私は、オセアニアで任務に就く全ての兵士達に敬意を表します。彼らがそう名乗らずとも、皆が彼らを英雄と呼んでくれる日が来る事を願って」

その時。

『情報同盟』の操縦士エリート、馬鹿二人からは『オホホ』などと呼ばれているその少女は、連日続く大規模なネットライブの最中、画面の中から世界中にこう語りかける。

『じょうほうの正しいとりあつかいと、より良い未来のためにたたかう、わたしたち「情報同盟」にとってはうれしくないニュースがながれていますわね。ＭＩＢ？「世界の警察」？

しんぎじゅつをつかった、みちのオブジェクトによるせかいとうち？』

オセアニア。

一つの大陸の簒奪と、それによって始まる世界の軍事バランスの刷新。

『ふだんなら、完成されたげんこうをにこやかなえがおでかんぺきにはなすことで、いんしょうそうさの1つでもしてやるところですが』

しかしだからといって、中心地以外の場所から影響を与えられないとは限らない。

世界は小さくなった。

圧倒的な電子の網が、地球の反対側からだろうがリアルタイムで戦況に影響を及ぼす時代がやってきたのだ。

『どちらが正しいか、何が正しいか。それくらい自分のあたまでかんがえやがれ☆　ですわ。おほほ』

最初は、小さな波だった。

だが、それは少しずつ、確実に、人為的な印象操作を施された民衆の心へと深く広く浸透していく。

まるで。

天然のダイヤと人工のダイヤには雲泥の差があるように。
どちらが、より多くの人達の心を惹きつけるかを示すように。
事態が。
動く。

「……何だ……？」
廃墟となったビルの中であちこちに目をやるクウェンサー達は、その『違い』を敏感に嗅ぎ取った。
「空気が変わってきた……？　ピリピリした怒りが、どこか別の場所へと向け直されていくぞ……」
怒気や殺意といった強い感情は、それ自体が心に刺さる。合気や居合などでは、敵の『間』を外して一方的に攻撃するため、具体的な技術として研がれるほどだ。クウェンサーやヘイヴィア達は武術の達人ではないが、元から周囲を取り囲む感情の総量が半端ではなかった。だから、クリーンな戦争に浸かった彼らでも気づけたのだ。
状況の変化に。
いつまで経っても、群衆は扉を破って殺到してこない。機銃を積んだＭＩＢの四駆も、何か

に阻まれたように動きを見せない。
「妙だぜ……。外の様子がおかしい」
窓は板で塞がれていたが、板と板の隙間から覗き込むような格好のヘイヴィアが、何か呟いていた。
「例の、ナイトスカイとかいう藍色の旗が見当たらねえぞ。何だ、みんな揃って放り捨てちまったのか……？？？」
ひょっこりと、通路の角から細い手が出てきたのはその時だった。
その手はクウェンサー達へ手招きしている。
潜めるような女性の声で、話しかけてくる。
「こっち、逃げるならこっち」
最初は、誰も動けなかった。
罠かとも思った。
誘いに乗って近づいた途端、頭にずだ袋を被せられてどこかへ連れて行かれるんじゃないか、と。
だが、このまま拘泥していても事態は好転しない。
一歩踏み出したのは、クウェンサーだった。
「おいクウェンサー!?　本気で信じるのかよ!!」

「一発も撃たずにここまで耐えたから、何かが動いたんだ。だったら、俺はこの変化に乗る。自分達で掴んだチャンスくらい、自分達で使ったってバチは当たらないはずだ!!」

ヘイヴィアは、自分が両手で掴んでいるアサルトライフルへ、わずかに目を落とした。

自分が何を誰に突き付けようとしたか、ようやくそれを思い出したように、居心地の悪い舌打ちをする。

「ちくしょう、この超絶美形天才金持ち貴族ヘイヴィア様が我を失うとはな……。確かに、こいつはお声を掛けてくださった貴婦人に向けるもんじゃねえ!!」

クウェンサーとヘイヴィアがドアの方へ向かった事で、場の雰囲気全体が動いた。

ヘイヴィアは上等兵、クウェンサーに至っては『学生』だ。生き残った兵士達のほとんどは彼らより階級が上だから、無理に従う道理はない。

しかし、ヘリのパイロットはこう言った。

「元々、落ちた場合は歩兵の誘導に従えと言われている。お宅らに任せるよ。とにかく生きて整備基地まで帰れるなら何でも良い！」

上等兵より階級が上のはずの中年の兵士達も、肩をすくめる。

「部下の『助言』を考慮し上官の私が自ら判断した、という事にしておこう。正直、状況がイレギュラー過ぎて頭が追い着かん！　舵取りはそちらに任せる!!」

負傷者を含め、全員が通路の角へと走る。

茶髪の女性が待っていた。彼女の案内でビルの中を進む。一見すると粗大ゴミのせいで行き止まりになっている場所を、隙間を選んで上手に潜り抜けていくと、小さな扉があった。そこは狭い裏通りに面していて、見た限りは頭に血が上った群衆もいない。

「……何だ、商店街？」

「昔から、職人用の小道具を扱うお店ばかり。表に面した出入り口は、全部さっきみたいに粗大ゴミで埋めているの。お得意様しか入ってこれないように」

女性に礼を言って、警戒しながら順路を進むクウェンサー達に、様々な小店舗の主人達が声を掛けてきた。

「傷薬と包帯くらいしかないけどいるか？」

「テレビ観たぜ。格好良い事やってるみたいじゃん。アンタ達に協力すれば、どこかの陰謀をくじけるんだろ。何だか知らねえが勝手にやってくれよ！」

「いつから水筒に入れてるか分かんねえ水なんかで腹壊すなよ！　ほら、スポーツドリンクだ!!」

「弾足りてる？　五・五六ミリなら好きなだけ持ってけよ!!」

……一部、物騒な申し出もあるにはあったが、クウェンサー達は躊躇なくそれらを受け取った。元々、突発的な戦闘を済ませてからは無補給の状態だった。このタイミングで武器弾薬の補給ができるなら断る理由はない。

「よおクウェンサー、これからどこへ向かうんだ!?　とりあえず整備基地まで帰るのか!?」
「向こうも向こうで群衆に囲まれているはずだ。この奇跡みたいな現象がどこまで広がっているかは未知数。だったらここで黒幕のＭＩＢを叩いて、完全に鎮静化させた方が良い！」
「そりゃ賛成だが、連中の秘密基地は分かってんのか？　ヤツらはオセアニア全土で陰謀を張り巡らせているんだぜ!!　そう都合良く俺らの前に出てくるかよ!!」
「俺はそうは思わない」
　クウェンサーはきっぱりと言った。
「考えてみればおかしかったんだ。輸送ヘリに乗っていた俺達は、最優先で叩かなきゃいけないターゲットだった。その始末を、どう動くか分からない群衆に任せる？　だったら、群衆に混じって自分達で迫撃砲を設置した方が『安全』だ。そもそも、迫撃砲は野球の遠投みたいな軌道で遠くへ砲弾を飛ばして地上の目標を攻撃するもんだ。素人さんの腕じゃ、空を飛んでいるヘリに叩き込むなんてトリッキーな真似はできないだろ。さらに、だ。広場へやってくるはずだった重武装の四駆だって……」
「って事は、ＭＩＢの本拠地はこの近くにあるってのか？」
「連中の根っこは砂漠のパイプラインと、それらを結ぶターミナル施設だ。……ヘイヴィア、ここから一番近くにあるのは？　油田でも地下水を汲み上げるポンプ施設の跡地でも何でも良い」

「近くにある。この街から三キロも離れてねえぞ！　ただの跡地っつー事でみんな関心を持ってなかったからさ」

「ならそこだ。本拠地って事は、ＭＩＢのオブジェクトが眠っている可能性も高い！」

そこで。

ギクリと、ヘイヴィアは顔を強張らせた。

「待てよ。この怪我人軍団で怪物兵器とやり合えってのか⁉　どうやったって勝てるとは思えねえし、そもそも意味なんかねえ。ＭＩＢは複数のオブジェクトを抱えているって話だったろ。俺らが命懸けで一機を破壊したって何になるってんだ⁉」

「……それはどうかな」

クウェンサーはニヤリと笑った。

「連中は『かつての大国』のスパイ組織を母体とした思想集団だ。つまり、情報の取り扱いにはとことん繊細なはずだった。そんな連中が、自ら計画の全貌を明かす？　自慢話に精を出して？　……ありえない。そんなヘマをする敵じゃない」

「じゃあ、あれは……」

「強酸爆弾でも俺達を殺せず、計画の一部分が漏洩したと知ったＭＩＢは焦ったんだ。一度洩れた情報を完全に消すのは難しい。……だから、情報を上書きして歪める事にした。これなら簡単に全貌を覆い隠せる」

おあつらえ向きに、ＭＩＢとの長話の直後に迫撃砲の攻撃、墜落となった。

クウェンサー達が真っ先に行うのは、整備基地との無線連絡だ。自分が死ぬ、手にした情報が誰にも伝わらずに死ぬ。そんな恐怖に駆られれば、情報の真偽なんて考えもせず、万が一に備えてとにかく片っ端から報告しようとしてしまう。

結果、デコイの情報がそのまま上官へ伝わる。

ありもしない恐怖が、クウェンサー達だけでなく、軍全体へと感染していってしまう。

「ヤツらは確かにオブジェクトを開発しているかもしれない。でも、今すぐオブジェクトを総動員できる訳じゃない！　当たり前だ、ホントにそんな大戦力があるのなら、ＭＩＢはコソコソしていないでオセアニアにある全てのオブジェクトへ真正面からケンカを売れば良いんだから!!　今は数の時代だぞ。一対二なら迷わず『白旗』の信号飛ばして損害が出る前に撤退しろ。それがルールってヤツだ。なのに、ヤツらはそれをしない。つまり、数で言えばヤツらの方が劣勢なんだ!!」

クウェンサーの予想では、ＭＩＢ側が今動かせるオブジェクトは一機か二機……二〇機以上を抱える多国籍軍に取り囲まれれば、瞬く間に破壊されてしまう程度のものでしかないと考えている。

「でも、ヤツらの狙いは『世界の警察』とかいう巨大組織だろ!?　そのために最適な立地として、オセアニアを乗っ取る計画まで立てていた。その広大な土地を守るためには、オブジェク

ト一機じゃ話にならねえはずだ。世界を支配する、掌握する、管理する。それをやるためには、やっぱり大量のオブジェクトが必要になってくるだろ!!」

「準備が追い着いていない。だから『我々は複数のオブジェクトを同時に動かせる状況で、いつでも攻撃できる』って情報を俺達に信じ込ませようとしたんだ。時間を稼いで、準備を終わらせるために！　そうなったら、本当にオセアニアのあちこちに所属不明のオブジェクトが湧いて出てくる事になるぞ!!」

「……だとすると、ヤツらが今一番やりてえのは、そのとんでもねえ話に信憑性を持たせる事か。一機しかねえオブジェクトを使って、いかに効率的なデモンストレーションを行うか。たとえ一機がそこで使い潰されたって、それで多国籍軍全体をビビらせて及び腰にさせちまえば、起動に必要な時間を稼ぐ事ができる。……そうなったら、本当に連中の全機体制が整っちまう……」

「どれだけの規模か、正確なところは知らないけど、連中だって負けると分かって計画を立てるはずはない。物量勝負にしても、カラクリがあるにしても、順調に進んだらヤバいっていうのだけは間違いない」

「ちょっと待てよ。多国籍軍は全部合わせて一、〇機以上駐留しているんだぜ。それに『勝てる』と踏んで準備してやがるってのか？」

オブジェクトが出てこない戦場を、俗に泥沼と呼ぶ事がある。

だが今回は違う。

オブジェクトとオブジェクトがぶつかって、なお泥沼。

そんな事になってしまえば、オセアニアはこの世の終わりみたいな大破壊が席巻するだろう。戦場も市街地も区別はなくなる。そういう事を考える余裕がなくなる。冗談抜きに、大陸からあらゆる生物が死に絶える可能性さえ浮上してくる。

「だから、俺達で叩き潰す」

クウェンサーは、そう言った。

「例のデモンストレーションを完全に失敗させて、ＭＩＢの出鼻をくじく。これ以外に、みんなが助かる道はないんだ」

11

原子番号七九。

原子量一九六・九六六五五。

元素記号Au。

つまり……純金。

それが、『彼ら』の莫大な資金源の正体だった……という事になっている。

世界は一度粉々に砕け散った。『国連の崩壊』とオブジェクトの台頭が象徴する、既存国家体制の瓦解というヤツだ。そのどさくさに紛れて、『彼ら』は世界最大の金保有国であった『ある大国』から、大量の金塊を盗み出していた。

普通であれば即座に露見し、袋叩きにされていたところだろうが、折しも世界は最大級の混乱に見舞われていた。どこに何がどれだけ保管されているか、それを調べる事さえできない状況を上手く利用していたのだ。

と、そこまで考え、黒服の青年は唇の端を歪めた。

ここ数年で、すっかり笑みの質も変わっていった。

「ひどい嘘だ。子供だって、冷静になれば穴だらけだと気づく」

「冷静にさせなければ良い」

隣に立つ、別の青年がそう呟いた。

「我々には莫大な金がある。世界を動かす力がある。秘密のコミュニティへ参画する通過儀礼として、あなたの財産の半分を担保として預からせてもらう。……言ってみれば、これが財源確保のカラクリだ。たった一つの嘘が、本当に世界を変えうる金と人脈を作り上げる」

「いつかはバレるよ」

「バレる前に、世界を変えてしまえば良い。嘘を、本当にしてしまえば良い」

『彼ら』はそうやって生きてきた。

かつての先人達が、情報を武器に大国の安寧を守り続けてきたように。

インターネットなんてものが普及する前から、まだ世界を渡り行く情報が手紙や電話だけだった頃から、世界中の新聞を切り抜きラジオを録音して、『彼ら』は地球全人類の複雑な情勢を色分けするように分析し続けてきた。……そもそも、引き合いに出したインターネットさえ、発端はあくまでも一国の軍用ネットワークだ。情報の網が世界を覆い尽くした事すら全ては『彼ら』の功績であり、時代や歴史という漠然とした『もの』へどの程度の介入ができるのか、その影響力を端的に証明しているだろう。

「準備の方は終わった」

報告があった。

する方も、される方も、共に黒のスーツに帽子、サングラスと統一された服装。

彼らに個性はない。

必要とされていないし、何より、彼ら自身が必要としていない。

「そうか」

カンパニー、ラングレー、ペンタゴン。

呼び方は色々あっても、彼らは決してCから始まるアルファベット三文字の略称は使わない。

敢えて、間違った都市伝説に基づく、Mから始まる三文字を好んで使う。

そう。

MIB。

UFOや宇宙人などの目撃者や接触者に脅しをかけて真実を隠蔽するなどと噂された、『世界の警察』の一番深い所にある諜報機関の名を。

「敵は来るかね」

「あの混乱の中、広場の中央に八つ裂きにされた人肉が掲げられなかった以上は、何らかの方法を使って切り抜けたという事だろう。であれば、来る。万に一つに備え、無実の市民さえ根掘り葉掘り調べるほどの慎重さが我々の流儀だ」

敢えて間違った名前を使い続ける理由は単純だ。

今はまだ、真実の名を使うべき資格がない。このステンドグラスのように分かたれてしまった世界を、新しい『世界の警察』の樹立によって再び完全な統治を叶えた時、彼らは初めて虚構の存在から現実の存在へと昇華する。

アルファベットのCは中央という意味だが、今は『彼らを包み込むもの』がない。卵は黄身だけでは卵として機能しない。故に、この瞬間の彼らが真実の名を使ったところで何の意味もない。

その三文字は。

全てが終わった後で、胸を張って地球人類へ名乗れば良い。

「では、最終準備に取りかかろう」

「用意はできている」

彼らがやろうとしている事は、歴史年表というよりもはや『伝説』と呼ばれるものの中に色濃く残っているものと何も変わっていない。

自らは表舞台には立たず、大量の札束と情報と武器と権力でもって対象国の関係者と静かに接触し、深く関わり、時に誘い、時に脅し、時に殺し、最後にはその国の行く末までも指先で操ってしまう。

「分かっているよ。後は俺がやる。他の二機に、およそ五〇〇の『増幅施設』。その起動までの時間を稼げれば、俺達は世界に勝利を宣言できる」

「予定通りとはいえ、大丈夫か。お前は……」

「そう、俺はオブジェクトの操縦士エリートじゃない」

他の全てと変わらぬ黒服の青年は、うっすらと笑う。

外見を統一してなお、滲み出る鋭さと共に。

「でも、それでこそ意味がある」

だから、と黒服の一人は呟いた。

一見すると、繋がりの良く分からない一言。

直後に、どちらか一人が、サイレンサーを取りつけた拳銃を取り出した。

「もう後は俺に任せろ。真実を摑んだ兵士達を群衆の手で殺させるための、ケースナンバー024は終了だ、ネバダ36。この俺、D．C．ゼロがこれよりケースナンバー025へ移行する」

12

クウェンサーやヘイヴィア含む少数の部隊は、どこもかしこも人々で溢れ返った雑然とした街を何とか乗り越えた。

街の外は砂漠……と言っても、こちらは西部劇の荒野のような、砂色にひび割れた大地だった。サボテンと寂れたバーがあれば完璧だったが、あれは別に砂漠ならどこにでもあるものではないらしい。

代わりに、あちこちに中身をくり抜かれた列車の車両が転がっていた。電子機器はもちろん、ドアもガラスも、椅子も、照明器具の一つもない。どうやら、『墓場』のようだった。元々は使い物にならなくなった車両をレールの端まで運んでバラバラに分解していたが、ついには誘導用の金属レールや枕木さえも盗まれてしまったのだろう。

「見えた、見えたぜ。……つーかどう目を逸らそうとしても絶対に視界に入っちまう。ヤツら、

身を隠すって言葉の意味を取り違えてねえか？」

複数の錆びついたパイプラインが連結するターミナル施設の正体は、石油を汲み上げるための油田だったようだ。これまでの地下水ポンプ施設よりも、ややゴチャゴチャした外観をしている。もちろん、どれもこれも時代に取り残されて朽ち果て、まともに機能しているようには見えなかったが。

クウェンサーは双眼鏡のようなものを構えてあちこちを見回しながら、

「……罠みたいなものはないな。地雷とか警報とかカメラとか、まあ色々。あそこまであれこれ陰謀張り巡らせていた連中が、ただ油断しているとも思えない」

「下手に仕掛けたって無関係な市民だのカンガルーだのの脚を吹っ飛ばすだけだ。全力で籠城するならともかく、異変がある事さえ知られたくねえ状況じゃ爆薬の出番はねえだろ」

とはいえ、世の中には金属探知機に引っかからない木製やガラス製の地雷、なんてものも普通に存在する。クウェンサー達は基本通りに警戒しながら、無秩序に打ち捨てられた列車の車両を遮蔽物に利用しつつ、ゆっくりとターミナル施設へ接近していく。

「廃品回収のハイエナなんかいねえだろうな。流石のヘイヴィアさんだって、今、驚かされたら思わず撃っちまうかもしれねえぜ」

「ここにあるのはフライドチキンの骨だけじゃないか？　もう食べられるところがないからこうして放っておかれてる」

罠と同様、人の気配もない。

油田跡地までは五〇〇メートルといったところだが、本当にあそこがＭＩＢの拠点として使われているのかどうか、無意味に自信が揺らいできた。

「これで本当に合理的なのか？　列車の墓場でかくれんぼしている子供がそのまんまターミナル施設に迷い込むのだって止められないぞ」

「あるいは、もうバレても構わねえから、とかじゃねえだろうな」

ヘイヴィアがこの局面で不吉な事を言った直後だった。

ゴゴン!!!!!　と。

唐突に、一番大きなランドマークの油田跡地が、内側から軽々と吹き飛ばされた。

その瞬間、まずやってきたのはひび割れた大地を揺さぶる猛烈な震動だった。続けて入道雲のように膨大な粉塵が広がっていくのが分かる。分かっていて、為す術もなかった。崩壊地点から全方位へキロ単位で拡大していく粉塵の海が、クウェンサー達を丸呑みしていく。

それは、現象だけなら砂嵐にも似ていた。

分厚い灰色の壁は、太陽光すらも局地的に隠していく。夕暮れか、宵の始め。大空の明るさが明確に鈍っている。

「ガハゴホ!!　くそ、何だこりゃ？　全部コンクリートか!?」

「ハンカチでも包帯でも何でも良い。とにかく口と鼻を覆うんだ！　軍事国時代の古い廃墟に安全基準なんかないぞ。アスベストが使われている可能性だって否定できない。後で死ぬほど後悔したくなければ今ここで対策するんだ!!」

遠くから雷雲が近づいてくるような、低い唸りがクウェンサーの耳についた。

明らかに視界を遮る濃い灰色の世界の向こうに、何か巨大な影が蠢いている。

推進装置は、静電気式か。直線的なフロートが二本、平行するように並べてある。まるで建設重機の履帯のような印象がある。

その巨体は、通常のオブジェクトと比べて、全体的に何か歪なシルエットをしていた。球体状本体からウニのように大小一〇〇門以上の砲が延びている、という『定番』がない。サッカーボールに均等な突起物を加えたというか、艦船を爆破するために敷設される機雷というか。突起物自体も、砲というよりはフジツボを巨大化させたり、火山の火口が張り付いているようなイメージを受ける。何のための機能か分からず、その未知数の部分が余計にビリビリとクウェンサーの精神を炙っていく。

本能が巨大構造物へ向けて、全神経を尖らせる。

思考がクリアになる。

焼けつくような暑さも、喉に直接刺さるような渇きも、ジャリジャリと頬に張り付く不快な

粉塵も、全ては意識の外へと追いやられる。
そんな些事に気を回している暇など一秒もないと、魂が叫んでいる。
「……来やがったぜ」
ヘイヴィアが、粉塵の中で口を覆うのも忘れて呟いた。
「予想通りだ。ＭＩＢは本当に造ってやがった！　どこの世界的勢力にも属さない、オセアニア軍事国を生贄に捧げての、完全な独力オブジェクトを!!」
「伏せろ、全員伏せるんだ。……ヤツは俺達に気づいているのか？　このタイミングで隠れ家を壊して表舞台に出てきた理由は何なんだ？」
灰色のカーテンのせいで具体的な距離感が摑めない。巨大な影は、近いようにも遠いようにも見える。が、少なくともお姫様の『ベイビーマグナム』のように、ボクシングや総合格闘技に似た軽快なフットワークは取っていない。こうしていると、本当に止まっているように見える。
「……何をしている……？　『露見』が圧倒的不利に繋がる事は分かっているはずだ。にも拘らず、どうして何もしない。何もしないなら、わざわざ派手に出てきた理由もないだろうに」
分かりやすい攻撃がなければ安心できる、という訳でもない。
得体のしれない生態不明な昆虫をルーペで思い切り拡大して観察しているような、不気味さだけが胸を支配する。

ざざー　と。クウェンサーの無線機が電子音を発したのはその時だった。

上官のフローレイティアからだ。

『貴様達、今どこだ!?　市街地に落ちたヘリから消えているようだが』

「うわお、このタイミングでお説教か!?　いちいち答えるの面倒臭せえけどどうすんだクウェンサー!?」

「ボタン押すなよ！　後で全部終わったら、整備基地に帰る道すがらで無線機ぶっ壊しちゃおう」

『返事がなければ戦死扱いでレポートを書く』

「「ハイ生きています!!　僕達は今日も元気!!」」

全力で叫ぶと、機材の向こうのフローレイティアは舌打ちして、

『場所は？　市街地から三キロ地点で不明勢力のオブジェクトらしき影が顔を出した。何か関係しているか』

「今、目の前にいまーす」

『五〇〇は離れろ。砲撃に巻き込まれて死ぬぞ』

「はァあ!?」

と、そこでいきなり別の声が割り込んできた。

しかし声は聞き慣れない。そもそも『正統王国』軍からの通信ではない。

『聞こえているか、「正統王国」の犬ども。状況は衛星から確認している』

「今度はどこのどなた様だよ……？」

『いつぞやの「シンプルイズベスト」戦でお世話になった中佐だよ。名前はレイス＝マティーニ＝ベルモットスプレー。ああ、ファーストネーム以外は気にするな。たわけた天才少女計画のおかげで、同じ呼び名が溢れ返ってる。ざっと一〇〇人以上はな』

クウェンサーは額に手を当てた。

「……思い出した。夜の砂漠で、『情報同盟』の貴賓用装甲車から顔を出していた反抗期将校……」

『女の顔は忘れないタイプの軍人か。なるほど、憎悪すべき軽薄さだな』

彼の正式な分類は『学生』なのだが、敵国の人間に詳しく説明したって危険が増すだけだ。放っておく事にする。

『マティーニシリーズ』の一人は心の底から軽蔑するような調子で、

『「情報同盟」、「資本企業」、「正統王国」、「信心組織」……これら世界的勢力は不本意ながらオセアニア戦災復興の助けとして多国籍軍を編成している。そしてこの多国籍軍は、世界的勢力以外の管理不能なオブジェクトの存在を認めていない。貴様達の薄汚れた命を繋ぐために我が「情報同盟」の最新鋭機を解き放つなど唾棄すべき状況だが、私は物事に優先順位をつけて考えられる程度には冷静だ。分かったら安心して平伏すと良い』

クウェンサーとヘイヴィアは思わず顔を見合わせた。

「……多国籍軍、って事は」

「複数のオブジェクトが、ＭＩＢを狩るために動き出したって事なのかよ……？」

答えたのはレイス＝マティーニ＝ベルモットスプレーではなく、フローレイティア＝カピストラーノだった。

『「正統王国」からベイビーマグナム、「情報同盟」からカタパルトカーゴ、「資本企業」からデザートスコーピオ、「信心組織」からミラーボーラー。……これが四方向からアンノウンを強襲する』

『うちの第二世代は「カノン２５６」と呼べ、貴様達の敵性コードなど耳にするだけで吐き気を催す』

『……クウェンサー、ヘイヴィア、チームにいる他のヤツも全員聞け。問題はアンノウンより、その後よ。とりあえず標的を貪った四機が、その場で殺し合いを始める可能性は否定できない。だから常に備えろ。流れ弾で挽肉にされたくなければ』

ゾッとする言葉だった。

確かに、四対一ならもう結果は出ている。それが現代の戦争だ。

となると、

「……おいクウェンサー。英雄気取りでこんな所まで来たってやる事がねえ。どさくさに紛れ

【カタパルトカーゴ】
CATAPULT CARGO

全長…8[illegible]

最高速度…時速550キロ

装甲…5センチ×200層(特殊装甲ハニカム)

武装…陸戦専用第二世代(フロート[illegible]より換装)[illegible]

分類…多用途精密砲撃兵器

搭乗者…「[illegible]」

仕様…[illegible]

主砲…切り替え装填式コイルガン[illegible]

副砲…下位互換式プラズマ砲、レールガン[illegible]

コードネーム…カタパルトカーゴ(様々な装備した状態を切り替えて撃ち出すところから。ちなみに、「[illegible]」ではカノン256と呼称)

[illegible]インターリンク[illegible]

てさっさと逃げちまうのが吉だぜ。支援砲撃が始まる前に」

『そいつは遅い』

何故か、クウェンサーではなくレイスが応じた。

可憐な声で、容赦なく。

『もうやってる』

ッッッドン!!!!!!　と、鼓膜というより腹を叩くような轟音が炸裂した。視界を遮っていた膨大な灰色の粉塵が、風船が割れるように吹き散らされていく。最初、砲撃音かとも思ったクウェンサーだったが、直後に間違いだと気づく。あれは音速の五倍一〇倍で突き進む、自動車よりも巨大な砲弾が生み出す衝撃波だ。

その場で踏ん張る事も、歯を食いしばる事もできなかった。

伏せていたはずのクウェンサーが、下からめくり上げられるように荒野を転がる。

とっさに耳へ手をやると、何かドロリとした感触があった。

真っ赤な血だ。

「がばっ!!　くそ……何だ……今の。レールガンかコイルガンを使った長距離砲撃か!?」

「どっちだろうと変わらねえよ!!」

「いやコイルガンは電磁石だけどレールガンはフレミングの……」

「耳から血を流したって元気そうで何よりだぜ設計バカ!!」

ともあれ。

ＭＩＢ側のオブジェクトはその場でずっと留まっていたようだった。あそこに超高速の金属砲弾が突っ込めば、回避する暇もなく直撃コースだろう。クウェンサーやヘイヴィア達、脆弱な生身の人間は、余波のダメージを叩きつけられた体を震わせながら『情報同盟』の戦果を確認していく。

大量の粉塵が舞い上がる。

もう動かない野晒しの死体へさらに剣を突き立てていくように、さらなる砲撃が襲いかかっていく。方向も、攻撃の種類も一致しない。レーザービームが空気を焼くオレンジ色の残像や、下位安定式プラズマ砲の目を焼くような青白い閃光が踊り狂う。

屠殺。

処分。

「おいおいおい！　くそっ、馬鹿野郎!?　がはごほ、明らかにやり過ぎだ!!　これじゃ観客の俺らまで殺されちまう……!!」

「いや……ちょっと待て……」

そこで。

彼らは、信じられないものを見た。

「……おい、何だ……」

「知るかよ」

舞い上がる粉塵をさらに吹き散らすように、無数の砲撃が一点へ集中していく。

それが、薄汚れたヴェールをはぎ取っていく。

その向こうにいたのは……、

「ＭＩＢ側のオブジェクト、傷一つねえじゃねえか!?　その場から動いた気配もねえ。何だ、『情報同盟』側が勝手に外しやがったのか!?」

「俺は霊感少女じゃないんだ、何でもかんでも答えられる訳じゃない!!」

速度、重量、威力、全て申し分ないはずだった。まさか、あれだけの砲撃を装甲板だけで弾き返したとは思えない。

『情報同盟』からの発射予告はなかった。

続けざまに、先ほどと全く同じ大質量砲弾がＭＩＢのオブジェクトへと突き抜けていく。

ッッッドン!!!!!　という空気が破裂するような轟音は、むしろ傍目で見ているクウェンサー達の肉体をすり潰そうとしているのではないかと邪推するほどの破壊力を秘めていた。

だが。

今度こそ、歯を食いしばったクウェンサー達は知る。

「逸れた、のか？」

「何だありゃあ……。落ちた場所が明らかにおかしいぜ!!　クランクみたいにぐにゃりと曲がらねえと、あんなトコには落ちねえだろ……。レーザーなんかが蜃気楼で曲がるなんて話は聞くが、金属砲弾であんな現象って起こるのか!?」

大量の粉塵は、標的にされたオブジェクトを破壊したものではない。金属砲弾やレーザービーム砲などが大きく逸れて、地面に激突した事で舞い上げられているだけなのだ。

そして、それが偶然なのか必然なのか。

ここで楽観論に逃げても活路は開かない。クウェンサーは最悪の可能性を口に出す。

「……何かしらの防御システムがあるんだ。向かってくる砲撃を逸らして無力化させる、おかしなテクノロジーが!!」

無線機から、舌打ちのような音が聞こえた。

続けて放たれたのは、複数の光線だった。空間に焼け付くようなオレンジ色はレーザービーム砲、青白い溶接のような光は下位安定式プラズマ砲か。今度は金属砲弾ではない。光やイオンの性質は全く違うため、金属砲弾用の防御システムでは対応できないはずだ。

なのに、

「冗談……だろ」

「どんな攻撃だって当たらなければ意味はねえ……。何使ってるかは知らねえが、あんなオー

ルマイティに何でもかんでも弾いて逸らしてを繰り返されちまったら、どんなオブジェクトだって手札は一枚もなくなっちまうぜ!!」

関係なし。

相手が金属砲弾だろうが、励起された光の束だろうが、莫大な磁力によって指向性を整えられたプラズマ兵器だろうが、一切合財お構いなし。

それぞれのオブジェクトは、それぞれのコンセプトを極限まで極めて先鋭化させた、世界的勢力の技術の結晶だ。

ベースは金属砲弾でありながら、内部に強酸や下位安定式プラズマ用のガスなどを積載できるコンテナ構造を有する事で、多種多様の攻撃を可能とした機体。

まず標的の周辺へ作為的にレーザービームを落とし、地面の砂をガラス化させた上で、今度はそのガラス板を利用して主砲のレーザービームを複雑に乱反射させる機体。

ショットガンのように大量の電子ビーム兵器をばら撒きつつ、高性能センサー群とブースターの恩恵を受けて『常に標的へ薄いダメージを与えながら逃げ回り続ける』長期戦専用の機体。

どれもこれもが、一律で対処された。

受け流しの極致。

自分で避けるのではなく、向かってくる攻撃の方をズラして生還する方法論。

いいや。

そこに留まらない。

『「資本企業」のデザートスコーピオ、中破！　どういう事だ、「信心組織」のミラーボーラーから砲撃されているぞ!!』

『憤るな「正統王国」。四方向から攻めているとはいえ、立ち位置から流れ弾の被弾はありえない。であれば、それ以外の要因でダメージを受けたと判断するべきだ』

『……アンノウンが逸らしたレーザービーム砲が、私達のオブジェクトを正確に狙っているとでも言うのか……？』

今度こそ。

クウェンサーの心臓が、何か見えない手によって握り潰されるかと思った。

「……単なる防衛装備じゃない。受け流すだけじゃない！　何なんだ？　光の速度で向かってくる攻撃を正確に捉えて狙いを逸らして別の標的へぶち当てるなんて、どんなテクノロジーを使ったら実現できるんだ!?」

『チッ。遠距離砲撃を封じられたとなると、うちの「カノン２５６」の持ち味はほぼ死んだと考えて良い。主軸はそちらの時代遅れの第一世代に任せてやっても良い。極近接、ゼロ距離まで近づいて主砲でもぶち込んでやれ』

「それはお姫様に言ってくれ!!」

『では私達にできる事は？』

「あらん限りの砲弾をぶち込め!!　たとえ実際には直撃しなくたって、向こうが防御で手一杯になるように!!」

言葉が終わる前に、恐るべき轟音がクウェンサーの意識を直接揺さぶった。

『情報同盟』で呼ばれる『カノン256』からの支援砲撃……ではない。

MIB側のオブジェクトが動いたのだ。

最初。

クウェンサーやヘイヴィア達は、行動の真意を測りかねた。

オブジェクトの球体状本体を中心に、半径二〇〇メートル前後の、青白く輝く光の輪が生じた。それは時間の経過と共に数を増やしていく。最上部を除く球体状本体を埋め尽くすように、やがては半円状のドーム施設に似た形状を作り上げていく。

埋め尽くされる青白い光によって、あれだけ巨大だったオブジェクトの全景が完全に隠れてしまう。

「……おい、まさかだろ……」

ようやく、クウェンサーは事態を悟った。

分かった途端に、自分の心臓が針金か何かで締め上げられるかと思った。

「レーザービーム、下位安定式プラズマ砲……いや、電子ビーム式か」
「何で分かんだそんな事!?」
「それ以外だったら俺達の目が潰れてる」
クウェンサーは観察を続けながら、
「あの野郎、自分で放った攻撃を自分のシールドで捻じ曲げているんだ……。大型加速器みたいに、常に電子ビームを追加しながら加速させているから、時間の経過と共に速度とエネルギー量が跳ね上がっていくぞ!?」
「……は、はは。なあオイ。欧州の片田舎にある加速器ってのは地下深くに埋めてあるもんだろ。あれって確か、ビームを曲げる時に外周へ洩れる放射線だの電磁波だのを食い止めるためじゃなかったっけ？　あんな大気中で加速させちまって大丈夫なもんなのか？」
「あの化け物にＪＩＳマークでもついているように見えるのか!?　強酸爆弾だって躊躇なく使うような連中が、敵兵の安全なんて気を配る訳がないだろう！　ていうか、それよりも……!!」
クウェンサーが叫ぼうとした直後だった。
ドッ!!!!!!　と。
彼らの頭上を突き抜けるように、極限まで束ねて加速された電子ビーム砲が突き抜けた。原理だけならハンマー投げとそう変わらない。もっとも、人間の目で追える速度ではないため、

クウェンサー達にはいきなり『結果』だけが突き付けられる事になる。

そう。

はるか遠方……『情報同盟』が派遣したと思しきオブジェクトが吹き飛ばされる轟音だ。

「何だ……おい」

ヘイヴィアが、見えるはずもないのに思わず背後へ目をやった。

その声は、これ以上ないほど震えていた。

通常の下位安定式プラズマ砲やレーザービーム砲と違って、その砲撃は『一瞬』に留まらない。

続く。

延々と続く。

それはもう飛び道具というより、地平線の向こうまで延びる巨人の剣のようだった。

横へ振り回す。

縦に薙ぐ。

一〇キロ以上の破壊劇であるため、クウェンサー達の肉眼ではリアルな恐怖心が脳まで伝わらない。

呆然とする彼らの耳に、切迫した『事実』が無線機から届いてくる。

『ひっ、ひ、ひィイいいいいいい!?　な、なん、何、なん……』

『うろたえるな分析官、正確に報告しろ!!』

『は、はひっ少佐！「情報同盟」のカタパルトカーゴ、大破。「信心組織」のミラーボーラー、大破。「資本企業」の……』

『おい、ちょ……うごけない！　だ、だっしゅつを……ザザザザ!!』

『……デザートスコーピオ、大破。「正統王国」のベイビーマグナム……』

まるで悪趣味な一筆書きだった。

どんな技術でどんな器用に回避挙動を取ろうが、延々と続く電子ビームの剣は世界を薙ぎ払い続ける。いつかは追い着かれて切断されていく。

『……交戦継続可能！　唯一動けるのはベイビーマグナムだけです!!』

「……うそ……」

お姫様が唯一生き残ったのは、おそらく彼女の技量によるものではない。

一筆書きの最後に、たまたまお姫様が選ばれただけ。

継続時間・数十秒間の猶予が、お姫様に辿り着く前に途絶えてしまった、というだけ。

次が来れば。

彼女は鋼の塊ごと蒸発する。

「……どうすんだ、こんなの。どうすんだよクウェンサー!?　次のチャージまで何十秒だ。それが終わっちまったら何がどうなるんだ!!」

例えば『情報同盟』のオホホなども、連速ビーム式ガトリング砲を振り回し、横一線に薙ぎ払うような攻撃を行う。

だが、彼女の攻撃は射程距離が短い。

『砲台』からの距離が短ければ、機体を大きく左右へ振る事でその横や背後へ回って攻撃を回避する事だってできるのだ。だがそれを一〇キロの超長距離で実現されたら、回避に必要な速度と距離は倍増してしまう。

単純に、扇を思い浮かべれば良い。

根元の方なら扇の外へ出るまでの距離は短いが、先端へ近づけば近づくほど、その距離は延びていく。

しかし。

技術者の卵として、クウェンサーはさらに別の脅威を捉えていた。

「……問題の核心は、破壊力じゃない」

ごくりと、クウェンサーは喉を鳴らす。

不快な汗が顎まで伝うが、気にしている余裕がない。

「光の速さで進むレーザー兵器を回避できるのは、砲口とか照準用レンズとかの微細な動きを読み取って『事前に』回避挙動を取るからだ。……でも、空気中にあった電子ビームを直接曲げて遠心力で加速させていたあの主砲じゃあ、発射前動作を読み取るためのヒントがない。回

避するためには、実際に発射された電子ビーム兵器を目視してから回避挙動をスタートさせるしかないんだ!!」

「んなもん、成功できる訳がねえだろ!!」

「だから吹き飛ばされた！　現状じゃあ、どんなオブジェクトにもあの主砲は避けられない。こちらの攻撃は一発も当たらず、向こうの攻撃は一〇〇%命中する。これを、ＭＩＢはたった一つのシステムで実現しているんだよ……!!」

無線機は沈黙している。

『情報同盟』の将校とやらは撤退を決定したか、あるいは立て直しのためクウェンサー達を構っている余裕はなくなったか。

どちらでも良い。

クウェンサーは頬を伝う、汗なんだか涙なんだか分からない液体を手の甲で拭う。

「……おいヘイヴィア、俺達で突破口を見つけるぞ」

「何言ってやがる……？」

「ＭＩＢのくそったれオブジェクトが次の主砲を撃つまでに、俺達で突破口を見つける。じゃないとお姫様まで粉々にされてしまうんだ!!」

「ふざけんな!!　ヒーローぶりたいなら一人でやれよ。最新鋭のオブジェクトを一瞬で三機も吹き飛ばした相手だぞ。数の差なんて関係ねえ、下手すりゃ大陸にある一〇機を本当に食い散

らかす!!　生身の人間でどうにかできるもんじゃねえ!!」

「彼女は俺達にとっても最後の綱だ。『ベイビーマグナム』に諦められたら、戦場で孤立した俺達は誰に拾ってもらうんだよ!?」

ひくっ……と、ヘイヴィアの喉が不気味な音を鳴らした。

ここで『ベイビーマグナム』まで破壊されたら、もうクウェンサー達の救援に応じる戦力はなくなる。『正統王国』内でも、多国籍軍を構成する別の世界的勢力のオブジェクトでも、一機五〇億ドルの高級品を無駄に失っても良いと考える人間はいなくなる。いずれMIBは駆逐するにせよ、今は様子を見て機体構成を分析し、突破口を探るために長考するべきだ、と判断するだろう。

その間、MIBのオブジェクトは傍若無人の蹂躙を続けてしまう。

真っ先に餌食となるのは、一番近くにいるクウェンサー達だ。

「死にたくなければ、前に進むしかない」

クウェンサーは、静かに言った。

「お姫様が大活躍できるように、少なくとも突破口だけでも見つけないと。俺達はお涙頂戴の『悲劇の未帰還兵』にされてしまうぞ……」

13

嫌な汗を流して小便ちびりそうになっているクウェンサー達が隠れているグラウンドゼロから、およそ一五キロの岩陰に、やたらと大量のアンテナを取り付けた装輪装甲車が停車していた。指揮官用の貴賓車両だ。

見るからに偉そうなヤツが乗っています、と喧伝しているこの手の特殊車両は、普通であれば単独で行動は取らない。

それは、中に乗っている『情報同盟』の中佐にしても同じはずなのだが……。

「気に喰わんな」

レイス＝マティーニ＝ベルモットスプレー中佐は、静かに言う。金髪碧眼の声の主は一一歳程度の少女で、きっちりとした高官用の軍服も、胸の辺りに取り付けられた略式章の数も、どれもこれもがアンバランスだった。『島国』には七五三って風習があってね、とかいう話をすると軍用ブーツの蹴りが飛んでくる事で有名だったりする。

装甲車の中で、彼女はソファベッドの上で脚を組んでいた。本来であれば多数の歩兵を運搬するために確保されている広大な車内は、この将校がくつろぐために必要な物資で満たされていた。冷蔵庫、ソファベッド、ダーツ用のボード、簡易シャワーに、軍のネットワークからこっそり切り離した衛星インターネット回線とノートパソコン。壁の一面はホームシアターのスクリーンと兼用されていた。

「気に喰わん」

「『カノン256』は大破しましたが、操縦士エリートの脱出は確認しています。元々、後継機への乗り換えを間近に控えていましたので、大局にはさほど影響があるとも思えませんが……」

流れるように語るのは、一〇代後半の青年だ。

戦場を渡り歩く際は常に少女の後ろに控えるこの青年、階級は少尉なのだが、高度な戦闘訓練を受けた殺人マシンというよりは、有能な秘書の方がイメージは近い。……もっとも、こちらもこちらで、ツンデレの女王が犬と呼ぶと幸せになれる人達の国があってね、とかいう話をすると問答無用の鉄拳が飛んでくる事で有名な訳だが。

彼らは二人揃って『繋ぎの死神』と呼ばれていた。

軍の高官が不祥事を起こした時、宙ぶらりんの大部隊を迅速に戦線復帰させるために送り込まれる専門職だ。今回の場合、『カノン256』の整備大隊はなんとオセアニアでの人身売買に一枚噛んでいたらしい。そういう経緯もあり、『カノン256』にはそれほどの執着はない。というより、彼らはこれまでの人生で指揮下の兵士達を大事に扱った試しがなかった。

レイスは鬱陶しそうに片手を振って、

「そちらじゃない。ヤツらの主張だ」

「MIBの？」

「世界中に宣伝しまくっているぞ。しばらく前から動画サイトのランキングが塗り替えられて

るが、ちょっと毛色が変わってきた。オセアニアの民衆感情を予期せぬ事態でかっさらわれて、向こうも焦っているらしい」

サイドテーブルにあった炭酸飲料の缶に口をつけながら、レイス＝マティーニ＝ベルモットスプレーは私用のノートパソコンに表示されていた画面を、ホームシアター用のスクリーンとして使っている壁一面へと表示させた。

そこにはこうある。

『オブジェクトの最大の特徴である、分厚いタマネギ装甲さえ削減できれば、五〇億ドルの調達費用は大幅に削減できる』

『装甲の耐久性に重要性はない。あらゆる攻撃を歪曲させる、全く新しいシステムを搭載すればオブジェクトの常識は覆せる』

『フライバイコライダー』

『この技術の登場は、極端な連続回避が必要なければ、専用に選抜・開発する操縦士エリートすら無用の長物となる』

『機体の調達費用は一〇分の一に、エリートの選抜・開発・護衛などの費用はゼロに』

『これで勝てる事を、我々はオセアニアで証明する』

『我が「アーリーステイツ」はエリートではない一般兵の運用でもって、あらゆるオブジェクトを破壊してみせる。来るなら来てみろ、多国籍軍。我々は時代の変化を望まぬ全てを均等に

【アーリーステイツ】
EARLY STATES

全長…70メートル

最高速度…時速530キロ

装甲…フライパイコライダー[illegible]

用途…大陸用戦略防衛兵器

分類…陸戦専用第二世代

[illegible]…「MB」

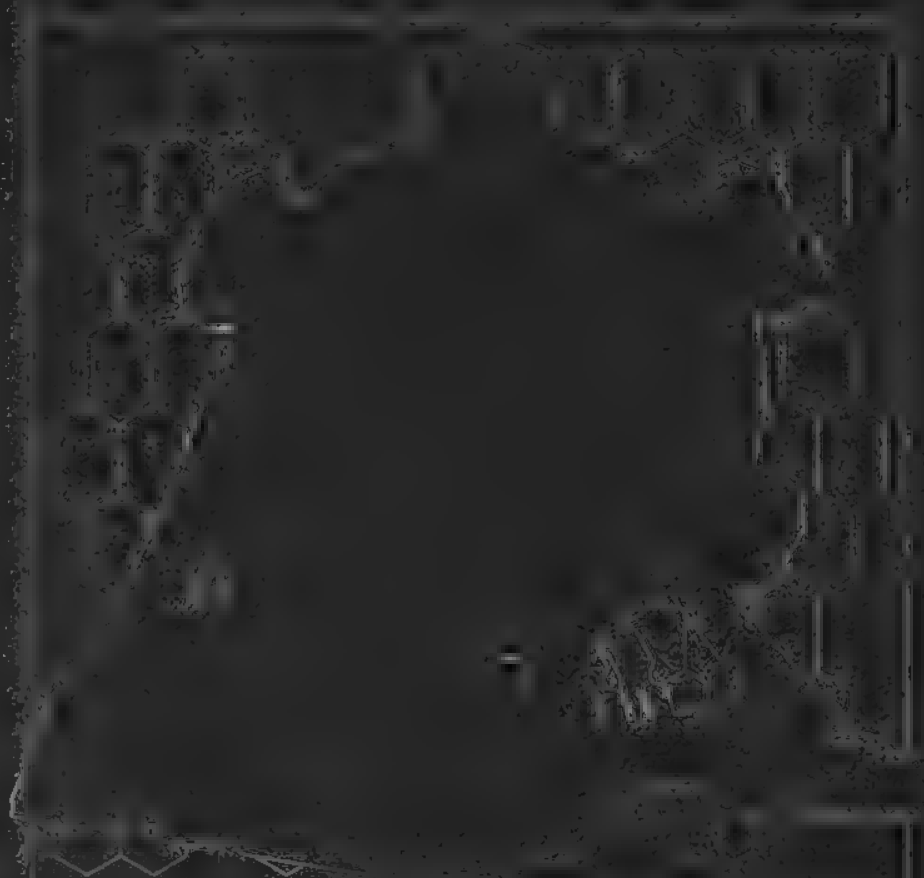
仕様…[illegible]

主機…フライパイコライダー[illegible]

副機…なし(主機の出力[illegible]で対応)

コードネーム…アーリーステイツ(かつて[illegible]

[illegible]インカーリンク…[illegible]



粉砕し、それによって新たな時代の到来を祝福しよう』

『私達、特別ではない一般人の頭を押さえつけている巨大な手を、ここで粉砕する。今日は記念日だ。全ての人が均等な可能性を取り戻し、それを使って公平な競争をしてもらう』

『のし上がる者もいれば、沈んでいく者もいるだろう』

『さあどうする？　踏みにじられ、搾り取られるだけの人生を、いつまで安定なんて言葉で誤魔化すつもりだ』

『いつか嫌気が差して自分のこめかみへ銃口を押しつける前に、もう一度自分の足で立ち上がってみせろ』

『この歪みに歪んだくそったれな世界の端でうずくまるんじゃない。胸を張って肩で風を切って堂々と歩くために。そのための勝利は私達がもぎ取ってやる。ナイトスカイの旗と共に、今度こそ世界の中心へ立つために!!』

青年は、滑らかな動作で首を傾げた。

上官が最も望むであろう返答を脳内で検索する。

自分の本音は関係ない。

「ブラフでしょう」

「そんな事は分かっている」

短く切り捨てるようにレイスは言い、苛立ちを紛れさせるように手の中でボールペンを回し

た。

自身の思考に没入する。

（……オセアニアの民衆感情は『正統王国』の猿どもに傾いている。しかし一方で、あれだけの破壊力を提示されれば、単純に恐れたり、その力を担ぎたがる者も出てくるだろう。つまり、これは感情と利害のせめぎ合いだ。天秤の傾きによっては、制御不能の兵器を操る馬鹿どもの方が英雄としてオセアニアに迎え入れられかねない事態に陥るやも……）

「……む」

そして、無意識の癖に気づくとペンを投げ捨てる。

ペン回しは例の天才少女プロジェクトで刷り込まれた精神安定行動だったのだ。『同じ個性』を持った少女なら何千人と存在する。

代わりが利く、という条件が少女に大胆な行動を促し、それによって誰も摑みたがらない危険なチャンスを的確に独占する事で、彼女はごく短期間で中佐にまで上り詰めた。が、優越感と劣等感が地続きで繋がっている例は決して珍しくない。

一方で、横暴を受け入れる柔軟性によって安定した地位を獲得するに至った（ただしそれを外から指摘されると瞬時に頭へ血が上る）青年は、顔色を変えずに流れるような動作でボールペンを拾い上げる。

そんな青年に、唇を尖らせながら少女中佐は言う。

「……ブラフかどうかはあまり関係ない。問題は、この与太話を世界のどれだけの人間が信じるかどうか、というところなのだよ、少尉。『情報同盟』の流儀を学びたまえ」

そして、『正統王国』軍第二七機動整備大隊の基地司令官、フローレイティア＝カピストラーノ少佐もまた、機嫌が悪そうに眉をひそめていた。

『我々は我々の敵を残らず駆逐するが、同時に、新しい世界の協力者に対しては惜しみない支援を送る』

『具体的には、この全く新しい技術を供与しよう』

『戦争とは、競争とは、常に早い者勝ちだ。我々の「窓口」を特定して連絡をつけられる程度の情報収集・管理能力を第一の条件としよう。我々は、いつでも親しい友人を待っている』

オペレーターの若い女性が、恐る恐るといった調子でフローレイティアに声をかけてくる。

「ど、どうしましょう？　動画の投稿元を辿る事で、相手の正体に迫る事はできるかもしれませんが……」

「そんなのは『安全国』の基地に詰めている暇なデスク組が勝手に取りかかるさ。むしろ、技術情報欲しさに妙な取引なんぞ始めなければ良いが……」

若い彼女は知る由もないが、それもまた『世界の警察』の一つの側面だった。

ただ強大な力を振りかざすだけでは、恐怖の独裁者にしかなりえない。

その力が恐れの対象とならず、広く世界に受け入れられたのは、『リスクを差し引いてあまりあるメリット』が提供されたからだ。

「こいつら、母体はどこかの情報機関系か？　文章のあちこちに感情を昂ぶらせる装置が織り込まれているみたいだし……頭がお猿なお偉方も、これくらいは読み切って回避してくれれば良いんだが」

情報自体は、一般のインターネットへばら撒かれたため、誰もが簡単に閲覧する事ができた。

『我々はこのオセアニアで、かつてあった「世界の警察」を再建させる』

『それは世界統一秩序を取り戻すに至り、戦争が恒常化するこの歪な時代を正す事になるだろう』

『我々は、これら一連の動きに皆の参加・不参加の是非は問わない』

『「世界の警察」は、躊躇も容赦もなく無辜の市民を迷わず守る。そういう仕組みを、皆の前へ提示する』

『己の胸に聞け。善人はただ時代の到来を喜び、悪人は震えて待つが良い。誰が何を考えようが、我々ＭＩＢは再び「世界の警察」を解き放ち、あの暁に元の名を取り戻そう』

そして。

遠く離れた『正統王国』と『情報同盟』の高官は、全く同じ事を呟いていた。

「「気に喰わんな。その顔に泥でも塗り付けてやるか」」

14

「なあヘイヴィア、あれの呼び方ってどうするんだ？　ていうか、オブジェクトの名前ってどこの誰が決めてるの？」

「知らねえよ！　わざわざムカつく血祭兵器に頭をひねる必要なんかねえ。あんなの『サノバビッチ』で十分だ!!」

クウェンサーやヘイヴィア達は、食い潰された列車の残骸の下へと潜り込んだ。向こうがこちらを捕捉しているか否かは未知数だが、『オブジェクトでも絶対に回避不能な砲撃』を目の当たりにした後では、焼け石に水であっても身を隠したくなる。一度でも狙いをつけられたら、生身の人間の二本の足で、どうこうできる存在ではない。

「気になる事がある」

「そうかよ奇遇だな！　俺は何で野郎ばっか揃いも揃ってこんな狭いとこに詰め込まれなくちゃならねえのかってのがすげえ気になる。なあクウェンサー、何でテメェ美少女じゃねえの!?」

「レールガンやコイルガンは金属砲弾、レーザーは光、他にもプラズマだのイオンだのも兵器に応用されている。……本当に、その全てを歪曲させる技術なんてあるのか？　そんなものを実際に使っているとしたら、俺達の目にもあの『サノバビッチ』は見えないはずなんじゃないのか？」

「あん？　……言われてみりゃそうか。常に光を曲げてるとしたら、蜃気楼みてえにあの巨体が消えてるように見えちまうかもしれねえんだよな」

「単に『見えない壁』が、向かってくる攻撃を均等に曲げてる訳じゃない。何か別の法則がある」

『そもそも避ける必要がない』と感じているのか、ＭＩＢの『サノバビッチ』はその場を動こうとしない。

それ自体も、妙と言えば妙だった。

「……最初にターミナル施設が内側から破壊された後、『サノバビッチ』はしばらくその場でじっとしていた。何故だ？　粉塵が晴れるのを待っていたのか。それとも、攻防一体の謎のシステムの起動準備でもしていたのか……」

伏せたまま双眼鏡の倍率を最大にして、ＭＩＢの『サノバビッチ』の周辺を観察するクウェ

ンサー。

油田跡地を利用したオブジェクト建造用のターミナル施設の残骸が、あちこちにばら撒かれていた。岩のようなコンクリート、形を失った鉄塊、何かのプラスチックの箱が潰れたもの、などなど。

しかし、それらには共通する特徴がある。

「……？　溶けてる……？」

「そりゃ加速のためにあれだけド派手に電子ビームを旋回させてやがったんだ。エネルギー量は半端なもんじゃねえだろ。にしても、くそ。外に溢れた余剰エネルギーだけでコンクリートまで溶けたっていうのかよ……。直撃したら、マジで地球から俺らの体が消えちまうぞ!!」

「……、」

クウェンサーは双眼鏡をあちこちに振る。

目的のものはすぐに見つかった。

ＭＩＢの人間が持ち込んだものだろう、ビールの小瓶が瓦礫に混じっていた。

真ん中から割れた茶色い瓶のギザギザの断面が、ギラリと鋭い光を照り返している。

「……いや、もしかしたら……」

「おい、何だよクウェンサー？　ちょっと待て、何でテメェ列車の下から這い出ようとしてんだ!?」

「『情報同盟』のオブジェクトが最初に撃ったのは馬鹿デカい金属砲弾だった。直撃の前に軌道をねじ曲げられた砲弾は、『サノバビッチ』から外れた地面に落下した。……あれが最大の証拠だ。俺が予想している通りだとしたら、あそこに痕跡が残っている」

「嘘だろ……。何もこの状況で散歩することねえって!!　身を隠してじっとしてたって生き残れる可能性はほとんどゼロだってのに……くそ！　待てよクウェンサー!!」

どっちみち、攻めあぐねて遠方からの観察を続けている『ベイビーマグナム』へ、ＭＩＢの『サノバビッチ』が本格的に攻撃を始めてしまえば、もうおしまいだ。

最前線で孤立したクウェンサー達の救援を試みる者は誰もいなくなる。

鋼の塊による嬲り殺しか、砂漠で渇いて死ぬか。

何にしても、楽しい末路はやって来ない。

列車の下から這い出たクウェンサー達は、可能な限り大回りで、『サノバビッチ』を迂回するように砲弾の落下地点を目指す。派手に飛び散ったターミナル施設の残骸が、遮蔽物として利用できた。自動車よりも大きなコンクリートの塊に背中を預けながら、彼らは進む。

「死ぬぜ。こんなの絶対に死ぬ……。多分俺の人生で何か間違っているとしたら、テメェみてえな命知らずに出会っちまった事が間違いだったんだ……」

「ゴーフォーブロークだよ、ヘイヴィア。逆境を見てむしろチャンスだくらいに視点を変えられないようじゃ、くそったれな世界の中で勝ち組のチケットをもぎ取れない」

「誰にとってのチャンスだよ！　何をいくら努力したって、有名貴族ウィンチェル家のボンボン様を差し置いて、どうせ手柄はどっかの腹黒デブが持っていっちまう。俺はそこに座るために戦場へ来たってのによ!!」

ジリジリと緊張で寿命を縮めながらも、クウェンサー達は瓦礫の陰を縫って、目的の金属砲弾の落下地点へ向かう。異様に喉が渇き、ピリピリと張り付くようだった。水筒の中身はあっという間になくなっていく。

Cの字を描くように、『サノバビッチ』を迂回する。

ほぼ、敵機の真後ろに位置する場所、三〇〇メートルほどの距離に、半径三〇メートルほどのクレーターができていた。

「あった。あったぞ」

「マジかよ、ここ下りていくの？　マッハいくつで飛んでいるんだよ、あの砲弾。摩擦熱のせいで、触れた瞬間に掌が燃え上がるかもしれねえぞ。あっ、おい！　危ねえっつってんのに!!」

「……」

クウェンサーは無視して……というか、探究心が勝ったおかげで耳に入っていないまま、クレーターの縁から中心部分へ滑り下りていく。彼一人が動くと、ヘリのパイロットや中年の兵士達もつられるように動き出した。

結局、最後に残ったヘイヴィアも舌打ちしてクレーターの底へ向かう。

金属砲弾。

サイズこそ並の乗用車を超える規格外だったが、シルエット自体は射撃演習場などで良く見る潰れた弾丸と大して変わらなかった。元々は、おそらく先端が杭のように尖った円筒形に近かったのだろうが、今では砲弾の前半分が潰れて丸くなっていて、後ろ半分だけが原形を留めている。歪な傘にも見える形状だった。

「何だこれ……単に金属が詰まった塊って訳でもなさそうだぜ」

「『カタパルトカーゴ』のコンテナ式砲弾だ。中には好きなものが詰め込める。オブジェクトの装甲表面を溶かす強酸のスプレーとか、下位安定式プラズマ砲の専用ガスと大規模バッテリーにＣＯＩＬの組み合わせとか」

「やっぱ危ねえな！　不発弾だろこれ!?　起爆したら俺ら骨も残らねえぜ！」

しかし、重要なのはそこではない。

クウェンサーは砲弾の後ろ半分、その側面へ目をやる。

正確には、側面についた『傷』を。

「……やっぱりだ。砲弾に変な『傷』がついている。あれのせいで、空中でバランスを失って軌道が歪曲したんだ。空気抵抗の偏りのせいだ」

「あん？　って事は、金属砲弾については『サノバビッチ』が何かしたんじゃなくて、『情報同盟』側の設計ミスだったってオチなのかよ？」

「そんなに簡単じゃなさそうだ」

クウェンサーは苦い顔で答える。

「仮に空中であの砲弾へ、的確に、規則的に、『傷』をつける技術があるとすれば、『サノバビッチ』側が人為的に金属砲弾を曲げる事ができたはずなんだ」

「……マジで言ってんのか？　そりゃオブジェクトなら弾道ミサイル防衛用のレーザー兵器を搭載してたって不思議じゃねえが、それで自分に向かってくる砲弾を精密に『加工』したなんて言うつもりかよ!?」

しかし、クウェンサーはこれを否定した。

さらに悪い方向で。

「もっと簡単で、もっとヤバいかも」

「……？」

「『サノバビッチ』の周りに散らばっていたコンクリートは溶けていた。鉄塊も、プラスチックも、何もかも。……でも、あれは電子ビームを使った主砲の余剰エネルギーを浴びて溶けたんじゃない。唯一、ガラスの瓶だけは溶けていなかった。割れて鋭くなった破片は少しも丸まっていなかったからな」

「それがどうし……いや待てよ。それってまさか!?」

「強酸だ」

クウェンサーは、吐き捨てるように断言した。

「『サノバビッチ』は機体の周りに、霧状になった強酸を大量にばら撒いている！　だから向かってくる砲弾は強酸ゾーンに入っただけで傷ついて軌道を曲げる。強酸は気化する時に、空気をもやのように歪ませる。レーザービーム兵器なんかも、その『もや』を使って蜃気楼のように逸らしていたんだ!!」

「待てよ、馬鹿、ふざけんな!!　オブジェクトの装甲ってのは基本的に高耐火反応剤を混ぜた鋼の塊だぜ。無秩序に強酸の霧をばら撒くだけだったら、自分で自分の装甲表面を溶かしているはずだ。それに、あいつの主砲は？『サノバビッチ』はただランダムに電子ビームの軌道を歪めているだけじゃない。正確、精密に操作して加速器の真似事までしやがったんだ！　強酸説でそれを説明できんのか!?」

「多分、強酸の粒子よりも一回り大きいカプセルみたいなもので覆っているんだ。霧みたいに小さな粒で。濃度や摩擦も制御可能なら電気的にプラズマや電子ビームも曲げられるかも」

自分でもうんざりするように、クウェンサーは言う。

「ヘイヴィア、青十字の事を話した時に、ナノテク医療についても触れていただろ。多分、あれを応用してる。普段は安全な外殻に包まれたまま大気中をコロイド状に滞空、滞留させていて、必要なタイミングで信号を送って、外殻をシャボン玉のように割る。そしたら中身の強酸が空気に触れて迅速に気化するって寸法だ。これなら、空気中で反応する強酸の位置も密度

も思いのまま。加速器みたいに精密な装置を組み上げる事だって難しくない」

「馬鹿げた仮説だぜ……」

「『サノバビッチ』は自らターミナル施設を破壊して機体を『露呈』させておきながら、かなりの時間その場でじっとしていただろ。何故だ？　強酸の鎧を周辺一帯へ散布して、無敵の盾を配備するのにそれだけ時間が必要だったんだ!!」

「だって、そんなの、それが答えじゃ困るだろ!?」

ヘイヴィアが、理論を一切無視した事を喚いた。

剝き出しの感情だけで、彼は続ける。

「『サノバビッチ』の秘密の正体は大量の強酸だった？　つまり、この一帯には触れただけで金属やコンクリまで溶かすような薬品がばら撒かれてるだって!?　こっちにゃＮＢＣ装備なんて豪華なもんはねえんだ！　そんな環境破壊されちまったら為す術なんかねえよ！　これじゃ強酸爆弾と一緒だ、ここにいるだけで骨にされちまう!!　そんなの嫌だ!!」

「大丈夫だ、心配するな、大丈夫だってば！『サノバビッチ』の主砲を思い出せ。電子ビームのリングは半径二〇〇メートルくらいだったろ？　つまり、あれが最大効果圏の端なんだ。それより遠くに離れていれば、強酸の鎧の発動に巻き込まれる心配はない。それ以上離れると、きっとナノテクを使った外殻の遠隔操作が利かなくなるんだ!!」

「分かんねえだろそんなの!!　風向きなんかで、カプセルから弾けた強酸の霧が流れてくるか

もしれねえ。そもそも『サノバビッチ』が力をセーブしているかもしれねえ!!　どこからどこまでが安全かなんて誰にも言えねえんだ。ああくそ、やたら喉が渇いて水筒の水飲みまくったのだって、ひょっとしたら……」

自家生産の恐怖と妄想にやられるようになったら、戦場から生き残れる可能性はぐっと減る。些細なヒントも逃さない鋭い視点、というのは、度が過ぎれば単なる被害妄想へと劣化してしまうのだ。

「ヘイヴィア！　都合の悪い事実であっても、まず認めない事には乗り越えられない！　鉄くずやコンクリが溶けているのに、ガラスだけは無事な理由は？　ただの高温じゃこんな変化は起こらない。顕微鏡がないからいきなりナノテクなんて言われても納得したくないかもしれないけど、『サノバビッチ』が何かしらの方法を使って強酸を自由にコントロールしているのは明らかだ！　そして、ナノテクのカプセル以外に強酸の霧を広範囲にばら撒いて自由にオンオフできる仮説を俺には立てられない!!　ヘイヴィア、他に何か意見はあるか!?　あるのか、ないのか！　イエスかノーかだけで答えろ!!」

「くそったれが……」

「そんな事は聞いていない！　イエスか、ノーか!?」

「イエスだよ馬鹿野郎!!　ちくしょう、認めてやる。テメェはオブジェクトの事になると命の危険も分からなくなるイカれたヤツだが、イカれたなりにクレバーな頭を持っている事だけは

認めてやる!!　で、これからどうすんだマッドサイエンティスト候補生。仮にあれがナノテクの塊で、周辺二〇〇メートルを強酸のカプセルが隙間なく埋め尽くしているとしたら、俺らに何ができるってんだ!?　相手はマッハ四だの五だので飛んでくるオブジェクトの金属砲弾だって溶かしちまうんだぜ!!　近づく事だってできねえ!!」

「……そうだな」

クウェンサーは、視線をクレーターの底から、今も瓦礫の中央にそびえる『サノバビッチ』へと移していく。

これからの行動全てに命がかかる事を自覚した上で、考える。

「気になったのは、主砲の発射直前だ」

「あん？」

「『サノバビッチ』の全周をほぼ取り囲むように電子ビームのリングが展開してただろ。残像だけ見ると馬鹿デカいドームって感じの。敵味方問わず『砲撃を曲げる』時に強酸を開放していた、って事はさ、あそこじゃ『サノバビッチ』のほぼ全周を囲むように強酸の霧が展開されていたはずなんだ」

「それがどうかしたのかよ」

「……光も電子ビームも曲げるとしたら、ヤツはどうやって精密な照準を合わせていたんだ？『サノバビッチ』から外へと放たれる赤外線やレーダー波だって、強酸の鎧を通り抜ける段階

で歪曲してしまうはずなのに」

「待てよ……。となると、まさか照準システムだけは別枠で存在するってのかよ!?　歩兵、無人航空機、人工衛星、何でも良い。『サノバビッチ』とリンクしている外部の目ってのが!!」

「あるいは、『サノバビッチ』から直接伸びた触手みたいなケーブルの先に、照準用のレンズでも取り付けられているとかな」

クウェンサーはゆっくりと、意識して呼吸を整えながら、

「……何にしても、『目』さえ潰してしまえばどんな強大な主砲だって怖くない。お姫様からの攻撃だって当たらないから根本的な解決にはならないけど、少なくとも、『返す刀』で瞬殺されるのだけは避けられる。考える時間を延長できる!!」

「考えるのはテメェの仕事だ、とにかく俺に手を動かさせてくれ！　これ以上ぐじぐじ頭の中で悩んでいると恐怖でおかしくなっちまいそうだ!!」

「ようしヘイヴィア、それじゃ探し物の時間だ。カメラ、センサー、レーダー。とにかく照準に使えそうな機器が眠っていないか、徹底的に洗うんだ。初恋の女の子の部屋に初めて入れてもらって、ちょっとお茶入れてくるねーなんて言われて一人になった時と同じくらいにさ」

「いやー……クウェンサーちゃん……その流れにはついていけないわー」

「えっ、嘘でしょ、そわそわするよね!?　ここで梯子を下ろすなよ!!　あれ、ヘリのパイロットとかも目を逸らしちゃう!?　みんなも!?　今のそんなになの!?」

どのみち、『サノバビッチ』の無敵の防御システムも永遠には続かない。例えば、金属砲弾の表面に強化ガラスや純金などでコーティングを施せば、強酸の鎧の干渉を受けずに貫通できるかもしれない。

今は机上の空論を実現化・物質化に結び付ける時間が追い着かないだけ。

なら、その一番乗りとして楔を打ち込んでやる。

「べ、別に下着回りとか生理用品とかそういうド変態なのじゃないよ？　本棚を見てどんな本読んでいるのかなーとか、そういうライトなのだよ!?　それくらい誰だってあるよね。ねっ!?」

「分かったよ！　生きて帰ったら一晩議論してやるから血走った目でくっつくんじゃねえ暑苦しい！　そもそも血統優先の『貴族』はそうそう簡単に相手方の寝室に入る事なんかねえけどな!!」

双眼鏡で、ライフルのスコープで、銃器に取り付けられた様々な携行センサー類で、彼らは周辺一帯を音もなく走査していく。

ジリジリと神経が炙られていく。

「……ねえぞ。何もねえ！　ガラクタみてえな鉄くずはいくつか転がってるが、電磁波だの赤外線だの飛ばしてる反応はどこにもねえな。それともパッシブ式に徹底してやがるのか!?」

アクティブ式が赤外線や超音波などを自ら放って、その反射を計測するタイプに対して、パ

ッシブ式は外からやってくる光や音をただ感知する。『自らは何も照射しない』ため、感度が劣るが見つけにくいのが特徴だった。

「何かあるはずだ。光も物も歪める強酸の鎧にすっぽり収まった『サノバビッチ』が、単体で正確な狙いをつけられるはずがないんだ！」

「おい、あれから何分経ったんだ？　お姫様はもう到着するんじゃねえのか!?」

「待て、見ろ、あそこ！　瓦礫の隙間で何か光ってる。レンズか!?」

「センサーにゃ何の反応もねえぞ!?」

「パッシブ式の観測機器、そう、デジタルカメラか何かかもしれない。何にしても調べておいて損はない!!」

　正面からではなく、瓦礫の山を再びCの字に迂回する形でクウェンサー達は慎重に移動する。あれが本命なら、ガラスのレンズは『サノバビッチ』の目、そのものだ。下手に感知されたら最後、核にも耐えるオブジェクトを一撃でドロドロに溶かして吹き飛ばす、あの電子ビーム砲が襲いかかってくる事になる。

　地雷や不発弾の処理よりも精神を削る接近だった。

「……ああ、紅茶のポットを思い出す」

「いきなり何だよ」

「金属加工に爆薬扱う関係で、『安全国』にいた頃から学校で実習やらされたんだよなあ。不

発だったプラスチック爆弾を処理する時は、熱湯かけて爆薬を溶かしてさ」

「次、不吉な事言いやがったらレンズの前に放り出すぞ」

センサーやレンズの有無を確認するためとはいえ、馬鹿正直に真ん前からひょいっと覗き込む訳にはいかない。捕捉されたら一発で殺されるからだ。

よって、クウェンサー達はレンズが隠してある瓦礫の山の正面ではなく、その横や背後に回って、有線ケーブル類が隠されていないかを探す事にした。

「……基本的にゃ地雷探しと変わんねえぜ。砂の中にナイフの刃を薄く差し込んで、異物がねえか確かめる」

「地雷探査って言ったら、ライフルのセンサー類とか使えないの？」

「この瓦礫だぜ。金属反応なんて多過ぎて信用できねえよ」

「油田のパイプラインの油漏れ検知器みたいにさ、有線ケーブルに沿ってセンサーがびっしり張り付いているかもしれない。ケーブルは傷つけるなよ。見つけても引っこ抜くな。ジャイロ系なら少し傾いただけで反応を拾われるぞ」

ヘリのパイロットや中年の兵士達も協力して、クウェンサーやヘイヴィア達は少しずつ、砂の中を調べていく。鋭い刃を柔らかい砂へ突き入れて、顔中汗まみれにしながらミリ単位の探索を進めていく。

「なんかよお……。『島国』のオモチャでこんなのなかったっけ？　樽の横からオモチャのナ

イフを刺していって、真ん中の海賊が飛び出すヤツ」
「あれ、飛び出した方が勝ちなんだっけ？　負けなんだっけ？」
「こいつでそれやったら全員まとめて消し炭だぜ……。ちっとも笑えねえ、重圧が違い過ぎる」
と、その時だった。
砂の中に折れた鉄筋を差し込んで反応を確かめていたヘリのパイロットが、何か歪んだ笑みのようなものを作った。
「……ある。何かある！　ぐにゅって、今、何か細長いものが……」
「待ておっさん、そこ動くな。おい、こっちからもナイフ入れてみるぞ……」
ヘイヴィアがヘリのパイロットの近くへゆっくりと歩いていく。別の角度からナイフを差し込むと、やはり彼の顔も不気味に歪んだ。
不用意に建物のドアを開けたら、ドアノブに仕掛けてあった手榴弾が床に落ちるのを目の当たりにした時のような顔。単純な恐怖とも違う、やや現実逃避にも似た奇妙に弛緩した表情だ。
「くそ……確かになんかある……。細長いぞ、なんか、チューブみてえだ……」
「パイロットからヘイヴィアまでだろ。途中にある砂、少しずつ取り払ってみよう」
言いながら、クウェンサー達は遺跡の発掘作業のようにじりじりと砂を取り除いていく。すると、地面から数センチほど潜った所に、蛇のようにのたくるものが出てきた。ある程度予想していた事とはいえ、実際に目の当たりにしてクウェンサー達の心臓が縮む。

ただし……、

「……おいクウェンサー、こりゃ何だ……？」

「見れば分かるだろ」

「ただのゴムホースにしか見えねえよ!!」

緊張の糸が切れたのか、ダムが決壊するようにヘイヴィアは叫んだ。彼は瓦礫の山を回り込むと、『レンズ』があったと思しき場所へ躊躇なく手を伸ばす。

彼は何かを投げてきた。

砕けて丸い底だけになった、ガラス瓶の残骸だった。

「有線式のセンサーだのレンズだの、そんなの始めっからありゃしなかった！　ここにはヒントなんか何もねえ。さて、こっからどうすんだ!?　『サノバビッチ』を封殺する仕組みなんてホントにあるのかよ!!」

「待て、だとしたら『サノバビッチ』はどうやって照準情報を取得しているんだ。さっきも言った通り、あいつは周囲全体の空気を強酸の霧で歪ませてレーザービームや電子ビームを歪曲させてる。シールドの内側にあるセンサーやレンズを使っていたら、自分のシールドで照準情報を歪めてしま……」

言いかけて、そこでクウェンサーの言葉が止まった。

糾弾していたはずのヘイヴィアだったが、相手からの声が途絶えると、それはそれで不安

になるらしい。慌てたように声を掛ける。
「おい、何だよ。何を頭の中に浮かべてやがる!?」
「……ヤツは光さえ自在に曲げる」
クウェンサーは、呆然としたように呟いた。
「だったら、潜望鏡みたいに光の流れを何度も折り曲げる事だってできるかもしれない……。有線のケーブルなんて通す必要はなかったんだ。強酸の霧を上手に使って、光ファイバーの代わりにしてしまう技術があるとしたら……」
「冗談じゃねえぞ」
ヘイヴィアは、遮るように言った。
これ以上は聞きたくないと宣言するように。
「それじゃ正真正銘、『サノバビッチ』には弱点がなくなっちまうじゃねえか……。攻守も照準も全部あの強酸の霧一つあればクリアできちまう!!　これ以上、俺らに何ができるってんだ!?」
「……」
「頼む、頼むよ……。黙るんじゃねえ!!　ここでパパッと解決策を思いつくのがテメェの仕事だろ!?　なあ、ここでテメェが沈黙しちまったらどうにもならねえ。頼むから何か大仰な事を言ってくれよ!!」

ゴゴン、と低く唸るような音が聞こえた。

『サノバビッチ』を中心に、何か青白い色の土星の輪のようなものが浮かび上がる。

「まずいぞ……。ＭＩＢの主砲だ」

ヘリのパイロットが、瞬きすら忘れて言った。

「『ベイビーマグナム』が捕捉されたのか？　それとも私達が!?　どちらにしても、あれが放たれればもう救援到着の目はなくなるぞ!!」

「何か……何か、何でも良い。とにかく少しでも情報を！　突破口になるものは何かないのか!?」

「ある訳ない……」

中年の兵士が、力が抜けたようにへたり込んだ。

うつろな目で何か呟いている。

「辺りを見回して何か分かるか？　あるのは瓦礫の山と、圧倒的な威容のオブジェクトだけ。無線機や携帯端末を頼って何か見つかるのか？　ＭＩＢとかいうのがネットに垂れ流している犯行声明くらいしか出てこない……」

しかし。

そこで、クウェンサーはわずかに眉を動かした。

「犯行声明？」

「意気揚々と全世界にばら撒いている！　あそこまで勝利を確信するからには、相応の根拠ってものがあったんだ。我々じゃあのオブジェクトには勝てない!!」

突き付けられた携帯端末の画面を、クウェンサーはまじまじと見た。

ＭＩＢ。かつてあった大国の亡霊達。タマネギ装甲を用いない。専門の操縦士エリート以外の一般兵が搭乗。大幅なコスト減。新防御システム、フライバイコライダー。『世界の警察』の地理的条件。新たな大国の建国と、それによる一局軍事支配がもたらす平和な世界の構築。新しい時代の到来を証明するための、既存オブジェクトとの作為的な戦闘。アーリーステイツ。

「……おいヘイヴィア」

「何だよ？」

「一帯には『カタパルトカーゴ』がばら撒いたコンテナ式の金属砲弾があちこちに埋まっているはずだよな。あれは不発弾だ。信管を差し替えれば起爆できる。間違っていないか？」

「だったら何だってんだ!?」

「勝てるかもしれない」

苛立つヘイヴィアの言葉に被せるように、クウェンサーは告げる。

息が詰まるように、全員が沈黙を生み出した。

もう一度、繰り返すようにクウェンサーは言う。

「くそったれの『サノバビッチ』に勝てるかもしれない。どうする、この賭けに乗るか？」

15

幸い、今回はクウェンサーとヘイヴィアの二人だけでなく、輸送ヘリで運命を共にした兵士達が合計八人ほどいた。

時間はない。

こうしている今も、『サノバビッチ』の周囲には青白い色の輪が次々と増えている。光り輝く繭を作るように機体が覆われていく。あれが十分に加速されれば、一筆書きのように長大・長時間の電子ビーム兵器が解き放たれる。『ベイビーマグナム』には逃げられないし、クウェンサー達など論外。どこの誰を狙われても、彼らの命運が決まってしまう。

だから、クウェンサーは迅速に指示を出した。

彼はボールペン型の電気信管をいくつも取り出し、味方の兵士達に手渡しながら、

「みんなは辺り一帯に埋まっている『カタパルトカーゴ』のコンテナ式金属砲弾をこじ開けてくれ。不発弾の信管をこいつと付け替えるんだ！　作業が終わったら、どこでも良い、とにかく爆発に巻き込まれない安全圏まで逃げてくれ。いつ仕掛けるかは分からない。待っている余裕もない！　爆発で死にたくなければ自分の命は自分で守ってくれ！」

「おいクウェンサー、俺は!?」

「無線機使って周波数のランダムサーチ。あの『サノバビッチ』のコックピットにも届く帯域を見つけてくれ。不自然に雑音が大きくなる場所が、ヤツらの使っている帯域だ！」

「嘘だろ……。あれと交信するつもりか!?　電波の発信元辿られたら主砲をぶち込まれるぞ!?」

「だからいくつも無線機を経由して発信元を特定されないようにする。電気信管には無線信号を送受信する機能がついているし、みんなの無線機も使わせてもらう。とにかく広範囲にばら撒いてくれ！」

「テメェはどうすんだ？」

「火箭」

クウェンサーは吐き捨てるように言う。

「前に言った、巨大なロケット花火をいくつか作りたい。みんなが持っているライフル弾をあるだけ貸してくれ、片っ端から！　あと、水筒と冷却スプレーも頼む。どうせ死んだら使えないだろ」

「……あん？　ロケット花火に水なんかいるのかよ？」

「ロケットは乗り物に過ぎないよ。何を積み込むかで真価も変わる。とにかく従ってくれ、ヤツに対抗するにはそれしかない！」

時間との戦いだ。

クウェンサー達は迅速に散り、それぞれの作業を始める。

暴発事故などからも分かる通り、ライフル弾の炸薬も取り扱いを間違えれば持ち主を殺しかねないほどの牙を剝く。が、クウェンサーは爆薬のスペシャリストだ。電子秤や専用の道具などを使わなくても、その場にあるものだけで正確、精密に炸薬を詰め直していく。幸い、辺り一面は瓦礫だらけで、必要な容器や姿勢安定用の棒などを調達するのに事欠かなかった。

むしろ面倒臭いのは導火線だ。

こちらについては、ティッシュを丸めてこよりを作るようにしながら、中に少量の炸薬を混ぜて作る。量が少なければ火は途絶え、多過ぎれば途中で爆発する。均一に込めるのが一番神経を使う。

『金属砲弾の信管を付け替えた。この通信を最後に無線機は捨てる！』

『こっちも完了。後は勝手に逃げさせてもらうぞ!!』

『無線機は囮に使うから、以降は連絡を取れなくなる。死んだ訳じゃないから回収忘れるなよ！』

クウェンサーは手元にある無線機から、作戦の進行を確認していく。

ヘイヴィアが叫ぶように言った。

「周波数分かったぜ！　一〇・一ＧＨｚ。ホントに『サノバビッチ』と交信するつもりか!?」

「そうしないとヤツに勝てない。とにかくヘイヴィアも安全な所へ逃げてくれ！」

「どこだよ!?　あんなのに狙われたら核シェルターに隠れたってぶち抜かれちまうぜ！」

これ以上は拘泥していられない。

クウェンサーは一・五リットルのペットボトルほどの手製巨大ロケット花火を地面に突き刺すと、慎重に角度を合わせて導火線に火を点ける。

ほとんど爆発音のような轟音と共に、数発の火箭が『サノバビッチ』の頭上目がけて斜めに飛び出した。

途中で、その軌道がぐにゃりと曲がる。

「何やってんだ!?　しっかり歪んでやがるし、あんなオモチャが当たったってオブジェクトには傷一つつかねえだろうがよ!!」

「当たらなくったって良いんだ!!」

クウェンサーが意味不明な事を言った直後だった。

『サノバビッチ』の頭上で、機体に当たらないまま、ロケット花火が限界を迎えた。

パン!!　という破裂音と共に、その『中身』がばら撒かれていく。

16

その瞬間。

クウェンサー達が勝手に『サノバビッチ』と呼んでいる……実際の正式名称は『アーリース

テイツ』というそのオブジェクトのコックピット内で、ＭＩＢの黒服の青年、Ｄ．Ｃ．ゼロはゆっくりと眉を動かしていた。

画面に躍る大量のエラーの文字。

タマネギ装甲を持たない『アーリーステイツ』の攻防一体の兵装『フライバイコライダー』が使用できなくなっている。加速中だった電子ビーム主砲は制御を失い、中途半端な威力のまま遠くの砂漠へと投げ放たれてしまった。

「なん……だ？　凍結？　さっきのロケット花火か。ナノテクのカプセルを吐き出す噴出口を薄い氷の膜で塞がれた、だと!?」

ただ火薬を詰めただけのオモチャではなかったらしい。

『アーリーステイツ』の頭上で大量の水をばら撒き、さらにはそれを瞬間的に冷却して氷へ変えてしまう……。一瞬、過冷却などを思い浮かべた黒服の青年だったが、そこでもっと答えはシンプルだと気づいた。

（……冷却スプレーと水筒を組み合わせただけか。そんな子供騙しで、一時とはいえ『フライバイコライダー』を塞がれるとは!!）

ザザッ!!　と、無線装置から不意にノイズが走った。

ＭＩＢで使っている帯域に何者かが割り込んだのだ。暗号化を施していないため、それはダイレクトに音声をコックピット内へ響かせる。

『ようＭＩＢ、ちょっとは驚いてくれたか？　アンタ達の専売特許が、ナノテク使った強酸カプセルだっていうのは分かってる。そして効率的に噴霧するなら、口は機体の上側に設置するだろう。薄く広く氷を張ってしまえば全部塞げると思っていたよ。答えはどうだった？』

「……馬鹿が」

呟き、青年は同時にいくつかのボタンを人差し指で押していく。

無線電波の発信元をスキャンしようとしたが、反応がかなり多い。主砲以外の兵装を持たない『アーリーステイツ』には、副砲の斉射で同時攻撃……といった手も使えない。

「こんな子供騙しで『アーリーステイツ』を本当に止められるとでも思ったか？　こちらは新しい『世界の大国』を建国するため、オセアニア軍事国ができる前から暗躍を続けてきたんだ！　その場の思いつき程度で負けるはずがないだろう!!」

ブン、と誘蛾灯のスイッチを入れるような音が響く。

通常、『アーリーステイツ』の主砲である電子ビーム兵器は、機体周辺へ展開した『フライバイコライダー』の力で円周上に加速していく事で最大の破壊力を実現するようにできている。

が、全く加速ができなかったとしても、多少の熱くらいは放出する。

広く浅く氷を張る事に専念したため、『アーリーステイツ』の表面にある氷の厚さはせいぜい数ミリ。兵器としては通用しないほど弱体化した主砲であっても、この程度の氷は溶かせる。

そして、数ミリの氷さえ溶かせば、再び『フライバイコライダー』は起動する。

攻防一体の完全な兵装を、取り戻す。

「ははは!!　『フライバイコライダー』を備えた『アーリーステイツ』はまだ一機ある。どこにあるかも予想がついていないだろう？　そんな時間は与えない。俺達は、この一機で起動までの時間を稼げばそれで良い。後は時間が戦力差を決定的に広げてくれる!!」

『……へえ』

「そしてオブジェクトの他にも『増幅施設』を数百確保している。『フライバイコライダー』を一時的に封じた以上、正体についても看破しているな？　あのナノテクを大陸中にばら撒く散布機だよ。大陸を覆う『フライバイコライダー』に、それを制御する三機の『アーリーステイツ』!!　これが何を意味しているかは分かるだろう!?」

『あれだけ高出力の電子ビーム兵器を、大陸全体で自由に折り曲げて、俺達のオブジェクトを全方向から狙撃できる環境が整う……。地平線なんかの制約もなし。だが空気中の減衰については考えているのか？』

「あれはナノテクの塊だ。強酸の散布位置や量を調整すれば、真空に近い空間の製造も可能となる。つむじ風のような極めて短い瞬間的、極めて小さな局所的に過ぎないが、その細いチューブへ正確に電子ビーム砲を通す技術がこちらにはある!!　つまり減衰はほぼ無視できる!!」

『なるほどな。フライバイの語源通りに「サノバビッチ」同士で電子ビームを受け取り、再加

速させる事ができれば出力だってうなぎ上りになる訳か。便利な時代だよな、単純なオブジェクトの差を覆す素晴らしい技術だ。……代わりに、大陸の半分以上が酸に冒されるけど』

今ある局地的戦況を、オセアニア全土に広げると考えれば良い。

圏内の全てのオブジェクトはまともに砲撃を当てる事ができず、反対に、『アーリーステイツ』側からの電子ビーム砲は変幻自在に屈折して、確実に敵機を破壊していく。

泥沼の削り合いとも、暗黙の了解に則った一騎打ちでもない。

自軍の犠牲など、そもそも想定しない。

○対一〇〇の損害比率。完全なる一方的な破壊の実現。

それこそが、

『最小の機体で最大の支配圏を獲得する、新しい『世界の警察』に相応しいシステムだ!!　オセアニアが成功すれば、後は少しずつ範囲を広げていけば良い。一〇年もしない内に新しいシステムは地表をくまなく覆うよ。このオセアニアを中心にしてな。ついてこれない者は、時代の上書きに呑まれて死ぬが良い!!』

『……そんな暇を与えると思ったか？』

心を読んだように、無線越しの敵兵は嘲笑った。

黒服の青年の瞳は揺らがない。

『遠方で待機している第一世代がやってくるか？　そんなもの間に合わない。氷の厚さは数ミ

リだ。ほんの一〇秒足らずで『フライバイコライダー』の制御は……」

『そっちじゃない』

断言された、その直後だった。

キュガッッッ!!!!!!　と。

分厚いオブジェクトの壁を貫くような轟音と震動が、黒服の鼓膜へ襲いかかった。

「な、ん……!?」

『忘れたのか？　辺り一面には「カタパルトカーゴ」の不発弾が埋まっている。オブジェクトがオブジェクトに向けて放った本気の主砲だ。中身は何だったかな？　下位安定式プラズマ砲のガスと、オブジェクトの動力炉から直接大電力を注いだ大規模バッテリー、あとはＣＯＩＬのワンセット？　ま、何でも良いけど、爆発に巻き込まれたらただでは済まないはずだぞ』

何せ、と敵兵は付け足すように言う。

『……アンタは金のかかる職人技のタマネギ装甲を排して、新技術の「フライバイコライダー」に頼ったんだもんな？　その防御システムが使えない今じゃ、並のオブジェクトよりペラッペラの装甲しか持っていないって事になってしまうもんなあ？』

「……っ!!」

（不発弾の信管を付け替えて、歩兵の手中に収めたか……っ!!）

黒服の青年はコックピットを改めて見回す。

レバーだけで一〇本以上、ボタンの数は数百に上る。通常なら眼球の動きをレーザーで読み取る装置なども併用するが、操縦士エリートとしての訓練を積んでいなければまともに使いこなす事もできないはずだ。

そう。

青年は操縦士エリートではないのだ。

エリートではない一般兵の手で既存のオブジェクトを撃破していく事に、思想的意義があったのだ。

安価で高性能、大量の兵器を全世界に配備する事で最強の座を独占する。

かつてあった『理想の大国』の第一歩として。

『お前はエリートじゃない！　今までその場を動かなかったのは、強酸カプセルの散布に時間がかかるだけでもなかった。あまりにも複雑過ぎる操縦体系を把握しきれないから、高速戦闘なんて夢のまた夢だったんだ!!　その場に留まって、向かってくるオブジェクトを全て挫く。大したパフォーマンスだけど、お前にはそれしか選べなかった!!　だから!!』

地中から噴き上がる大爆発を避けられない。

薄い氷が溶ける前に歩兵達が生み出した凄まじい爆発が届いてしまえば。

並以下の装甲しか持たない『アーリーステイツ』は。
轟音と共に打ち破られてしまう……!!
「く……」
黒服の青年は、たくさんあるレバーの中から二本を、左右の手でそれぞれなぞる。
摑む。
勢い良く、奥へ押し込む！
「馬鹿が!!　一般兵が動かす事は最初から分かっていたんだ！　コンピュータ処理で極限まで操縦手順を削減する工夫は織り込んでいる。対オブジェクト戦に届かずとも、私の手でオブジェクトは動かせる！　高速移動だって。だから、お前達の爆発なんぞに巻き込まれない!!」
ドガッ!!　という爆音が炸裂した。
一度や二度ではない。
しかしそれは、敵兵が生み出した大爆発……だけではなかった。
その爆発から逃れるため、イカズチのような鋭角的に何度も機体を切り返した反動のようなものだ。
「踏み潰す……」
黒服の青年は、笑う。
『アーリーステイツ』の一部分を覆っていた氷の膜が、溶けていく。

本領を、取り戻す。

「踏み潰してやる!!　この程度でＭＩＢに……『世界の警察』の復興に対抗できると思った事、そのものが不敬！　二度と地球人口が思い上がれないよう、敗者の象徴として最も無残に踏み潰してやる……!!」

赤く、染まる。

猛烈な怒りで黒服の青年の視界が、端からじわじわと真紅に染まっていく。

そして……。

17

「おい、どうすんだ……？」

呆然と、ヘイヴィアは呟いた。

それはすぐに叫び声に変わっていく。

「本当にどうすんだ!?　さんざん挑発するだけ挑発しておいて、『サノバビッチ』の動きが機敏になっただけじゃねえか！　これじゃ自殺のために相手を煽ってるようなもんだぜ!?」

「いいや」

クウェンサーは、ニヤリと笑った。

絶体絶命。

眼前の『サノバビッチ』がただ怒りに任せて突っ込んでくるだけで挽肉にされかねない状況の中、それでも勝利を確信した笑みを。

「俺達の勝ちだ。自殺をしたのはあいつの方だよ」

「あん……？」

「オブジェクトは全長五〇メートル以上、総重量二〇万トン超え。原子力空母二隻分の超重量が時速五〇〇キロ以上の猛スピードで戦場を席巻しているんだ」

区切るように息を吸い、彼は続ける。

「……操縦上にかかる慣性Gの強さは、超音速戦闘機なんて目じゃない。最新テクノロジーの塊である特殊スーツを身に纏って、さらにはエリート自身も徹底的に肉体を改造して、これに何とか抗う。でも、逆に言えば……」

「何の特別性もない一般兵が、無理にそんな挙動を取っちまったら……」

ごくりと喉を鳴らすヘイヴィア。

まるでナイフでも突き刺すような残酷さで、クウェンサーはこう答える。

「良くて脳から血が不足する意識不明のブラックアウト。……悪ければ太い血管か内臓が丸ごと破裂して即死、かな」

どがかがかかかがかがかがかがかがっっっ!!!!!!　と。

『サノバビッチ』がまるで見当違いの方向へと流れていく。クウェンサー達のすぐ横を突き抜けていく。辺り一面にあった瓦礫の山を無理矢理に押しのけながら、ひたすら一方向に一方向にと緩やかに進んでいく。その意思なき動きは、オブジェクトを操る者から力が奪われているのを如実に伝えていた。

『ばっ、が……あぐあ……あああああ……』

呪いのような声が、無線機から響く。

クウェンサーは笑いながら、それを口元へ寄せていく。

「どうした？　目玉の毛細血管でも破れたか？　まるで視界が全部真っ赤に染まって困っていますみたいな声を出して」

『馬鹿、が……』

がくがくと。

息を吐く力さえ失われつつあるのか、切れ切れの声が返ってくる。

『……この、割れた、ステンドグラスのような……世界を、正す、最後のチャンス、だったのに……。世界は、かつてあった、「警察」の再来を、望んでいる……。お前達は、そんなに、戦争が好き、なのか……？』

「マジで言っているのか」

一言だった。

クウェンサーは、さっさと切り捨てた。

「『国連の崩壊』に代表する、世界地図の破壊なんて一体何十年前に起きた事なんだ。少なくとも、そんな張りのある声の持ち主が当時の事なんか知っているはずがない。整備兵のばあさんがギリギリで経験しているくらいの事なのに」

『あ……ぐ……』

「アンタは何も知らなかったんだろう？　自分の目的を果たすためには、歴史的背景ってヤツがあった方が民衆を騙しやすいからな。例えば、私はかの有名な『貴族』の一員で、遠い昔に嵐の海で消えた、祖先の沈没船に関する古い資料が出てきた。金銀財宝を引き揚げるために出資しませんか、とかな。アンタ達が掲げているＭＩＢだって似たようなもんだ」

かつて、『世界の警察』は、立派に役目を果たしていたのかもしれない。

大国が管理する時代は、今よりずっと平和だったのかもしれない。

やはり『若い世代』のクウェンサーは、当時を知らずにそこを否定するつもりはない。

だけど。

「……なあおい。アンタ達は本当に、かの大国の後継者なのか？　真顔でイエスって言ったら、

両手叩いて爆笑してやるよ」

吐き捨てるように、クウェンサーは言った。

少なくとも、このＭＩＢ達は『世界の警察』とは何の関係もない。

遠い未来で、その名を勝手に語っているだけの悪党だ。

「何か勘違いしているんじゃないのか？　ここは、アンタの国でも、俺達『正統王国』が管理する植民地でもない。ここは、オセアニアの人達の、彼らだけの国なんだ!!　俺達はただ一時的にお邪魔しているに過ぎない。そんな簡単な事も忘れて、良い土地だから勝手に奪ってしまおうなんて平気な顔で言っている時点で、アンタ達はもう『警察』でも何でもない!!　かつてあった思想に憧れて取りつかれた、単なる略奪者だ!!」

『が、ご……ごぶ』

機械越しに、血を吐くような音が響いた。

だが、それでも『サノバビッチ』の動きが止まった。

今のは、今のだけは、聞き捨てならないといった調子で。

動きに。

人間味が、戻る。

『がばァァァあああああああ

あああああああ

終章

『ＭＩＢの追討作戦は継続中。抵抗勢力については躊躇なく攻撃しています。死亡確認のための写真を送りますから、リストの方と照合してください』

『彼らの拠点であるターミナル施設を捜索中。……驚くべき事に、本当に換装準備中だったオブジェクトが二機、出てきています。例の「フライバイコライダー」の増幅施設についても五〇〇基以上。あと一二時間ほど遅れていたら全て解き放たれ、オセアニアで全面戦争が起きていたかもしれません。幸い、起動前に全て制圧できましたが……』

『シドニー近郊の廃工場でＭＩＢメンバーを大量に発見。投降を希望しています。捕虜収容の準備をお願いします』

『ナイトスカイの方は沈静化しているようです。一応警戒はしていますが、民間人との交戦に陥る心配はなさそうでホッとしています』

第三七機動整備大隊の作戦指令室で、フローレイティアは報告を聞きながら、細長い煙管を吹かしていた。

表情にさしたる変化はない。

「芽は全て摘めそうか？」

『すでにほとんど終わっていますよ。「安全国」に潜伏しているスポンサーの方も「黒軍服」が始末している事でしょう。換装が終わらず、動くはずのないオブジェクトを保有していたのがプラスに働いたようです。素直に全力で逃走していれば、そのまま闇の中へ潜伏されてしまったかもしれませんが……』

「下手な希望があるせいで、そちらにＭＩＢの人員が集中したと？」

『キッチンの片隅でゴキブリを引っ掛ける……ええと、何でしたっけ？　粘着テープのアレみたいになっていましたよ。ともあれ、混乱に終止符を打てて何よりです』

ふむ、とフローレイティアはわずかに思考する。

そして、口に出す。

「となると、問題なのは……」

『例の、クウェンサー達が実際にぶつかった、ＭＩＢで唯一動かせるオブジェクトですね。特に、新技術の「フライバイコライダー」については、世界的勢力の間で争奪戦の火種に繋がりかねません』

「我々で手に入れられれば御の字ではあるが、そう簡単にはいかないだろう。技術を取得する事と、それを独占しておく事はまた別だ」

そもそも、事は完成品の一機だけではない。換装途中とはいえ、動力炉を搭載したオブジェクトの『素体』や、増幅施設と称する建造物が数百も見つかってしまった事も問題だ。鹵獲し、自軍の戦力に組み込もうとする思惑がぶつかれば、やはり戦争の引き金になる危険が出てくる。

そもそも、対象地域に大量の強酸をばら撒くあの技術は、広く世界で展開されれば農地の枯渇などに発展し、人類全体が自分の首を絞める結果にも繋がりかねない。間抜けな高官達が欲をかかないよう、闇に葬った方が身のためだろう。

あんなものが、『向こうが配備しているんだから、こちらも同じように対抗しなければならない』で拡散したら目も当てられない事になる。

『彼らMIBが技術情報漏洩防止のために、敗北と同時に全ての動力炉や強酸のタンクをネット経由で一斉に起爆させる仕組みでも用意してくれれば良かったんですけどね』

「……ものは相談だが、そう見せかけてMIBの忘れ物を残らず吹き飛ばす事は可能か？」

『命令であれば。……ただ、まあ、上層部には知られたくないですな。新技術取得を放棄して宝の山を吹き飛ばしたなんて事がバレれば、吊るし上げは確定ですし』

「綱渡りを任せても？」

『であれば、あなたの口から命令してください。それを叶えるのが私達の存在意義です』

短い言葉と共に、フローレイティアは通信を切る。

もう一度。

細長い煙管を咥え直す。

若い女性のオペレーターが、不安そうに彼女の顔色を覗き込んでいた。

「……な、何か、浮かない顔ですけど」

「問題がもう一つ」

それだけ、彼女は呟いた。

（……ＭＩＢの資金となった、大量の金塊。その隠し場所が分からないのよね）

ＭＩＢの前身は、国連の崩壊時に大量の金塊を盗み出したと言われる。

軍上層部、現場の兵士達、そして拘束したＭＩＢの捕虜達は揃って『荒唐無稽な幻想だ』と切り捨てていたが……。

（しかし一方で、本当に言葉一つの嘘だけで、あれだけの組織体制を恒久的に維持できるものなのか？　全てが真実とは流石に言わないが、嘘を信じ込ませるため、時には金塊の山を見せて『証明』しなくてはならない場面もあったのでは……？）

その荒唐無稽な話、もしも真実の一端を摑んでいるとすれば、大きな問題を孕んでいる。

今ある貨幣制度は『その金塊がなかった事を基準点に』相場が決定されているのだ。

仮に。

海を埋め尽くすほどの金塊が、ひょっこり顔を出したら……。

（金の値段が暴落し、現状の貨幣制度が崩壊しかねない）

とんでもない『爆弾』だ。『国連の崩壊』に匹敵する大騒動に発展するほどの。生け捕りにしたMIBを締め上げても金塊の場所など誰も知らないと答えるだろう。

そこまで考えて。

フローレイティアは、コキコキと首を鳴らした。

「……危ない危ない。こういう『リアリティ』に振り回されて、今の今までヤツらをのさばらせていた訳か。まるで人の頭に巣食うコンピュータウィルスだな」

「？」

輸送ヘリの墜落から、『サノバビッチ』撃破を経て、ほうほうのていでクウェンサーやヘイヴィア達は整備基地ベースゾーンまで帰ってきた。

もはや自分の足で歩く能力すら失い気味で、救援部隊の手で拾い上げてもらったのだった。

軍用四駆に乾杯。

時代遅れの旧式兵器が満載の部隊に配備されて本当に良かったと彼らは涙した。

「……うへえ。最悪だ、汗と砂と血と油となんか良く分かんねえ汚れまみれで最悪だっ!!　おい、休暇申請ってどれくらい残ってたっけ？　そもそもそんなもん俺にあるのか!?」

「お前のスケジュールなんて知らないよ……。とにかくシャワーを浴びてベッドに潜り込みた

い。馬鹿じゃないの、俺、給料はみんなおんなじなのに一人で張り切っちゃってさ……」

停車した四駆のドアからゴロンゴロンと転がり出る馬鹿二人。下は砂漠の砂地だった。体中の汚れに細かい砂がこびりついて不快な事この上ない。

もう立ち上がるのが億劫で、力が尽きたミミズみたいにのたくるクウェンサー達の前に、整備兵の婆さんが歩いてきた。

「もー……何でこの場面でせめてお姫様がやってこないかな……？」

「そりゃ彼女は一戦終えてシャワーを浴びているからに決まっておるじゃろう」

ガバァ!!!!!!　と馬鹿二人は即座に立ち上がった。

そして同時に叫ぶ。

「「ご褒美タイムですね!!」」

「……あー、覗きに挑戦するのは構わんが、多分、機密情報保護の名目で射殺されるんじゃないかね」

ろくな事に頭を使わない馬鹿野郎達は聞いていない。

……そもそも、整備兵の婆さんはここにいる。これは重要な情報だ。最大級のトラップである『女湯を　覗いてみたら　婆さんが』といった地獄絵図は取り除かれているのだ。ならば挑戦するべき価値もぐっと上がるはず!!　あと、婆さん以外の女性なら大抵は『まあ、それはそれで』と受け入れられるクウェンサー達なのだった。

何やらその場に屈み込むと、落ちていた木の棒を使って詳細な図面を描き始める。

「おいクウェンサー、ここはこうなっているだろ。この整備基地は一〇〇両以上の大型車両で組み上げられているから、一見壁に見える所をこじ開ける事だって……」

「馬鹿、おい、駄目だ、ヘイヴィア、カメラは駄目だ！　旅のイベントで済ませるためには古き良き柵を乗り越えて覗くスタイルだけに留めておこう。これは紳士のルールだ」

「覗いた時点でアウトじゃよ、ご都合主義ども」

呆れたように整備兵の婆さんは息を吐く。

その後もあれこれ作戦会議を進めるクウェンサーとヘイヴィアだったが、いよいよ話が現実味を帯びてきたと判断した婆さんが無線機でフローレイティアと連絡を取り合った事で戦況が一気に悪化した。やたらとゴツい筋肉兵士が運転し、ルーフから上半身を出したフローレイティアを乗せた軍用車に追い駆け回される羽目になる馬鹿二人。

全力疾走しながら彼らは叫ぶ。

「バッカじゃねえの!?　これで轢き殺されたら一〇〇パー浮かばれねえぞ俺ら!!　ていうか何であの爆乳風呂に入ってねえんだよ！　女湯で待ってろ馬鹿、ばーか!!」

「いや待て!!　何とかしてお姫様の専用シャワールームの方へ逃げられないか？　そうすれば不可抗力の闖入劇で全て有耶無耶になってくれるかも……!?」

世の中はそんなに都合良くはないのだった。

追い詰められた女の敵二名はゴツい兵士達に連行される形で、刑罰の便所掃除を命じられる。何もかもが最悪だった。

「でもよお……」

「何？」

「今回のＭＩＢじゃねえけど、こんな世界になっちまった本当の理由なんて、一体どこの誰が知っているんだ。当時の空気を知ってる人間だって、高齢化でどんどん少なくなってるっていうのによ」

「……ひょっとしたら、あいつらが名乗る前は、本当にどこかの誰かが『世界の警察』を取り戻すための戦いをしていたかもしれないんだよな。戦争の真実を抱えたまま歴史の闇に埋もれて、その抜け殻や肩書きだけを別の誰かに利用された……」

クウェンサーは便所の壁に背中を押し付けながら言う。

極限の疲労で完全に膝は震えており、ちょっとでも気が緩むと便所の床とキスしてしまいかねないほどの苦行だった。

そんな中、何とか二本の足で踏ん張りながらも、クウェンサーはどこか遠い所を見るような目で呟く。

「……話を聞ける内に聞いておいた方が良いのかもしれないなあ。本当の当時を知っている

……例えば、整備兵のばあさんとかに」

そう言っている間にも、闇の中で、次の戦争の火種は煌々と輝く。

もはや誰も理由が分からないまま、それはただ続いていく。

あとがき

七冊目！　一冊ずつの方もまとめ買いの方もこんにちは。
鎌池和馬です。

一本の間違い電話から始まる物語、身に覚えのない誘拐の脅迫電話、その時あなたは赤の他人のためにどこまでできるのか……!?　という始まりにも拘らず、毎度お馴染みのヤツらが関わると途端に珍道中になってしまう、なんてところに、クウェンサー達の規格外ぶりがいかんなく発揮されております。……つまり、彼らが普段から取り扱っているのは『戦争』であって『事件』などではない、という事ですね。

今回はオセアニアに焦点を当てた展開に絞っています。最初の一巻目を紐解いていただければ分かる通り、オセアニア軍事国の開発していた〇・五世代、実は『情報同盟』のおほほが操る『ラッシュ』の劣化版だったりする訳で。では、その機密情報の塊をオセアニアに持ち込んだのは誰だったのか……？　という辺りを物語の核に据えております。『情報同盟』の本国がどこにあるかを思い浮かべれば、『彼ら』なら比較的容易だった事も分かるはず？

敵はＭＩＢ。ＵＦＯ関連の都市伝説にしょっちゅう出てくる謎の組織ですね。当作品世界ではＵＦＯや宇宙人ではなく、オブジェクトの秘密や世界地図が崩壊した理由などの管理を担当していただきました。まあ、そうシンプルに進まないのがこの作品らしいところですが。……作品世界最大の『異物』であるオブジェクトの謎を任せる相手としては、まあ妥当な線なのかなとか思いながら書いていました。いかがでしたでしょうか。

イラストの凪良さん、担当の三木さん、小野寺さん、阿南さんには感謝を。ひょっとしたら、オブジェクトよりも大量の群衆とかの方が大変だったのかも……？　色々とお手間をおかけしてしまってすみません。

そして読者の皆様にも感謝を。ただ巨大な敵をひたすらに屠っていくだけというシンプルな爽快感を目指したこの物語がある程度受け入れられている事に、何か大きな、言葉にできない可能性を与えていただいております。これからも色々な事に挑戦していきますので、応援よろしくお願いします。

それでは、今回はこの辺りで。

この一冊が、あなたにとって小さな糧となりますように。

ようやっとオセアニアも一段落……

鎌池和馬